キリスト者の自由を求めて

第二版

レイモンド・フランズ

エホバの証人の統治体の元メンバー

COMMENTARY PRESS ♦ ATLANTA ♦ 2007

本書で言及されている英語聖書：

アメリカ標準訳	American Standard Version
エルサレム聖書	Jerusalem Bible
改訂標準訳	The Revised Standard Version
今日の英語訳	Today's English Version
ジェームズ王欽定訳	Authorized King James Version
新アメリカ聖書	New American Bible
新英語訳聖書	The New English Bible
新改訂標準訳	The New Revised Standard Version
新国際訳	The New International Version
新世界訳	The New World Translation
フィリプス現代英語	Phillips Modern English
リビングバイブル	The Living Bible

可能な限り、また信ぴょう性を高めるため、本書では他の出版物からの引用を直接コピーして紹介するように努めました。これらの出版物の中には 90 年も前にさかのぼるものもあるため、活字の品質は必ずしも最高水準とは限りません。

SECOND EDITION, First printing 2007
Copyright © 2007 by Raymond Franz
All rights reserved
First edition 1991
Second printing 1999
Third printing 2002
Published by Commentary Press
P. O. Box 43532, Atlanta, Georgia 30336
ISBN 0-914675-17-6

www.commentarypress.com

もくじ

第 10 章　群れの羊飼い

第 11 章　排斥の誤用

第 14 章　御名のための民

第 15 章　良い知らせの偉大さ

第 17 章　キリスト者の自由という課題

第10章

群れの羊飼い

ある人が百匹の羊を持つようになり、そのうちの一匹が迷い出るなら、その人は九十九匹を山に残し、迷い出ているものを捜しに出かけないでしょうか。そして，うまくそれを見つけるなら、あなた方にはっきり言いますが、その人は迷い出なかった九十九匹のこと以上にその[羊]のことを歓ぶのです。—マタイ18:12。

イエスはご自分の羊について、羊は「羊飼いの声を知っている」と保証なさり、その上で、羊は「よその者には決して付いて行かず、むしろその者から逃げるのです。よその者たちの声を知らないからです」とおっしゃいました[1]。御言葉を読むことでわたしたちはまことの羊飼いの「声」を知るようになり、そうでない声と区別できるようになります。まことの羊飼いの声は、羊飼いが羊への呼びかけの中でご自分について語った事柄に完全に調和しています。

すべて、労苦し、荷を負っている人よ、わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方をさわやかにしてあげましょう。わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。わたしは気質が温和で、心のへりくだった者だからです。あなた方は自分の魂にとってさわやかなものを見いだすでしょう。わたしのくびきは心地よく、わたしの荷は軽いのです[2]。

長年信仰していた宗教を離れていく人は古今に多くの場所にいます。その理由こそは、その宗教が告げ知らせる事柄の中に善き羊飼いの声が聞こえず、安らぎと平安をもたらす呼びかけも聞こえず、むしろ聞こえてくるのは人間の権威への全面服従を求めるけたたましい声だからです。彼らが耳にするその「声」は、キリストが弟子たちにお与えになった次の訓戒に反するものです。

あなたがたも知っているように、この世では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが民に権威の重みを感じさせている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない[3]。

『良心の危機』を書いてしばらくして、それ以前に書かれたそっくりなタイトルの本を友人が貸してくれました。『良心の問い』というタイトルの本で[4]、著者のチャールズ・デイビスはローマ・カトリックを信仰する両親のもとにイギリスで生まれました。彼は若いころをこう語っています。

ローマ教会が唯一の真の教会であるという主張を不動の事実として当然のことのよう

1　ヨハネ10:4, 5。
2　マタイ11:28-30。
3　マタイ20:25, 26, 新英語訳。
4　わたしが自分のを書いていた時点ではこの本の存在を知りませんでしたが、同じタイトルを使うことを真剣に考えていました。

に受け止めていました。大人になってからもカトリック教会はわたしにとって疑問の余地のない不変の現実であり、わたしの世界を支配していました。

十五歳の時から彼は聖職に就くことを人生の目標としました。わたしたちがそれぞれに受け継いだ宗教的伝統にはかなりの隔たり――カトリックが大海ならばエホバの証人は小さな池のようだった――がありましたが、親から受け継いだ自分の宗教についてわたしもまったく同じ感情を抱いていたことから、同一の体験をした者同士の絆(きずな)を感じました。

チャールズ・デイビスは二十年以上司祭職を務め、英国を代表するカトリック神学者となって国内外を広く講演して回りました。そして1966年、生まれたとき以来の宗教を離れる決意をしました。わたし自身の体験との類似点で心に残ることがほかにもあったにせよ、わたしが最も親近感を覚え、最も深く感動したのは、彼がこの大きな一歩を踏み出した――彼が生涯にわたって築いてきた信仰体系と宗教的なキャリアを放棄した――その理由でした。彼はこう書いています。

> わたしは今でもキリスト者ですが、今あるような形での教会が、わたしの知っている尊敬すべき熱心なキリスト者の生活に障害となっていることに気づくようになりました。教会は彼らの大切にして推し進める価値の源泉ではありません。それどころか彼らは教会との緊張、対立を常に感じながら生活し働いています。
>
> わたしにとってキリスト者であろうとすることは、真理への配慮と人への配慮と切っても切れないものです。公式の教会ではそのいずれも見ることができません。真理を犠牲にして権威に配慮が払われ、非人間的で自由のないシステムのせいで人が傷つけられている事例に、わたしは絶えず心を痛めています。教会が一機関として主張していることは、十分な聖書的、歴史的根拠に基づいているとは思えません[5]。

これと同様にわたしに最も深刻な影響を与えたのは、ものみの塔組織の教えに誤りがあることに気づいたからではありません。わたし自身が不完全であるのに完全さを期待することはできないと思ったからです。わたしが最も深く憂慮したのはおもに、その表される精神でした。同じように「真理を犠牲にして権威に配慮が払われ」、それに伴い、「非人間的で自由のないシステムのせいで人が傷つけられている」のを見たからです。権威への配慮が明らかに人への配慮に優先されていました。

エホバの証人の中にはこの国にも他の国にもわたしが心から愛情を感じる、それこそ大勢の人がいます。正直、わたしが尊敬する人で組織にまだいる人もいます。しかしわたしがその人を尊敬するのは、その人柄であって――というのも、その人となりをわたしは確信しているからである――その人が属している組織のゆえではありません。それどころかその人は属している組織にもかかわらず多くの面でそういう人なのです。その人の持っている資質や精神は、公式の組織から来るものを反映したものではありません。チャールズ・デイビスの言葉を借りれば、その人が他者と接する際に「大切にして推し進める価値の源泉」は組織ではないのです。ま

5　チャールズ・デイビス著、『良心の問い』（London: Hodder and Stoughton, 1967年）16頁［英語］。

た、聖書の原則を守ってキリストの資質を規範としようとするその良心的な努力は、それゆえにしばしば内部の緊張を生み出します。ある問題に関して自分の意見を表明するたびに、容易に克服できない危険を感じるに違いないとわたしは思います。

どのような羊飼いか

エホバの証人のコミュニティーで長老やその他の責任ある立場の人は、この章の冒頭に引用したイエスのたとえ話の羊飼いのようになるように言われています。このたとえ話では羊飼いが一匹の羊を、単に群れの羊とか単なる数とかではなく、羊飼いの助けや世話、保護を必要とする一つの命として見て、真摯に気遣う美しい姿が描かれています。その描写は、ひと昔前の宗教上の羊飼いを描写して預言者エゼキエルが語ったことと非常に対照的です。

> あなたがたは弱いものを強めず、病めるものの世話もせず、傷ついたものを包帯で包んでやらなかった。また、はぐれたものを取り戻さず、失われたものを探し求めず、強いものをさえ冷酷なまでの厳しさで追い詰めた[6]。

エホバの証人の長老の大半は自分が最初に描かれた羊飼いのようであると信じており、またそうありたいと願っています。それは間違いないでしょう。しかし残念ながら証拠は、二つ目の記述に描かれているような状況が、組織の方針のために高い確率で生じていることを示しています。羊は羊飼いから絶えず圧力をかけられ、強いものでさえもきついペースで追い立てられます。弱いもの、病めるもの、傷ついたもの、はぐれたもの、失われたものを助けるために時間がかけられることはほとんどありません。悲しいことですが、どこの会衆でも長老が困難や病気、憂うつ、落胆のもとにあるメンバーと一緒に過ごす時間はほとんどなく、その時間はおもに、より多くの野外奉仕活動を推し進めるのに使われます。長老は「忙しすぎて」メンバーを強めて力づけるための時間はありませんが、何か不祥事の疑いがある時には非常に迅速に行動して調査や審議に多くの時間を割くことができます[7]。

組織から追放される人の数は毎年記録的で、1985年だけでも3万6,638人が排斥され、1986年にはさらに3万7,426人が排斥されました[8]。そのうちのかなりの割合の人が、コリント第一5:9-13の勧告の中で使徒が述べているような行為、すなわち淫行、窃盗、泥酔、その他同様の不道徳な行為を行なっていたことに疑いはありません。

しかし、そのように多くの人を切り捨てた記録とは裏腹に、悪行に陥った仲間の証人が<u>復帰</u>し<u>更生</u>するのを助けたという組織の記録――その人たちが霊的な強さを取り戻して<u>癒される</u>のを助けるために数時間かそこらではなく、数週間、必要とあ

6　エゼキエル34:4, 新英語訳。

7　テモテ第二2:24-26; テサロニケ第一5:14, 15; テサロニケ第二3:13-15; ヤコブ5:16, 19, 20の諭しと比較してください。

8　『ものみの塔』1986年1月1日号13頁および1987年1月1日号13頁。

れば何ヶ月にわたっても個人的な援助を惜しまないという意欲を示したという記録——はきわめて乏しいと言わねばなりません。

　若いエホバの証人の間で問題が頻発していることは否めません。しかもその「救済策」は聴聞会だけで、それに続いて排斥処分が下されることも珍しくありません。組織は「世の」人——薬物中毒者、暴力を振るう人、不道徳な人——がその間違った道から離れるのを助けた具体例を挙げることができるかもしれませんが、大抵それは「野外奉仕」で会った結果として得られたものです。しかし、ひとたびその人がバプテスマの一歩を踏み出すと、長い時間（もはや「野外奉仕」として報告されることのない時間）その人と一緒に過ごそうという意欲は著しく減退します。このように、組織の中にいる人を霊的に強めたり悪行から立ち直らせたりして援助する記録よりも、悪行をかつて犯していた人を組織に引き入れる（それによって「群れ」の人数を増やす）記録のほうがずっと良いのです[9]。

　この数字上の増加へのこだわりは『年鑑1980』（11頁）に見られます。そこには、「排斥がなかったとすれば、アメリカ合衆国では、1.5％ほどの増加ではなく、3.5％ほどの増加が見られたはずです」と記されています。（つまり、この年［1979年］に全メンバーの2％が排斥されたことになります。）信じがたいことですが、ここで組織が焦点を当てているのは、「失われた羊」の窮状ではなく、報告された増加率の低さなのです！イエスのたとえ話に出てくる羊飼いが、迷い出た一匹の羊を救出するために九十九匹の羊をあとに残して行ったのとはまったく違っています[10]。

調査に早く、助けるのに遅い

統治体に届いた一人の証人からの手紙を思い出します。その人の夫はバプテスマを受けましたが二年間「不活発」でした。夫婦はギャンブルで有名なカジノの都市に休暇に出かけ、夫は賭博に一時夢中になりました。そのことが長老の耳に入り、長老たちは彼を聴聞会に呼び出しました。そして「悔い改めていない」と判断して排斥しました。妻は統治体への手紙の中で、夫は「ギャンブラーではない」（二年以上前に一度だけギャンブルをしたことがある）にもかかわらず排斥されたと述べています。そして、これを自分の場合と比較し、自分自身も不貞を働いて罪を犯したことがあると述べました。当初、自分のしたことに愕然（がくぜん）とし、二度とこのようなことはしまいと決心したと書いています。しかし、再びしてしまい、明らかに助けが必要だと感じました。それで長老たちに過ちを告白し、悔い改めたと見なされ、

9　「離脱率」は異常に高く、毎年多くのメンバーが去っています。そのデータについては、『良心の危機』44, 45頁をご覧ください。

10　ブルックリン・ベテルの家族で行う「朝の聖句討議」で統治体のメンバーのジョン・ブースは、毎年多くの人が組織を去って行くこと（必ずしも排斥とは限らない）についてコメントし、「でも、それは問題ではありません。毎年必ず新しい人が代わりに入って来るのだから」と言いました。ジョン・ブース自身は親切な人でした。彼をよく知っているわたしは、彼の言ったことが単に組織の見方を反映したもので、何十年も組織にいたことによって彼の思考に植え込まれたものであると信じています。重要なのは増加、数字上の増加であるという見方です。

「戒め」を与えられました。長老たちは、彼女が霊的な強さを得られるように毎月会うことを告げました。六ヶ月が過ぎて彼女はようやく長老の一人に近づいてそのことを思い起こさせたと書いています。長老の返事は、長老たちは「とても忙しかった」が近いうちに彼女のために時間を取るだろうというものでした。「司法措置」を取ることに早く、助けの手を差し伸べることに遅いというこのまったく対照的な事象はあちこちの会衆で広範に及ぶことが実証されています。

この手紙が奉仕部門から統治体の奉仕委員会に送られた時、「本当は貪欲ではないという証拠があるにもかかわらず人々がギャンブルで排斥されています」という意見も添えられていました。そこには、「ギャンブルの問題の時だけ貪欲さを理由に排斥されるのはなぜかという疑問も出ました。ギャンブルを時折する人よりもはるかに貪欲な人がいます。......しかし、その人が貪欲かどうかが問われて審理委員会の前に呼ばれることはありません」とありました。

組織が"警察活動"のようなことをするのに素早く、継続的な援助の手を差し伸べることに遅いため、長老自身が「内省」した例もあります。元長老で、三十年以上のエホバの証人がブルックリン本部に1988年8月30日付けの手紙を書きました。彼は、会衆の長老たちによる牧羊が「愛に満ちた助け」と「さわやかさ」の源であるという組織の説明が単純に事実に合っていないことを心から悲しみました。その一例として次のように述べています。

> ヴァージニア州のウォレントン会衆で長老として奉仕していた時、別の会衆の区域に住んでいて、生活のために昏睡(こんすい)状態の老婦人の世話をしている年配の不活発なやもめの姉妹に関する嫌疑が、隣りの会衆の長老から電話で報告されました。それについて調査するためにわたしは主宰監督と一緒に出かけました。
>
> わたしたちが到着すると、主宰監督は姉妹にかけられた嫌疑について質問しました［この嫌疑はまったく憶測に基づくものでした］。姉妹の返答は、「夫が亡くなってもう七年以上になります。わたしは不活発になり、何年も集会に出席していませんが、長老はだれ一人訪問してくれませんでした。それなのに、最近わたしが何か悪いことをしたという噂(うわさ)を聞いてあなたがたはわたしを排斥しようとしてここに急いでやって来たのです。あなたがた兄弟が理解できません」というものでした。

このような組織的な態度が蔓延(まんえん)していたため、この手紙を書いた人はこれまで24年間さまざまな責任のある立場で奉仕してきましたが長老を辞任しました。辞表の中で彼は、自分と妻が会衆から「キリストのような愛、配慮、サポート」を受けられるようにお願いしました。1987年11月、長老を辞任したことについて話し合うために、彼は訪問中の巡回監督と他の長老たちと会いました。その九ヶ月後、ブルックリン本部宛ての手紙の中でこう述べています。

> その会合から今日［1988年8月25日］に至るまで、ウォレントン会衆への次の訪問をしたＷ・パークス［巡回監督］も長老もだれ一人として、わたしたちに会いに来て霊的にもその他の面でもサポートしてくれることはありませんでした。

長老たちはサポートや励ましを与えるための時間を取ることはしませんでした

が、実質上無視され続けて九ヶ月後に彼は長老たちから聴聞会への呼び出しの電話を受けました。そのような聴聞会で精神的なストレスに耐えるよりも、彼は組織そのものから脱会する旨を手紙にしたためて送ることにしました。

聖書的な慣わしが非聖書的に実践される

わたしは、関係者（たとえば、先に言及した長老たち）に自然の慈愛や感情がないなどとほのめかすつもりは毛頭ありません。多くの人がそうでないと確信しています[11]。ここに述べることは、システムというものが及ぼす影響を示すためであり、個人が己の良心の行使を宗教システムに委ねてしまった時にどのような悲しい、時にはほとんど信じがたいような結果になるか、またそれが人間の感情に頑なで不自然な影響を及ぼすことを説明するためです。（このことは支配的だったり無感情だったりする傾向のある人が栄えるような雰囲気を否応なく作り出し、いっぽうで慈愛に満ちた性格の人がその慈愛を表現すれば「組織への忠誠」の欠如という罪に問われかねないと言わなければなりません。）

この情報は悪行者との交友をやめることそれ自体に反対を表明していると受け止められるべきでもありません。それは聖書が教えていることで、堕落した影響から、またキリスト教の信条や基準をむしばむ影響から人を守るという健全な目的を果たしています。問題なのは、多くの場合、聖書で教えられている事柄が実践されていないことです。

たとえば、コリント第一5章にある使徒パウロの言葉がその意図に反して律法主義的に使用されたり誤用されたりしています。コリントの会衆内で起こった甚だしい不道徳行為（異邦人の寛容な基準でさえも非としている行為）について、パウロはそれが会衆全体にとって危険であることを警告してこう述べました。

> わたしは手紙の中で、性的に不道徳な者とつきあってはいけないと書きましたが、その意味は、この世の不道徳な者とか貪欲な者、また、ペテン師や偶像を礼拝する者たちとつきあってはならない、ということではまったくありません。もし、そうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないでしょう。わたしが書いたのは、兄弟と自称する人で、性的に不道徳な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、ペテン師がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだったのです。……あなたがたの中から悪い者を追い出しなさい[12]。

パウロはここで、キリスト者と称する人で不道徳、貪欲、酩酊あるいはそれらに類する悪行をある時期犯したことがある者について述べているのではありません。キリスト者と称する人で不道徳、貪欲、酩酊（めいてい）などの悪行を**現在犯している**者について述べているのです。一度だけ酔ったからといってその人が「酒におぼれる者」になるわけではありません。同じように、不道徳行為を一度したからといって自動的に「淫行の者」、「性的に不道徳な者」になるわけでもありません。使徒が述べて

11　先に引用した手紙に表明されていた長老の気持ちは、証人の長老の中にも情愛があることを物語っています。

12　コリント第一5:9-11, 13, 新国際訳。

いるのは、その人が続けている生き方、その人がどのような人であるかを示す特質やその人たらしめている要素であることは明らかです。使徒のこの言葉に従うことは、キリスト者にとってなんら複雑な問題を呈するものではないはずです。そのような人を家に招き入れたなら、家族や子どもの道徳およびキリスト者の信仰に明らかな危険、腐敗的影響が及ぶことは判断に難しくないでしょう。

しかし、ものみの塔の方針では使徒のこの教えが法的権威の複雑かつ形式的な行使に転用される根拠に使われており、それによって霊的な羊飼いとして奉仕するはずの人たちがしばしば霊的な警察官、時には刑事、検察官、法廷裁判官、刑執行者に過ぎなくなることがあります。それは多くの点で一般の法執行や司法制度に倣ったと思われるシステムで、初審と控訴、所定の手続き、判決、保護観察があります。長老は教会裁判所なるものを組織し、再婚を考えている人はまずその裁判所で離婚を認めてもらわなければなりません。このような組織の方針によって長老は事実上告解の取決め上の"聴罪司祭"となり、すべての重大な罪は彼らに告白されなければならず、彼らがよいと判断すれば「赦免」が与えられるのです。また後述するように、「情報提供者」システムも作り出され、各メンバーは組織の規範から逸脱しているメンバーがいれば、その人が長老の"告解室"に自ら行かない限り、報告の義務があると感じるように仕向けられています。同時にこのような態度や風潮のために、悪行に陥った人は助けを求めることを恐れ、悪行を認めれば直ちに司法機関の歯車が動き出すことを懸念する結果となっています[13]。

ものみの塔の英国支部から統治体に宛てられた手紙は、すべての重大な罪が長老団に報告されるべきで一人の長老によって扱われたり内密にされたりすべきではないという組織の方針を引用し[14]、実際に起きた事例を挙げています。「非の打ち所がない会衆でも評判の良い姉妹」が一度だけ証人でない男性と姦通(かんつう)しました。「彼女の夫は不信者で彼女にほとんど愛情を示しませんでした」。翌日、彼女は思い悩んで、長老のところに行き、自分の過ちを告白しました。支部の手紙にはこう書かれています。

> その長老は思いやりのある人で、その姉妹のことを何年も前からよく知っており、姉妹が頑なな罪人ではなく、すでに自分を戒めており、励ましと霊的な平衡およびエホバとの良い関係を回復するための助けを必要としているだけなことに気づきました。それで姉妹と一緒に祈り、助言を与え、姉妹が再び罪に陥ることがないように、また自責の念に飲み込まれることがないように継続的な援助を与えることを伝えました。

とはいえ、その長老はこの問題を主宰監督に報告する組織上の義務を感じました。その結果について、手紙はこう続いています。

> 残念なことに、この兄弟［主宰監督］はその長老がこのように問題を扱ったことに腹を立て、その件を長老団に知らせました。その長老が正しかったか間違っていたかが彼

13　これをヤコブ5:16と比較なさってください。そこでは、告白は権威ある人にするものと限定されておらず、「互いに自分の罪をあらわに告白し、互いのために祈りなさい。それは、あなた方がいやされるためです」とあります。

14　当時の支部調整者 W.グーチの署名入りの1979年5月3日付けの手紙。

らの間で争点となりました。この事例では、その姉妹は立ち直ってエホバへの奉仕において良くやっています。

これら長老にとって本当に重要だったのは、迷い出た羊を立ち直らせるための助けが与えられたかどうかではありませんでした。そうではなく、組織の方針が守られたかどうかでした。守られなかったというのが事実で、その長老の行動は良い結果をもたらしたとはいえ組織上の立場からすれば「秩序に反する」ものでした。その長老は、姉妹が審理委員会に引き出されるならば姉妹の評判を著しく――しかも不必要に――傷つけることになると考えました。しかし組織の方針には、そのような懸念のためにどう行動するかを判断する余地はありませんでした。英国支部の調整者は続けてこう述べています。

> その姉妹と同様の境遇にいる多くの人が告白を思い止まったことに間違いありません。というのも、長老に罪を告白すれば、続いて行われる審理委員会のことが漏れて公になり、それまで申し分のなかった評判が台無しになることを知っているからです。このように思い止まることはその人たちの霊的な痛みとなっています。このような良い人たちが、ただ一度の過ちを犯したとしてもその問題を内々に扱ってもらえることを知ることができるのであれば、それに越したことはないのではないでしょうか。そうすれば、自ら過ちを告白し、必要な助けを受けられるのではないでしょうか。
>
> そんなことをすれば、罪を犯した人は“告解室”にいるかのようにそっと扱ってもらえると信じて再び罪を犯し、そうなれば罪を助長しかねないと言う人がいるかもしれません。しかし、その論議は成り立ちません。罪の傾向があって罪を繰り返すなら審理委員会にかけられることを知っているからです。
>
> したがってわたしたちがお尋ねしたいのは、不道徳を含むそのような事柄を個人的に扱うか、それとも長老団に報告して調査してもらうかを各長老が自分で判断してもよいかどうかということです。

英国支部の調整者の論理は道理に適っており、思いやりのあるものでした。また、組織の方針によって実害が生じている束縛について明らかにするものでした。しかし、統治体は方針を変えませんでした。伝統的な見解が支配したのです[15]。

組織の方針が事実上すべての行動分野に及んでいるため長老たちもまた、歓迎されるかどうかを問わず会衆の人の生活のあらゆる面に関与する権限を有している、時にはそうする義務さえあると感じています。その結果、最善と思う方法で子どもをしつけて立ち直らせる証人の親の権利がしばしば、長老による先制的、時には恣意的とも取れる支配と決定に侵されるという状況が生じています。親は外からの援助を求めるかどうかを自由に自分で決めてもいいとは感じません。家庭内の不祥事を長老に報告しなければならないという義務感に縛られています。長老は「親が状況を把握している」かどうかを判断し、そうでなければ司法裁判のようなものを行

15 1983年の組織マニュアル、『わたしたちの奉仕の務めを果たすための組織』145頁［英語］にはこうあります。「長老は個人から、罪の告白や他の人の悪行についての報告を受けることがあります。（ヤコブ5:16; レビ記5:1）しかしどんな形にせよ会衆のバプテスマを受けたメンバーが重大な悪行を犯したという報告を聞いたなら、最初の調査が行われます」。

います[16]。夫婦関係においても同じような司法権の介入がしばしば見られます[17]。

さらに、憂慮すべき頻度で長老の介入があるのは、援助や癒しの手を差し伸べるためではなく、任命された当局者という立場で調査、尋問、証言喚問の無制限な権限を持っているからであることを証拠は示しています[18]。往々にして最初の聞き取り調査（大抵二人の長老によって行われる）の狙いは、証拠が起訴の根拠となるかどうかを判断することにあるようです。それによって過ちを犯した人は三人の長老からなる宗教裁判（「審理委員会」）での審問を受けなければなりません。これは「審理委員会」によって認められた人以外には公開されない基本的に内密のものです。

これは告発された悪行者のプライバシーに対する思いやりのある配慮に映るかもしれませんが、本人の希望はまったく考慮されません。たとえ告発された人が、誰もが証拠を見ることができるように公の場で審理されることを希望し要求したとしても、それは組織の方針で許されないのです。

前述のように、その人を「救う」ための改心や「再調整」の努力はその人と一、二度の会合を持つにとどまり、それ以上はありません。長老たちは通常、一種の万能薬として「野外奉仕」および集会への出席を増やして処方し、もしその人がこの処方に従わない場合は反省していない証拠と見なします。個人的な助けを与えるためのしっかりとした長期計画のようなものはめったにありません。悔い改めの十分な証拠を示していないとして有罪を宣告された場合は、委員会の判決（排斥、または排斥ほど劇的な措置ではない公の戒め）が会衆に発表されますが、その判断に至った実際の根拠を会衆が知ることはありません。

排斥された場合、その人は「排斥された状態」と見なされます。そうなると、もはや問題となるのは、その人が実際にやっていることや送っている生活ではなく、どのカテゴリーあるいはステータスに属するかになります。その状態から抜け出すには、組織の定める手続きを踏まなければなりません。排斥された「状態」が終わったことを宣言するかどうかの判断はすべて、長老から成る審理委員会が行います。

このようにして十六歳の青年が何らかの性的不道徳のために排斥されたとします。彼は「復帰」のために必要な手順を踏んで排斥の「状態」を終わらせることはしないことにします。しかし性的不道徳をもはや犯しておらず、のちに結婚して子どもをもうけ、忠実な夫、良き父親、正直で責任感のある人であることを示し、キリスト者の原則に従って生きようとするかもしれません。それなのに何年たとうが、どのような人であろうが、あたかも性的に不道徳な人、堕落させる影響力のある人、他のキリスト者だけでなく家族でさえも付き合ってはならない人であるかのように扱われるのです。なぜでしょうか。その人が「排斥された状態」を解かれて

16　『ものみの塔』1988年11月15日号20頁をご覧ください。
17　『良心の危機』58-66頁、および『ものみの塔』1983年6月15日号30, 31頁をご覧ください。
18　組織との不一致が疑われる場合、その人が読んだもの、話した相手、受け取った手紙などについて尋問されることがあります。尋問官にとって「立ち入り禁止」とされるものはほとんどありません。すべての質問に答えなければ、その人は危うい立場に置かれます。

交友に適していると宣言されるために組織が定めた法的手順を踏んでいないからです。もし放蕩息子のたとえ話に出てくる父親がそのような方針に従って生活していたとしたら、家に近づいて来る放蕩息子を見てあのように駆け出して抱き締めるのではなく、まず三人の委員によって息子を精査してもらい、親としてそのような関心や愛情を示すのがふさわしいかどうかを判断してもらわなければならなかったでしょう[19]。

このようにして、ある人が清く生きる人かどうか、その人を家に招き入れてもいいかどうかについて、大人の円熟したキリスト者が自分で考えて判断する権利が一切否定されます。まず宗教的権威がそのことを裁定し、もし排斥の「レッテル」が剥がされなければ、その人は「タブー」のままでいなければなりません。

ブルックリン本部には（各国の支部事務所でも）、すべての排斥措置を記録したファイルが保管されています。排斥された人の氏名だけでなく、その措置の詳細を含む通信も大抵は保管されています。かなりの期間、何年も、個人が「復帰」した後も保管されていることがあります。名簿に載っている人が死亡した場合でも奇妙なことに、ブルックリン本部の慣習ではその人の排斥記録を保管することになっていました[20]。

1973年、一人の証人が本部に宛てて手紙を書き、ブルックリンの施設を見学した際に見学案内者が「内密」と書かれたファイルキャビネットを指差して、そこには排斥者の記録が保管されていることを説明したと述べています。この男性は十六年ほど前に排斥され、排斥からわずか七ヶ月後に復帰しました。その期間が短かったのは問題が軽かったからです。彼は手紙の中で、排斥措置が取られたのは「協会が“組織への忠誠”を強調していた」からに過ぎないと思うとほかの長老から後日言われたと述べています。排斥されて四ヶ月後、復帰する前に、彼は徴兵され、兵役を拒否して投獄されることも覚悟しました。彼は手紙の中で、排斥のために味わった内面的な苦しみに加え、自分の名前が「内密ファイル」に載っているかもしれないと考えると不安でたまらないと書いています。また、「警察ファイルのようにその人の永久ファイルに“印”をつけることは、あってはならないように思えます」とも

19　ルカ15:11-24。長年にわたり、排斥者のために祈ることは不適切であると考えられてきました。イギリスの支部委員会（1979年5月3日付けの手紙）はこの方針について統治体に問い合わせた際、放蕩息子のたとえ話に言及し、「14年前に淫行の罪で排斥され、今は結婚して二人の子どもがあり、もはや淫行を犯していない息子を持つ忠実な姉妹」の事例を挙げ、息子のために祈る、つまり息子が「組織に戻る」ように祈るのは間違いであることをその姉妹に伝えることがいかに難しかったかを述べています。その方針は変更され（『ものみの塔』1980年1月15日号31頁および2001年12月1日号30, 31頁をご覧ください）、姉妹は息子のために祈ることができるようになりましたが、息子の「排斥された状態」とそれに伴うレッテルはそのままでした。その後の『ものみの塔』では、親族がそのような排斥者との付き合いを避けることが強調されています。それは悪行を犯しているからではなく、組織が定める復帰の手順を踏んでいないからです。

20　コンピューターが導入される前の時代は、オレンジ色の「排斥」カードが排斥者用のファイルに使われていました。奉仕部門で働き、執行部で秘書の仕事もしていたジョン・ミッチェルによると、そのようなカードに「死亡」というスタンプが押された後、カードはファイルに戻されたと言います。彼は、同僚のリー・ウォーターズの言葉を引用して「死んだ人の記録をこのように保管している組織はわたしたちだけに違いない」と述べています。

述べています。神は御言葉の中でご自分と和解するように罪を犯している人を憐(あわ)れみ深く招いておられ、その人の罪が緋色(ひいろ)のようでも「雪のように白くされ」ることを約束なさり、「わたしは彼らのとがを許し、彼らの罪をもはや思い出さない」と述べておられます[21]。それとは対照的に、これまで見てきたように、ものみの塔組織は膨大な量のファイル、中には人に恥ずかしい思いをさせる情報のファイルまでも大切に保管しているのです[22]。

聖書の前例に裏打ちされないやり方

証人たちの組織に強く見られる律法主義的なアプローチや様相が、キリスト教以前にもキリスト教時代にも神の民の間に定められていたことを示すものは何もありません。『目ざめよ！』1981年4月22日号（17頁）は、米国憲法において被告人が「迅速かつ公開の裁判を受ける権利......告発の性質と原因について知らされる権利......自分に不利な証人と対面する権利を享受する」という規定を称賛した上で、イスラエル国家の司法がこれと同じ原則を採用していたことを示し、次のように述べています。

> 地方の裁判は町の門で行われたので，裁判が公開されていたことに疑問の余地はありません。（申命記16:18-20）公開裁判であったため、密室で行われる尋問では時として消えてしまうであろう、慎重さや公正さを帰するよう裁判人が動かされたのは間違いありません。では証人についてはどうでしょうか。
>
> 聖書時代の証人は公の場で証言することが求められました。そのため、世論の圧力によって証言が左右されて、「多数者に追随して証言し、判決を曲げてはならない」と警告されています。

ものみの塔組織は都合の良い時はモーセの律法と法手続きに頻繁に立ち戻って、その方針の裏付けを取っていますが、ここに述べた原則とは正反対のことを行っています。公の場での尋問が「慎重さや公正さ」をもたらすことを称賛してはいますが、現実には証人たちの「審理委員会」の尋問はすべて組織の方針によって「密室で行われる尋問」の形で行われており、結果として審理委員会は己に対してのみ責任を負えばよくなっています。発表された決定の妥当性について信者は純粋に信仰によって受け入れなければなりません。コリントの信徒たちは問題の個人との付き合いをやめるように促された理由や状況をはっきりと知っていたのに対し、今の会

21　イザヤ1:18; エレミヤ31:34。

22　ノア会長に宛てた1971年11月18日付けの手紙の中で本部の執筆部門の監督カール・アダムスは、その人の復帰後もこれらのファイルを保管していることに疑問を呈しました。彼はこう述懐しています。「今のところ復帰した人の名前もファイルにあり、その事例に関するかさばる記録に『破棄するな』というラベルが貼られています。それは『あなたが赦されたことは信じていますが、あなたの罪の記録は保管してあります』と言うに等しいのではないでしょうか。あるいは、『あなたの罪はきれいに洗われましたが、あなたの名前が記された瓶の中に汚れは保管してあります』と言っているようなものではないでしょうか。」それから数十年たってもこの慣習はまだ続いています。

衆のメンバーは何も知らないままなのです。審理委員会の行動が生み出した秘密の空白を埋めるために推測、憶測、噂（うわさ）がしばしば飛び交います。ある人が言ったように、「噂（うわさ）を打ち消そうとするのは、打ち鳴る鐘の音を止めようとするようなもの」で、一旦放たれると、内密の尋問によって生じた噂（うわさ）は個人の評判に消えることのない不当な傷を付けかねません。

キリスト教以前の時代には、被害を受けたと主張する人からの要請があれば基本的に都市や町の年長者が司法の役目を果たし、論争の解決でも重大かつ困難な事件はエホバの代理人として神殿の祭司や、後には王の前に出されたことが聖句に裏付けられています。（出エジプト記18:13-16; 申命記17:8, 9; 25:1; サムエル第二14:4-7; 15:2-6; 列王第一3:16-22; イザヤ10:1, 2; ルツ4:1-13と比較なさってください）村の年長者たちが調査官や検事として一方的に行動を起こしたことを示すものは、流血や偽りの神々への崇拝が関係した重犯罪の場合を除いてはほとんどないと言えます。（申命記17:2-5; 21:1-9）子どもが悪行を犯した場合、証人の長老による介入を正当化するのに申命記21:18-21がよく使われますが、実際には、問題をどう扱うかは本質的に親の判断に委ねられていました。というのも、この聖句に出てくる親は子どもの矯正と更生のために手を尽くしたことが明らかだからです。しかし、（それなりの年齢に達していたであろう）その息子のが極端な事例で、無類の反抗者、大食漢、酒飲みであるという結論に追い込まれた時、初めて親はこの問題を町の年長者に委ねたのです。

言うまでもなく、キリスト者はイスラエルの律法体系に従うわけではありませんが、その根底にある原則はキリスト者を導くものです。新約聖書を読めば、使徒や他の著者が強調しているのは――律法の厳格かつ綿密な遵守ではなく――キリスト者の道徳的、倫理的な清さを達成する手段として教え、戒め、叱責、励まし、そして何よりも模範を通して信者が互いに愛と信仰において築き上げられることであったことがよく分かります。罪深い道を歩む人との交流をやめることは、形式化された司法手続きや布令によるものではありませんでした。会衆が個人的なレベルで自発的に応じることを求めるものであって、司法上の布令を集団としてのメンバーに課することによって得られる結果ではありませんでした。必要な状況においては会衆の益と名誉のために、また悪行者が辱めを受けてその道から離れるかもしれないという望みをもって交流をやめるように会衆のメンバーが促されることはありましたが、使徒がコリントのキリスト者に述べた次のこと、つまり会衆の「大多数の人から与えられたこの叱責」で十分であり、その人は――委員会によって復帰されるではなく――その大多数によってもう赦されるべきであると述べていることにわたしたちは着目できるでしょう。（コリント第二2:6-8）それとは対照的にものみの塔の方針では、排斥者との交流を禁じる公の布告を守らないメンバーは排斥されることになっています。しかし、パウロは手紙に言及した悪行者に与えらている叱責に加わらない少数の人に対してそのような行動を取ることについて何も述べていないのです。

忌避

マタイ18:15-19で、イエスは個人間の問題の解決についてこう指示なさいました。

> さらに、もしあなたの兄弟が罪を犯したなら、行ってただあなたと彼との間でその過ちを明らかにしなさい。彼があなた［の述べること］を聴くなら、あなたは自分の兄弟を得たのです。しかし、もし彼が聴かないなら、あなたと一緒にあと一人か二人を連れて行きなさい。一切のことが二人または三人の証人の口によって確証されるためです。もし彼がそれらの人たち［の述べること］を聴かないなら、会衆に話しなさい。もし会衆［の告げること］にさえ聴かないなら、その人を、あなたにとって諸国民の者また収税人のような者としなさい。

ものみの塔組織は、「その人を、あなたにとって諸国民の者また収税人のような者としなさい」という最後の部分に焦点を当てて、組織から排斥された人に対するきわめて極端な態度を支持するものであるとしています[23]。『ものみの塔』1981年11月15日号は、イエスの時代のそうした人々に対するパリサイ派の伝統的な態度に関する歴史的資料を大きく引用し、それを現代の方針の型として課しています。

ユダヤ人が当時取っていた忌避の仕組みには、三つの用語で表される懲罰の段階がありました。

> 1）初犯の場合は、*nidduy*《ニッドゥイ》。これは風呂、かみそり、食卓を共にすることを禁じ、社交および神殿への出入りを制限するものでした。その期間は30日、60日、90日でした。
>
> 2）それでも頑なで態度を改めない違反者は、評議会（十人）によって正式に呪い（*herem*《ヘレム》）が宣告され、コミュニティーの知的生活、宗教生活、社会生活から締め出され、会衆から完全に切り離されました。
>
> 3）*shammatha*《シャンマタ》とは、おそらく *nidduy* と *herem* の両方に適用される一般的な用語であろうと思われます。ヨハネ9:22; 12:42; 16:2の「会堂から追放された」人々のことを指していることは明らかです[24]。

イエスは人々がご自分の追随者を「締め出し、非難し［ギリシャ語の *oneidizo* から。ヘブライ語の *herem*（「災い」）に対応する］、あなた方の名をいとわしいものとして退ける」と言われた時、このような異なる段階に言及しておられたのかもしれません[25]。

このユダヤ人の手順で思い起こされるのはものみの塔の方針の一つで、必ずしも対応しているわけではないものの形式的な側面を重視するという点では同じで、次のような段階を踏みます。

> 1）<u>*マーキング*</u>とは、重大な罪を犯しているわけではありませんが、「神権秩序を甚だしく無視している」と見なされた人物に適用されます。そのような人はまず戒められ、もしその行いを続けるようであれば、その行為について会衆に話がなされて、メンバーは

23　この箇所と、続く幾つかの節の論点は、他の人たちが行ったリサーチによっています。
24　『国際標準聖書事典』 第2巻1050頁［英語］。
25　ルカ6:22。

そうした行為をする人に「特に注意する」ように呼びかけられます。その人が完全に避けられることはありませんが、メンバーはその人との「親睦を制限する」ことになっています[26]。

2）*戒め*と観察期間。単に「マーキング」される程度の罪よりもっと深刻と見なされる罪が関わっています。（淫行、泥酔、窃盗などの罪は公の「戒め」に値するに十分ですが、他の分野ではその区別がしばしば明確でなく、その問題を扱う長老の見解に大きく左右されます。）「戒め」は「私的な戒め」である場合もあれば、「傍観者全員の前での戒め」（「傍観者」とは宗教裁判の審理で証言した人のこと）である場合もあります。あるいは、問題が知れ渡っていると判断されるならば会衆全員の前での「戒め」である場合もあります。会衆の前で正式に「戒め」られる場合、それは週ごとの「奉仕会」で行われなければならず、その発表の後にどのような罪であったかの話が行われることもあります。集会のプログラムを扱わない、会衆を代表して祈らない、集会で聖句を読んだり注解したりしないなどの制限が課されることもあります[27]。その人は忌避されるべきというレッテルを公式に貼られることはありませんが、実際の事実関係を知っているのは長老だけなので、必ずと言っていいほど冷遇されて社会的受容性が減り、消極的な話や憶測の対象になることはほぼ確実です。観察期間の長さは司法の立場から長老が判断します。

3）*排斥*とは、全き拒絶、完全に断ち切ることを意味します。メンバーは排斥者とは口をきいてもなりません。

イエスの時代に見られたユダヤ教の慣習に鑑みると、単に規定の手順が同じように強調されているのみならず、律法主義の精神が同じように表現されており、最も顕著であるのが分かります。御言葉は既存のユダヤ教制度を支持せず、むしろ律法主義の精神が権威への強い恐れを植え付ける脅威であることを示しています。それは規律によって人格を向上させるどころか、実際には人を堕落させ弱らせてきたのです。「愛は恐れを外に追いやります」と書いた使徒ヨハネは、この忌避制度がユダヤ人の良心にいかに有害な影響を及ぼし、その信仰の表現を妨げてメシアを否定させるまでに至ったかを明らかにする上で、最も顕著な役割を果たしています。―ヨハネ7:13; 9:22; 12:42, 43; 19:38; 20:19; ヨハネ第一4:18をご覧ください。

当時人々が感じていた威圧感の典型として、ニコデモを挙げましょう。ニコデモはイエスが「神のもとから来られた」ことを信じていましたが、それでも人に分からないように夜になってイエスを訪ねました。イエスはニコデモに「真実なことを

26　『わたしたちの奉仕の務めを果たすための組織』152, 153頁［英語］および『ものみの塔』1985年4月15日号30, 31頁をご覧ください。ほとんどの証人にとって、このマーキングと完全な忌避の区別が曖昧であることは間違いないと思います。しかし、ものみの塔の討議ではこの混乱を取り除くことはほとんどできません。後述するように、テサロニケ第二3:14, 15の主題聖句の説明には重大な誤りがあります。

27　『わたしたちの奉仕の務めを果たすための組織』145, 146頁［英語］および『ものみの塔』1981年11月1日号23-27頁をご覧ください。これはバプテスマを受けた証人だけでなく、二人の長老による審査を経て「バプテスマを受けていない伝道者」（以前は「是認された仲間」と呼ばれていた）として承認され、野外奉仕時間を報告する資格を有することが会衆に発表された他の人にも適用されることがあります。『ものみの塔』1988年11月15日号16-19頁をご覧ください。このような場合に関する組織上の手続きが詳しく説明されています。

行なう者」は、本心では何を信じているのかを見破られまいと暗闇に身を隠すようなことはせず、「光に来る」とおっしゃいました[28]。わたしも似たようなやり取りをすることがあります。中には身元を隠すために偽名を使いながら特別な郵便受けで受け取りをする文通相手もいました。父親が著名な長老だと言う若者はわたしに電話をかけてきて、まだ一言二言しか話していないのに「この会話を録音しておられないでしょうね」と尋ねました。そんなことはしていないとわたしは断言しました。彼は続けて「わたしの番号を追跡するコンピュータ機器を持っておられないでしょうね」と聞きました。わたしは笑って、「いや、持っていないし、持っていたとしても使いませんよ」と答えました。彼は、わたしに電話をかけることがどんなに危険なことか、もし彼の妻が来たらすぐに電話を切らなければならないことを分かっていただけると確信していると言いました。そして会話が始まって間もなく唐突に電話を切りました。翌日、彼はまた電話をかけてきて、「少し誇大妄想に聞こえるかもしれませんね」と言いました。「そうですね、でもどうしてかは分かりますよ」と答えました。彼とは何か月にもわたって連絡を取り合ってきましたが、わたしは未だに彼の名前を知りませんし、知ろうとも思いません。その恐れはほぼ手に取るように分かります。それはニコデモや当時の人々に影響を与えたのと同じ恐れ——宗教的権威による発覚と懲罰措置への恐れ——を起源としています。

マタイ18:15-19でイエスは組織的な排斥措置を定められたわけではありません。その表現からすると、それが個人的な性質の違反と処罰であることが分かります[29]。「会衆」（機能しているユダヤ教の会衆のことなのは明白です。キリスト教の会衆はまだ存在していませんでした）に申し出た後でさえ、「その人を、あなた［単数形］にとって、諸国民の者また収税人のような者としなさい」とイエスは言われました[30]。それは宗教権威によって会衆全体に課される行動ではなく、不当な扱いを受けた人が頑なな加害者を尊厳をもって個人的に避けるための原則でした。その前後の文脈もその点を示しています。

17節と18節は宗教的権威による行動を意味しているかのように描かれることがありますが、続く節はそうでないことを示唆しています。少なくとも二人いれば宗教上の事柄を決定し、神の祝福を受けることができるのです（19節参照）。その祝福は、決定する人が何らかの公的地位にいる個人であることや、その決定が中央集権的な権威機構に提出されることによりません。なぜなら、イエスは「二人か三人がわたしの名において共に集まっているところには、わたしもその中にいて」、彼らの考えを導くと約束しておられるからです（20節）。真のキリスト者が心を込めてするその他の事柄においてもそうで、これこそが考えの一致、真の一致を生み出すものなのです。人数は関係ありません。イエスの御父は「霊の一致」を育む点にお

28　ヨハネ3:1, 2, 21。

29　一部の翻訳は古代写本に倣って、15節を「兄弟があなたに対して罪を犯したなら」と訳しています。（新国際訳、新改訂標準訳、今日の英語訳、リビングバイブル、新英語訳の脚注をご覧ください。）

30　英語では「you《あなた》」は一人を指すこともあれば複数の人を指すこともありますが、ギリシャ語では単数形と複数形が別です。

いて「すべて［の者］の上に、すべて［の者］を通しておられるのです」。一部の人を通してだけ働くのではありません[31]。キリストは彼らの一致のために祈られました。キリストの地上における強大な影響力をもってしてもこの一致を保つことはできず、その平和は神の霊の実としてのみもたらされることを知っておられたからです[32]。それは権威主義的な支配によって課せられる平和ではありません。

マタイ18:6でイエスは、「わたしに信仰を置くこれらの小さな者の一人をつまずかせる」ことを戒めておられます。イエスに信仰を置くことが基準であって、組織の教義と宗教的権威をセットにしたものを受け入れることが基準ではありません。父との個人的な関係が強調され（10節）、迷い出た羊とその一匹の羊に対する羊飼いの深い気遣いが関連付けられています（12節から14節）。証拠が示すところによれば、エホバの証人の組織はその教義主義や権威主義的な要求、人の思考や信念や良心を司ることによって、実に多くの人をつまずかせています。さらに悪いことにそうしておきながら、問題を正すために形だけの努力をするだけで、あとは見捨ててしまうのです。しかしそれらの人は、キリストが言われた「わたしに信仰を置く小さな者の一人」なのです。

数多くある事例の一つを挙げて、この精神がいかに「小さな者」に厳しい措置を取ることを長老に正当化させるか、少なくともそれを許してしまうかを説明しましょう。中西部の州に結婚を約束した若いカップルが住んでいました。男性はアパートで一人住まいをしており、女性は母親と義父と暮らしていました。二人の母親は共に証人となり、結婚の良いスタートを切るためにエホバの証人と勉強するように二人を説得しました。二人は地元で「開拓者」として奉仕している夫婦と勉強を始めました。夫が若い男性と、妻が若い女性とです。若い二人は神のご意志についての知識を得たいという心からの願いを示し、数か月後には証人の集会に出席するようになりました。彼らと勉強していた「開拓者」夫婦の妻は、その時のことを次のように語っています。

> ある金曜日、その若い男性から主人に電話があり、問題があるから来てほしいと言われました。わたしたちが彼のアパートに着くと、そこに若い女性もいました。彼女は前の晩、義父に家を追い出されたことを説明しました。夜遅くに他に行く所がなかったので彼女は婚約者のアパートに行き、「正しいこと」をしようと思った彼は彼女に寝室を譲り、自分はソファで寝たということでした。二人が電話をしたのは彼女のためにすぐに部屋を探したかったからでした。わたしたちは彼女が義父との関係を修復するか、別の居場所を見つけるかするまでうちに泊めてあげることにしました。その日の晩、彼女はわたしたちの家に来ることになりました。
>
> 車を走らせながら、主人は問題ないとは思うけれども、まずは会衆の長老に「打ち明け」たいとわたしに言いました。わたしは客人を迎えるのになぜ長老の許可が必要なのか、殊に家族の頭である主人がなぜそれを必要とするのか理解できないと言いました。それでも主人は「組織に従順」であることを長老に知ってもらいたいと言って、彼女が家に来る前に長老と話をする決意を変えませんでした。

31　エフェソス4:3-6, 新世界訳。
32　ヨハネ17:16-21; ガラテア5:22。

> その晩、主人は二人の長老と会い、長いプライベートな話し合いの後、どんなことがあってもその若い女性をうちに入れるべきでないと言われました。わたしはショックを受け、主人もかなり驚いたようでした。夜の９時半過ぎに家に着いたわたしたちは、彼女が何時間も待っていたけれど帰ってしまったことを知りました。主人が彼女に電話をかけ、彼女がうちに滞在することを長老たちが望んでいないこと、わたしたちの申し出は取り消さざるを得ないことを伝えました。若いカップルはどうしていいか分からず、彼女はもう一晩アパートに泊まることになりました。
>
> 翌朝の9時に、二人の長老がアパートのドアをたたき招き入れられました。若いカップルは自分たちを助けに来てくれた人がいることに最初は喜んだと言います。しかし長老たちは彼女がアパートに二晩泊まったというのは本当かと尋ねただけでした。カップルがそうだと答え、その理由を説明しようとすると、長老たちはそれだけで十分だと答え、このようなことが起こった以上、翌日の日曜日の集会で二人を正式に「断絶」する以外に選択肢はないと告げました。聞かされた以上の罪があると疑われたのです。
>
> 長老たちが帰った直後にわたしたちが到着すると、カップルは落ち込んで幻滅していました。わたしは状況から見てそのような行動が必要とは思えませんでしたし、勉強を始めて三ヶ月で数回の集会に出席しただけの人たちなら尚のことでした。主人が長老に連絡したところ、「一回」でも集会に出席していれば誰に対しても「断絶」することができるとのことでした。日曜日、カップルの母親たちと二人の姉妹が出席する中、二人の「断絶」の正式な発表が読み上げられ、聴衆は二人と付き合わないように告げられました。若いカップルは家族からも切り離されてしまったのです。
>
> 主人は数日後、巡回監督と話す約束を取り付けました。とても親身になって話を聞いてくれたように見えましたが、巡回監督は発表前に知っておきたかったが発表されてしまった以上は何もできないこと、協会としては地元の長老の決定を覆すようなことはしたくないことをわたしたちに伝えました。
>
> 若いカップルは、自分たちが何をしようとどっちみち責められるのだと感じたと言いました。二人は同棲（どうせい）を始め、数か月後に結婚し、子どもが生まれ、やがて離婚しました。ごく若い時期に人前で恥をかかせられたり、家族から疎外されたりすることがなかったなら、人生の道のりももっとスムーズだったのではないかと思わずにはいられません。二人の人生が違ったものになっていたかどうかはさておき、二人が受けた扱いは愛や慈悲、思いやりのかけらもないものだったことは確かです。

このような行動が取られたのは、バプテスマを受けていない人が悪行を犯しても排斥者として公に宣告されたり扱われたりしないという決定が『ものみの塔』1988年11月15日号で下される前のことです。新しい決定の下であれば長老たちは違った行動を取っていたかもしれません。とはいえ、これは組織が定めた規則を果することがいかに間違っているかを浮き彫りにするものであり、そのような規則によって個人の良心が踏みにじられ、通常であれば示すはずの思いやりや哀れみや分別ある判断が制限されてしまうことを示す実例なのです。このような規則がもたらす深い傷は多くの場合取り返しのつかないものです。先に言及した『ものみの塔』の中に、何らかの悪行を犯したバプテスマを受けていない「伝道者」がその資格をもう有していないと長老が判断した場合には、「適切な時に、『______さんは、もはや良いたよりの伝道者ではありません』という簡単な発表が行われる」とあることに

も着目できるでしょう。これは正式な排斥の発表ではありませんが、結果はほとんど同じです。この場合でも、証人はそのような人と「話をするのを避ける必要はない」としながらも、『ものみの塔』は、この「調整」に関わらず「コリント第一の手紙15:33の諭しは、やはり守るべき」という注意書きを加えています[33]。「悪い交わりは有益な習慣を損なう」というこの聖句に言及すれば、大多数の証人はバプテスマを受けていないそのような人に冷淡な反応以上のものを与えることにためらいを感じるにほぼ間違いありません。そのような人を霊的に築き上げるために訪問したり時間を割いたりすることが組織の「調整された」方針によって可能になったと感じる人は皆無でしょう。そんなことをしようものなら、間違いなく長老の戒めを受けるからです。このように法律もどきの用語や学術的な区別で綴られる方針の「調整」が、組織に育まれた精神に変化をもたらすということは稀で、その精神と考え方こそが、広く見られる不親切や思いやりの欠如の根底にあるのです。

誰の手本か

頑なな違反者を「諸国民の者また収税人」と同じように見なすというイエスの言葉は、ものみの塔組織が排斥者に対する冷たい軽蔑と極度の嫌悪をあおることを正当化するものではありません。御言葉は二つの例を選択肢として示しています。『ものみの塔』（先に言及した『ものみの塔』1981年11月15日号およびそれより新しい1991年4月15日号）は、キリストの時代のユダヤ人宗教指導者の例を強調しています。それら宗教指導者は異邦人や収税人を根深い偏見をもって蔑視していました。「軽視」し、「嫌って」いたとさえ記事は述べています。

それとは対照的に、ヘブライ語聖典は何世紀にもわたってまったく異なる態度を促してきました。イスラエル人は外人居留者を愛するべきでした。かつて自分たちも外人居留者であったからです[34]。異邦人は避難都市に逃れる権利を持ち、時にはイスラエル人の召使いを持つことがあり、神殿で祈りを捧げることができました。また、イスラエル人は異邦人の支配者のために祈ったことが示されています[35]。

ユダヤ人の態度は何世紀にもわたって徐々に堕落していきましたが、その理由は間違いなく、流刑中に異国の征服者の手によって受けた酷い仕打ちにありました。彼らは、カナンの地に入ったイスラエル人に関連した聖句、および偶像礼拝の汚れを避けるようにとの命令に関連した聖句を根拠に、すべての異邦人は生まれながらにして神とその民の敵であるとして分類しました[36]。新約聖書の時代には、異邦人は極度の嫌悪と憎悪に近い目で見られ、汚れた者として数えられ、彼らと友好を結ぶ

33　『ものみの塔』1988年11月15日号19頁の脚注。

34　申命記10:19; 24:14, 15; 出エジプト記23:9をご覧ください。ケニ人はイスラエル人とほぼ兄弟と見なされ、レカブ人、エブス人、ヒッタイト人などの異民族は好意的に受け入れられました。（裁き人1:16; 5:24; サムエル第二11:6-11; 15:19-22; 18:2; 24:15-25; エレミヤ35:1-19。）

35　民数記35:15; レビ記25:47; 列王第一8:41-43; エレミヤ29:1, 7。エズラ6:10と比較なさってください。

36　例としてレビ記18:24-30; 申命記7:3-12; エズラ9:11, 12をご覧ください。

ことは「不法」と見なされるようになりました。たとえ彼らが改宗者となっても、昔のように完全な親睦が認められることはありませんでした。このような偏見は、ヨハネ18:28; 使徒10:28; 11:3; ガラテア2:12の記述に反映されています。

排斥者に対するものみの塔の見方は、イエスの見方というよりも、ユダヤ教の宗教指導者たちが収税人や異邦人に対して抱いていた根強い見方を模倣しています。

　神の御子はそのような社会規範に縛られることはなく、まさにその理由で宗教的権威から批判されました[37]。御子は御父の御心と、人種を問わない全人類への愛をご存じで、わたしたちが従うべきより高い基準を定められました[38]。そしてそのことを態度で、異邦人にも収税人（異邦人の政府の回し者として軽蔑されていた）にも、またサマリア人や罪人に対しても示されました[39]。ものみの塔組織は、この模範を脇に置いて忌避の立場を取り、イエスがそのような人と付き合ったのは、彼らが良いたよりを受け入れることを示すそれ以前の証拠のためであり、「悔い改めない罪人の扱い方に関する手本ではない」と述べています[40]。これは悔い改めが生じたのがイエスの助けを受ける前ではなく後だったという事実を無視するものです。イエスが彼らと交流し話をした時、その多くは罪人で、中には売春婦もいました。イエスは、「わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われました[41]。それらの人はユダヤ人の会衆の中で「良い立場にあるメンバー」ではありませんでした。また、エホバの証人が「新しく関心のある人」と呼んでその悪い素行を一時見過ごすような、ユダヤ人の会衆への入会希望者でもありませんでした。ほとんどの場合（おそらく生まれた時から）ユダヤ人コミュニティー、神の契約の民の中にいた人々でしたが、その行動のために「マーキングされ」、時には除け者扱いされました。そのような「マーキング」をしていたのはユダヤ人コミュニティーの「年長者」でした。エホバの証人の一人にとって、証人のコミュニティーでそれに相応する人と話したり付き合ったりすることは、組織の忌避規範に違反したかどで排斥される危険を意味します。証人のコミュニティーの誰かがイエスの行いに見倣うということは、組織の規範を守らないで交

37　マタイ9:10, 11; 11:19。
38　ヨハネ3:16; 使徒10: 28, 34。
39　マタイ5: 43-48; 8:8-13（ルカ7:2-9と比較）; マタイ9:10-13; 11:19; 15:21-28（マルコ7:24-30と比較）; ルカ5:29, 30; 15:1, 2; ヨハネ4:7-42。
40　『ものみの塔』1981年11月15日号19頁および1991年4月15日号20, 21頁。
41　マタイ9:11-13, 新改訂標準訳。

わらなくなった人だけでなく、罪深い習慣に陥って追放された人とも連絡を取って話す時間を持ち、その人にとって前向きで癒しとなる力になるということです。組織の方針はそのような道筋を排除しています。いったん「排斥」のレッテルが貼られると、その人の家族でさえもその人との霊的な会話を絶つことになっています[42]。

何十年もの間、長老といえども――向こうから近づいて排斥状態を解いてくれるよう嘆願しない限り――排斥者に話をしてはなりませんでした[43]。自分から決して話しかけてはならず、会話は常に排斥者の側から始めるべきということを長老は頭にたたき込まれていました。御言葉の中に、神ご自身が預言者を任命して非常に罪深く頑固なまでに反抗的な道を歩んでいたイスラエルの人々に定期的に話しかけられ、間違った道から立ち返るように、一時ではなく何年にもわたって訴えてこられたという証拠が豊富にあるにもかかわらずです[44]。ヘブライ語の預言の大半は罪深い状態の国民に語られました。それに加えて、神は「わたしたちがまだ罪人であった間にキリストがわたしたちのために死んでくださったことにおいて、ご自身の愛をわたしたちに示しておられるのです」[45]。

約半世紀後、『ものみの塔』1991年4月15日号はようやくこのことを認め、排斥者との会話を始めることの妥当性を認めました。残念なことに、このことは直ちに体系化され、そのような接触を始めるのは長老に限定され、どのようにして「神の憐れみに倣う」かの規則が詳述されました。

その雑誌の最初の記事では、憐れみが示された多くの素晴らしい事例と聖書の原則が紹介されています。二番目の記事は、これらの事例や原則をどのように適用すべきかをメンバーに伝えるもので、肝心要の内容となってます。聖句から組織方針への転換をはかるこのやり方から、記事の筆者が組織権威に影響を受けていることがありありと分かります。二番目の記事は接触を始めるというこの慈愛に満ちた行為を、組織に任命された長老だけに限定するための土台作りを早々に始めています。マタイ18:15-17の引用に先立ち、イエスのこの言葉が「後にクリスチャンの監督になる」使徒たちに対して語られたものであるとしているのです。イエスがそこでお与えになった助言には監督職のことは含まれてもおらず、その助言は明らかに

42　唯一の例外は同居している未成年の子どもが排斥された場合で、組織はそうした子どもに霊的な指導を与え続ける権利を親に認めています。（『ものみの塔』1988年11月15日号19, 20頁）同居している成人した親族が排斥された場合、「家族として霊的な資料が考慮される時にその場にいる」ことが許されています。（『ものみの塔』1991年4月15日号22頁の脚注）おそらくこれは同居している妻や祖父母も含まれており、同席は許されるが討議には参加できないという意味合いなのでしょう。

43　1971年、カール・アダムスはノア会長に宛てた手紙の中で、ブリテン諸島を管轄する支部の監督を務めたことがあるプライス・ヒューズにまつわる出来事を思い起こさせました。カールは次のように書いています。「彼が排斥者に偶然会って非常に率直に語り、復帰のために何をすべきかを伝えたということを、あなたは語ってくれましたね。わたしの記憶では彼がそうしたのは『そうするのが正しいと思った』からでしたが、それでもその出来事を語る時の彼の口調は申し訳なさそうで、それは協会の方針に従わなかったことを知っていたからでした」。

44　イザヤ1:2-6, 14-20; 44:21,22; エレミヤ3:12-14; 5:20-25; エゼキエル18:30-32と比較なさってください。

45　ローマ5:8-10。

すべてのキリスト者を対象にしていたにもかかわらずです。幾つかの段落で長老に焦点を当てた後、『ものみの塔』1991年4月15日号はこう述べています（10節）。

> 先に引用した百科事典にはこう記されています。『破門の基本的な根拠になったのは、そのグループの規準を守ることであった。「少量のパン種が塊全体を発酵させる」（コリント第一5:6）。この動機は、聖書および聖書正典意外の書のほとんどの部分で明らかにされているが、追放の後でさえ、当人に対する気遣いは、コリント第二2:7-10にあるパウロの嘆願の基盤になっていた』。（下線は本誌。）したがって、今日、群れの羊飼いは当然この種の気遣いを示すべきです。（使徒20:28; ペテロ第一5:2）以前の友や親族は排斥者が戻ることを望むかもしれませんが、彼らはコリント第一5:11の命令に対する敬意ゆえに、追放された人とは交わりません。彼らは、そのような人が戻ることに関心があるかどうか率先して調べる仕事を、任命された牧者たちに委ねます。

聖句のどこにも長老を特権的な立場に置く箇所はなく、過ちを犯した人を励ましたり、戒めたり、復帰させたりすることを長老だけに限定しているわけでもありません。長老が率先してそうするからといって、他の人が同じことをしてはいけないということにはなりません。そのような規則を作ることは、キリスト教の同胞関係ではなくて、聖職者と平信徒を区別するメンタリティーを明らかにするもので、二つの行動規範、一つは長老に対して、もう一つはそれ以外のすべての人に対して定めるものです。「愛される子供として、神を見倣う者となる」という勧めはすべてのキリスト者に向けられているのであって、一部のキリスト者に向けられているのではありません[46]。何よりも、神がわたしたちに示された憐（あわ）れみと慈しみの模範はすべてのキリスト者が自由に従うべきものであり、組織が自らの権威を高めるために課する制約に縛られる必要はありません[47]。記事はさらに踏み込んで、長老が排斥者や断絶者に対して取る憐（あわ）れみの表明までも体系化しています。そこには「長老団は多くても年に一度、自分たちの区域にそのような人［接触するに値する］が住んでいるかどうかを考慮すべきです。長老たちは、追放されてから一年以上たった人たちに焦点を合わせるでしょう」とあります[48]。本来自発的で自由になされるべき憐（あわ）れみの表明にこのような機械的なアプローチが適用されるのは、ものみの塔組織の典型的なやり方です。このような規則の下で働く羊飼いが、失われた羊を探すべきかどうかを年に一度検討し、探す対象を一年間群れを離れていた羊だけに限定するところを想像できる人がいるでしょうか。天の父の驚くべき憐（あわ）れみと辛抱強さの表明とはまったく違います。ユダの悪行者や偶像礼拝者にさえ、天の父はこうおっしゃいました。

> あなたがたは、わたしが何度となく［うまずたゆまず, 新アメリカ聖書］語ったのに従わなかった。わたしは、あなたがたにわたしの僕である預言者を何度となく遣わして言

46　エフェソス5:1。

47　ガラテア5:22, 23と比較なさってください。

48　『ものみの塔』1991年4月15日号23頁。脚注には、もし排斥者が区域に住んでいることを知ったら「その情報を長老たちに伝えるべきです」と長老でない人たちに銘記させています。

わせた。「おのおの悪い道を離れ、その行いを改めなさい。ほかの神々に従って仕えてはならない。そうすれば、わたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの地に住むことができる」と[49]。

その上で、長老がそのような人を訪問する仕方、従うべき手順、そして「監督ではなく、また排斥された人たちに対してそのように率先することのない人」は何をすべきかについて述べられています。また、同居の家族の一人が排斥された場合にその排斥者の家族をどのように見なし、どのように関わるべきかについてもかなり詳述されています。つまり、古代のユダヤ人のように「収税人の家族にまで憎しみを広げる」ようなことがあってはならないこと、その人が「客から離れているという礼儀も示さない」場合にはどう対応すべきか、その家を訪問したり電話をかけたりした時にその人が応対に出たら何と言うべきかなどです[50]。このように聖句から始まった記事の優れた助言はすべて組織の方針によって即座に上書きされ、神がお与えになった寛大な原則と憐(あわ)れみの模範は、体系化され、規則化され、事実上無味乾燥なものにされてしまったのです。

「こんにちは」の一言もいけない

長老が年に一度接触することは別として、排斥者や断絶者に対する扱いは変わりません。長老以外のすべての証人は、排斥「状態」にある人との付き合いも会話も避けなければなりません。一定の譲歩が認められるとはいえ、同居していない親族とは、家族に関係したことで必要な場合や緊急な場合にのみ連絡を取ることが許されています。この極端に厳格な方針は、イエスの時代の宗教指導者が取った厳しい態度を模倣しています。『ものみの塔』1981年11月15日号21頁には、その方針の裏付けとして、会堂から追放された人が受けた待遇についての記述が引用されています。

> ゆえにその人は死者も同然だった。他の人と共に学ぶことも許されず、［親ぼくのための］交流も持てず、その人には道を教えることさえできなかった。実際、生活に必要な物を買うことはできたようだが、そうした人と飲食を共にすることは禁じられていた[51]。

着目してほしいのは、これがコリントのキリスト者に対するパウロの勧めのように個人的に決断するというものではなく、会堂から追放された人に対して会堂のメンバーが他の行動を取ることが宗教権威によって「禁じられていた」ということです。このユダヤ教の慣習は、ものみの塔組織が任命した長老から「排斥」のレッテルを貼られた人が受ける待遇によく似ています。その人は「死者」と見なされます。その措置が取られた理由はまったく不明です。軍基地でゴキブリを殺したからかもしれませんし、教会の芝刈りをしたからかもしれませんし、誕生日を単に祝っ

49　エレミヤ35:14, 15, 新改訂標準訳。エレミヤ7:24, 25と比較なさってください。

50　『ものみの塔』1991年4月15日号23, 24頁。

51　A・エダーシャイム著、『メシア、イエスの生涯とその時代』第2巻184頁から『ものみの塔』が引用。

たからかもしれません。あるいは、1914年が聖書に指し示された年であるとかキリストの死の記念式典には特定の人だけがあずかるべきであるとかを受け入れることができないと認めたからかもしれません。わたしの場合は、組織から正式に脱会した雇用主とレストランで食事をしたのが理由でした[52]。待遇を決めるのは理由ではなくレッテルです。

『ものみの塔』1981年11月15日号は（ちなみに、この『ものみの塔』はわたしに対して排斥措置を取る手段となった）、こう問いかけています。

> 神の義と排斥に関する神の取決めを擁護するということは、クリスチャンは追放された人とひと言も話してはならない、「こんにちは」というあいさつさえできないという意味でしょうか。

その上で、ヨハネ第二9-11を紹介しています。

> 先走って、キリストの教えにとどまらない者は、だれも神を持っていません。……この教えを携えないであなたがたのところにやって来る人がいれば、決して家に迎え入れてはなりませんし、あいさつのことばをかけてもなりません。その人にあいさつのことばをかける者は、その邪悪な業にあずかることになるからです。

ヨハネのこの言葉は、組織から追放された人との会話を一切禁じ、簡単な「こんにちは」という挨拶さえも許されないというように受け取られています。しかし、ヨハネの言葉はその主張を裏付けるものではありません。

まず注意すべきなのは、焦点となっているのが「キリストの教え」であって、ある宗教運動の教えではないということです。ヨハネにとってその教えとは、その最初の手紙が示しているように、イエスがキリストすなわち肉体をもって神に地上に遣わされた方であるというキリスト教の基本的な告白を中心としたものでした[53]。その他の聖句も明らかに示しているように、バプテスマの基準は、ナザレ人イエスが本当にキリストであり人類のために命を捧(ささ)げて復活なさったことを心から信じて、その教えと道徳を実践することでした[54]。何世紀も後にものみの塔組織のような宗教運動によって編み出された複雑な一連の「独自の教え」を信じることでも、組織により決定された同様に複雑な一連の方針を守ることでもありませんでした。それほど重要でない他の教えについての見解の相違は分裂や隔たりの理由とはならず、ある者が他の者を切り離して交わりから締め出す理由にもなりません。使徒はこう言っています。

> 信仰の弱い人を受け入れなさい。その個人的な考え［論争になりそうな事柄, 新国際訳］で言い争ってはなりません[55]。

ものみの塔は論争になりそうな事柄を「意見や趣味や良心の相違などに関するさ

52　『良心の危機』336-363頁をご覧ください。
53　ヨハネ第一2:22, 23, 29; 3:23; 4:2, 3; 5:1-5。
54　ローマ10:6-9; コリント第一12:3。コリント第一1:2およびマタイ16:16, 17と比較なさってください。
55　ローマ14:1, 今日の英語訳。

さいな問題」として片付けることで、それをごまかそうとしています[56]。これは、使徒が特定の食物を食べることや特定の日を聖なる日として守ることなどの事柄に限って述べていることを示す文脈を無視しているにすぎません。（ローマ14:2-23）とりわけユダヤ人信者にとってそれらは「ささいな」事柄などではありませんでした。「何でも食べてもよい」（2節）と信じることには偶像に捧げられた肉や豚肉を食べることも含まれ、ユダヤ教の背景を持つキリスト者にとってきわめて重大な事柄でした。実際、それに基づいて神に対する他者の立場を裁いていた人もいました。仮にものみの塔がほのめかすようにそれが現代社会に見られる食べ物の好き嫌いのような宗教上の呵責とは無関係な単なる「趣味」の問題であったとすればこれはとてもありえなかったことでしょう[57]。安息日のような特定の日を守ること（5, 6節）は、ユダヤ教の礼拝において非常に重要な点であり、安息の休みを犯すことは最大の罪の一つに数えられていました。キリスト教に改宗したユダヤ人にとって、「どの日もほかのすべての日と同じである」と考えるのはなかなか馴染めるものではなかったでしょう。しかし、このような重大な問題について見解の相違があったにもかかわらず、その相違がもとで他者の立場を裁いたり隔たりができたりすることがないようにと勧められました。ものみの塔の方針は使徒のその勧告に従っていません。言われていることと正反対のことを実際に行おうとしているのです。「人の内心の疑問について決定し〈新世界訳〉」、「論争になりそうな事柄で裁いて〈新国際訳〉」、そのような争論になりかねない事柄でもって、糾弾すべきでない人を糾弾することによってです。糾弾すべきでないのは、各自が「他人の召し使い」で、「彼が立つか倒れるかは、その主人に関わること」だからです[58]。

「キリストの教えにとどまらない者」と使徒ヨハネが表現しているのは、このような見解や理解の相違とは一切関係ありません。また、ヨハネの勧告の残りの部分に関する『ものみの塔』の討議も事実に合致していません。『ものみの塔』1985年7月15日号31頁に掲載された「あいさつ」という聖句の言葉の議論に着目なさってください。

---

56 『ものみの塔』1981年11月1日号20頁。

57 レビ記11:7, 8、イザヤ66:17; コリント第一8:7-13と比較なさってください。『ものみの塔』1978年3月1日号には、ローマ14章に関する論考（筆者はエドワード・ダンラップ）が掲載されており、関係する事柄の深刻さが的確に述べられています。それ以降の記事はそこで提示された証拠を単に無視しています。

58 ローマ14:1, 4, エルサレム聖書。リビングバイブルでここはこうなっています。「どちらも神に仕えているのであって、人に仕えているわけではありません。神に対して責任を負うのであって、人に対して責任を負うのではありません」。

ヨハネはさらに，「その人にあいさつのことばをかける者は，その邪悪な業にあずかることになるからです」と付け加えました。(ヨハネ第二 11) ここでヨハネは，13 節にあるアスパゾマイという語ではなく，カイローというギリシャ語のあいさつの言葉を使っています。

カイローは歓ぶことを意味しました。(ルカ 10:20。フィリピ 3:1; 4:4) この語はまた，口頭あるいは文面でのあいさつに用いられました。(マタイ 28:9。使徒 15:23; 23:26)アスパゾマイは，「両腕に抱きしめる，それゆえあいさつをする，歓迎する」ことを意味していました。(ルカ 11:43。使徒 20:1，37; 21:7，19)どちらの語もあいさつの言葉になり得ますが，アスパゾマイは丁寧な「こんにちは」というような言葉以上のことを示唆したかもしれません。イエスは 70 人の弟子たちに，だれに もアスパセステーしてはならないと告げました。こうしてイエスは，業が緊急であるゆえに，口づけや抱擁それに長い会話を伴う東洋式のあいさつを交わす時間がないことを示されました。(ルカ 10:4)ペテロとパウロ は，『愛の口づけ，あるいは聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わし[アスパステー]なさい』と勧めました。―ペテロ第一 5:14。コリント 第二 13:12，13。テサロニケ第一 5:26。

ですから，ヨハネはヨハネ第二 10，11 節で，故意にアスパゾマイ(13 節)ではなく，カイローを使ったのかもしれません。そうだとすれば，ヨハネは，偽りを教えたり会衆を否認したりした(背教した)人に温かいあいさつをする(抱擁や口づけ，会話を伴う)ことだけを避けるよう当時のクリスチャンたちに勧めていたのではないことになります。むしろヨハネは，カイロー，すなわちごく普通の「こんにちは」という言葉でそのような人にあいさつをすることさえしてはならない，と言っていたのです。

この記事（『ものみの塔』1988年4月15日号に再掲載）を書いた人は、ルカ1:28, 29の記述を明らかに見落としているか無視しているかしています。ものみの塔は、*aspazomai*《アスパゾマイ》という語に、ヨハネ第二の手紙に使われている *khairo*《カイロ》という語をしのぐ挨拶の特別な温かさを持たせようとしています。そうすれば、*aspazomai* に比べて *khairo* は「温かい」言葉でなくなるので、「こんにちは」というようなありふれた形式的な挨拶に関連付けることができます。これに基づいて、ものみの塔は排斥者との会話を一切排除できるというわけです。ルカの記述には、神のみ使いがマリアを訪ねた時のことが次のように記されています。

> み使いは彼女のもとに来て言った、「おめでとう［ギ語、*khaire*《カイレ》］、恵まれた女よ。主はあなたと共におられます」。この言葉にマリアは戸惑い、いったいこの挨拶［ギ語、*aspasmos*《アスパスモス》］は何のことだろうかと思い巡らしていた[59]。

この二つの語が同じ意味で使われているのは明らかです。マリアはみ使いが述べた *khaire* という語に、*aspasmos* という語を当てています。マリアがそうしたのは、ものみの塔の定義のようにみ使いが彼女を「抱擁」したからでも接吻（せっぷん）したから

59　ルカ1:28, 29, 新改訂標準訳。

でもありません。また、この時点でみ使いが彼女と「長い会話」を交わしていたからでもありません。マリアは、抱擁や接吻(せっぷん)にではなくみ使いの「言葉」に言及しているのです[60]。

ものみの塔の誤りはこれだけではありません。ヨハネが使ったギリシャ語の動詞 *khairein*《カイレイン》が「こんにちは」のような簡単な挨拶に関連していないことも、ものみの塔は気づいていません。この語は他のギリシャ語用語に比べて少しも引けを取らない「温かさ」があります。*khairein* という語は文字通りには「喜んでいる」という意味で、「平和があるように」という意味のヘブライ語の *shalom*《シャローム》に匹敵します[61]。これは単なる挨拶ではなく、個人的あるいは社会的な好意や受容、さらには権威の承認を表明するのに使われました[62]。このことを踏まえ、幾つかの翻訳はここを単に「挨拶」とではなく「歓迎する」と表現しています[63]。ある翻訳はヨハネの言葉の意味を次のように上手に表現しています。

> 彼を家に迎えてはならない。「平和がありますように」とも言ってはならない［彼らを励ますようなまねはいっさいやめなさい〈リビングバイブル〉］。彼に平安を願う者はだれでも、彼の行う悪事の仲間となるからである[64]。

キリスト者が反キリストにしてならないことは明白でしょう。「こんにちは」とか「ごきげんよう」とかいった簡単な挨拶をしてはならないのではなく、その人やその大義を受け入れ、賛同し、好意や成功を祈ることを意味する挨拶をしてはならないのです。そのようにして「歓迎する」なら、「彼の行う悪事の仲間」となります。いっぽう、単に話しかけるだけなら、受容や同意、好意を意味しません。それは人が何を言うかによって決まります。その人に反論したり、説得してその間違った考えややり方の誤りを確信させたりしても、その人が行う悪事の仲間入りすることにはなりません。むしろその逆で、そうすることがキリスト者の務めであることを聖句は示しています[65]。

ものみの塔はその最新の方針に「調整」を加え、長老が排斥者や断絶者と接触してもいいとしつつも、「批判的で危険な態度を示す人は訪問しない」と明記しています[66]。ものみの塔は、組織が「背教者」とした人との会話を一切禁じるその方針によって、いわばメンバーを無菌状態にして、組織側に誤りがあったとしてもメンバーがその確たる証拠に向かい合わなくてもよいようにしています。そればかりで

60　40節で、マリアがエリサベツにした「挨拶」にも *aspazomai* の語形が使われていますが、これも単に言葉を指しています。というのも41節では、エリサベツは挨拶を「聞いた」のであって温かい抱擁や接吻(せっぷん)を受けたのではないからです。

61　『ギリシャ語聖書　王国行間逐語訳』のヨハネ第二10, 11をご覧ください。

62　ローマ人公式の敬礼「ハイル・シーザー《カエサル万歳》」はギリシャ語で *khaire kaisar*《カイレ・カイザル》と表現されます。マタイ27:29で兵士たちがイエスを「ユダヤ人の王」と呼んで嘲りに使ったのもこの言葉でした。

63　新国際訳、新英語訳、新改訂標準訳のヨハネ第二10をご覧ください。

64　ヨハネ第二10, 11, 今日の英語訳。

65　ヤコブ5:19, 20; テモテ第二2:24-26; テトス1:10-13と比較なさってください。

66　『ものみの塔』1991年4月15日号23頁。

はありません。組織がそのような証拠に対して弁明の必要すらないようにしています。単に「背教者からの情報」として受け流せばいいのです。『良心の危機』の本を読んでブルックリン本部に手紙や電話での問い合わせをしてもいつも答えてもらえないのは、この根拠によります。電話での問い合わせには「ノーコメント」との答えが返ってくるだけです。この“石の壁”は、「背教者からの情報」を討議するのは間違っていると主張すれば正当化されるのです。

仮に本当に背教の罪があったにせよ（ほとんどの場合そうではないが）、これは人が考えた言い訳に過ぎず、御言葉に何の裏付けもない口実です。ヨブ記の第１章には、エホバが最初で最たる背教者サタンと話をされ、論争を交わしておられる様子が描かれています。このことを論じたものみの塔の出版物には、エホバがサタンの挑発を受け入れられたこと、それが一時はヨブに多大の苦しみをもたらしたが最終的には有益な結果になったことが述べられています[67]。それにもかかわらず、ものみの塔自身は自分の主張に合わない証拠を提示されても、受難でなく単なるオープンな議論を求められても、それに応じようとしません。エホバは「背教の国民」、「背信の子ら」とご自分が形容した人々に繰り返し預言者をお遣わしになりました[68]。彼らの悪行を容認したり罪を軽視したりはなさいませんでしたが、彼らの過ちを明らかにし、贖（あがな）いを成し遂げるために彼らと「事を正し」、「争い」、さらには「論争を始め」ようとなさいました[69]。

神の御子は大いなる背教者サタンにためらうことなく返答なさり、その誘惑に反駁（はんばく）して聖句を引用することさえなさいました[70]。また、当時のエホバの契約の民の宗教指導者を、ゲヘナの子ら、まむしの子ら、人殺し、悪魔の子孫と評されましたが、繰り返し彼らに話しかけ、その質問に答え、その主張と議論を暴露なさいました[71]。使徒たちもそれら宗教指導者に対してだけでなく、キリスト教を公言しながら誤った教えを広めたり他のキリスト者を正しい道からそらせようとする人に対しても御子の例に倣いました。使徒の書簡を読めば、そうした人からの議論に対して、返答を避けるようなことはせず正面切って反論していることが分かります。

宗教指導者にとって最も穏やかならぬ質問の一つは、「どんな権威でこうしたことをするのか」というものでしょう[72]。ものみの塔組織は自分の主張する権威を疑問視する誠実な人に確たる証拠を示されても、その証拠に正々堂々と取り組むのではなく、そのようにして自らを表現する人を排斥します。パウロはその使徒職が挑戦されても、それに尻込みすることなく、自らの使徒職を裏付ける広範な証拠を提

67　『あなたは地上の楽園で永遠に生きられます』105-111頁［英文］および『ものみの塔』1986年11月1日号31頁をご覧ください。

68　イザヤ10:6; エレミヤ3:12-14。

69　イザヤ1:18; エレミヤ2:9, 35; イザヤ50:7, 8と比較なさってください。

70　マタイ4:1-11。

71　マタイ23:15, 33; ヨハネ8:44。

72　マタイ21:23。

示して、反対者からの論争や苦情や非難に対処しました[73]。その際も彼自身が述べているように、権威主義的な態度を取ったり手紙や行いで相手を脅したりするようなことはしませんでした[74]。パウロは挑戦者がしたように、僭越(せんえつ)にも「自分を推薦し」ようとはしませんでしたし、嫌がらせや欺瞞(ぎまん)、詭弁(きべん)といった「肉の武器」を用いることもありませんでした。また、自分の立場に疑問を抱く人に対して破門の脅しを武器に使うこともありませんでした[75]。

テモテへの助言の中でパウロは、間違った影響から自分を守り、論争を避けるようにとテモテに勧めました。と同時に、権威を誇示したり組織的な報復を脅しに使ったりして対抗するようなことは指示せず、そのような罪を犯した人、悔い改めて「悪魔のわなから」逃れ出る必要のある人を温和に指導することに努めるようにと勧めました[76]。

今日の真のキリスト者も神と御子とその使徒たちの模範に倣うべきであって、権威主義的な組織の手本に倣うべきではありません。

さらに誤った区別

ものみの塔組織は、霊的な事柄を排斥者と話し合うことを特に禁じているので、テサロニケ第二3:14, 15のパウロの勧告を扱う時に困難に直面します。新世界訳では、パウロの言葉はこうなっています。

> もし，この手紙で私たちが述べていることに従わない人がいれば，その人に特に注意し，交友を持つのをやめなさい。そうすれば，その人は恥じるようになるでしょう。それでも，その人を敵と見なすのではなく，兄弟として訓戒し続けてください。

この勧告に従うことは、完全な排除を目指すものみの塔の方針を支持するものでも、それに適うものでもないため、ものみの塔はこれを、排斥ほど深刻でない事例として扱うように分けています。このように、「マーキング」という別カテゴリーを設けて、そのカテゴリーに分類された人に対して、それほど思い切った措置や態度を取らないようにしたのです。それによって、ここで議論されている扱いが、コリント第一5:9-11の扱いとは異なるように見せかけているのです。しかしそうなのでしょうか。

文脈が示すように、キリストに遣わされた使徒の手紙の言葉に従わないのは違反です。これが些細(ささい)な問題でないことは確かです。ものみの塔組織もその公式見解や教えを無視する証人がいれば些細(ささい)な問題とは見ないでしょう。

『ものみの塔』1985年4月15日号の31頁は、その聖句の考察の中で「交友を持つ

73　コリント第一1:10-17; 3:4-10; 4:1-16; 9:1-18; 15:9-11; コリント第二6:3-13; 7:2, 3, 8-13; 10:7-13; 11:5-27; 12:11-13, 16-19と比較なさってください。

74　コリント第二1:24; 10:1, 8, 9と比較なさってください。

75　コリント第二3:1; 10:3, 4, 12, 18; 12:16。ペテロ第二1:16と比較なさってください。

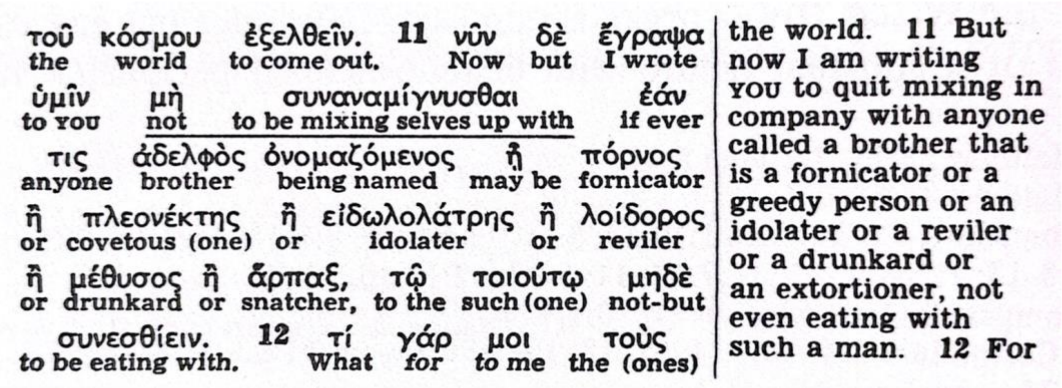
76　テモテ第二2:14-26。

のをやめなさい」というパウロの言葉を引用し、次のように述べています。

> 兄弟たちはその人を全く避けてしまうわけではありません。パウロは、「その人を……兄弟として訓戒し続けなさい」と彼らに助言したからです。それでも、その人との社交的な交友を制限することにより、当人は恥じるようにな（る）……かもしれません。

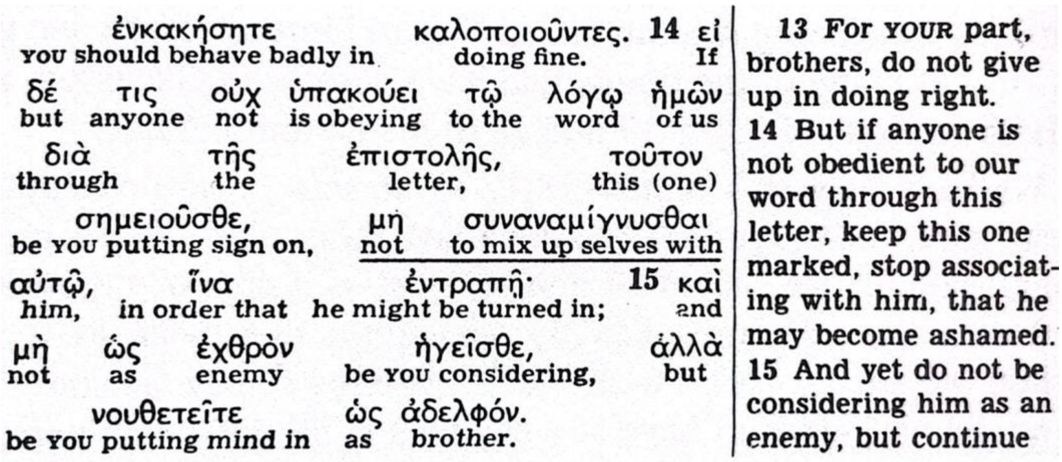
ものみの塔が気づいていない、あるいは認めていないのは、「交友を持つのをやめなさい」にパウロが使ったギリシャ語の表現（*synanamignysthai*）がコリント第一5:11でパウロが使った表現と同一であるということです。新世界訳はコリント第一5:11を「（その人々と）自分たちを混ぜ合わせないようにし」と訳しています《日本語版では脚注》。このことは、王国行間逐語訳を見れば分かります。

コリント第一5:11：


τοῦ κόσμου ἐξελθεῖν. 11 νῦν δὲ ἔγραψα
the world to come out. Now but I wrote
ὑμῖν μὴ συναναμίγνυσθαι ἐάν
to YOU not to be mixing selves up with if ever
τις ἀδελφὸς ὀνομαζόμενος ᾖ πόρνος
anyone brother being named may be fornicator
ἢ πλεονέκτης ἢ εἰδωλολάτρης ἢ λοίδορος
or covetous (one) or idolater or reviler
ἢ μέθυσος ἢ ἅρπαξ, τῷ τοιούτῳ μηδὲ
or drunkard or snatcher, to the such (one) not-but
συνεσθίειν. 12 τί γάρ μοι τοὺς
to be eating with. What for to me the (ones)

the world. 11 But now I am writing YOU to quit mixing in company with anyone called a brother that is a fornicator or a greedy person or an idolater or a reviler or a drunkard or an extortioner, not even eating with such a man. 12 For

テサロニケ第二3:14：


ἐνκακήσητε καλοποιοῦντες. 14 εἰ
YOU should behave badly in doing fine. If
δέ τις οὐχ ὑπακούει τῷ λόγῳ ἡμῶν
but anyone not is obeying to the word of us
διὰ τῆς ἐπιστολῆς, τοῦτον
through the letter, this (one)
σημειοῦσθε, μὴ συναναμίγνυσθαι
be YOU putting sign on, not to mix up selves with
αὐτῷ, ἵνα ἐντραπῇ· 15 καὶ
him, in order that he might be turned in; and
μὴ ὡς ἐχθρὸν ἡγεῖσθε, ἀλλὰ
not as enemy be YOU considering, but
νουθετεῖτε ὡς ἀδελφόν.
be YOU putting mind in as brother.

13 For YOUR part, brothers, do not give up in doing right. 14 But if anyone is not obedient to our word through this letter, keep this one marked, stop associat-ing with him, that he may become ashamed. 15 And yet do not be considering him as an enemy, but continue

どちらの聖句でも、この用語の効力に違いはありません。いずれの場合においても、キリスト者はコリント第一5章ないしテサロニケ第二3章に述べられているような悪事を働いている人との親密な交わりを個人的なレベルで避けるようにと求められているのです。それは不義を行っている人が恥入るためです。それがパウロの助言であり、それ以上でもそれ以下でもありません[77]。

77　分裂を招くほどの論争好きで、そのことについて繰り返し戒めを受けている人について語る時でさえ、使徒はその人と話すことを一切禁じているわけではないことに気づかれるでしょう。テトス3:10で「退ける」と表現されることのあるギリシャ語は実際には「離れて懇願する」とか「さらばする」という意味を持っています。（同じ用語が使われているヘブライ12:25とルカ

キリスト者の交友では個人的な相違を認める余地というものが十分にありました。キリストのメシアとしての地位、犠牲の死、復活と栄光、信仰による救いの恵み、聖霊の働き、キリストの教えと道徳に関する教えは強く擁護され、キリストの体を構成する肢体にとって不可欠なものと見なされていました[78]。しかし、復活を信じないといった間違った見解でさえ兄弟の霊性の弱点として扱われ、必要な証拠の提示によって助ける手立てが講じられました。一緒くたに背教のかどで告発したり、教会の司法機関によって懲罰措置を講ずるというようなことはありませんでした[79]。

ここで議論されている幾つかの点は、二十年も前に統治体の注意を喚起したものです。カール・アダムス、エドワード・ダンラップ、そしてわたし自身が携わった組織の新しいマニュアルの作成において、わたしは排斥とそれに関連する事柄を扱った部分を準備しました。第6章に述べたように当時執筆部門の監督であったカール・アダムスは、ある調整が推奨される理由を説明したメモランダムをノア会長に提出しました[80]。メモランダムの17, 18頁の以下の部分からも分かるように、カール自身ここで議論されている多くの点の妥当性をはっきりと認識していました。

> マタイ18:17をわたしたちは排斥の意味と理解してきました。イエスは、関係する人が「会衆の告げることを聴かない」なら、その人を「諸国民の者また収税人のような者としなさい」とおっしゃいました。そうした排斥者に対してわたしたちが取るべき行動に関連して、これは一体どんな意味を持つのでしょうか。ユダヤ人はそうした人と付き合ったり話したりすることを一切拒否するようなことはしませんでした。
>
> マタイ18:17に関連して、テサロニケ第二3:6, 14, 15、およびそれに付随してテモテ第二2:25, 26、ヤコブ5:19, 20を考察することは助けになると思われます。それらの聖句、特に最後の二つでは強い表現が使われています。「悪魔の意志に仕えるべくその者に生きながら捕らえられて」いても、「真理からそれ」て「多くの罪」を犯していたとしても、そうした人を戒めて復帰させるために手を尽す自由があったことを暗示しているように思います。わたしたちもそうすべきではないでしょうか。その人の悪行を承認するような友好的で親しい付き合いの必要性はありません。テサロニケ第二3:14の「交わるのをやめなさい」という表現で使われているギリシャ語の動詞は、コリント第一5:11で使われている語（「その人々と自分たちを混ぜ合わせないようにし」）とまったく同じです。この後者の聖句はわたしたちが排斥する人、混じり合うことのできない人に適用するのに使われてきました。しかし、テサロニケ第二の手紙が示すところによれば、誰かと混じり合うのをやめるというのは、その人を戒め、かくしてその人に話しかけることを排除するものではありません。もし聖書からの戒めや叱責を与えることがその人と霊的な交友を持つという罪に問われるのなら、異なる信仰を持つ人（僧職者を含む）に

14:18, 19と比較なさってください。）『新英語訳聖書』はここを「その人を見かぎる」と表現しています。ですからこのような場合でも、そうした人に対して作法をわきまえ、礼儀正しく、しかし毅然（きぜん）とした態度で接することにより、無用な議論に巻き込まれることを避けることができます。

78　ガラテア2:4, 5と比較なさってください。

79　コリント第一15:12-57。

80　第6章の188, 189頁［英語］をご覧ください。

> 証言する時にもその人と霊的な交友を持つことになるのではないでしょうか。排斥に対するわたしたちの考え方は本当にこれらの聖句に根ざしているのでしょうか、それともそこにある以上のものを厳格に読み取っていないでしょうか。

他の場合と同様、提示された聖書的根拠は確かで示唆に富むものでした。とはいえ、当時もそれ以降も統治体の議論でよくあることでしたが、時間をかけて検討されることはありませんでした。提出された資料が読み上げられ、調整を行うことの可否について意見が述べられましたが、それは聖書的根拠を祈りのうちに検討するというものではなく、単に発言している特定のメンバーが組織の方針として「望ましい」と考えるかどうかに基づいていました。従来の立場が保たれたのです。強いて言えば、二十年後には当時よりさらに厳格になっていきました。

第11章

排斥の誤用

わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いている者です。—コリント第二 1:24, エルサレム聖書。

ものみの塔の組織が排斥に関して取っている方針は精神とやり方の両方において、キリストとその使徒のよりも、一世紀のユダヤ国家で権力を握っていた宗教指導者のほうにもっと当てはまります。その影響は往々にして悲劇的です。

このことがどのような結果をもたらすかは、長年証人であったマサチューセッツ州ウェスト・ブルックフィールドの77歳の祖母アネット・スチュアートから届いた手紙に示されています[1]。彼女の孫娘は十四歳の時にエホバの証人としてバプテスマを受けるように母親に励まされました。それから三年後、少女は証人としてのしかかるプレッシャーが大きすぎるという気持ちを伝えました。長老たちが呼び出され、少女はもう集会には行かないと言い張りました。長老たちの決断は、「彼女が自らを排斥した以上、我々としても彼女を排斥する以外に選択肢はない」というものでした。当時の組織の方針は排斥された家族を完全に忌避することを求めていなかったので、アネットが言うように、「少なくとも家族はまだ無傷でした」。

それから1981年に方針が変わりました。アネットはこう述べています。

> 孫娘は家族と親族から切り離されました。わたしは孫娘を家から追い返すことはできませんでした。これまで以上にわたしたちを必要としていたのです！母親は新しい規則を守り、娘ともわたしとももう関わろうとしませんでした。それはもちろん彼女の選択です。
>
> 二人の長老がうちに来てわたしに選択を迫りました。わたしの夫はエホバの証人ではないので孫娘がうちに来るのを禁じる権利は自分たちにないと長老は述べました。以前に夫がそのことを長老に伝えていたのです。
>
> 長老は、孫娘が訪ねに来たらその部屋から出なければならないと言いました。孫娘が夫と食事をするために滞在しても同じ食卓で食事をしてはいけないとも言いました。わたしの中では、長老が求めたことは愛に欠けて非人間的で、キリスト者のすることではありませんでした。わたしは求めに応じることはできないと言いました。その時ひどく泣いたのを覚えています。長老は同情することなく凍りついたように立ち尽くしていました。

こうして、その子の73歳になる祖母も、証人になって三十年後に排斥されまし

1　1987年7月29日付けの手紙。

た。彼女の夫は一度も証人であったことはありませんでしたが、突然家族が自分から引き離されるのを経験しました。彼は助けを求めてものみの塔の本部に手紙を書きましたが、長老の行動が支持されました。スチュアート婦人はこう記しています。

> 娘、息子、孫、ひ孫――わたしはこれら愛する人たちともう四年以上も顔を合わせていないのです！息子と娘はわたしたちと同じ町に住んでいます。……わたしの罪は排斥された孫娘をうちに迎えたことでした。

このような行為が「組織を清く保つこと」に寄与するという主張によって正当化できるものでしょうか。むしろ、「組織の権威に従わない者は罰を免れない」という立場を示すものではないでしょうか。実際に長老はアネットに、『規則を破っても構わないと考える人たちの手本になる』と言いました。本部組織も彼らの立場を支持しました。この七十代の祖母は、まさに「権威の重みを感じさせられた」のです。そのような扱いはキリスト教のものではなく、世の典型であるとイエスが述べられたものです。―マタイ20:25, 新英語訳。

組織の厳格な方針が家族関係にどれほど壊滅的な打撃を与え得るかは、リチャード・ギモンドとその家族の事例でも実証されています。30年にわたって証人だったギモンドはものみの塔の教理について深刻な疑問を抱くようになり、それが長老との「調査」会合につながりました。彼は自分の疑問に答えるのに聖句を提示してくれるよう長老に提案しなければならないことに気づきました。こう書いています。「その返答はいつも同じで、『わたしたちは神の伝達経路を認めなければならない』というものでした」。1982年、ニューハンプシャー州ウィルモット・フラット会衆の長老たちはそのような疑問を抱いたとしてギルモンドを排斥しました。家族の中には破門措置を支持する者もいれば、支持しない者もいました。1984年、最終的な結末について彼はこう語っています。

> 我が家のドラマはまだ続いています。1月5日、わたしと妻の二人の母親（やもめで72歳と77歳）がウィルモット・フラット会衆の三人の長老によって「排斥」されました。この計り知れない冷酷さは多大の心痛を彼女たちにもたらすことでしょう。証人である娘との最後の交流の糸が断ち切られたのです。妻は二人の姉妹とその家族とも連絡が取れなくなることになります。わたしの母はエホバの証人として残っている三人の孫娘におそらく忌避されるでしょう。何よりも悲しいのは、愛する義理の母が二人の娘と九人の孫と四人のひ孫に拒絶されることです。このすべてはものみの塔協会の「規則」のためなのです。

今日、同じような事例は何百、何千とあります。それが異例ことでも、単に少数の地元の長老の偏狭な考えによるものでもないという証拠は、父親が排斥された北東部の青年にものみの塔協会の奉仕部門が書いた手紙から見ることができます。その父親の罪状はただ一つ、組織のある教えを聖句に基づくものとして受け入れなかったというものでした。息子はブルックリン本部に手紙を書き、姉《あるいは妹》夫婦が現在父親とまったく付き合いがなく、これは親に対して不敬なことだと感じ

ていると述べました。それに対して彼が受け取った手紙をここに掲載します。（プライバシーのため、彼の名前と住所は本人の希望で伏せてあります。）

WATCHTOWER
BIBLE AND TRACT SOCIETY OF NEW YORK, INC.

CABLE WATCHTOWER

25 COLUMBIA HEIGHTS, BROOKLYN, NEW YORK 11201, U.S.A. PHONE (212) 625-3600

SCE:SSH July 14, 1983

[redacted]

Dear Brother [redacted]

We have your letter in which you say that you are troubled by a problem that the elders seem unable to resolve. Your father has been disfellowshipped and as a result of this your sister and her husband do not have any association with your father. You seem to feel that this is disrespectful to your parents.

It is most unfortunate to hear that your father has been disfellowshipped. His taking action that resulted in his being disfellowshipped has brought about a Scriptural barrier between him and those loyal members of the family who continue to faithfully serve Jehovah. The loyal ones have not been the creators of the problem but, rather, the one who is disfellowshipped has caused it. Therefore, it would not be appropriate on your part to find fault with your sister if she respectfully obeys the Scriptural command at 1 Corinthians 5:11.

A person who is disfellowshipped has been spiritually cut off from the congregation; the former spiritual ties have been completely severed. This is true even with respect to relatives, including those within his immediate family circle. Thus, family members—while acknowledging family ties, will no longer have any spiritual fellowship with the disfellowshipped relative. (1 Sam. 28:6; Prov. 15:8, 9) While you and your sister may find it necessary from time to time to care for necessary family matters in regard to your parents, the direction at 1 Corinthians 5:11 would prohibit any association on a regular basis. We can appreciate that sentiment and family ties are particularly strong between parents and children but, in the final analysis, we will not benefit anyone or please God if we allow emotion to lead us into ignoring his wise counsel and guidance. We need to display our complete confidence in His perfect righteousness and ways, including his provision to disfellowshipped unrepentant wrongdoers. If we remain loyal to God and the congregation, the wrongdoer in time may take a lesson from that, repent and be reinstated into the congregation. It is our hope that will be the case with your father.

Faithfully yours,

Watchtower B. & T. Society
OF NEW YORK, INC.

cc: [redacted]

--------------------《訳》--------------------

SCE:SSH　　　　　　　　　　　　　　1983年7月14日

親愛なる________兄弟

長老たちが解決できなさそうな問題に悩まされているというお手紙をいただきました。兄弟のお父さんは排斥され、その結果、お姉さん夫婦はお父さんと一切関わりを持たなくなりました。兄弟はこれをご両親に対する不敬だとお感じになっているようです。

お父さんが排斥されたと聞いてとても残念に思っています。お父さんが排斥されるような行動を取ったことで、お父さんとエホバに忠実に仕え続ける忠節な家族との間に聖書的な隔たりができました。忠節な人たちが問題を起こしたのではなく、むしろ、排斥された人が問題を起こしたのです。したがって、お姉さんがコリント第一5:11の聖書の命令に敬意をもって従うのであれば、兄弟がお姉さんのあら探しをするのはふさわしくありません。

排斥された人は会衆から霊的に切り離され、かつての霊的な絆(きずな)は完全に断ち切られました。これは、肉親を含む親族に対しても同様です。したがって、家族は家族の絆(きずな)を認めつつも、排斥された親族と霊的な交わりを持つことができなくなります。（サムエル第一28:6。箴言15:8, 9）兄弟とお姉さんは、ご両親に関わる家族の必要を満たす必要が時折あるかもしれませんが、定期的に付き合うことはコリント第一15:33で禁じられています。情や家族の絆(きずな)は親子の間では特に強いことは理解できますが、結局のところ、感情に流されて神の賢明な助言と導きを無視するなら、誰のためにもならないし、神を喜ばせることもできません。わたしたちは、悔い改めない排斥された悪行者の扱いも含め、主の完全な義と方法に対して全き確信を示す必要があります。もしわたしたちが神と会衆に忠実であり続ければ、悪行者はやがてそこから教訓を得て、悔い改めて会衆に復帰するかもしれません。わたしたちは、兄弟のお父さんがそうなることを願っています。

あなたの兄弟、

この手紙の写し：__________　　　　　　　　　　ものみの塔聖書協会

したがって、組織の立場や教えに良心上同意しないということでこの男性はコリント第一5:11に記述されている性的に不道徳な者、貪欲な者、ゆすり取る者、偶像を礼拝する者と同類に、つまり「邪悪な人」に分類されるというわけです。家庭が分裂した責任もすべてこの男性にあるとされています。

しかし否定できない事実は、このような事例のほとんどすべてにおいて家族の分裂が生じるのは、排斥者ないし断絶者の家族の個人的な確信や感情からではなく、もっぱら家族に課せられた組織の方針のためなのです。このことは『ものみの塔』1974年11月1日号に、排斥された親族に対する家族の態度について従来の立場を大幅に緩和する記事が出た後、世界中の証人がすぐに態度を変えたことからも明らかです。その記事は証人の家族から感謝をもって迎えられました。しかし1981年、以前の厳しい方針が復活しました。排斥された家族に対する極端な冷遇、往々にして

完全な断絶をまたもや義務として負わされたのです[2]。しかし今日この方針が再び「正式に」緩和されたとしたら、ほとんどの証人はためらうことなく家族の絆を新たにするに違いありません。その家族を拒絶する理由が、単に排斥された「状態」にあるということだけであって、現在の行いゆえに「邪悪」ないし「腐敗的」な人であると心底憂慮させるものではない場合には尚更でしょう。アネット・スチュアートの家族が80歳になる祖母を本当にそのような人であると信じているとは思えません。そして、証人がこのような厳格な立場を取りたかったわけでも、その正しさを心から確信していたわけでもない場合がほとんどであったことは疑う余地がないと思います。それは宗教権威によって押し付けられたものであり、そのような場合、家族の分裂の責任はすべてその権威にあるのです。

その精神的な苦痛は計り知れません。マサチューセッツ州の排斥されたある女性の場合、メイン州に住んでいた母親が重い病気になり、1980年代半ばに亡くなりました。証人の家族も長老もこの女性の住所を知っていましたが、母親の病気や死、葬儀のことを知らせませんでした。彼女がそのことを知ったのは、母親がすでに埋葬された後でした。死の床にある母親に会うことも母への愛を表現する、あるいは表現しようとする機会さえも奪われて、それによって生じた、責め苛まれるような苦痛は消えることはないと彼女は述べています。このようなことが、愛の神とその慈愛に満ちた御子のご性格と調和するわけがありません。このような行為を助長するシステムに惹かれてよいはずもありません。

組織の法を杓子定規に執行する

長老がものみの塔の方針を適用する方法は、それを実際に法と見なしていることを明確に示しています。本部組織が作り出した――あるいは少なくとも容認している――杓子定規な態度のために長老たちは、境遇、年齢、健康状態、所属年数などいかなる要素も、組織のすべての規則を完全に遵守し、すべての教えを完全に受け入れるという要件に何ら影響を及ぼすものではないと見なしています。

ほとんど無思慮な厳格さがしばしば生み出される一例として、メイン州で防犯警報サービスを営んでいたデビッド・ヘインズという証人の事例があります。1970年代から何年にもわたって彼の会社は防犯・火災警報システムを多く設置してきました。そのうちの幾つかは教会や教会運営の学校でした。1980年代、会衆の三人の長老、スピアー、マドック、ウェントワースによって構成される委員会に会うように

2　1974年の緩和の記事は、統治体から割り当てられてわたしが執筆したものです。排斥されていたわたしの甥は親と兄弟姉妹から何年も口をきいてもらえませんでしたが、この記事が直接のきっかけとなって彼らから連絡を受け、その後すぐに復帰しました。

との要請が舞い込んできました。

長老は彼に、宗教建造物にそうした設置作業を行い続けることはもうできないと告げました。彼はやめることに同意しました。その後、長老はすでに設置されているシステムの整備もやめるように告げました。彼はそれに従うと述べ、サービス・マネージャー（証人ではない）が土曜日など個人の時間に行って整備を行うように取り計らい、その報酬は**すべて**その男性に支払うことを約束しました。

しかし、長老はそれさえも満足しませんでした。というのも、そのシステムが彼の会社のオフィスにある中央監視システムと連動していたからです。長老は教会や教会運営の学校に設置されたシステムを監視することはもうできないこと、続けるなら会衆の中での自分の立場を危うくすることを告げました。彼は多少時間がかかるかもしれないが他の警報サービス会社に監視を移管するために何ができるかを探りたいと申し出ました。彼はその期間を与えられました。当時、彼の会社では設備の入れ替えが行われていて、そのために期日に間に合いませんでした。彼は長老に、これらの顧客に対するサービスを無理矢理に断ち切って自分のビジネスに損害を与えたくない旨を伝え、期間の延長を求めました。長老は一ヶ月の延長を認めました。期限が切れた時、配慮と寛容を文字通り懇願したにもかかわらず彼は、それまでに移管を完了していなかったために排斥されました。彼は十五年間組織に所属していました。地元の「審理委員会」の決定を不服とし、「上訴委員会」との会合で、電力会社で働く人や教会に電話や回線の設置および整備を行う人を引き合いに出して事情を説明しようとしました[3]。それに対する返答は『警報サービスを提供する必要はない』というもので、排斥の決定が支持されました。

この律法主義的なハラスメントに本当に意味があるのか、安息日に麦粒を摘んで食べた弟子たちを咎（とが）め立てしたパリサイ人の批判的な視点にどれほど似ているかを長老が疑うことは決してなかったに違いありません。おそらく、「組織に忠実」であるという考えに焦点が合っていたのでしょう。

性質はまったく異なっていますが同じ姿勢が取られたのが、マサチューセッツ州メイナードにあるエホバの証人の会衆に所属する高齢の証人ジョージ・ウェストの1982年の事例です。彼は骨がんを発症し、やがて悪化して末期患者として入院を必要とするまでになりました。首の骨が頭の重みに耐えられなくなったため、支えのためにケージを頭に被せられました。

地元の長老はジョージ・ウェストが輸血を受けたと聞いて、彼が死にそうなのにもかかわらず、また妻の希望にも反して彼と話をしようと何度も試みました。ついにある晩彼らはジョージに面会することに成功し、尋問の末ジョージは輸血を受け入れたことを認めました。理由は何だったのでしょうか。前妻との間にできた子どもたちが電話をかけてきて、彼の死期が迫っていることを聞いて中西部からお見舞いに来るという知らせがあったのです。子どもとは幼い時以来会っていませんでした。子どもと再会するために命を少しでも伸ばそうとして輸血を受けることにした

3　控訴の場合、上訴委員会は通常ブルックリンの奉仕部門によって直接選ばれて任命されます。

のです[4]。
長老たちはジョージ・ウェストが亡くなるわずか数日前に彼を排斥しました。

繰り返しになりますが、死の床にある人に対してそのような行為をすることが、少しでもキリスト教を反映したものであるとか、まともな理性で考えて「清い会衆」に寄与するものであるとか言えるのは一体どういうメンタリティーなのでしょうか。実際の効果はただ一つ、彼のために証人の葬儀が執り行われなかったことぐらいでしょう。大部分の証人にとって、「排斥された状態」で死ぬことによって組織の外で命を終えた彼は復活の資格がないと見なされることになります。そのような行為は現実には清さよりもむしろ汚点を残すものです。なぜなら、キリスト教というよりもパリサイ主義とその宗教的な「清さ」への強いこだわりを反映した無感情な態度に強く彩られているからです。まるで組織の代表者が、病気で不自由になったこの男性の体に排斥のラベルを貼らないで死なせては自分の不徳の致すところだと感じているかのようでした。
そこで次のことを今一度問うのは理にかなっているでしょう。つまり、そのような行為を生み出している態度の主要な責任は誰にあるのかということです。どんな精神が示されるかが長老団によって大きく異なるという証拠は数多くありますが、このような事例に見られる厳格で無慈悲な態度の責めは単に関係した一部の長老だけの責任として片付けることはできません。この厳格さの頻度とそれが広範に及んでいることは何らかの中心的な原因があることを示しています。
すべての排斥措置は本部組織に報告されるため、本部は何が起きているのか知らないわけではありません。パーシー・ハーディングの痛ましい事例はそのことを如実に物語っています。というのも世界本部の目と鼻の先で起きたからです。
1910年、カナダ西部出身のパーシーは二十歳のころにラッセル牧師の著作を読むようになり、半年で三千頁ほどの量を読みました。彼はそれまで所属していたプロテスタント系の教会から退き、町の人々の中で自分だけが新しい信仰を持っていることに気づきました。それで「証言」を始め、その地域に二つの群れを結成し、近くの川でバプテスマを施しました。こう書いています。

> 1918年、わたしは良い仕事をやめてコルポーターになりました。割り当てられた区域はアルバータ州南部から太平洋岸までで、その大部分は鉄道に沿って数百平方キロに及びました。また、本の入った小さな鞄を二つ持って徒歩で田舎の区域をくまなく回りました。一日に24キロから40キロばかり歩くこともしばしばでした。

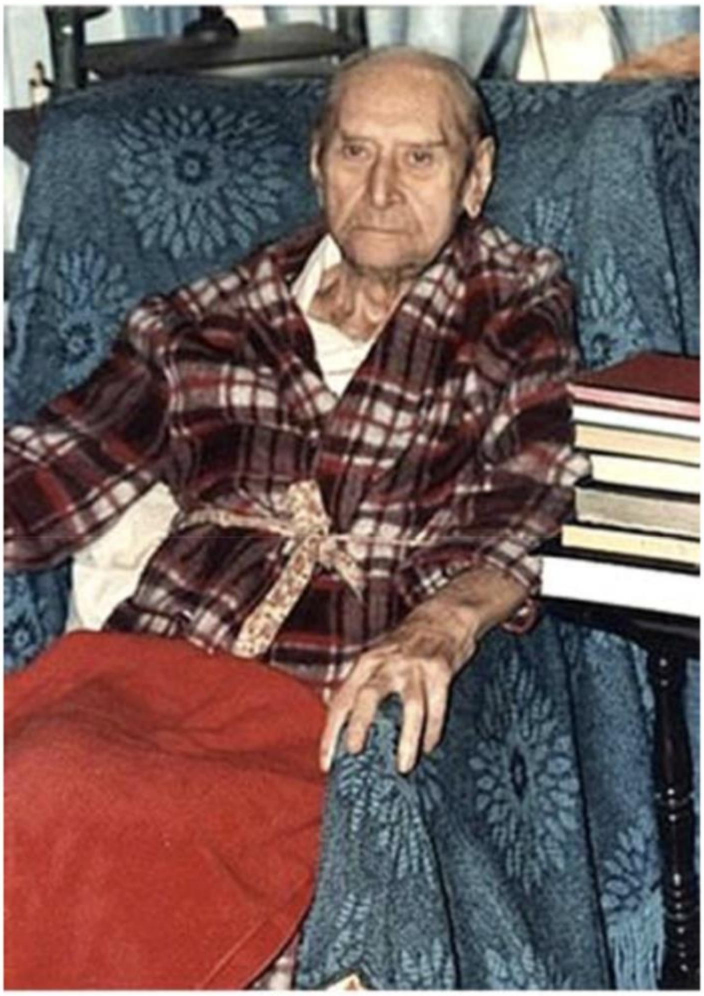
このような活動を七年続けて、1925年5月25日に彼はニューヨーク州ブルックリンに行き、ものみの塔本部での奉仕を始めました。その約四年後、ラザフォード会長の下で育まれた態度や監督の立場にいた一部の人の行いにパーシーは幻滅し、1929年に本部での奉仕をやめました。
それでも彼はその後五十六年間、ブルックリンの同じ会衆に交わりながら活動を

4　これらの事実は1984年12月8日の『コンコード・モニター』紙の論説欄への手紙に書かれていました。それに反論する人、反論できる人は誰もいませんでした。

続けました。それから起きたことを彼はこう書いています。

> 1925年5月から1981年12月までわたしは同じ会衆に留まっていましたが、神の御言葉について数人の友人に話したという理由で排斥されました。これは信じがたいことで、協会に関する限り不名誉なやり口でした。審理委員会は別の会衆の長老団からの手紙を持っていました。その長老団はわたしの友人を排斥しており、聖書について話したことがある人たちについて友人に長々と質問しました。友人は屈服してわたしや他の人の名前を挙げていたのです。そこで、その手紙に書かれているわたしや他の人が言ったことについてコメントを求められました。わたしは審理委員会に対して、何も言うことはない、わたしと友人との間であったことはきわめてプライベートなことであって他の誰にも関係がないことを伝えました。彼らは手紙の写しをくれる約束をしましたが、それをわたしが受け取ることはありませんでした。
>
> それから審理委員会は質問を始めました。最も重要な質問は、「あなたは協会が神の組織であり真理をもたらしていると信じていますか」というものでした。わたしは、「神が真理をもたらすために『組織』を用いたことを示すものは神の御言葉に何もありません。モーセからすべての預言者を経てヨハネと啓示に至るまで、それはいつも個人でした」と言いました。
>
> 審理委員会との会合は三度あり、最後はベテルで開かれました。わたしが排斥された夜、ハリー・ペロヤン［ものみの塔執筆部門の長年のスタッフ］は王国会館で話をし、審理委員会のどの会合でも議論されなかった、会衆の一致を乱したという罪状を持ち出しました。そしてヨハネ第二10, 11を誤用し、わたしを冷遇するよう175人の人々に指示しました。集会が終わると、皆はわたしがハンセン病患者でもあるかのように通り過ぎて、出て行きました。

パーシーは91歳で、健康状態も思わしくありませんでした。ある聖句についての彼の理解が正しいか間違っているかは別として、この問題が起こったのは、彼が明らかな騒ぎを会衆に引き起こしていたからではなく、友人とのプライベートな会話からでした。会衆の誰も彼が「煽動者(せんどう)」であると不満を言うようなことはありませんでしたし、それが問題となった唯一の原因は、他の会衆からの手紙にあって、その手紙のために彼は友人との間で交わした聖書の話題に関するプライベートな発言について長老から調査と尋問を受けることになったのです。（使徒24:5-13の使徒パウロに対する告発およびその弁明と比較なさってください。）1982年に北東部を旅行した際、わたしはブルックリン6番街にあるパーシー・ハーディングの家を訪ねました。彼が座っている大きな椅子のためか、彼は見るからに小柄で弱々しく、年齢と病気のために明らかに衰弱していました。


パーシー・ハーディング、91歳で排斥される。

地位もなく特別な影響力もないこのような人を危険な存在と見なし、証人として七十年以上活動してきたにもかかわらず排斥して、古くからの付き合いを断つ必要があると考えることが、まともな精神の持ち主であればはたしてできるのだろうかとわたしは自問しました。組織はよほど己に自信がなく、信じられないほど脆弱(ぜいじゃく)性を感じているに違いない、だからこのようなか弱い老人を脅威と考えたのだと思いました。排斥が彼個人の状況にどのような影響を及ぼしたかについて、彼はこう書いています。

> それまでは、ほぼ毎週二人の［証人の］看護師がわたしを訪ねてくれていました。自分でできないことをやってくれたし、もっと重要なのは、わたしが必要とすればいつでも駆けつけてくれたことでした。わたしは8月18日に92歳になるのでいつ緊急事態が訪れるか分かりません。排斥後、看護師の一人に電話をかけました。彼女の夫が電話に出て、「アンはあなたと話すことを禁じられています」と言いました。
> もう一度言いますが、長老がわたしに反感を抱いているのは、わたしが聖書について数人の友人と話しただけのことなのです。

パーシーとの会話の中でわたしは彼がぶっきらぼうな口のきき方をする人だと感じました。彼を裁いた長老との話し合いではかなりぶっきらぼうだったかもしれません。しかし、仮に彼がぶっきらぼうであったとしても――辛辣で不機嫌でさえあったとしても――それが91歳の独身で、病気で、しかも数百キロ圏内に身寄りもない男性を断ち切り、証人として70年以上活発に活動してきた経歴も合わせて無視し、忘れ去られるべき人と見なすことを正当化できるものでしょうか。それを正当化できるようなどんな凶悪な犯罪を彼は犯したと言うのでしょうか。羊の真の羊飼いであるイエス・キリストの弟子であることを自称する人がこのような行為、わたしの中では非情という表現がぴったりの行為にどうして加担できるのかわたしは理解に苦しむのです。しかし、前述のように、これはものみの塔協会の世界本部のまさに「目と鼻の先」で起きたのです。

パーシーは1984年2月3日に眠るようにして亡くなりました。排斥されて二十五ヶ

月の間、56年間交わっていた会衆の誰一人として彼に会いに来たり、彼の必要を尋ねたりする人はいませんでした[5]。

究極の罪：組織と考えを異にする

パーシー・ハーディングの事例は、組織のすべての教えが全面的に受け入れられることに組織がいかに固執しているかを物語っています。では、ものみの塔の代表者が語っている次のことを考えてみましょう。

> わたしたちの原則に従いたくない人は自由に出て行けばいいのです。口やかましい者はここにはいません。身体的なハラスメントも感情的なハラスメントもありません。……わたしたちが本部から指図するわけでもありません[6]。
>
> わたしたちは霊的な警察官ではありません。……誰かの意見にケチをつけることはしません[7]。
>
> ここにいたくない人は自由に出て行けばいいのです。……考えを異にする人たちがなぜただ静かに立ち去らないのか理解できません[8]。

この人たちは皆、自分たちが語っていることが現実と一致していないことを知っているはずです。というのも、エホバの証人の一人が「静かに立ち去ろう」とすると今何が起こるかを知っているからです。実際の状況は、兵士が指揮官のところに行って、「閣下、良心に基づいてわたしは退役することにしました。ただ、静かに立ち去り、いかなる形でも軍規を乱すようなことはしないことをお伝えしたいと思います」と言った場合に直面するであろう状況に似ています。すぐに撤回でもしない限り、その兵士が直面する結末――不名誉除隊、戦時下であれば銃殺刑――はエホバの証人が直面する結末と霊的な意味で類似しています。

「静かに退く」ことを考える人は、自分の頭に銃口が突き付けられていることを知っています。その銃器は公式の排斥という脅しです（あるいは、「断絶」と公に宣告されることで、名称は異なっても同一の結果を生む同一の銃器です）。文字通り銃殺隊の前に立たされるわけではありませんが、良心上の理由で組織を離れようとする証人は、異端者、真のキリスト者（他のエホバの証人）が付き合うのに不適切で、家族でさえも「追放者」として扱うべき人物というレッテルを貼られる危険を冒すことになります。組織の方針には名誉ある脱会はありません。人の感情に鈍感な人だけが「感情的なハラスメントはない」と考えることができるのでしょう。

このような状況は1980年以降に特に明らかになりました。ものみの塔の教えをすべて完全には受け入れないという理由で本部スタッフ数人が排斥され、わたしが統治体から退いたことに続き、1980年9月1日付けの旅行する代表者宛ての手紙によって組織が今取っている方向性が示されました[9]。その手紙には、「奴隷級」が提供す

5　ニューヨーク近郊に住むわたしの友人が毎週のようにパーシーを訪ね、やがてパーシーの資金が底をつくと老人ホームへの入所を手配しました。パーシーはそこで亡くなりました。

6　カナダ支部のウォルター・グラハム、トロント新聞の引用。

7　巡回監督、今は統治体のメンバーのサミュエル・ハード、シカゴ・トリビューン紙の引用

8　ロバート・バルザー、ものみの塔本部の広報係。

9　この手紙の写しは『良心の危機』の380-381頁に掲載されています。

るものと異なることを――話すではなく――ただ信じて固持するだけで背教に当たり、排斥につながる可能性があるという方針が綴（つづ）られていました。メンバー個人の信条について問いただす際には「慎重で思いやりのあるやり方」をするように長老に求めましたが、「思いやりのある慎重な審問」という面でその指図がどのような結果をもたらしたかはすでに引用したパーシー・ハーディングの事例やその他の事例で見ての通りです。この手紙によって、独断と不寛容に傾きがちな人がそれらの特質を発散して群れを扱う、さもなければ思いやりのある人に無感情な行動を取らせる道が開かれてしまったのです。知識不足からくる素朴な疑問は許され、歓迎さえされます。しかし、真剣な調査と知的思考の結果として質問が出されたり、組織の教えを疑問視するような質問が出されたりすると、その質問に答えるよりも質問者とその動機を攻撃するということが圧倒的に多いのです。

『良心の危機』に記録されているブルックリン本部ですでに起こったことは、思いやりや慎重さという特質がどの程度示され、その表現がいかに空虚であったかを物語っています。本部の手本はその後アメリカ全土、そして他の多くの地でも反映されました。その目的は無菌状態を作り出すことにあり、それによって深刻な疑問に答えたり聖書的な反論や不利な証拠に向き合ったりしなければならない危険を排除しつつ、組織の教えや方針を普及させることができます。これは言い過ぎでしょうか。典型的な例をほんの幾つか挙げましょう。

『良心の危機』の中で、わたしはエドワード・ダンラップの排斥について述べました。彼は証人として五十年以上過ごし、そのうちのほとんどを「ベテル奉仕」に費やしましたが、七十歳近くになって事実上「道端へ放り出され」ました。友人との会話の中で組織の教えにすべて合致するわけではない見解を述べたという理由で排斥されたのです。彼が幼少時代の故郷であるオクラホマ・シティに戻って弟《あるいは兄》のマリオンと共に以前やっていた壁紙の張り替えの仕事を始めたことはすでに述べました。その結果何が起こったでしょうか。

マリオン・ダンラップは当時、オクラホマ・シティにある幾つかの会衆の「都市の監督」に任命されていました。彼もまた五十年近く証人であり、野外奉仕や集会への参加においていつも非常に活発でした。排斥された七十歳の兄に宿と仕事を提供した時、マリオン自身も調査対象となりました。彼はその後排斥され、一年ほどのうちにダンラップ家の他の五人も排斥されました。彼らはいかなる悪行にも関わっておらず、事を荒立てたり運動や抗議活動をしたりしようとしたわけでもありませんでした。ただ、良心の呵責（かしゃく）に耐えかねて、自分たちの信条は、誤りを犯す人間や組織の言葉よりも神の御言葉に支配されるべきだと感じただけでした。オクラホマ州立大学の教授であるもう一人の証人は、エドワード・ダンラップのような教育能力を持つ人がその能力を発揮する場がないのは残念なことだと真情を吐露しました。彼は、エドが大学で授業を受け持てるように手配を手伝いました。その結果、長老の監視下に置かれて彼も間もなく排斥されました。

幾つかの事例では集会への出席をやめる選択をした人がいたことは事実ですが、

それは以前から付き合っていたエホバの証人との友情や会話を絶つことを意図しての選択では決してありません。また、その人を拒絶したりその人に反感を抱いたりしていることを意味するわけでもまったくありません。関係が完全に「断ち切られる」のは、専ら長老の強い働きかけの結果なのです。

離反の疑いがある事例を追求する際に長老が示す異常な熱意は、ミシシッピー州のダンシーという、ほとんどの地図に載っていない片田舎で取られた行動に表れています。ここにウォーカー家の住まいがあり、1940年代に母親と三人の娘が証人になりました。（やがてウォーカー家のすぐ向かいに王国会館が建てられました。この土地は娘の夫であり王国会館の建設者でもあるレイ・フィリップスによって寄贈されました。）

三人娘の一人スー・ウォーカーは「開拓者」になり、後にものみの塔の宣教者学校ギレアデを卒業しました。ボリビアで十二年間、困難な状況の中で宣教者として奉仕しました。ジャングルの端にあるトリニダードという町に赴任中、彼女とパートナーは他の証人たちとの交流から完全に切り離されていました。低地にあるこの町は季節によっては洪水に見舞われ、移動には小舟を使うしかありませんでした。（スーと聖書研究をしていた女性がいつも棒をそばに置いていたことをスーは思い出します。なぜなんだろうと思っていました。ある日、蛇が水からポーチにはい上がって来た時、その女性は静かに棒を拾い上げて蛇を水中にたたき戻しました。）スーとパートナーは病気と乏しい食生活に耐えながら何年も任地に留まりました。

1962年、スーはボリビアからわたしたち夫婦が駐在していたドミニカ共和国へ赴任しました。そこでは1965年に本格的な革命が起こるなど激動の時代で、スーが聖書研究の帰り道に銃撃から身を隠さなければならなかったことも一度や二度ではありませんでした。健康上の問題を抱えながらも、ボリビアでの十二年間の奉仕に加えてドミニカ共和国でさらに十三年間を過ごしました。宣教者として二十五年間奉仕した後、スーは年老いた両親（現在八十代）の介護のためにミシシッピー州ダンシーに戻るのが自分の務めであると感じました。戻ってからも彼女は「開拓」を続けましたが、地元の証人の多くが彼女を「宣教者を降りた」と見ていることに気づいて苦悩しました。彼女が悪行を犯したために協会から帰されたとのうわさまで流れましたが、それはまったくの偽りでした。

スー・ウォーカーを知る人が彼女のことをこのように語るとは信じがたいことです。わたしはプエルトリコとドミニカ共和国の支部監督として百人を優に超える宣教者と関わってきましたが、その中でスーほど苦情の要因になりにくい人はいませんでした。気性が穏やかで、カッとならず、黙々と静かに奉仕に取り組んでいました。彼女ほど個人の聖書通読を行う宣教者はほとんどいませんでした。このことと、長年にわたる幾つかの国で体験したこと、その体験を通して組織が真のキリスト教精神を反映していないことを思い知らされたことが相まって、やがて彼女は組織が神の唯一の経路で選ばれた器であるという確信を再吟味するようになりました。彼女の二人の姉妹も同じように再吟味の段階に達していました。その後に起こったことはまたもや、群れから「はぐれている」と長老に見なされると、組織の

「牧羊」計画がしばしばどんな具合に機能するかをまざまざと物語っています。

最初に彼らの注意を引いたのはスーの姪で、同じくスー（・フィリップス）という名前でした。彼女は協会の教えが一世紀の良い知らせを正しく表現していないことを確信し、集会への出席を人に知られないようにそっとやめました。地帯監督、巡回監督、地元の長老が彼女を訪ね、集会に来ない理由について一時間ほど質問しました。彼女は自分の心のうちを説明し、聖句についてたくさんの個人研究をしてきて、組織が教えている幾つかの信条をもはや良心的に支持することができないことを伝えました。中でもとりわけ、キリストの仲介を特別な階級に限定していること、特定の行いによって救いが得られるという印象を与えていることに言及しました。何千もの同じような状況で起こるように、そのような疑問の扱い方は聖句にではなく「組織」に焦点を当てることです。そのため地元の長老は、「神の目的について知っていることをどこで学んだのですか」と彼女に尋ねました。期待されている通例の答えは「神の組織から」というものですが、スーは「聖書から」と答えました。彼らは『わたしたちはあなたよりもっと勉強しているし、組織の中で割り当てられた立場に就いている』とはっきり言いました。組織の重要性を強調することが彼らの助言の本質であり、彼らは直に立ち去りました。

この「牧羊訪問」から数週間後、スーは旅行から帰って来てまさにその日の1982年1月3日の聴聞会に呼び出す通知を見つけました。彼女は体調をひどく崩して帰宅しており、その日のうちに入院しました。退院できるまでに回復したのは十二日後でした。その間、地元の証人は誰も彼女を訪ねて来ませんでした。ただ、二人の証人が彼女の具合を聞くために母親に電話してきました。入院していたその十二日間、会衆の「羊飼い」は、例え話に出てくる「病気のとき……訪ねて来ることはなかった」と言われた人たちと同じ道を取りました[10]。

スーは金曜日に帰宅しました。退院してからちょうど二日後の日曜日、地元の長老が聴聞会の日程を決めるために電話をかけてきました。彼女は退院したばかりでまだ具合が悪いので、そのような聴聞会に行くつもりはない旨を告げました。長老は彼女が入院していたことを聞いており、病気だったことを残念に思うと言いました。そして、もし彼女が聴聞会に出席しないのであれば、「何らかの措置を取らなければならないかもしれない」と言いました。スーは「どのみちあなたがたはしたいようにするのでしょう」と答えました。彼の返答は興奮気味でかなり攻撃的で、「わたしたちは組織から言われたことを何でもしますよ」というものでした。
その三日後、スーは会衆と親しい人たちに手紙を書きました。そこにはこう述べられています。

> この一年以上、わたしは神の御言葉聖書をとても熱心に読み、学んできました。聖書の勉強にこれほど多くの時間と思考と祈りを捧げたことは、これまでの人生で一度もありません。わたしが学び、気づき始めたことがこれまでのわたしの人生の方向性を変えまし

10　マタイ25:43, フィリプス現代英語。

た。わたしが下した決断は多くの勉強、思考、祈りの末に下したもので一夜にして決めたことではありません。わたしはエホバ神とイエス・キリストを心から愛しており、お二人を悲しませるようなことはしたくありません。わたしはキリスト教の道を最良のもの、最もやりがいのある生き方として心より支持しています。それ以外の生き方は望んでいません。聖書は霊感を受けた神の言葉であり、生きる上でのガイドブックです。わたしにとってイエス・キリストについての良い知らせ、イエスが全人類のためにしてくださったこと、イエスに信仰を働かせるすべての人にとってそれが意味することこそが、最もすばらしく胸の躍る知らせなのです。いかなるクリスチャンにとっても、エホバ神、イエス・キリスト、聖書、良い知らせ、キリスト教の道への忠誠は他のすべてに優先されなければなりません。わたしの忠誠と支持はそのすべてに向けられていて、それは絶対なのです。何ヶ月も、何ヶ月も聖書を勉強して多くの祈りを捧(ささ)げた後、わたしは以前に信じていた事柄が聖書的でないという結論に達しました。キリスト者として変わらなければならないこと、もはや支持することができない事柄があることに気づきました。

その手紙を受け取ってから数日後に、長老たちはエホバの証人のマンティー会衆（ダンシーで集会を開いている）に、スー・フィリップスが「クリスチャンらしくない行い」のために排斥されたことを発表しました[11]。「マンティー会衆」とだけ署名されたその旨の通知が彼女の家に送られました。

地元の長老と旅行する監督が「牧羊のために払った努力」は、子どものころから証人として育てられてきたこの若い女性と合計しておおよそ一時間半過ごしたことでした。彼らはものみの塔本部の指令に言及されている「手厚い努力」を自分たちはしたと感じたことでしょう。彼女が聖句に深い敬意を持っており神とキリストに喜んでいただきたいと心から願っていることは彼女の手紙から明らかでしたが、それによって長老が寛容になったり、寛大なる忍耐を示す理由が十分にあると感じたり、冷静に優しく協調性を示しながら近づけば彼女の疑問を解決できるかもしれないと考えたりすることにはどうやらならなかったようです。彼女が会衆にとってもはや付き合うのにふさわしくないと公式発表するのに時間はかかりませんでした。

ものみの塔の出版物では、組織に賛同しない人は誇り、反抗心、謙遜さの欠如のために戸別訪問活動から逃げ出したいなど否定的な感情に突き動かされているとほのめかす、あるいは、それに類することをほのめかすことが頻繁に行われています。そのような人がいることを疑うつもりはありません。しかし、まったく根拠がないことが証明されている事例が後を絶たないことも知っています。少なくともスー・フィリップスの叔母であり元宣教者のスー・ウォーカーに関しては、それは明らかに虚偽でした。四十年以上にわたる奉仕の中で彼女は長老や旅行する監督を含め、その地域の誰よりもはるかに多くの時間を戸別訪問に費やしました。宣教者奉仕から戻ってからも、この時点に至るまでマンティー会衆に活発に交わり続けて定期的に集会に出席し、活発に「証言」に携わり、関心のある人々と家庭聖書研究を行いました。しかし、姪(めい)に対する組織の対応を見て、彼女は決断を要する段階に達

11　これは標準的な表現で、法的な問題を避けるためにわざと曖昧にしてあります。

したことを感じました。そして、「次はわたしが追われる番ね」と姪に言いました。そこで彼女は脱会届けを書き、日曜日に道路を渡って向かいの王国会館に行き、長老にそれぞれ一通ずつ手渡しました。

スー・ウォーカーは当時63歳でした。四十二年間証人として過ごし、そのうち三十五年間は全時間奉仕に、うち二十五年間は外国での宣教活動に従事しました。結婚、子どもを持つことを見送り、多くの困苦に耐え、未開地で働き、聖書の原則に密接に調和した生活を送るように地道に努力してきました。そのような人に会衆に留まってほしい、そのような人との交流や手本を失うのはまさしく損失であると感じるのは当然のことではないでしょうか。もしも証人の信条がかくも健全で聖句にしっかりと根ざしていると感じるのであれば、最終的に相違を埋め合わせることを希望して、少なくともそのような人と連絡を取り続けるために可能な限りの努力をしたいと感じるのではないでしょうか。わたしはそう思います。しかし、組織に訓練された長老がそう思わなかったことは明らかです。彼女の手紙を受け取った後、彼らはその内容について彼女と話し合おうともせず、時を移さず彼女の「断絶」を公式に発表しました。組織の方針により、その時からスー・ウォーカーは事実上会衆のメンバーにとって話すことも付き合うこともできない非人となりました。

一層注目に値するのはスー・ウォーカーが、年老いた母親が望めばいつでも王国会館への道を渡るのを手伝い、集会の間母親と一緒に静かに座り、出席者の誰からも存在を認めてもらえなかったにもかかわらず、そのようにして母親が証人として残っていることに全面的に配慮しました。やがて健康状態の悪化のために母親が集会への出席を断念した時、会衆のメンバーは「断絶した」娘と接触することを嫌がって母親のもとを訪れることはほとんどありませんでした。母親の組織に対する見方は変わり、夫（証人になったことはない）が亡くなった時はわたしに現地に赴いて葬儀を執り行ってくれるように娘たちと一緒に頼みました。彼女自身も亡くなる前に、わたしが葬儀を執り行うことを希望しました。誰もが顔見知りの小さな田舎町で、葬儀に参列した百人ほどの人たちは隣人のウォーカー婦人が排斥されたわけでも「断絶した」わけでもないのに、四十年以上も崇拝を共にしてきた証人が一人も参列していないことに注目せざるを得ませんでした。個人の感情ではなく組織の方針が証人たちを遠のかせていたのです。

スー・ウォーカーの「断絶」の発表に続いて起こったことは、組織に育まれていた精神をまさに明らかにするものでした。その数ヶ月前に姉のルルとその夫（スー・フィリップスの両親）はダンシー地区からミシシッピ州のガルフコースト地区に引っ越していました。組織について良心上の結論に達し、このことがもたらすであろう結果を十分に承知していたため、彼らはマンティー会衆の長老たちに新しい住所を知らせず、ロングビーチの引越し先に着いた時はそこの会衆に「身元」が知られないようにしました。そうすることで、敵対的な尋問や不快な司法手続きを避けて静かに退くことを望んだのです。

ですからマンティー会衆が娘を排斥してから程なくして、ミシシッピ州ロングビ

ーチ会衆の個人的にまったく見知らぬ二人の長老が予告なしに突如家の前に現れた時、彼らは驚きました。この人たちがどのようにして彼らのことを知ったのかは推測するしかありませんが、数百キロも離れた場所で娘に取られた司法措置のフォローアップであることはその発言から明らかでした。長老が「牧羊」に払った努力は、レイ・フィリップスとルル・フィリップスにその信条について質問し、娘と同じように感じているかどうかを尋ねることでした。彼らは肯定の返事をしました。数日後、聴聞会に出席するように通知がきました。彼らはそのようなことを経験したくなかったので、そう答えました。彼らも排斥されました。

ブルックリン本部のロバート・バルツァーをはじめとする協会の代表者が論じるように「静かに立ち去る」なんてどうやってもできないと誰もが思うに違いありません。「組織を清く保つ」ために長老のこのような追求が必要だという主張は、この措置が取られた当時六十代後半だったこの夫婦がどの会衆とも関わらないで目立たないように静かに暮らそうとしていたことを考慮すると、特に空虚に思えます。

ウォーカー婦人の三人娘のうちラベニアだけが証人として残りました。ラベニアはとても温厚な人で、当時ルイジアナ州ニューオリンズに住んでいました。引っ越した当初、ラベニアは地元の王国会館の集会に数回出席しましたが、姉《あるいは妹》のルルのように静かに退くことにしました。ミシシッピ州の姉が「調査」されていた同じ時期に彼女も地元の長老と訪問中の巡回監督から訪問を受けて、集会に来ていないことについて尋ねられました。彼女は出席しない理由を説明しました。これらの人が彼女に関心を示し、彼女の霊的な福祉が危険にさらされていると信じて集会に出席するように励まそうとしたことの是非を問うことは誰にもできません。そのような関心は確かに理解できるし、称賛に値しさえします。とはいえ、彼らが実際にやったことは実に不可解です。彼女がなぜ出席しないのかの説明を聞いて巡回監督は短い声明文を書き、もう出席するつもりがない（声明文の文言通り）のならここに署名すればいいと言いました。彼女はそうしました。その結果はどうなったでしょうか。彼女は正式に「断絶した」と見なされ、破門が求められるような行為をしたのと同じように見なされ、もはや話したり付き合ったりできない人になりました。はぐれた羊を「再調整」し回復させるための手厚い努力とものみの塔の出版物に描かれている牧羊の努力は、せいぜい一時間しかかかりませんでした。しかしラベニアは三十年余り組織に所属していたのです。

これら五人の家族が証人として活動していた年数は全部で200年ほどに及びます。彼らを「群れに戻す」ために証人の長老が費やした時間は合わせてもせいぜい5、6時間程度でした。

監視と情報提供者システム

「友を信じてはならない。愛する者も信頼するな。お前のふところに横たわる女にもお前の口の扉を守れ。」―ミカ7:5, 新改訂標準訳。

このようなことは度々、場所を越えて国を越えて繰り返されてきました。証人は、組織の方針や教えから逸脱しているかもしれない仲間の証人がいれば、それについて報告の義務があると感じています。

『ものみの塔』1987年9月1日号は「『話すのに時がある』――それはどんな時？」と題する記事で、たとえ守秘義務の既存の基準に違反するとしても、医師、看護士、弁護士など機密記録や機密情報に触れる人の守秘義務の誓約に違反するとしても、組織の規則に対するメンバーの違背行為が「排斥に値する違反」と呼ばれるものに関わることであれば、それを明らかにする責任が証人にはあると公式見解を出しました。違反者は違背行為を長老に告白するように諭されることになっていますが、告白がなされない場合は違反行為を知っている証人が神への忠誠ゆえに長老に報告する必要のあることが述べられています。守秘義務が神聖視される分野はただ一つ、それは長老によって開かれる聴聞会など組織自体に関わる事柄です[12]。

信じがたいことに思えますが、この方針が出されてから四年もしないうちに『目ざめよ！』1991年3月8日号（7頁）は、入院について扱った記事の中で「患者の権利章典」を掲載し、その権利の中に次のことを挙げています。

> 6. 自分の医療に関して話し合った事柄や記録された事柄がすべて内密に保たれることを期待する権利。

これまで見てきたように、組織の規則に対するメンバーの違背行為を知る証人は自分が医師であろうと看護士であろうとそれを明らかにすべきというのが組織の方針で、この方針に患者の権利が抵触する場合は患者の権利が無効となります。

1985年8月19日付けの『メディカル・エコノミックス』に掲載されたテキサス州プラノ在住のジェラルド・L・ブロック医師の論文から、証人は自分や他の人に深刻な影響を及ぼすことになるとしても、長老団への情報提供者として行動せざるを得ないと感じていることがよく分かります。ブロック医師は自分の患者であり、何年も家族ぐるみの付き合いをしていた若い証人の女性を雇ったことを語っています。彼はトニー（実名ではなく、彼が彼女につけた名前）を陽気で良い働き手と言っています。別の証人の女性（彼がリンダと呼び、トニーの知り合い）がクリニックに来るまではすべて順調でした。リンダはテキサス州ヒューストンのバーに行った後、数人の男性にレイプされて淋病（りんびょう）に感染したと言い張りました。別の医師の診察を受けていましたが、今は淋病に感染していないことを確認するフォローアップ検査をお願いしたいとのことでした。レイプ被害の真偽を問うのは自分の立場ではないと思った彼はただ検査を行い、感染していないことを確認しました。数週間後、リンダが電話をかけてきて、自分が排斥され、家族からも忌避されていることを腹立ちげに告げました。彼女は訴訟を起こすと脅し、トニーがブロック医師のクリニックの記録から彼女の情報を持ち出して長老に提供したのに違いないと言いました。彼はこう述べています。

12　実際は、長老が話し合っている事例をその妻が知っているということはよくある事実です。

> 　わたしは唖然としました。トニーが患者のうわさ話をするなんて信じられませんでした。わたしは彼女を雇う前に守秘義務について詳しく説明しました。また、人事マニュアルには患者の個人情報を漏らした従業員は即刻解雇するという罰則が定められています。
>
> 　トニーに問いただした時、わたしはさらに唖然としました。自分が告げ口したことを公然と認めたからです。彼女の宗教ではその教えや規律を破るメンバーがいれば、そのことを教会の長老に報告することが求められているということでした。リンダのカルテから治療費や保険情報を確認してリンダがわたしに話したことを読んだ時、彼女は自分の忠誠がどこにあるのかを判断するのにしばらく時間をかけました。結局、彼女はその話を長老に伝えました。

着目したいのは、忠誠について黙想した時、彼女はクリニックの記録から得た情報を使って何をしようとしているかを雇い主であり友人である彼に知らせる義務が自分にあるとは判断しなかったことです。それが忠誠の問題に関わる事柄であるとは、証人として受けた訓練のために思いつかなかったのでしょう。ブロック医師はこう続けます。

> 　少なくともただの軽率なうわさ話ではなかったのです。とはいえ、そっちのほうが、信頼していた従業員であり友人である彼女が患者やわたしに与える損害を十分に考慮した上であのようなことをしたという事実よりもわたしにとって対処しやすかったかもしれません。
>
> 　それにしても、リンダの公の弾劾の話はほとんど信じがたく思えました。わたしが知っている証人は皆とても親切そうでした。彼らの宗教がこのような告げ口や、背信者への厳しい報復を求めるものだとは信じられませんでした。高校時代からの友人である、教会の有力な長老に電話しました。彼はすべて本当だと言いました。
>
> 　教会の長老たちはリンダのレイプの話の真偽を量ろうとはしなかったと彼は説明しました。彼らの見るところ、彼女は行ってはいけない場所に行き、やってはいけないことをし、かかってはいけない病気にかかってしまったのです。ゆえに「仲間はずれ［排斥］」の罰を受けなければならず、本当に悔い改めたことを長老に納得させることができなければ罰を解かれることはないのです。教会は、彼女が赦免の条件を満たすまでは実家から出るようにとまで命じていました。
>
> 　電話した時にすでに怒っていたとしても、その長老の説明が終わるころには憤怒していました。無実の傍観者であるわたしに教会が何をしたのか分かっているのかと尋ねると、彼は申し訳ないと言いましたが、彼もトニー同様、教会の教えがその他の考慮事項すべてに優先されなければならないと感じていました。

トニー同様、彼も他の長老も医師に対して、従業員から機密情報を受け取ったこと、そのような法的特権のある情報をどんな用途に使いたいかを知らせる道義的責務を感じていなかったようです。証人として受けた訓練のために、そのような観点で考えることができなかったのです。

弁護士のアドバイスにより、ブロック医師はトニーを解雇する必要があると判断しました。そしてなぜそうしなければならないかを彼女に説明しただけでなく、考

慮の末、彼女の行為ゆえに友情を断つようなこともしませんでした。リンダには謝罪し、何が起こったのかを説明しました。リンダは彼に個人的な落ち度がなかったことが分かったので訴えるつもりはないと断言しました。

ブロック医師は現在、別の街で開業していますが、まだ少々“怖がり”だと言います。従業員の守秘義務違反は医療過誤保険の対象外であるため、「このような被害を受けた患者が訴訟を起こして勝訴した場合、高額の専門職業賠償責任保険は一銭にもならないでしょう」と彼は書いています。現在彼は、従業員に対する重い個人賠償責任補償を含む事業主保険に加入しています。新しい従業員には「トニー」と「リンダ」の話を聞かせ、宗教上の信条ゆえに患者の情報を漏らさざるを得ないようなことはないと断言しない限り雇わないようにしています。

仲間内の違背行為について証人は守秘義務に反するとしても長老に報告しなければならないというこの主張の根拠として、先に言及した『ものみの塔』は、レビ記5:1にあるモーセの律法の規定を引用しています。そこには、「さて、ある魂が、公然たるのろいのことばを聞いたゆえにその証人であるのに、あるいはそれを見たり知ったりしたのに、それを報告しないでいることによって罪を犯した場合、その者は自分のとがに対する責めを負わねばならない」とあります。それから記事は次のような結論を導き出しています。

> 宇宙における最高レベルの権威からのこの命令は、各イスラエル人に、いかなるものにせよ自分が見た重大な悪行を、その問題が扱われるよう裁判官に報告する責任を課すものでした。クリスチャンは決して《厳密には［英語］》モーセの律法のもとにありませんが、律法の原則は依然クリスチャン会衆内で適用されます。したがって、クリスチャンに、ある問題に対して長老たちの注意を喚起する責任がかかってくることがあるかもしれません。個人的な記録の内容を権限のない者に明かす行為を違法としている国が多いのは事実です。しかし、もしクリスチャンが祈りをこめて考慮した末、自分は今、下位の権威の要求には反することになっても、神の律法がわたしに自分の知っていることを報告するよう要求するという事態に直面していると感じるなら、それはその人がエホバの前で受け入れる責任です。クリスチャンには、『支配者として人間より神に従わねばならない』時があります。－使徒5:29。
>
> 誓いや厳粛な約束を決して軽く考えるべきではありませんが、人間が要求する約束と、自分たちの神に一意専心仕えるという要求とが対立する場合があるかもしれません。誰かが重大な罪を犯す場合、その人は事実上、被害者であるエホバ神の『公ののろい』を被ることになります。（申命記27:26; 箴言3:33）クリスチャン会衆の一員になる人はすべて、個人的に行なう事柄

> によって、また他の人たちが常に清くあるよう助ける
> ことによって、会衆を清く保つよう「誓う」ことにな
> ります[13]。

これは個々の証人に重い負担を強いるものであるのは確かで、記事の筆者は、仲間内の罪を組織に任命された長老に報告しない者にも同様の重い罪の意識を植え付けようとしています。このような立場を正当化する最大の要因として会衆の清さが強調されています。しかし、証人の「清さ」はそれについて聖句が語っているか沈黙しているかに関係なく組織の裁定によって決まっており、「他の人が清さを保つのを助ける」ための手順も組織とその手続き上の規則によって定められています。そのため、全メンバーが「会衆を清く保つという誓い」の下に置かれているとの主張が貫かれ、不気味でさえあるのです。守秘義務違反を正当化するために『ものみの塔』の記事は、未婚の証人の女性が病院での中絶を受け入れる事例を用いています。しかし第8章で見たように、組織には数多くの規則や規定があり、報告を要する違背の範囲や種類は数百に及ぶ可能性があります。証人の経営者が教会に屋根を取り付けたり警報システムを設置したりしたことを伝票から知った会計事務所に勤める証人は、そのことを長老に報告するのは自分の義務であると考えるでしょう。軍事訓練を受ける代わりに老人ホームで働く任を引き受けたり、軍事基地に殺虫剤を散布したり、兵舎でベッドメイキングをしてお金を稼いだりしている人が訴えられることもあるでしょう。キリストの王国が1914年に始まったという教えやキリストがたった8600人ほどの人の仲介者であるという教えを受け入れることはできないと仲間の証人が表明したら、自分はそれを長老に報告する「誓い」の下にいると感じるでしょう。

先の記事はキリスト者が厳密にはモーセの律法の下にいないとしていますが、記事の筆者が持ち出した以上にこの律法を厳密にキリスト者に適用することなどはたしてできるのだろうかと思わずにはいられません。「律法」と「原則」との間に設けられた区別は、違いのない区別に他なりません。キリスト者はモーセの律法の下に「厳密にはいない」だけでなく、部分的であれ何であれその下におらず、まったく神の恵みの下にいるのです[14]。記事は、この規定の「原則」――それは人が正義と義のために奉仕するのに資すると言える――を単に適用しているのではなく、律法の「文字」を適用しており、それは使徒の教えに反しています。

> 今やわたしたちは律法から解かれました。自分たちが堅く抑えられていたものに対して死んだからです。それは、霊によって新しい意味での奴隷となり、書かれた法典による、古い意味での奴隷とはならないためです[15]。
>
> 文字は殺しますが、霊は生かします[16]。

13　『ものみの塔』1987年9月1日号13頁。
14　ローマ6:14; ガラテア5:4, 18。
15　ローマ7:6。
16　コリント第二3:6, 新改訂標準訳。

ものみの塔がした適用は、キリストの精神を反映しているというよりもむしろ、パウロがあれほど熱心に戦ったユダヤ教化の姿勢――キリスト者を律法遵守者に変えようとする試み――を反映しています。この律法遵守こそがキリスト者を「のろい」の対象にすると使徒は警告しましたが、ものみの塔の記事はこの「のろい」を指して自分たちの方針を支持しない者に罪悪感を抱かせようとしているのです[17]。この適用を遂げるために、記事はモーセの律法に包含されている事柄を超えることもしています。

記事はまず、レビ記5:1で扱われているのは、過ちが犯され、その被害者が証人に証言するよう呼びかけ、それに応じない証人を呪うという訴訟事件であると述べています。脚注では以下のように、それとはやや異なる説明を引用しています。

> 『旧約聖書に関する注釈』の中で、キールとデリッチは、「人が罪を犯したのを自分の目で見たか、あるいは何かほかの方法でそのことを確かに知るようになったため、その犯罪者を有罪とする証人として法廷に出る資格があるのにそうすることを怠り、その犯罪に関する公の調査の場で、裁判官が、その場にいる者すべてに対し、その問題について何かを知っている者は証人として前に出るようにと厳粛に命ずる［ここでいう「のろいのことば」］のを聞いても、自分が見たこと、または知ったことを述べなければ」、その者はとがに対する責めもしくは罪を負うことになった、と述べています[18]。

イスラエルは軽犯罪や刑事事件だけでなく個人間のあらゆる紛争に関わる民事事件も扱う独立国家として機能しており、村や町の年長者は法廷の役目を果たし、事件の審理は町の門で公に行われました[19]。ある事件で証言する証人を求める呼びかけがなされる場合、それは公の場で行われ、その呼びかけには「厳粛な命令」、新世界訳によれば「公然たるのろいのことば」が伴うこともあり、証人は証言、しかも率直な証言をする責任を負わされました[20]。

町の年長者の前で行われた審理の詳細な例は、ルツ記4:1-12にあります。ボアズは亡くなったエリメレクの近親者で、故人の資産の「買い戻し人」となることに関心がありました。それにはモアブの婦人ルツと結婚する責務も含まれます。ボアズは町の門に行き、一番近い親戚の男性（つまり「買い戻し人」としての第一の権利を持つ人）がやって来るまで待ちます。それから、町の年長者十人を集め、それら年長者と集まった群衆の前で話をまとめ、求めていた権利を得ました。そこで彼は年長者と群衆に向かって、「皆さんは今日証人です」と言います。

当時非常にオープンな仕方で物事が運ばれたことと、ものみの塔組織によって定められた宗教裁判システムの秘密めいた運用の仕方とには、一致点がまったくありません。証人を公に呼ぶことは事実上なく、審理は密かに行われ、唯一公に表明されることと言えば、排斥か断絶の短い発表だけなのです。組織はなぜ、律法の「原

17　使徒15:5; ガラテア3:1-5, 10-13。この記事は申命記27:26を参照することさえしています。そこには、「この律法の言葉を守らず、それを実行しない者はのろわれる」とあります。

18　『ものみの塔』1987年9月1日号13頁。

19　申命記16:18; 21:19; ルツ4:1。

20　箴言29:24; マタイ26:62, 63と比較なさってください。

則」を非常に選択的に適用し、仲間内の違背行為の報告義務をメンバーに負わせるためだけに利用するいっぽうで、組織に任命された代表者による司法手続きの実施をオープンにするという明白な原則を無視しているのでしょうか[21]。

『ものみの塔』の記事の筆者は、証人を求める公の呼びかけに応じることから、個人が悪行の報告をまず長老にすることへと論点を素早くすり替えようとしています。そして、長老でない人を通報者または告発者の役に追いやり、状況によってどうすべきかの自己判断をすべて長老に委ねています。メンバーは悪行を犯したと思われる仲間にまず近づいて長老のところに行くように促すことになってはいますが、それが行われることは実質ほとんどありません。多くの場合、その段階は飛ばされ、長老に報告がなされ、そうなっては大抵取り返しがつかず、組織の司法手続きが機能し始めるのです。

『ものみの塔』の資料全体の意図は、この件における自己選択の権利、他の人の誤った行為が審問の対象となるかどうかを自己判断する権利を証人のメンバーから奪うことです。思いやりや同様の配慮からその件を内密にするかどうか、個人が決定する余地のないようにしています。また、組織に任命された長老に報告せずに個人で悪行者を助けようとすることは神への不敬であると描写しようとしています。モーセの律法下で、ある重大な過ちや極悪犯罪――神に対する冒とく、同胞のイスラエル人を偶像崇拝にいざなう企て、無実な人の血を流すこと、そしておそらく偽りの欺まんに満ちた預言を口にすること――について声を上げる責任があったことは間違いありません[22]。しかしモーセの律法のどこにも、イスラエル人は皆「自分が目撃した重大な悪行」を一つ残らず裁き人に報告する義務があると記されている箇所は大まかに言っても見当たりません。これまで見てきたように、ほとんどの場合、レビ記5:1節を含む規定は、証言するようにとの呼びかけや命令に応じることを定めるものであり、イスラエル人が何らかの報告をまずすることを定めるものではありません。同胞のイスラエル人が犯したかもしれない過ちについて町の年長者に逐一報告する義務を神の律法は各イスラエル人に課している――その結果、それが町の門で公にされる――という考えは、『ものみの塔』の筆者が聖句に読み込んだものです。もちろん他の人から不当な扱いを受けて苦悩している人は、門にいる年長者のところに行って告訴する権利がありました。しかしここでも、個人で解決できることであれば、苦悩している人がその人の悪行を報告する義務はありませんでした。

重大な過ちの明白な証拠があるにもかかわらず沈黙を守った顕著な例として、イエスの養父ヨセフの事例を挙げることができます。ヨセフは自分の婚約者が姦淫(かんいん)の

---

21 組織が1988年に出版した『聖書に対する洞察』では、「門のところで行なわれる裁判はどれもよく知れ渡ったので、裁き人たちは裁判の手続きの点でも決定の点でも注意深く公正に行なうように促されました」と述べられています。（第2巻828頁）

22 レビ記24:10-14; 申命記13:6-11; 17:2-7; 21:1-9; ゼカリヤ13:2-6。概してこのような犯罪を知っている者は、証人になるだけでなく、犯罪者を処刑するのに最初に石を投げる者にもなりました。

掟(おきて)を破ったことを心から信じていました。婚姻関係に入る前に彼女が妊娠したという否定できない事実が何よりの証拠であるように思われました。とはいえヨセフは彼女のことを裁判官である年長者や祭司に報告する義務を感じませんでした。「彼女をさらし者にする」ことを望まず、ひっそりと縁を切るつもりだったのです。それによって彼は報告の神聖な「誓い」を軽んじ、「会衆の清さ」への配慮を著しく欠いていることを示したのでしょうか。聖句は彼が「義にかなった人」［善良な人〈フィリプス現代英語〉; 正しい人〈エルサレム聖書〉］であったからこそそのようにしたと述べています[23]。神はヨセフの誤解を解いてマリアの貞節を保証なさった時に、彼の憐(あわ)れみ深い意図を叱責したりなさいませんでした[24]。

神の御子も同様に、すべての過ちが裁判官に持ち出される必要があるわけではないことを明らかになさり、悪行者がそうなることを避けるために裁判官に訴えに行く途中の告訴人と折り合いをつける状況について語られました[25]。また、罪を犯されたほうにも、司法機関に率先して報告するようにとではなく、罪を犯した者に近づいて過ちを認めさせる努力を払うようにと呼びかけられました。それが成功すれば「あなたは自分の兄弟を得たことになる」とイエスはおっしゃいました。これは長老を含め、他の人の介入なしにということです。成功しなかった場合にのみ、「あと一人か二人」に助けを求めますが、それが「長老」であるとは言われていません。この努力さえも失敗して初めて、悪行者の罪深い行為が会衆に持ち出されるのです[26]。

神への奉仕において律法主義的な立場を取ることに代表される厳格さがいかに間違っているかをイエスは力強く暴露なさいました。律法の目的が人を益することにあり、憐(あわ)れみを示すのに重荷になるべきでも足かせとなるべきでもないことを示して、イエスは「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」と告発者たちにおっしゃいました[27]。また、ダビデが幕屋に入って「祭司のほかは、自分も供の者たちも食べることが<u>違法とされている</u>」神聖な「供えのパン」を受け取って部下に食べさせたという記述を、宗教上の律法主義者たちに思い起こさせられました[28]。ダビデがそのようなことをしたからといって「神の呪いを受ける」と描写なさったり、ダビデを告発しなかったという理由でその時の祭司が会衆を清く保つという「誓い」を果たさなかったと描写なさったりしませんでした。同様に、この出来事を国の最高幹部サウルに<u>速やかに報告して</u>、85人の祭司の死刑判決と町民の殺りくを招いたエドム人ドエグの行動を称賛なさることもありませんでした[29]。むしろイエスはこの記述を根拠に宗教上の年長者たちにこうおっしゃいまし

23　マタイ1:19。
24　マタイ1:20-24。
25　マタイ5:23-26。
26　マタイ18:15-18, エルサレム聖書。
27　マルコ2:27, エルサレム聖書。
28　サムエル第一21:1-6; マタイ12:1-4, 新改訂標準訳。
29　サムエル第一21:7; 22:9-19。

た。『わたしが望むのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったでしょう」[30]。

「律法から解かれ」、もはや「書かれた法典による古い意味での」奴隷ではないキリスト者として、わたしたちにはこの分野で決断する際にキリストの模範と信仰の律法と愛の最高の律法に導かれる自由があります[31]。「人を愛する者は律法を全うしている」という使徒の保証もあります。姦淫、殺人、盗み、貪りに関する命令のみならず、「ほかにどんな命令があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という この一つの決まり事に要約されます。愛は隣人に害を加えることはありません。だから、愛は律法を全うするものです」という保証です[32]。わたしたちには、悪行者にもその影響を受ける者にも最大の益をもたらすことが期待できる道はどれかについて自分自身で判断する自由があるのです。確かに、人生にはきわめて重大な問題――犯された傷害の重大さと深刻さを表している問題、あるいは深刻な危害を及ぼす可能性のある問題――があり、それを理解しているゆえに、その問題を他の人に知らせようと思うことでしょう。しかし、融通の効かない規則に縛られてはおらず、「誓い」の下にいるわけでも他の人の過失を暴くことを義務化されているわけでもありません。わたしたちは、教会裁判所にではなく「互いに自分の罪を告白する」ように励まされています。組織の任に就いている人だけでなくわたしたち一人ひとりが、真理から迷い出て誤りに陥った人を助けて癒すためにできることは何でもするように、またそうする際には悪行そのものは忌み嫌いながらも個人に憐れみ深く接するようにと勧められているのです[33]。

最終分析で示された厳格な方針は、誤りに陥った人を助けるどころか実際には逆効果になっています。重大な罪を犯した人は、さらに過ちを犯さないための助けが必要であると痛感するかもしれません。しかし、罪深い過ちについて相談するために会衆の友人のところに行くこともできません。友人に話したことが内密に保たれるという確信がないからです。そのような場合、「内密の話をあらわにする」ことを禁じる聖句は無効と見なされ、「真の友はどんな時にも愛しつづけるものであり、苦難のときのために生まれた兄弟である」という聖句も同様に意味を持たず、空虚なものとなります[34]。罪を犯した人がキリストを通して祈りのうちに神に近づいて赦しを求めたとしても、それだけでは守秘義務が守られることの保証にはなりません。その罪が組織によって「大罪」に分類されているのであれば、組織の幹部に報告されなければならず、教会裁判所は行動するかどうかを決定しなければなりません。証人たちは、個人的な過ちについて仲間が「権威のところに行って」いないのを知っていながら通報しないなら、それは愛に欠けていると感じるように仕向け

30　マタイ12:7, 新国際訳。
31　ローマ7:6。
32　ローマ13:8-10, 新国際訳。
33　ヤコブ5:16, 19, 20; ユダ22, 23。
34　箴言11:13; 25:9; 17:17をご覧ください。

られています。過ちを犯した証人は、「親切に、思慮深く扱ってもらえるという確信を抱いて」長老に話すことができると言われます[35]。統治体にいる間、描かれているのとはまったく違ったイメージが本部の奉仕部門から伝わってきました。引用された巡回監督の言葉によれば、長老の大多数（70％以上という数字を挙げる者もいた）は司法権を行使する資格がないと考えているとのことでした。ものみの塔の出版物に書かれているような信頼に値する長老もいることは確かです。しかし実際の経験が示すように、長老の大多数にとって組織の方針を堅く守ることが最優先事項であり、本来持っているはずの自然な憐(あわ)れみの感情が律法主義によって阻害されてしまうことがあまりにも多いのです。

証人の個人的な行動が、組織の「神権的な大法典」の執行を推し進める「忠実な」長老に厳しく監視されていることを物語っているのは、スウェーデンのルド・パーションとその妻の事例です。ルドは1959年にエホバの証人としてバプテスマを受けました。1986年1月、彼と妻は、「善きサマリア人」の例えの中のキリスト・イエスのメッセージについて、それまで以上に真剣に考えるようになりました。特にエチオピアにおける飢餓状況に動かされて、赤十字社にわずかな年会費を払って、さまざまな緊急プロジェクトについての情報を得て、その中からささやかな寄付ができるものを選べるようにしました。それが問題とは思ってもみませんでした。筋金入りの証人であるルド自身の母親も不治の病にかかってスウェーデン赤十字の救済サービスの恩恵を受けたことがありました。

数ヶ月後、その年の5月に地元の会衆の主宰監督がルドに近づき、赤十字に加入したかと尋ねました。ルドは友好的な会話を期待していましたが、主宰監督は彼がメンバーになったことを確認するとその話を切り上げ、それ以上の質問はしませんでした。

ルドはこの会話の前にすでに「調査」が始まっていたことを、後になって知りました。ルドが赤十字のメンバーになったとのうわさを聞いた一人の長老がそのことを長老団に報告し、長老たちはその件について話し合い、その地域の巡回監督であるゲルト・アンデルソンにも連絡を取って助言を求めていたのです。なぜでしょうか。戦争に関連してルドが「中立を破った」（これまで見てきたように「イザヤ2:4に背いた」としばしば表現される）かもしれないと感じたからです。1986年6月19日、長老たちはものみの塔のスウェーデン支部に手紙を書き、ルドがキリスト者の中立を破ったかどうかを確認するためにルドを審理委員会に呼び出すことの可否を問い合わせました。支部はこれについて調査し、おそらくブルックリンの統治体から助言をもらうことになるだろうと回答し、巡回監督のアンデルソンに手紙の写しを送りました。1986年10月15日、ついに支部はここに示した手紙を会衆の主宰監督であるマット・ノルドスンドに送りました[36]。

35　『ものみの塔』1987年9月1日号15頁の図版の説明文からの引用。
36　この手紙はスウェーデン語で書かれました。ここに掲載されているのは翻訳です。スウェーデン語の原本』の写しは『コメンタリー・プレス』にあります。

BIBEL-OCH TRAKTATSÄLLSKAPET VAKTTORNET
Box 5, S-732 00 ARBOGA, SWEDEN SR:SL 1986-10-15

Mats Nordsund
Brohuset 1019
Prästmöllan
260 70 LJUNGBYHED

To the body of elders in the Perstorp Congregation

Dear Brothers,

We now write to you concerning the information you provided the Society that brother Rud Persson has become a member of the Red Cross.

We forwarded the issue to the brothers in Brooklyn to get their view on membership of such an organization. The brothers advised us that even if the Red Cross in a certain country carries out the service that may be needed locally, it still applies the principles of the International Red Cross with headquarters in Switzerland. It is claimed that the purpose of the organization is to relieve human hardship and suffering, but we must, nevertheless, remember that the organization had its beginning on the battlefields. It performs a large part of its work directly or indirectly in conflict with the thoughts outlined at Isaiah 2:4. Too, the organization is one of the world's biggest suppliers of blood for transfusions. It is also involved in political matters and often acts as mediator between nations at war.

Consequently, it is good to consider what an organization as a whole works for and put that in relation to the Christian neutrality that God's people must show. And we cannot support misuse of blood either. To be sure, it is all very well to try to relieve human suffering, but we don't need to become members of a worldly organization to do so, do we? This was treated rather extensively in The Watchtower, October 1, 1986, pp. 22-24.

A person's motive for joining an organization also comes into the picture. Why does he wish to join a certain organization? Does he approve of what the organization stands for? It may happen that someone becomes a passive member of such an organization in order to qualify for a course in first aid. Nothing else is required of the individual. A Christian might think that his conscience allows for this. On the other hand, if someone says that he is defending everything the organization advocates, then, of course, his privileges in the congregation would be affected. If someone should become a member and actively support, for example, the worldwide blood program the Red Cross stands for, that could lead to disfellowshipping.

Hence, in your case we recommend that you talk to brother Rud Persson about this and examine his motive for joining the Red Cross. Is he of the opinion that what this organization stands for is good and proper? Is he aware of its program in support of blood transfusions? And its activities as mediator between nations? When you have talked extensively with him about this and heard his reaction, please communicate with us again so that we can visualize his thinking in this matter and if he wants to continue his membership of the Red Cross. What is his attitude to food containing blood served at school? Has he informed the teachers about our position regarding this? Birthday celebrations and so forth in connection with school activities? We mention this because brother Gert Andersson at one time made comments about this concerning the children of brother Rud Persson.

United with you in publishing the good news of the kingdom we send our love and greetings.

Your brothers

BIBEL-OCH TRAKTATSÄLLSKAPET VAKTTORNET

(stamp)

Encl. extract from The World Book Encyclopedia

cc: Gert Andersson

---------------------------《訳》--------------------------------

SR:SL 1986-10-15

マット・ノルドスンド

パーストープ会衆の長老団

親愛なる兄弟、

ルド・パーション兄弟が赤十字のメンバーになったという、兄弟たちが協会に提供な

さった情報に関して手紙を書いています。

わたしたちはこの問題をブルックリンに転送し、そのような組織のメンバーになることについて兄弟たちの見解を求めました。兄弟たちの助言は、ある国の赤十字が地元で必要とされる奉仕活動を行なうとしても、それはスイスに本部を置く国際赤十字の原則を適用して行っているというものでした。この組織の目的は人間の苦難と苦しみを和らげることにあるとされていますが、それでもわたしたちは、この組織が戦場で始まったことを忘れてはなりません。その仕事の大部分はイザヤ2:4に述べられている考えに直接的または間接的に対立しています。また、この組織は世界最大の輸血用血液のサプライヤーでもあります。政治にも関与し、戦争している国家間の調停役もしばしば務めています。したがって、ある組織が全体として何のために活動しているかを考え、神の民が示さなければならないクリスチャンの中立と関連づけるのがよいでしょう。血液の誤用もわたしたちは支持できません。確かに人間の苦しみを和らげようとするのは非常に立派なことですが、そのために世の組織のメンバーになる必要はないのではないでしょうか。このことは、『ものみの塔』1986年10月1日号の22-24頁に広範囲に扱われています。

その人が組織に加わる動機もまた考慮に入れなければなりません。なぜその人はある組織に加わりたいのでしょうか。その組織が掲げるものに賛同しているのでしょうか。応急手当ての受講資格を得るために、そのような組織の受け身のメンバーになることはあるでしょう。それ以外は何も要求されません。自分の良心はそれを許すと考えるクリスチャンもいるでしょう。その一方で、その組織が提唱することをすべて擁護していると言う人がいれば、当然、会衆内でのその人の特権は影響を受けることになります。もし誰かがメンバーになり、赤十字が掲げる血液プログラムなどを積極的に支援した場合、排斥につながる可能性があります。

ですから、兄弟たちの場合、ルド・パーション兄弟にこのことを話し、彼が赤十字に加わった動機を調べることをお勧めします。彼はこの組織が掲げているものが良いことで適切であると考えているのでしょうか。その輸血支援プログラムを知っているでしょうか。国家間の調停役としての活動についてはどうでしょうか。これについて彼とよく話し、彼の反応が分かったら、またこちらにお知らせください。この件に関する彼の考え、彼が赤十字のメンバーシップを続けたいと思っているかどうかを推し量れるようにするためです。学校給食で出される血の入った食べ物に対する彼の態度はどういうものでしょうか。それに関するわたしたちの立場を教師に伝えているでしょうか。学校行事に伴う誕生日のお祝い、その他についてはどうでしょうか。というのも、ルド・パーション兄弟の子どもたちに関連してゲルト・アンデルソン兄弟がこれについてコメントしたことがあるからです。

王国の良い知らせを共に宣伝しつつ、愛と挨拶を送ります。

あなたの兄弟、

（スタンプ）

同封：世界図書百科事典からの抜粋

この手紙の写し：ゲルト・アンデルソン

赤十字に加わったかどうかについて5月に主宰監督に簡単な質問を受けてから10月のこの時点に至るまでずっと、この調査についてルドは何も知りませんでした。ルドの父親と弟は長老団の中にいましたがルドに何も言いませんでした。おそらく

「守秘義務」のために、ルドが聴聞会に呼ばれるかもしれないことを知らせてはいけないと思ったのでしょう。しかし、10月15日付けの支部の手紙を受け取った長老たちは、再び巡回監督に相談して迅速に行動を起こしました。10月18日、主宰監督はルドに電話をかけ、協会の要請により二人の長老の立ち会いのもとで五つの質問に答えてほしいと告げました。また、ルドの妻も赤十字のメンバーになったかどうかも尋ねました。

会合でルドは次の五つの質問に答えるよう求められました。

1）赤十字に加わった動機は何ですか？

2）赤十字が掲げているものは良いことで適切であるという考えですか？

3）赤十字の輸血プログラムを知っていますか？

4）赤十字が国家間の調停に携わっていることを知っていますか？

5）赤十字のメンバーシップを続けるつもりですか？

彼の回答をかいつまんで言うとこうでした。

1）彼の動機は赤十字の支援プロジェクトについて知って、適切な寄付をすることでした。彼は『目ざめよ！』1977年3月22日号の記事に言及して長老たちに、その記事が慈善団体について多くの否定的要素を取り上げながらも寄付をすることは必ずしも悪いことではないと述べていることを示しました。また、この問題は労働組合やある種の雇用に対して組織が取っている立場に類似しており、それによれば否定的要素は肯定的要素によって相殺されるという見方がなされているように思うとも述べました[37]。

2）二つ目の質問に対する彼の答えは、赤十字が困窮者に分け隔てなく支援していることに共感し、それは良いことで適切であると感じているというものでした。そして、『ものみの塔』1918年6月1日号［英語］に掲載された以下の記述に、長老たちの注意を喚起しました。

「クリスチャンは、赤十字の活動が自分の良心に反する殺人のほう助に他ならないという歪(ゆが)んだ視点を提示されたなら、赤十字を支援するわけにはいきません。しかしその後、赤十字が無力な人々への支援を身をもって体現しているという広い視点を得て、自分は能力と機会に応じて赤十字を支援することができ、その意思があることに気づいたとします。」

今日、「歪(ゆが)んだ視点」から「広い視点」へのこの変化はより正当化されると感じると彼は付け加えました。

3）輸血に関しては、ほとんどの場合において実際の輸血は病院が行っており、大量の血液を使用するからといって協会が病院をボイコットするとは考えにくいという点を指摘しました。「血液プログラム」のある病院で働いている証人は多くいます。証人でない

37　『ものみの塔』1961年2月15日号日号128頁［英語］;『目ざめよ！』1977年3月22日号28-29頁;『ものみの塔』1982年10月15日号26頁。

患者が輸血を望む場合に証人の医師は司法措置を取られることなく輸血を施すことができるという協会の決まりを、彼は長老たちに思い起こさせました[38]。

4）国家間の調停に関する申し立てについては、赤十字は政治的なものではなく、調停役としてのその役割は人道的な問題に限定されていると彼は述べました。そしてまたもや何千人もの証人が所属する「世の」組織である労働組合との類似点を引き合いに出しました。赤十字とは対照的に、労働組合はしばしば政治活動に従事していますが、そのメンバーシップだからといってそれが協会にとがめられることはありません。

5）赤十字のメンバーであり続けるかどうかについては、自分が見るところそれは協会の出版物と調和していると彼は述べました。そのようなメンバーシップがキリスト教と相容れないものであることが最初に示されない限りその質問が無意味であること、その旨の情報を受け取っていないからには利害の衝突はないと思うことを伝えました。

ルド・パーションになされた質問の出所は着目に値するでしょう。それらの質問はものみの塔協会のスウェーデン支部によって地元の長老に提供されたもので、支部はブルックリンの統治体からこの問題に関する指示を受け取ったと述べています。支部が長老宛の手紙の中で提供した情報は統治体のその指示に基づくものであったと考えざるをえません。また、その情報には多くの虚偽や浅はかな推論があったことも着目に値するでしょう。

長老はルドの回答と共に、ルドに関する不利な申し立て――子どもの学校事情にまで及ぶ――を含めた報告書を支部に送りました。長老はルドに写しを渡しませんでしたが、ルドは写しを入手することができ、長老の申し立て一つ一つに対して詳細な反論を支部に送りました。

何ヶ月経っても支部から何の返事もありませんでした。ついに1987年4月8日、ルドは支部に電話をかけ、支部委員のアケ・カールソンとルーン・グラーンと話をしました。カールソンは笑いながら、「このような問題についてどうすべきかを組織が友人に指示することはできません」と述べました。（この責任逃れと、支部が会衆の長老に送った手紙に実際に書かれていた内容との明白な違いを比較していただきたい。）ルーン・グラーンは、ルドに対していかなる措置も取られることはなく、ブルックリン本部の指針では、赤十字のメンバーシップはその人が会衆の長老や奉仕の僕の職務を果たす資格があるかどうかに影響するだけである、と述べました。そして、髭(ひげ)を生やすことにそれを例えました[39]。

地元の長老団から何か言ってくるのを待つことさらに一ヶ月後、ルドは長老である弟に支部の人と話したことを伝えました。そして、地元の長老が支部宛に出したその手紙の返事をまったく受け取っていないことを知りました。彼らの名誉のために言っておきますが、何人かは支部の人が言ったことを知って安堵(あんど)の胸をなで下ろしました。ルド個人としては、キリスト教を公言する団体が、ルカ10:29-37を読ん

38　『ものみの塔』1965年2月15日号106-107頁をご覧ください。

39　一般的な方針として、証人の男性が髭(ひげ)を生やしても措置が取られることはありませんが、長老は組織上の責任を担う資格がその人にはないと判断するかもしれません。

で人道的な活動に携わりたいと感じたというだけの理由で人を詮索して尋問する、このような戦術に出るとは信じられない思いでした。
　スウェーデンのこの男性がしたような適切な返答を自分もできると感じる証人はそう多くないだろうとわたしは思います。もしそうできないなら、赤十字の「仕事の大部分はイザヤ2:4に述べられている考えと直接的または間接的に対立している」という組織の完全に誤った主張に基づき、「中立を破った」かどで排斥措置を講じられるでしょう。

「民主主義発祥の地」で

「民主主義発祥の地」と呼ばれるギリシャのアテネで起こった出来事ほど、意見の相違や離反の有無を探り出して即座に扱おうとする熱意が極限まで達するとどうなるかを明らかにするものはないでしょう。
　1986年、アテネにあるものみの塔協会の支部は、組織上の教えや方針に完全に同意していない兆候のある証人に猛烈な圧力をかけ始めました。排斥された証人の数は実に百人を超えました。霊性を維持するためにこれらの人々は個人宅に集まって聖書を読んだり、話し合ったりするようになりました。しかし、ギリシャ支部はそのようなことをする人を探し出して対策を講じることに極端な関心を顕にしました。やがて驚くような手段が取られるようになり、アテネ新聞の記事に掲載された裁判につながりました。
　1987年4月6日火曜日、ニック・ボザルツィスとその妻エフティヒアの家に50人ほどの人が聖書について話し合うために集まりました。ニックはバルコニーから、通りをはさんで向かい側に二人の男性が立って、自宅に入って来る人——中には脱会していない人もいた——を見ているのに気づきました。そのうちの一人が証人であることを見て取ったニックは二人に話しかけようと降りて行きましたが、彼が通りに姿を現すやいなや二人は文字通り走り去って行きました。数日のうちに、この集まりに出席していた三人が聴聞会で長老に排斥されました。
　金曜日いつもなら他の人は元証人であるヴォウラ・カロケリヌの家に行くのですが、日曜日に主の晩餐(ばんさん)を祝うために集まる予定だったので、4月9日金曜日の集まりは取りやめになりました。しかし、金曜日のその晩、ヴォウラは家の向かいの道路に五人の人が乗った車が停まっているのに気づきました。車も、乗っている人もそこに何時間も留まっていました。翌日の晩も同じでした。

Η ΝΕΑ ΤΕΧΝΟΛΟΓΙΑ ΣΤΗΝ ΥΠΗΡΕΣΙΑ ΤΟΥ «ΑΡΜΑΓΕΔΔΩΝΑ»

Μάρτυρες του βίντεο

- ΠΙΣΤΟΙ ΤΟΥ ΙΕΧΩΒΑ, ΠΟΥ ΕΦΥΓΑΝ ΑΠΟ ΤΗΝ ΟΡΓΑΝΩΣΗ, ΤΡΕΜΟΥΝ ΤΙΣ ΚΑΣΕΤΕΣ
- «ΔΕΝ ΜΠΟΡΟΥΜΕ ΝΑ ΜΙΛΗΣΟΥΜΕ ΟΥΤΕ ΣΤΑ ΠΑΙΔΙΑ ΜΑΣ»
- «ΠΟΛΛΟΙ ΧΑΝΟΥΝ ΤΗ ΔΟΥΛΕΙΑ ΤΟΥΣ ΜΕ ΤΟ ΗΛΕΚΤΡΟΝΙΚΟ ΦΑΚΕΛΩΜΑ»

「ビデオの証人たち」という見出しに続き、こうあります。「ビデオテープを恐れて組織を去った神の忠実な人々」、「自分の子どもと話すことさえできない」、「電子ファイリングのために多くの人が職を失っている」

このような状況を、“亡命者”の特定と司法措置を取るための“スパイ行為”の証拠と見なし、悪意があってそうしたと決めつけるのは、想像の産物のように思うかもしれません。後の出来事はそうでないことを示しています。

翌4月11日の日曜日、全人類のための神の御子の死を記念するために大勢の人がヴォウラの家に行きました。ヴォウラは道路を挟んで一方の角に見慣れない車が停まり、もう一方の角にバンが停まっているのに気づきました。バンの後部窓は紙で覆われていて、その中央には穴が開けられていました。車に乗っていた人は何度か道路を渡ってバンに向かい、バンの中にいる人たちと話をしていました。ヴォウラは自宅に来ていた人の一人に、なぜ車がそこに停まっているのか調べてほしいと頼みました。

彼が車に近づくと、中にいた人たちは急いで車で立ち去りました。それで彼はバンの後部に行き、後部窓の覆いの穴から中をのぞき込みました。中にはカメラ機材を操作している二人の証人、長老のニコラス・アントニウとものみの塔のアテネ支部のスタッフ、ディメトル・ゼルデスがいました。ヴォウラの家から他の何人かもバンにやって来て、近くのイタリア大使館に常駐している警察官も何があったのか

を知るために現れました。バンに乗っていた証人たちはなんとか周囲の群衆の間をすり抜けて近くの公園まで車を走らせ、そこで急いで撮影機材を降ろし始めました。そこへ二台のパトカーが到着し、二人はプライバシー侵害の容疑で逮捕され、撮影機材は押収されました。映像にはカロケリヌ夫人の自宅と、玄関から中に入って行く全員のクローズアップが写っていました。

地方検事の前で二人の男性は、ものみの塔の支部スタッフであるディメトル・ゼルデスの親族を撮影するために来ただけであると述べました。彼の従姉妹である前述のエフティヒア・ボザルツィスは二年前に脱会していました。「忠実な」証人としてディメトルは彼女に何ら関心を持つべきではなく、彼女の脱会から二年後に秘密裏に撮影しようとする理由も何もなかったはずです。
この事件は最終的に裁判となりました。公判終了時の陳述で地方検事のコンタキシス氏はこう述べました。

> キリスト教団体でメンバーに嘘を言うように指示するところはないと思うが、被告と被告の所属する組織がそうする場合にはその責任を認めて、「はい、スパイしました」と言ってもらいたい。そして組織がそのようなことをしたとすれば、どうして他の人に追従してもらえると期待できるだろうか。被告は特殊な機材を所持して、それを使って撮影しているのを目撃されているのに、自分はスパイするためではなく、ただ撮影するためにやったと言う。これでは被告の名誉にも被告の所属する組織の名誉にもならない。
>
> わたしたちは誰でも自分の好きな組織に所属する自由があるが、その組織を抜けて法の範囲内で好きなことをする自由もある。……メンバーが抜けて去って行くことで、この組織にはその後を追ってスパイする権利が与えられるのだろうか。個人の生活や人格を詮索する目的でビデオテープやテープレコーダー、撮影を使うことは法で禁じられている。これは**守秘義務**に該当し、個人の信条も含めて、そのような場合は守秘義務によって保護されている。これは非常に重大なことだ。被告が撮影機材を使って原告の私生活を暗号化しようとしていたのは明らかであり、これは偶然ではなく意図的である。
>
> ものみの塔協会は、協会が「箱船」であり、救われるためにはその箱船に入らなければならないと教えることにより、また、協会が神の経路であると教えることにより、メンバーのうちに強い依存心を生み出し、かくしてメンバーは人権とわたしたちが呼ぶものすべてを脅かし踏みにじるためなら何でもするように指示される。

裁判で裁判官の一人が、バンの持ち主である証人の長老に、その日彼ともう一人の証人がバンの中にどれくらいの時間いたかを尋ねました。答えは六時間でした。バンの窓が透明だったかを尋ねられると、その長老は、いいえ、後ろの窓は紙で覆われており、中央の穴からビデオカメラで撮影したと答えました。そして、これはすべて同行した証人の親族を撮影するために行ったと主張しました。押収されたフィルムには、家の正面玄関やバルコニーにいる多くの人がクローズアップされて写っていました。しかし、当の親族はフィルムのどこにも写っていません。それもそのはずです、彼女はその集まりにいなかったからです！裁判所は被告に有罪判決を下しました。

皮肉にもその翌年、『目ざめよ！』はギリシャ正教会幹部の不寛容を非難する記

事を掲載し、彼らがスポーツスタジアムの関係者に圧力をかけて、そのスタジアムで大会を開く予定だったエホバの証人との契約を解除させたと訴えました[40]。さらに記事は、ギリシャ憲法が保障する礼拝と宗教上の良心の自由を指摘し、「自分の宗教的信念を表明する自由は、『人権の保護に関する』1950年4月11日発効のローマ条約……により、一層明確に保障される」という裁判所の判決を引用して、「平和的で法律をよく守るクリスチャン」に対するこの不当な扱いを正しく非難しました。そして「ギリシャ国民の自由は、僧職者たちの持つ暗黒時代の精神のゆえに、またもや踏みにじられました」と述べた後、こう付け加えました。「“民主主義発祥の地”でそのように民主主義が愚弄されるのを見るのは実に残念なことです」と。

　この「甚だしい不寛容と偏見」に対する非難に同意できるし、証人がそのような不当な扱いを受けたことを悲しく思います。しかし、わたしが同じように悲しく思うのは、組織が他者の不正を見抜き、自らのメンバーに対して良心の自由の行使を侵害する行為がなされる時はそれに抗議することはできても、自分が同じ罪を犯している時はそれを見抜けないことです。ものみの塔組織は自らの代表者が、神の御子の死を記念するという唯一の目的で集まっていた平和的で法を遵守するキリスト者を秘密裏に違法にスパイすることによって、「民主主義発祥の地」で暗黒時代の精神を顕在化させたことに声を上げることは決してありませんでした。スパイに使われたバンに支部スタッフが乗っていたことは、支部幹部がそのような行為がなされていることを認識して承認していたか、少なくとも容認していたことを示しています。しかし、組織はこのことを証人たちに知らせず、そのような行為を非難する声明も発表せず、世界中の証人がギリシャ正教会の僧職者の行為について読んでいる一方で、ギリシャの外の証人たちは誰一人ギリシャのものみの塔の代表者のした行為を知らないのです。

　今に至るまでどの国においても、組織の教えや実践を良心上全面的に支持することはできないと分かったエホバの証人は恐れのうちに生活しており、何を言うか、何をするか、何を読むか、誰と付き合うか、誰から手紙を受け取るかについて常に注意を払わなければならないと感じ、個人的な友人や親しい親族であってもその人が証人であれば自由を感じることはありません。前述のようにわたし個人の経験では、名乗ることを恐れたり、偽名を使う必要があると感じたりした人が電話をかけてくることがあります。中には、わたしや他の元証人との文通が発覚する危険を冒さないで文通するために、特別な郵便受けを作る必要を感じた人もいました。彼らは一種の“人質”のような状況に置かれています。それは、組織の権威に服従する家族や友人との会話を一切断つことのできる組織の力によって生み出されたものです。これを避ける唯一の方法は組織が提示する条件を満たすことです。

　ここに描いたことは決して誇張ではありません。というのも、ここで述べた経験は氷山の一角にすぎず、すべてを記そうと思えば一冊の本が埋まってしまうほどだからです。このような経験は、メンバーの「無菌」状態の維持のためなら「マイン

40　『目ざめよ！』1988年11月22日号9-11頁。

ドコントロール」に等しい手段を使うことも辞さない組織が、どのような思考を生み出し、どのような態度を培わせるかを如実に示しています。強い基盤のある確かな教えは、オープンな議論を異端や反逆とするような無菌状態になくても生き残ります。真理には誤りに相対する力があります。その正当性と価値は結局のところ、そのような対決によって高められます。もろくて根拠の弱い教えだけが、抵抗力がないので生き残るために、力試しに耐えなくてもよいように保護される必要があるのです。

厳しい現実を目の当たりにすると、組織の広報の空虚さが際立ちます。報道陣のインタビューに応じた代表者は、「なぜ報復を心配するのか」、「考えを異にする人たちがただ静かに立ち去らないのはなぜなのか」理解に苦しむと述べ、「霊的な警察官」とは無縁のこの「非常に開かれた組織」には「口やかましい者」も「感情的なハラスメント」もないと主張します。このような発言がいかに事実に反しているかを知っている人は何百、何千といます。どんなに丁寧な態度であっても異なる考えを述べること、たとえ親しい友人同士の個人的な会話の中であっても組織の教えと異なる見解について意見を交わすことは、審理委員会の調査と審判を招くことを彼らは知っています。静かに退くことなどほぼ不可能であり、「あなたが辞めることはできない、我々が解雇しなければならない」というのが事実上の見解であることを彼らは知っています。なぜそのような見解なのでしょうか。そうすることで、組織の方針や教えに良心上の懸念を抱く人を、他のメンバーが近づいてはならない“立ち入り禁止”の対象にすることができるからです。そうすればメンバーがそのような人と会話をして、組織があり得ないとしている事柄を考えるようになるという危険はありません。

一匹の迷える羊を助けるために九十九匹をあとに残し、病気の羊を辛抱強く優しく治療して介抱する羊飼いとは異なり、そのような状況で証人の長老が払う努力はしばしば対立を生み出します。聖句が使われるとしても、一般にその使われ方は相手を癒すのではなく非難するものです。「あなたは組織を神の唯一の経路として受け入れているか、いないか」というのが事実上の決まり文句であり、尋問の結果を左右する主要な論点であり、その人のキリスト教信仰が裁かれる基準なのです。その結果生じる奇妙な状況はまるで羊飼いが群れに向かってこう言うようなものです。

> あなたがた羊の中に、わたしたちが養って世話しているやり方が気に入らない者がいれば、ここを出て行くのはまったくの自由だ。ただし、去りたい者はわたしたちのところに来てほしい。そうすれば、あなたに追放者の烙印（らくいん）を押し、オオカミの臭いがするスプレーを吹き付けて、群れの羊があなたを識別して避けることができるようにする。それから礼儀をわきまえて騒がずに静かに出て行ってもらいたい。

別の種類の「無法」

神の御言葉は、そのままでは封印されていたかもしれない事柄を暴く働きがありま

す。律法では罪のない純粋な聖人に見えても、その不親切さ、無感情、優越感のゆえに神の御子に最も強く糾弾されたパリサイ人のような人の過ちを明らかにします。神の御子は彼らが白く塗った墓のようであるとおっしゃいました。外側は立派に見えるかもしれませんが、内側は死者の骨や汚れしか入っていません。パリサイ人の義は表面的なもので、他の人には良く見えますが偽善と無法を覆い隠していました[41]。外見や法に適っていることが本物の義の証明にはならないことを強調してイエス・キリストは、本物の義が表面に見えるものよりもはるかに深いことを示されました。イエスは、女性に触れずとも心の欲情によって姦淫を犯すことがあると警告なさいました。イエスの弟子ヨハネも、誰の血を流したことがなくても心の激しい憎悪によって殺人者になりうることを明らかにしました。使徒パウロも、崇拝に用いる偶像を持っていなくても欲深い貪欲な心のゆえに偶像礼拝者になることがあると述べています[42]。

これらの原則を念頭に置いてパウロはローマ2:17-24の言葉を記したと思われます。

> ところで、あなたは自らユダヤ人と称し、律法に頼り、神との関係を誇りとし、その御旨を知り、律法に教えられてなすべきことをわきまえています。知識と真理が律法の中に具現されていると考え、盲人の案内者、闇にいる者の光、愚かな者の導き手、幼な子の教師であると自負しています。それならば、あなたは他人を教えながら自分を教えないのですか。盗むなと説きながら盗むのですか。姦淫を犯すなと言いながら姦淫を犯すのですか。偶像を嫌悪しながら神殿を荒らすのですか。律法を誇りとしながら律法を破って神を侮るのですか。「神の名はあなたがたのゆえに異邦人の間で汚されている」と書いてあるとおりです。―『新国際訳』。

エホバの証人の組織の中で経験したこと、その統治体の中で経験したことに、わたしはある意味で感謝しています。律法主義的な観点からキリスト教にアプローチすることの影響を実際に目の当たりにしていなければ、これらすべての点において聖書の教えの価値や重要性を十分に理解することはできなかったでしょう。また、無慈悲なだけでなく時にはこの上なく残酷な行為を許してしまう表面的な道徳がいかに生み出され得るかに気づかなかったでしょう。しかし今なら、使徒の言葉が今日にもどれほど等しく当てはまるかが分かります。ある組織が自分を比喩的な意味での「ユダヤ人」で構成される「霊的イスラエル」であると主張し、自分だけが神の寵愛を受け、神のご意志と掟を知っており、人々を暗闇から真理の光へと導く神の案内人であると世界に伝え、エホバという御名を全地に知らしめているとして大きな注目を集めようとするのはどういうことなのか、にもかかわらず、神の御名を尊ぶと主張するそのような組織が神の名誉を傷付けるほどに深刻な不法の罪を犯すことがあるのはどういうことなのかが理解できます。

問題は、金品の窃盗ではありません。それよりはるかに価値のあるものが盗まれ

41　マタイ23:27, 28。

42　マタイ5:27, 28; ヨハネ第一3:15; コロサイ3:5。

ているのです。神と御子と御言葉を純粋に愛している男女が、組織のある掟(おきて)や教えを受け入れないために友人や知人の間で適切な影響力を奪われ、誉れと良い評判を剥奪され、神と隣人への良心的な奉仕によって一生かけて勝ち得た愛情や尊厳を騙(だま)し取られ、家族からも引き離されてきたという事実です。しかもこのすべては組織の「掟(おきて)」によって正当化されているのです[43]。

血が流されたわけでも、文字通りの殺人があったわけでもありません。とはいえ、良心をただ守ろうとした無実の誠実な男女が不当な、時には悪意のある訴えによって、事実上「背後から刺され」、人格攻撃を受け、彼らを知るほとんどの人の目に霊的に死んだかのように映るのです。

組織による排斥とそれがもたらす結果を脅しに使ったり、相手の良心に反する方針であってもそれに従わせようと脅迫したり、聖句に反すると相手が心から信じている教えを信じていると言わせるために圧力をかけたりすることはどれも、一種の霊的なゆすり、霊的な脅迫です。人とキリスト・イエスとの間に宗教的権威を介在させて神の「経路」とすることは、人が本来持っている権利、つまり神と御子との親密で非常に個人的な関係という霊的な財産を搾取することなのです。

これらのことは、文字通りの窃盗や殺人、詐欺、ゆすりほど簡単に特定して暴露することはできないかもしれません。とはいえ、それらと同じくらい、場合によってはそれら以上に不道徳であり、神の御名を著しく辱める別の種類の無法なのです。

誤った方向に向けられてしまった熱意

エホバの証人の中には、建設的で健全な助け――生活に深刻な影響を及ぼす個人的な問題に対処するための力と理解力を養うことに寄与する助け――を必要としている人、その恩恵をおおいに受けるであろう人が何百、何千といます。後の章で述べるように、その国際的な組織内に見られるとされる「霊的なパラダイス」が自慢されることは多いですが、ほとんどの会衆を調査すれば、一般の人々に影響を及ぼしている社会ストレスや問題から、社会集団としての証人が決して自由ではないことが明らかになるでしょう。ものみの塔のブルックリン本部にある膨大な書類にはその証拠が豊富にあり、その量は年を追うごとに増えています。

「悔い改めない悪行者」を排斥するという方針は、「清い組織を保つ」ことへの配慮の証としておおいに語られます。しかし、冒された肢体の一部を切断するだけでは、全身の健康の印にはなりませんし、もちろん治癒力の証しにもなりません。

証人のコミュニティーにも、個人的な心配りをし、懲罰措置を取らないで済むように改善策を差し伸べる、あるいは大多数の人が必要としている純粋にキリスト者

43　20年間証人であったが現在は子どもや孫との絆(きずな)を断たれているカナダのジョージ・ビーチは、あるやり取りの中で組織に対する見方を表明し、「わたしの家、わたしのお金を盗むのは構わないが、わたしの思考、わたしの妻、わたしの子どもを盗まないでくれ」と言いました。

らしい励ましや慰めを与えようとする長老が必ずいます。そのための時間を取ることができると感じ、そのような助けを与える能力を霊的にも聖書的にも備えている長老がいます。本当に残念なのは、そのような長老が非常に稀であるという事実です。システムそのもの、そのシステムに対する見方、その結果として生じる精神が、そのような人を好まないだけなのです。長老を選ぶ際の基準では前述の望ましい特質が考慮されることはほとんどなく、候補者が組織のプログラムにどれほど「積極的」であるか――他者に親切な助けを与えているかではなく――が大きな焦点となります。その結果ほとんどの長老は、組織の路線に従うことだけに関心を持ち、その路線に従うよう羊に多大の働きかけをしますが、助けはその場しのぎで、慰めやさわやかさを与えることはほとんどない、単なる“組織人間”になっています。宗教システムによってその役割が霊的な羊飼いから霊的なタスクメーカー《仕事を作る人》に変換されてしまいました。キリスト者の救いは何らかの仕事によって成り立つものではないこと、キリスト者の行いは外からの圧力にではなく信仰と愛に動機付けられて自発的にするものでなければならないこと、キリスト者は律法の下にいるのではなく神の恵みの下にいることなどの聖書の真理に気づかない、この認識不足こそが問題の根底にあるのです。

わたしはこれらの人の多くが誠実であることを疑っているわけではありません。実際、良心の呵責に駆られて長老を辞任する証人の数は増え続けています。その証拠に組織は慈愛深い男子を多く失いつつあり、その長期的な影響は健全なものとはならないでしょう。多くの会衆では、比較的若い男子が長老になることが増えており、その状況は聖書時代にレハベアム王が中庸を求める懸命な助言を年長者から受けた時に、厳しくて権威主義的な姿勢を好む若い男子の助言に従うほうを好んだ状況に往々にして似ています[44]。

同様に、会衆のメンバーの多くが組織の規範に従うがゆえに友人や家族との絆さえも容赦なく断ち切り、友人や家族の「罪」がただ良心上ある教えや実践を聖書的に受け入れることができないというだけであることを知っていたとしても、深い心痛のうちにそうするのだとわたしは確信しています。ここでも、自分もそうすることが本当に神の御子の態度に倣ったものなのかどうかを自問自答するようになる人たちがいます。

1985年、「ヒッピー」の生活から抜け出して証人になったメイン州のある夫婦は、組織の見かけの暖かさとオープンさに惹かれたと書いています。二人は頻繁に「補助開拓」をし、あらゆる点で「全力」を尽くしました。そのため二人の手紙にあるように、「やがて自分たちの家がモーテル以外の何ものでもなく、集会からの長い帰り道に駆け込む場所、子どもたちを学校に急いで送り届けた足で奉仕に出かける前に慌ただしく食事をする場所に過ぎないことに気づきました。」しかし、そのようなことは何一つ気になりませんでした。気になったのは違った種類の経験で

44　列王第一12:3-16。

した。妻はこう書いています。

> 一つ目は奉仕中の出来事でした。わたしとある姉妹は危篤状態の証人を病院に見舞いました。たまたまそこに身なりの良い若い男性も見舞いに来ていたので、彼と話をしました。そして、彼が兄弟の息子で、元証人であることが分かりました。短い（言うまでもありませんが）会話の中で、彼はただ答えてほしい質問があっただけで、答えを得ようとして何度か話し合いをした結果、排斥されたのだと言いました。（これは1981年のことです。）
>
> 今振り返って驚くのは、わたしとその姉妹が本当に気にかけていたのは彼との会話を即座にやめることでした。そうすべきだと思ったのです。死期が迫った父親のことを彼がどう感じていたかなんて考えもしませんでした。

夫のキムは、第二次世界大戦中に強制収容所に入れられたポーランド人の証人とのある経験から、自分の考えを見直す必要に迫られました。彼女はある集会の後、話ができないかと彼に尋ねました。手紙にはこう書かれています。

> わたしたちが話し始めてすぐに彼女は泣き出しました。排斥された息子と毎朝一緒に通勤していましたが、「新しい理解」［1981年に排斥者に対する協会の方針がより厳しくなったこと］のために息子との関係で非常に惨めな思いをしていたのです。もう一人の息子はわたしたちの会衆の長老で強硬な態度を取っており、さらにもう一人の息子はがんで死にかけていました。排斥された息子を拒絶することは彼女には耐えられないことでした。
>
> キリストが教えてくださった愛というものを本当に教えている組織なら、あのようなことは決して起こらなかっただろうと夫［キム］はのちに述べました。そこには思いやりのかけらもなかったからです。

聴聞会によって排斥の評決が下されると、組織の方針は断罪された者の比喩的な「石打ち」に加わるように事実上すべての証人に――秘密の聴聞会で何が語られたかを知らないとしても――求め、その者は排斥された「状態」にある限り死んだ者として扱われます。天の裁判官とその御子を心から敬う人であれば、その裁きの座の前にわたしたちは一人残らず立たなければならないのですから、自分の「石」を投げるように求められた時に自らの責任を真剣に考えるだろうとわたしは思います。断罪されたその人が本当に「邪悪な」人かどうかについて少しでも疑問に思う場合は尚更です。

わたし自身そのような「石打ち」を経験したことがあるので、多くの人の気持ちは理解できると思います。とはいえ、優れた裁判官であられる神とキリストへのわたしたち自身の敬意、そしてわたしたち自身の思いやりと謙遜が、いかなる憤りも和らげてくれるとわたしは信じます。それは神の御子およびその弟子ステファノの言葉を取って、彼らと一緒に「父よ、彼らをお許しください。自分たちが何をしているのか知らないのですから」と言うことを意味するかもしれません[45]。神のみ前において会衆の長老やメンバーに行動の責任がないというわけではありません。彼ら

45　ルカ23:34; 使徒3:14-17; 7:60。

に責任はあり、その責任は組織やその指導部に引き受けさせることはできません。しかし、彼らに影響を及ぼしているその盲目の度合いはわたしたちには分からないことであり、心を読むことのおできになる天の父だけが判断できることです。わたし個人はそのような見方をしたいと願っており、その結果、人生がより幸せなものとなっています。

第14章

御名のための民

天におられるわたしたちの父よ、あなたのお名前が神聖なものとされますように。—マタイ6:9

真のキリスト者なら誰しも、天地の神の御名を敬い、讃え、知らせます。そうするように教え諭す聖句はキリスト教以前にも以後にも数多くあります。

エホバの証人は、万人の中で自分たちだけが神の御名を知らせていると心から信じています。その理由は、「エホバ」という名を出版物中でも会話の中でもかなり頻繁に使うからです。その名は、「テトラグラマトン」（「四つの文字」の意）と呼ばれるヘブライ文字「YHWH」に由来します[1]。テトラグラマトンは、旧約聖書（創世記からマラキ書まで）に7,000回近く出てきます。したがって、キリスト教以前の時代にテトラグラマトンが顕著であったことに疑問の余地はありません。また、今日よく知られている宗教グループの中で、エホバの証人ほどエホバという特定の名を高い頻度で一貫して使っているグループはありません。これによって彼らは「神の御名を負う民」となるのでしょうか。また、現代において地上に「神の御名を復元した」功績で評価されるべきなのでしょうか。

「エホバの証人」という名の由来

ものみの塔協会が設立されて最初の半世紀、そのメンバーは特定の教派名を持ちませんでした。彼らいわく、ただの「聖書研究者」でした。第4章で見たように、『ものみの塔』誌と、同誌に関連した協会の創始者チャールズ・テイズ・ラッセルは、自分たちを識別するためのいかなる呼称も分派主義の一形態と見なし、その採用に反対しました[2]。このことを論じた『ものみの塔』1882年4月号（7, 8頁）［英語］は、ジョン・バニヤンの有名な『天路歴程（てんろれきてい）』にある次の言葉を好意的に引用しています。

1　学者は「エホバ」がテトラグラマトンの正確な表記でないことを認めており、その多くは「ヤハウェ」がヘブライ語の正しい発音に最も近いと考えています。ものみの塔の『新世界訳』はその初版の「前書き」の中でこう述べています。「『ヤハウェ』という発音のほうが正しいと見なしつつも、わたしたちは『エホバ』という形を保持しました。14世紀以来、人々がその形に親しんできたためです」。『クリスチャン・ギリシャ語聖書 新世界訳』25頁［英語］をどうぞご覧になってください。

2　第4章71-73, 75頁［英語］。

> わたしがどのような名によって他と区別されるかをあなたがたは知っているだろうから、わたしは言う。わたしはキリスト者（クリスチャン）であり、そうありたいと願っている。もし神がわたしにふさわしいと見なしてくださるのなら、わたしはキリスト者、信者、または聖霊によって認められた他のそのような名で呼ばれることを選ぶ。アナバプテスト、長老派、独立派など、それに類する党派的（分派的）な呼び名については、それらがアンティオキアからもエルサレムからも来たものではなく、地獄とバビロンから来たものであると結論する。それらは分裂の傾向にあり、その実によって見分けることができる。

こうして、特化した名称の使用に頼ることは分派主義の兆候であるとして非難されました。この姿勢は1883年3月号（6頁）［英語］に掲載された別の質問に対する回答でも繰り返されました。目に見える組織を発展させるという考えを拒否するとともに、その回答にはこうあります。

> わたしたちは、わたしたちの頭であられる方の御名――キリスト者、クリスチャン――以外の名で呼ばれることを常に拒否し、御言葉を通して知らされている御霊と模範に導かれ続ける人々の間で分裂はあり得ないことを主張し続けます[3]。

ラッセルの後継者としてものみの塔の会長職に就いたジョセフ・F・ラザフォードが、組織のメンバーシップに「エホバの証人」という名称を選んだのは1931年のことでした。ラザフォードは、選択された名称が「主なる神が御口をもって命名された名称」であり、「わたしたちは『エホバの証人』という名称で知られ、また呼ばれることを欲する」と述べています。その名称を採用した根拠として、イザヤ43:10-12; 62:2および啓示12:17が引用されました[4]。

しかし、これらの箇所を読んでも、そこで語られた言葉が2,600年も後になってキリスト者の固有名となるように神が意図しておられたことを明らかにするものではありません。イザヤ43:10-12は、組織が自ら選択した名称を正当化するために用いる主要な聖句です。しかし、この聖句は比喩的な法廷の場面を見せているに過ぎず、そこでは国々が一堂に集められて、その前でイスラエル人が自分たちのために行使された神の救いの力を証しするようにと神に呼びかけられています。神がイスラエル国民に関連してお知らせになったすべての事柄の中で、なぜこの言葉が今日のキリスト者に冠せられた「主なる神が御口をもって命名された名称」とならなければならないのでしょうか。

使徒11:26には、「弟子たちは初めてアンティオキアでキリスト者と呼ばれるようになった」とあります。使徒26:28およびペテロ第一4:16に示されているように、彼らはその名で知られており、彼ら自身もその名を使っていました。『新世界訳』は使徒11:26を、「弟子たちが神慮によってクリスチャンと呼ばれたのは、アンティオキアが最初であった」と訳してさえいます。このような訳が正しいかどうかは別と

3　第4章73頁にある写しをどうぞご覧ください。

4　『神の目的とエホバの証人』125, 126頁［英語］をどうぞご覧ください。

して、疑問に残るのは、いかなる人やグループであれ、一世紀のキリスト者が使っていた以外の名を採用する権利がはたしてあるのだろうかということです。そのようなことをする神の許しや指示がどこにあるのでしょうか。神の御子が地上で弟子たちに語られた最後の言葉の中に、次のような命令があります。

> あなた方は……エルサレムでも、ユダヤとサマリアの全土でも、また地の最も遠い所にまで、わたしの証人となるでしょう[5]。

では、神の御子の足跡に従う者であると主張する人が、キリストの証しにもならない名称を選ぶのはどういう権利によるのでしょうか。キリストがメシアとして現れる700年ほど前、律法契約の下でユダヤ人に語られた言葉にまで遡る名を選択することを、彼らはどのように正当化するのでしょうか[6]。

これを正当化する主な手段として1931年以降に使われてきたのが、「キリスト者」ないし「クリスチャン」という呼び名にはもはや他と異ならせる特徴が何もないというものです。この呼び名は世界中の何億もの人々――何百もの異なる教派や分派に分かれている――によって使われています。しかし、別の名を採用することで何が証明され、達成されるのでしょうか。それらの幾百もの教派のパターンにただ従っているだけです。それぞれの教派が同じこと、すなわち他と異なる名称を採用してきたのです。たとえば、ローマカトリック教会、正教会、マロン典礼カトリック教会、ルーテル教会、メソジスト教会、バプテスト教会、基督教団、ホーリネス教会、メノナイト派、フレンド派といった具合にです。

「キリスト者」を名乗った人がすべて本当にキリスト者であったわけではないことは明らかです。キリスト・イエスは「麦と毒麦」の例え話の中で、背教について警告なさいました。「キリスト者」として知られていた使徒パウロはその著書の中で、その警告を繰り返しました[7]。使徒ヨハネは啓示の書の中で、当時の幾つかの会衆にすでに見られた不純物の混じった汚れた状態を暴きました[8]。偽のキリスト者が出現すること、しかも多く出現することは明白に分かっていました。しかし、キリストも、パウロも、ヨハネも、聖書筆者の誰一人として、名を変えることで状況が何かしら改善されるとは示していません。何か別の名、いわば新しいラベルを採用することによってではなく、真のキリスト教を体現する<u>生き方</u>によって、また神の御子とその使徒や弟子の教えに見い出される<u>真理を堅持する</u>ことによって、唯一意

5　使徒1:8。

6　しばらく前に『ものみの塔』誌はその記事の中で、「エホバのクリスチャン証人」という表現を使うことによって、この名称に修正を加えることがありました。（1971年に出版された『諸国民はわたしがエホバであることを知るであろう』［英語］もどうぞご覧ください。51-54, 76, 82頁などでこの表現が頻繁に使われています。）その後、元証人のグループがすでにこの名称を採用し、法的に登録していることが判明しました。それ以来、『ものみの塔』はこの表現を一般に使用しなくなりました。例外は、『ものみの塔』1980年11月15日号24頁にあります。

7　マタイ13:24-30; 使徒20:29, 30; テモテ第二4:3, 4。

8　啓示2章および3章。

味のある見分け方ができるのです[9]。神の御使いが例え話の最後の場面を実行に移すべく毒麦から麦を分けて収穫する時、教派名というラベルはきっと何の役にも立たないでしょう。

御名の“復元”──誰によって？

ものみの塔の出版物を読むと、「エホバ」という名はそれらの出版物に出てくる以前はほとんど知られておらず、それらの出版物によって世間に知られるようになったと思うかもしれません。しかし、ものみの塔の創設から四十年間に刊行された物を調べてみると、「エホバ」という名が出てくる頻度が、その時代の他の多くの宗教刊行物を上回っていないことが分かります。一例を挙げると、『ものみの塔』1919年4月15日号［英語］には、「エホバ」という名が雑誌全体の中で一度しか出てきません。今日では考えられないことです。しかも、イエス・キリストは1919年までに、すべての宗教の中から、ご自分の唯一の伝達経路としてものみの塔協会を中心とする組織を承認なさり、選ばれたことになっています。もしそうだとすれば、明らかにその選択は「エホバ」という名が特別に強調されていることを前提としたものではなかったと言わざるを得ません。

事実はと言うと、ものみの塔協会が現れる何世紀も前から、さまざまなキリスト教信仰の宗教作家がその著作の中で「エホバ」という名をかなりの頻度で使っていました。ものみの塔本部の執筆部門の図書には二世紀以上前に遡る多数の聖書注釈書やその他の著書があり、このことをはっきりと示しています。その名は、古い歴史を持つプロテスタント教派の讃美歌集にも見ることができますし、18世紀の比較的よく知られた讃美歌の一つに、「わたしをお導きください、おお　偉大なるエホバよ」というものがあります。『ものみの塔』誌も、テトラグラマトンが過去何世紀にもわたって世界の多くの国々で宗教建造物や碑文に使われてきたことを示す資料を出版してきました[10]。遡ること1602年、シプリアーノ・デ・バレラによるスペイン語訳聖書は、テトラグラマトンを何千回も *Jehová*（エホバ）と表記しています。十九世紀になると、キリスト教の宣教師によってさまざまな言語に翻訳された聖書は、テトラグラマトンの表記に「エホバ」という名を何らかの形ですでに用い

9　マタイ5:16, 44, 45; ヨハネ13:35; 17:17-19; ローマ6:4, 8-10; ガラテア2:20; ヨハネ第一2:5, 6; ヨハネ第二6。「エホバのクリスチャン証人」として正式に知られる既述のグループに加えて、それ以前に起こったかなりの数の「神聖な御名」運動があり、その中でも「ヤハウェの集会」と呼ばれるものが顕著です。これらはいずれも起源やその他において、ものみの塔組織とのつながりを示すものは何もありません。これらの運動は、テトラグラマトンに由来する名をエホバの証人に匹敵する頻度で使用しており、『聖なる御名聖書』など、その聖書翻訳においては新約部分でその名をさらに多用しています。この情報は、本章で後述するルド・パーションの論文に基づいています。

10　その例として、『ものみの塔』1988年7月1日号14頁; 1988年4月1日号31頁; 『目ざめよ！』1988年4月22日号19頁; 『ものみの塔』1987年5月15日号23頁; 『神のみ名は永久に存続する』の冊子10, 11頁をどうぞご覧ください。

ています[11]。その名を使用しない傾向は、十九世紀後半に聖書全体への批判的な態度を広めた宗教思想のとある学派の発展と時期をかなり同じくしているようです。

特筆すべきは、1901年にキリスト教界の学者たちによって作られた『アメリカ標準訳』が、ユダヤ教聖典（旧約聖書）の翻訳に際し、最も人気のある『ジェームズ王訳』または『欽定訳』も含め、それまでのほとんどの英語版聖書で行われてきた、テトラグラマトンを「主」または「神」に置き換える慣習を是正したことです。『欽定訳』がテトラグラマトンを「エホバ」と表記したのはユダヤ教聖典中わずか四回だけであったのに対し、『アメリカ標準訳』では7,000箇所近くでその名を復元しました。ヘブライ語の「YHWH」を「エホバ」と表記するのが不正確であることは認められてはいても、テトラグラマトンを表すのに「神」や「主」が使用されていた他の英語聖書に比べればこれは改善でした[12]。

ですから、ものみの塔協会が「エホバ」という名を「復元」したわけではないことに疑問の余地はありません。というのも、協会が登場したころには、その名を「復元」する必要はなかったからです。その名はすでに確立されており、協会が現れるずっと以前から多くの聖書翻訳や宗教文書に出ていました。とはいえ、今日、エホバの証人ほど「エホバ」という名を頻繁に使う宗教グループは大小を問わず他にないのも事実です。その名は彼らの文書のいたるところで使われています。エホバの証人の間で「神」について語られる時、その語の前に「エホバ」を付けて「エホバ神」としないのは奇妙なことになっているいっぽう、「主」という用語で表現することは非常に稀(まれ)です。聖書に「主」とあっても、それがとっさに話の中で使われることはほとんどありません。大半の祈りでは、「エホバ」または「エホバ神」への語りかけで始まるのがほとんど典礼となっており、「父よ」とか「われらの父よ」とかいう表現はそれに続く付加的な呼びかけとして時折使われるだけです。祈りの中で「組織」や「統治体」についての言及は非常によくありますが、キリスト・イエスの御名は「イエスの御名によってお祈りします、アーメン」という最後の結びまで言及されないことがしばしばです。

そこで次のような問いが生じます。このように「エホバ」という名を繰り返し使うことで、神の御名を尊び、知らせるようにとの聖書の数多くの諭しは本当に満たされるのでしょうか。このように「エホバ」という名が強調されるのは、そのよう

11　『クリスチャン・ギリシャ語聖書　新世界訳』の「前書き」24, 25頁［英語］をどうぞご覧ください。

12　「エホバ」という名が何千回も表記された『アメリカ標準訳』は1901年以降入手可能となりましたが、『ものみの塔』誌はそれを基本翻訳として採用せず、テトラグラマトンの代わりに「主」や「神」を使用した『ジェームズ王訳』または『欽定訳』を主として使い続けました。1916年のラッセルの死後も、ラザフォードが会長職にあった間も、これは変わりませんでした。ラザフォードの死後、1944年にものみの塔協会は、自分たちの印刷機で『アメリカ標準訳』の版を印刷する権利を得ました。しかし、この翻訳や他の多くの翻訳から頻繁に引用しながらも、『欽定訳』を基本翻訳としてすべての出版物で使い続け、1950年に自分たちの『新世界訳』聖書を出版するまでそれは続きました。（『神の目的とエホバの証人』215, 255頁［英語］をどうぞご覧ください。）

な聖句の多くで「名」という語が実際に意味するところを明確に理解しているからなのでしょうか。

重要な要素

テトラグラマトンに表される名がユダヤ教聖典ないし旧約聖書において非常に顕著であったことは明らかであるため、先の問いはキリスト教聖典におけるその使用と顕著さ、テトラグラマトンに表される名に対するキリスト者の態度に帰着します。その答えに到達するための第一の、そして最も決定的な要素は、神ご自身の御子、その使徒や他の初期の弟子が、テトラグラマトンに表されるその名をどの程度際立たせていたかという証拠であると思われます。どんな証拠があるでしょうか。

キリスト教聖典または新約聖書の筆者はユダヤ人でしたが、それらの書を、当時最も影響力があり、最も広く使われていたギリシャ語で書きました。原本は残っていませんが、紀元四世紀に遡るキリスト教聖典の全巻の古代写本は現存します。キリスト教聖典の一部の写本はもっと前に遡ります。しかし、これらの古代写本にテトラグラマトンに表される名が出てくるのは、啓示の書の中の短縮形のみです。啓示19章1, 3, 4, 6節には、「ヤー［または、ジャー］を賛美せよ」という意味のギリシャ語表現「アレルヤ《*Allelouia*》」、または世間一般に言う「ハレルヤ」を見いだせます。この表現の「ジャー」は単に「エホバ」の短縮形です。驚くのは、この省略形が啓示に四回出てくるほかは、この名がこれらの古代写本に収められているキリスト教聖典のどこにも見当たらないことです。キリスト教聖典のギリシャ語写本は現存するもので5,000以上あると推定されているので、これらの何千もの写本の中にテトラグラマトンが含まれているものが一つもないという事実は、より一層印象的です[13]。同じことが、キリスト教聖典のシリア語訳、アルメニア語訳、サヒード語訳、古ラテン語訳など、他の言語への最古の翻訳にも当てはまります[14]。

このような理由から、新約聖書の大半の翻訳で「エホバ」という名は、啓示の書の中で省略されて出てくる以外には出てきません。対照的に、ものみの塔協会の『新世界訳』に目を向けると、「エホバ」という名がマタイから啓示まで237回も出てきます。しかし、『新世界訳』が「エホバ」という名をキリスト教聖典のどこかに入れる時、それはキリスト教聖典の古代写本から何の裏付けも得ずにそうしているというのが事実です。ものみの塔の翻訳で「エホバ」が出てくる227箇所で、その翻訳の拠り所とされているギリシャ語本文は「主」（キュリオス《*kyrios*》）としており、残りの10箇所で「神」（テオス《*theos*》）という語を含めています。このことは、ものみの塔の『王国行間逐語訳』［英語］を手に取って、欄外の訳文と、原文を一語一語翻訳した行間訳を比較するだけで、読者の誰しも分かるこ

13　『聖書に対する洞察』第2巻8頁をどうぞご覧ください。
14　この情報および本章で述べられている幾つもの点は、スウェーデンの研究者ルド・パーションから提供されたものであり、彼の許可を得ています。

とです。では、『新世界訳』はどのような根拠に基づいてこの名を挿入しているのでしょうか。

基本的にものみの塔協会の論議は、キリスト教聖典の筆者――マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ペテロ、ヤコブ、ユダ――がテトラグラマトンを原本で使用していたというものです。明らかにこれは証明できません。これらの原本は現存していません。現存する5,000ほどの写本にもテトラグラマトンは含まれていません。それでも、ものみの塔の主張は、その名が後世の写本から削除されたに違いなく、それがなされたのはテトラグラマトン（YHWH）を「主」（キュリオス）または「神」（テオス）という語に置き換えるという以前からの慣習に従うためであったというものです。明らかにその慣習はキリストの出現に先立つ数世紀の間に発展しました。それはテトラグラマトンに表される名を重要視していなかったからではありません。それどころか、その名はあまりに神聖で、声に出して発音することはできないと考えたからであり、それを発音することは神殿の祭司職、特にアロンの家系の大祭司に限られるようになったことを、ユダヤの伝統的な著作物は示しています[15]。

古文書からの証拠

紀元前三世紀、ユダヤ教聖典が初めてギリシャ語に翻訳されました。その翻訳は『七十人訳』ないし『セプトゥアギンタ訳』として知られています。ユダヤ教聖典から引用する際、キリスト教聖典の筆者がしばしばその『七十人訳』から引用していたことを示す明確な証拠があります。この点は、それらの聖書筆者がその著書の中でテトラグラマトンを実際に含めていたかどうかを判断するうえで非常に重要です。もし含めていたなら、あの四つのヘブライ文字で表される神の御名を彼らがどの程度際立たせていたかを知る少なくとも手がかりになるはずです。最初に浮かぶ問いは、彼らが使ったギリシャ語の『七十人訳』聖書の写本にテトラグラマトンがあったのかということです。

長い間、ユダヤ教聖典のその最初の翻訳にテトラグラマトンはそもそも出てこなかったと信じられてきました。翻訳者たちは、テトラグラマトンを「主」（キュリオス）または「神」（テオス）に置き換える慣習に従ったと考えられていました。当時知られていた『七十人訳』の多くの写本がその考えを裏付けていました。しかし現在では、『七十人訳』の翻訳者たちがそのような置換を行ったかどうかを疑問視するもっともな理由があります。パピルスに書かれ、エジプトで発見された『七十人訳』の一部の写本断片は紀元前一世紀のものです。それには申命記の後半部分が含まれており、ヘブライ文字で書かれたテトラグラマトンがいたるところに出て

15　一例として、『聖書に対する洞察』第1巻392頁をどうぞご覧ください。

きます[16]。キリスト教以前（あるいは紀元前）のものではありませんが、紀元後の最初の数世紀のものである『七十人訳』の他のギリシャ語写本にも同様の例が幾らかあります。ユダヤ教聖典の初期のギリシャ語翻訳にテトラグラマトンが出ていたことを示す証拠としては他にも、紀元三世紀のオリゲネスの著作や、紀元四世紀にラテン語の『ウルガタ訳』を翻訳したヒエロニムスの著作があり、ヒエロニムスは「古代文字で表現された四文字の神の御名は、今日に至るまで、あるギリシャ語翻訳の中に見ることができる」と述べています[17]。

このすべてはどのような意味を持つのでしょうか。ものみの塔協会は、キリストとその使徒の時代に読まれ、引用された『七十人訳』の写本には通例テトラグラマトンが含まれていたという結論に達しています。しかも、ものみの塔協会はさらに踏み込んでいます。前述の証拠に基づき、キリスト教聖典が書かれた時、その筆者はテトラグラマトンを含めており、「少なくとも紀元3世紀以降、テトラグラマトンという形の神の御名は、写字生によって本文から削除され」、キュリオス（主）またはテオス（神）に置き換えられたと主張しています[18]。

ものみの塔協会は、ジョージア大学の宗教学の准教授ジョージ・ハワードが『聖書文献ジャーナル』（1977年第96巻第1号）に発表した記述に、新約聖書またはキリスト教聖典に「エホバ」という名を入れることの強力な裏付けがあると考えました。『ものみの塔』1978年8月1日号9, 10頁には、この件に関してハワード教授の発言が広範囲に引用されており、特に次の発言が強調されています。

> 初期教会の聖書はギリシャ語聖書［『七十人訳』］の写本であるが、その中になおテトラグラマトンが書かれていた以上、新約聖書の筆者が聖書から引用するとき、聖書本文中にテトラグラマトンを保存したことは当然に考えられる。キリスト教時代以前のユダヤ人の習慣から類推すれば、新約聖書本文に引用された旧約聖書の聖句中にテトラグラマトンが取り入れられたことは想像に難くない。

前述の、キリスト教以前に書写された『七十人訳』（ユダヤ教聖典）の一部の古代写本にテトラグラマトンが出てくることは注目に値します。というのも、『七十

16　これはパピルス・ファド目録266号と呼ばれ、その一部はものみの塔協会の『王国行間逐語訳』の付録1135, 1136頁［英語］に掲載されています。

17　『王国行間逐語訳』10, 11, 1134-1136頁［英語］をどうぞご覧ください。また、『ものみの塔』1988年8月1日号30頁、『聖書に対する洞察』第2巻8頁もどうぞご覧ください。さらに、ものみの塔協会は、イエスと使徒の時代の『七十人訳』の写本にテトラグラマトンが含まれていたという見解の裏付けとして、アキラが翻訳したギリシャ語のユダヤ教聖典に訴えています。ロバート・カウンテス博士はその著書『エホバの証人　新世界訳』28, 29頁［英語］の中で、この訴えが根拠のないものであることを示しています。一つに、アキラの翻訳は紀元130年ごろのものであり、キリスト教聖典が書かれた数十年後のものであるということです。二つ目に、ギリシャ語写本に精通した学者たちが指摘するように、アキラの翻訳はヘブライ語本文に「字義的に捕らわれ」ており、「不条理なまでに本文の分かりやすさが損なわれ」、多くの部分で『七十人訳』とは大きく異なっています。アキラの翻訳は、『七十人訳』の原典やその写本に何が含まれていたかを示し得る例としては成り立ちにくいと言わねばなりません。

18　『クリスチャン・ギリシャ語聖書　新世界訳』11, 12, 18頁［英語］；『ギリシャ語聖書　王国行間逐語訳』（1985年）1137, 1138頁［英語］をどうぞご覧ください。

人訳』の他のすべての古代写本——最古の完全な（あるいは、完全に近い）写本を含む——にテトラグラマトンがどんな形であれ出てこないからです[19]。『七十人訳』のこれらの古代写本の断片が発見されたことで、紀元一世紀にパレスチナで使われていた『七十人訳』の写本にテトラグラマトンが度々に出ていた可能性が明らかになりました。とはいえ、それ自体がそうであったことを証明するものではありません。

さらに重要なことは、それによってキリスト教聖典の筆者自身が自らの著書にテトラグラマトンを含めていたことが証明されるわけでも、彼らの著書の初期の写本のどれか——三世紀以前のものなど——にテトラグラマトンが含まれていたことが証明されるわけでもないということです。この件について、ものみの塔出版物は非常に断定的で、ユダヤ教聖典から引用するに際して「それらクリスチャンの筆者は神のみ名エホバを用いたに違いない」と述べており、マタイについては、そのような引用をする際はその福音書の記述に「テトラグラマトンをそのまま含めざるを得なかっただろう」と述べています[20]。それとは対照的に、『ものみの塔』がその主張を裏付けるために頻繁に引用するハワード教授は、この件をせいぜい合理的な可能性あるいは蓋然性にとどめており、「新約聖書本文に引用された旧約聖書の聖句にテトラグラマトンが取り入れられたことは想像に難くない」と表現しています。『ものみの塔』誌は『聖書文献ジャーナル』のハワード教授の論文を引用する際、その論文が慎重で限定的な表現——「この説」、「すべての蓋然性において」、「その可能性がある」、「この説が正しければ」、「わたしたちが立てた説」、「と仮定するならば」などの表現——で満ちていることを読者に指摘していません。また、ハワード教授が語っているのは、キリスト教聖典の筆者がテトラグラマトン、つまり四つのヘブライ文字（יהוה）を取り入れたことについてであって、「ヤハウェ」または「エホバ」といったその翻訳についてではないことにも着目なさってください。仮にキリスト教聖典の原典に四つのヘブライ文字が含まれていたとし

19　これらの写本にはシナイ写本、バチカン写本1209、アレクサンドリア写本があり、いずれも紀元4世紀から5世紀のものです。

20　『聖書に対する洞察』第1巻811頁；『新世界訳』（1984年版の参照資料付き）1756頁をどうぞご覧ください。組織はここでも矛盾しています。『ものみの塔』1988年2月1日号（5頁）の「聖書は矛盾したことを述べていますか」と題する記事の中で、キリスト教聖典の筆者についてこう述べています。「昔の書物からの引用句は、新しい筆者の必要と目的に応じてわずかながら変えられ、元の言葉とは異なっていたにしても、基本的な意味や考えは保たれていました。……削除も同様に、筆者の見地や、筆者が記述を短縮するかどうかによりました」。このように、ものみの塔協会は一方では、キリスト教聖典の筆者が引用を行う際に、使用されたユダヤ教聖典の写しの中にテトラグラマトンがあれば、それを「そのまま含めざるを得なかっただろう」と言い、他方では、その同じ筆者が「基本的な意味や考え」を保持しながらも、元の記述を適切に「わずかながら変えて」、望ましいと考えられる場合には省略することもあり得たとしています。

ても、その四文字を目にした読者が「主」や「神」を用いるのでなく、「ヤハウェ」とかそれに類する形で発音したという証拠にはなりません[21]。

はるかに重みのある証拠

旧約聖書またはユダヤ教聖典のギリシャ語の『七十人訳』に関する前述の本文上の証拠にどれほどの重きを置くべきと感じるかは別として、明らかにもっと重要な意味を持つ本文上の証拠があります。それはテトラグラマトンの使用に関してキリスト教聖典の筆者自身が実際に行っていたことをはるかに強力に示しているからです。結局のところ最も重要な問いは、彼ら、つまり新約聖書の筆者は、ユダヤ教聖典から引用する時であろうと、その他のいかなる時であろうと、テトラグラマトンを使用していたのかということなのです。

　発見された二つの最古の使徒書簡の写本のうちの一つは、パピルスの冊子形式の本（コデックス）（チェスター・ビーティ・パピルス第2号［P46］に指定）です。この冊子には、使徒パウロの手紙のうちの九通が断片的に収められています。ローマ人への手紙、ヘブライ人への手紙、コリント人への第一の手紙、コリント人への第二の手紙、エフェソス人への手紙、ガラテア人への手紙、フィリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への第一の手紙です[22]。この写本の年代は、長いこと紀元200年ごろと推定されていました[23]。しかし、今ではそれがもっと古いものであることを示す証拠が幾つかあります。1988年、写本の専門家であるY.K.キム博士は学術誌『ビブリカ』69巻2号において、この写本を一世紀後半、おそらくは皇帝ドミティアヌスの治世以前、つまり紀元81年以前のものとする重大な証拠を提示し

21　スウェーデンの研究者ルド・パーションが指摘しているように、ギリシャ語の『七十人訳』聖書の幾つかの写本にヘブライ語のテトラグラマトンが出てくることの重要性を見定めるに際しては次のことも考慮しなければなりません。このような写本を生み出した写字生はギリシャ語本文を書き写しました。ただし、そのギリシャ語本文中のテトラグラマトンは**ヘブライ**文字のまま写し取りました。それを「ヤハウェ」や「エホバ」に対応するギリシャ語表現に翻訳したり、それをギリシャ文字に翻字したりもしませんでした。それをヘブライ文字（יהוה）のままにしておいたのです。それで、読者がヘブライ語を知っている場合にのみ、何かしら発音を試みることができました。そうでなければ、それらのヘブライ文字を自国語の文字に変換する方法が分からなかったでしょう。ヒエロニムスも、当時のある人々がこれらの四文字（יהוה）を目にしてギリシャ語文字にして読もうとしたため、「ピイピイ」（ギリシャ語でπιπι）と発音したと述べています。したがって、英語やその他の現代語への翻訳に関して言えば、それらの数少ない『七十人訳』の写本は、キリスト教聖典の筆者がユダヤ教聖典から引用するに際しテトラグラマトンをヘブライ文字で入れたという根拠、しかも脆弱（ぜいじゃく）な根拠にしかならないでしょう。まして、それらの四文字の何らかの翻訳（「エホバ」や「ヤハウェ」など）を入れる根拠とはなりません。

22　パウロがヘブライ人への手紙を書いたかどうかは学者の間で疑問視されてきました。それがここに含まれていることは、パウロがその筆者であることを支持するものと思われます。

23　『聖書に対する洞察』第2巻8頁をどうぞご覧ください。

ました。もしそれが正しければ、彼の言う証拠によりパピルス・コレクションは少なくともパウロの書簡が書かれた時から数十年以内のものと考えられます[24]。

たとえ、このパピルス・コレクションの年代を二世紀の終わりごろとする、より一般的な見方を保持するとしても、このこともわたしたちがここで考察する問いに関して重要な意味を持っています。ものみの塔協会の主張は、使徒書簡の原典にはテトラグラマトンが何百回も含まれており、それらの書簡から“背教したキリスト者”がテトラグラマトンを削除したのはそれから数世紀たってからのことであるというものです。もしそうだとすれば、また、もしそれらの使徒書簡の原典にテトラグラマトンが多く用いられていたとすれば、キリスト教聖典が書かれた直後の世紀の写本にテトラグラマトンが少なくとも幾らかは残っていたはずだと考えるのが妥当ではないでしょうか。もしパウロの書簡――その中には紀元60年か61年に書かれたものもある――にテトラグラマトンが元々あったのであれば、それに続く写本からテトラグラマトンがすぐに排除されたとは考えにくいように思います。ものみの塔組織は、使徒ヨハネが一世紀の終わりまで生きていたという多くの人の見解を受け入れています。もしテトラグラマトンの使用が重要なことであったなら、ヨハネの影響はヨハネの存命中だけでなくその後もしらばらくの間は、使徒書簡（パウロの書簡を含む）を書写したクリスチャンの写字生に有利に働いたはずです。先に触れた古代のパピルス・コレクションの中にテトラグラマトンが幾らかでも出てくることを期待するのは確かに妥当です。では、どうでしょうか。

明白な事実は、キリスト教聖典のこの最古の冊子に収められている九通の使徒書簡には、どのような形であれテトラグラマトンがただの一度も使われていないということです。この九通の使徒書簡の中で筆者は、『七十人訳』の表現に従ってユダヤ教聖典から数多くの引用をしていますが、その引用にテトラグラマトンが含まれていることは一度もありません。テトラグラマトンをギリシャ語のキュリオス（主）やテオス（神）に置き換える慣習に従って引用しています。ものみの塔協会は、最古の『七十人訳』の写本（実際には断片的な写本）の幾つかにテトラグラマトンが出てくることは、元からそれがそこにあったことの証拠であると主張しています。もしその原理が成り立つなら、同じ原理がここでも当然成り立つはずです。つまり、パウロの手紙の最も古いこの九通の写本にテトラグラマトンが出てこないことは、それが原典にも出てこなかったことの証拠というわけです。

実際、もしパウロの手紙――その何通かは遅くとも紀元60年か61年に書かれた――にテトラグラマトンが元々あったのであれば、原文の執筆時からこんなに早くに、しかもヨハネを始めとする他の使徒がまだ存命中に消去されたとはどうも考えられません。これに加えて、啓示の書とそこに出てくる省略形の「ヤー」または「ジャー」を例外として、どのキリスト教聖典のどの古代写本にも――パウロが書

24　キム博士が採用した古文書学的な証拠は、古代写本を年代測定するための最も信頼できる手段と考えられていることに留意すべきです。（『目ざめよ！』1972年9月8日号8頁もどうぞご覧ください。）すべての学者がキム博士の年代測定を受け入れているわけではありませんが、多くの適格な学者が彼の研究の堅実性を認めています。

いたものであれ他のキリスト者が書いたものであれ――テトラグラマトンの形さえもないという事実があります。

　したがって、使徒や一世紀のキリスト者がユダヤ教聖典から引用する際にその著作の中にテトラグラマトンを含めたというものみの塔協会の主張はセオリーのみに基づいており、圧倒的に優勢な歴史的証拠に反する思弁的な理論なのです[25]。

さまざまなヘブライ語翻訳を通じての正当化の試み

ものみの塔がキリスト教聖典の本文に「エホバ」という名を挿入している箇所は、ユダヤ教聖典のテトラグラマトンが出てくる部分からキリスト教聖典の筆者が引用している箇所にあらかた対応してはいます。しかし、これは『新世界訳』が237箇所にわたってこの名を挿入していることのすべてを説明するものでは決してありません。多くの場合、引用が一切ない箇所で挿入が行われているのです。このことはどのように正当化されるのでしょうか。

　「エホバ」という名のこれら（そして他の）挿入――どの古代写本にも裏付けがない挿入――にいくらかでも信頼性を持たせようとして、ものみの塔協会はキリスト教聖典の数多くのヘブライ語翻訳、それもテトラグラマトンが頻繁に使われている翻訳に言及することにより裏付けを主張するに至りました。しかし、これらのヘブライ語翻訳はすべて十四世紀以降に作られたもので、十九世紀という最近のものまであるというのが事実です[26]。ヘブライ語だと信頼できる裏付けのように見えるかもしれませんが、それは単なる見かけで、それ以上のものではありません。翻訳元のギリシャ語写本に「主」や「神」が含まれているところにテトラグラマトンを挿入することで、さまざまな翻訳者が個人の選択を表明したに過ぎません[27]。実際、これらのヘブライ語翻訳は、アラビア語、ドイツ語、ポルトガル語など同時代に作られた他の言語への翻訳以上に重みがあるということはありません。それらは証拠ではなく、単なる意見、それも特定の翻訳者の意見に過ぎません。キリストやその弟子がテトラグラマトンを使っていたか、そうであればどの程度際立たせていたかについて、それらは何の証明にもなりません。これだけでなく、キリスト教聖典の最古の**写本**とそこに見られる言葉遣いを“飛び越えて”、千年も新しいヘブライ語**翻訳**に裏付けを取ることで、『新世界訳』は翻訳の基本原則に背いています。すなわち、最古の写本は、より原本に近いという理由で最も重視されるべきであるという原則です。『ものみの塔』1982年6月15日号23頁も、「霊感を受けた筆者が自ら著わした原本は今日1冊も存在していませんが、聖書写本の年代が古ければ古いほ

25　ものみの塔の出版物はその主張を裏付けるためにハワード教授を頻繁に引き合いに出してきましたが、ルド・パーションに宛てた手紙の中でハワード教授は、「エホバの証人はわたしの記事を使い過ぎだ。わたしは彼らのセオリーを支持していない」と述べています。付録にあるルド・パーション宛ての手紙のコピーをどうぞご覧ください。

26　『ギリシャ語聖書　王国行間逐語訳』（1985年）13, 14頁［英語］をどうぞご覧ください。

27　1969年版の『王国行間逐語訳』28-30頁［英語］の一覧をどうぞご覧ください。

ど、その原本に近いものになると考えられます」と述べています。とはいえ、この件に関しては、ものみの塔組織は5,000以上ある古代のギリシャ語写本からの証拠——そのどれにもテトラグラマトンは含まれていない——を無視して、原語の写本ではなく、翻訳者の個人的見解を最終的に反映した本質的にモダンな翻訳に導かれるという選択をしています[28]。

一貫性に欠ける主張

ものみの塔協会の立場は驚くほど一貫性に欠けています。一方では、キリスト教聖典の筆者がその著書にテトラグラマトンを何らかの形で元々含めていたと主張していますが、他方では、これらのキリスト教聖典が驚くほど正確に保全されてきたことを繰り返し認めています。協会が出版した『聖書に対する洞察』の第2巻6頁はクルト・アーラント教授の言葉を引用しています。

> 新約聖書の本文は古代の他のいかなる文書よりも良い状態で、また優れた方法で伝達されており、その本文に決定的な変更をもたらすような写本がこれから見つかる可能性は無に等しいと断定することができる。

『ものみの塔』も1977年7月15日号で、ギリシャ語本文の世界的な権威 F.J.A. ホートが、「［キリスト教教典の古代写本の中で］いかなる意味合いにおいても実質的な異文と呼ぶことのできるものの量は、本文全体の千分の一あるかないかである」と述べたことを引用して、こう続けています（439頁）。

> クリスチャン・ギリシャ語聖書のどの訳を手にしても、その基になっているギリシャ語本文が、霊感による聖書筆者の書いた事柄をかなり忠実に伝えていることを疑う理由はありません。最初書かれた時から、ほとんど2,000年を隔てているとはいえ、クリスチャン・ギリシャ語聖書のギリシャ語本文は正確に伝えられたという点で驚異と言えます。

聖書本文の純粋さと正確さを強調する数多くの記事は、このような保全が神聖な記録に対する写字生側の深い敬意とそれを忠実に伝えることへの強い配慮、また「聖書の聖なる著者」の影響によるものとしています。したがって『目ざめよ！』1985年12月22日号（28頁）は、神が霊感を与えて原典を書かせたので、「その聖なる著者がそのみ言葉を忠実に現代にまで伝える業を監督されたのは当然です」と述べています[29]。

28　『目ざめよ！』1972年9月8日号5-8頁、1971年6月8日号23頁もどうぞご覧ください。『ものみの塔』1991年3月1日号28頁は、キリスト教聖典にテトラグラマトンを挿入したことを正当化しようとして、脚注や注釈に御名が含まれている一部の**ドイツ語**翻訳に言及することまでしています。責任ある翻訳者であれば、このようなことが、古代写本の証拠そのものを無視あるいは覆して、それと異なる表記に裏付けを取る根拠になるとは考えないでしょう。

29　『聖書理解の助け』1110頁［英語］（または『聖書に対する洞察』第2巻10, 11頁）；『聖書全体は神の霊感を受けたもので、有益です』318, 319頁もどうぞご覧ください。

ここで問題なのは、組織がその主張において自らの立場を否定していることです。その主張とは、何か些細(ささい)な省略やバリエーションに関するものではなく、聖典のあらゆる特色の中で最も重要なものの一つと彼らが見ている、テトラグラマトンに表される名に関するものです。というのも、彼らは事実上こう言っているからです。キリスト教聖典のギリシャ語本文の保全のためにご自分の影響力を行使なさり、その本文が「正確に伝えられたという点で驚異」となるようになさった神が、同時に、「エホバ」という名の何らかの形がこれらのキリスト教聖典のおよそ5,000の古代写本のうちのただの一つにも保全されるように見届けることはなさらなかった、と。組織がテトラグラマトンを非常に重視していることが確かな根拠に基づいているとすれば、どうしてそうなるのでしょうか。

また、ヒエロニムスやオリゲネスをはじめ紀元四世紀に至るまでの人々を引き合いに出して、**ユダヤ教**聖典のギリシャ語『七十人訳』の写本にテトラグラマトンがまだ残っていたと言うことができるのに、それが**キリスト教**聖典ないし新約聖書の写本のどれかにあったという陳述が初期のキリスト教作家の誰からも引き出せないのはなぜなのでしょうか。キリスト教以前の旧約聖書のギリシャ語翻訳にテトラグラマトンがあったのであれば、論理的に考えて、キリスト教聖典のギリシャ語原典の写本か、少なくともその古代翻訳のいずれかにそれがあったはずではないでしょうか。もし原典にテトラグラマトンがあったのなら、確かに現代に至るまでその忠実な継承を保証なさっておられる神はそれが保全されるようになさったに違いありません。少なくとも、ものみの塔協会がそれを最も重要視するように神もご覧になっていたのであれば、それを保全なさったはずです。キリスト教聖典のどの古代本文にも、その最古の翻訳にさえもテトラグラマトンが保全されていないという事実は、そもそもそれがそこにあったのかという疑問に重くのしかかってくるのです。

現存する聖句そのものの証言

「エホバ」という名をキリスト教聖典または新約聖書に挿入したことを正当化するものみの塔協会の論議を受け入れる気になったとしても、それをユダヤ教聖典からの引用の場合に限ったとしても、重大な問いがまだ幾つか残っています。その中でも主立ったのが、独自の挿入をしているものみの塔の翻訳でさえも、使徒書簡のうち「エホバ」という名が完全に欠落している書簡があるという事実です。すなわち、フィリピ人への手紙、テモテへの第一の手紙、テトスへの手紙、フィレモンへの手紙、そしてヨハネによる三通の手紙です。エホバの証人であれば誰でも、組織の著名人が「エホバ」という名を頻繁に用いないで霊的な事柄を書くのはまったく考えられないことを認めないわけにはいかないでしょう。パウロのフィリピ人への手紙、テモテへの最初の牧会書簡、テトスへの同様の書簡くらいの長さと内容の手紙を書いて、あるいは使徒ヨハネが扱ったようなきわめて重大な課題について三通にわたって訓戒と勧告の手紙を書いて、その中に「エホバ」という名を繰り返し使

わないとしたら、エホバの証人の間では背教の疑いをかけられることになります。とはいえ、彼ら自身の『新世界訳』で、これらの七通の使徒書簡とそこでの重要な霊的課題の議論のどこにも御名は出てこないのです。『新世界訳』の見地からしても、使徒パウロと使徒ヨハネの両者はこれらの手紙を書くにあたって明らかにものみの塔組織内で優勢な規範に従わなかったと言わざるを得ません。あるいは、より正確に言えば、ものみの塔組織内で優勢な規範は一世紀の使徒の視点に従っていないのです。

『新世界訳』の七通の使徒書簡に「エホバ」が完全に欠落していることは、キリスト教聖典の他の書にその名が挿入されたことが純粋に恣意的なものであり、証拠によるものではないことのさらなる証拠です。

次に、仮に『新世界訳』の翻訳者たち（より正確には、翻訳者のフレッド・フランズ）による「エホバ」という名のキリスト教聖典への数々の挿入を受け入れたとしても、キリスト教聖典の筆者がはるかに高い頻度で神の御子の名に言及しているという事実がまだ残っています。「イエス」という名は912回出てきており、237箇所にわたる「エホバ」という名の挿入をはるかに上回っています[30]。これも、ものみの塔の出版物に見られる慣習とは著しく異なっており、それらの出版物ではその比率が逆のこともあります。特にラザフォードの会長時代から、「エホバ」という名の使用が徐々に増え、神の御子イエス・キリストへの言及が少なくとも減少していることが明らかになっています。しかし、神ご自身はその御心について、「すべての者が、父を尊ぶと同じように子をも尊ぶためです。子を尊ばない者は、それを遣わされた父を尊んでいません」と述べておられます[31]。キリスト教聖典の筆者は明らかにこの言葉を心に深く刻みつけており、その模範は従うべきもので、現代のニーズに合わないという主張の下に軽んずべきではないのです。

ですから、エホバの証人の組織内に見られる、テトラグラマトンを繰り返し用い、強調する慣習は、実際には一世紀のキリスト者の集まりでの慣習というよりも、キリスト教以前の時代のイスラエル国民の間に存在していた慣習を反映したものであることを証拠は示しています。この“時計の針を戻す”ことに正当性がないとすれば、神の御名を告げ知らせ、敬うようにと求めている多くの聖句はどのように成就されるのでしょうか。それを判断するには、次の問いを考える必要があります。

キリスト教時代になってなぜ変化したのか

すでに示したとおり、あらゆる主張やセオリーにもかかわらず、テトラグラマトンがキリスト教聖典のいずれかに出てきたことを示す確たる証拠は、啓示の書に省略

30　「キリスト」はさらに530回ほど（しばしば「イエス」との組み合わせで）出てきます。新世界訳翻訳委員会の構成については、『良心の危機』68頁の脚注16をどうぞご覧ください。

31　ヨハネ5:23。

形で四回出てくるほかは何もありません。歴史的証拠はパウロの著作から数十年以内にさかのぼるものまで含めて、逆のことを示しています。キリスト教以前の聖典（ユダヤ教聖典）にテトラグラマトンが数多く出てくる、それも何千回も出てくることを考えると、この変化は実に目を見張るものがあります。既知の証拠を前にして、これほどの顕著な変化をどのように理解したらよいのだろうという疑問が生じます。また、このことは神の御名を賛美し、尊び、神聖なものとするようにという数多くの聖句を心に留めて実践する上でわたしたちにどのような影響を及ぼすでしょうか。

　このことを理解するためにはまず、聖典において「名」という表現が何を意味するのか、神の「名」とは実際に何を指しているのかを理解する必要があります。「名」という表現をわたしたちはしばしば、ある人や事物を他から区別する単語や語句、「ヨハネ」、「マリア」、「オーストラリア」、「大西洋」など、一般に「固有名詞」や「呼称」と呼ばれるものに限定して考えます。これは「名」という語の日常会話における最も一般的な用法であり、聖典においてもしばしばその意味合いで使われます。とはいえ、「名」は他にもさまざまな意味で使われることがあります。1960年代の後半、ものみの塔協会の『聖書理解の助け』（現在の『聖書に対する洞察』）が準備されていた時、わたしはその本のために「エホバ」と「イエス・キリスト」と「名」という論題で記事を書くことになりました。当時、「エホバ」という名が一世紀のキリスト者の間で広く使われていたというものみの塔の教えを真剣に疑う理由がなく、そのような見解を支持しようと心から努めていました[32]。ここで取り上げた幾つもの要素にはまだ気づいていませんでした。組織の教えの妥当性を吟味したり検証したりするよりも、それを支持することに心を向けていたため、他の要素が単に思いに入ってこなかったのです。ただ、先の三つの論題をリサーチして、一つのことはかつてないほどはっきりとわたしの胸に刻まれました。それは「名」という語には、一般に割り当てられているよりもはるかに広範で重要な意味合いがあるという事実です。この理解が土台となって、数多くの聖句についてのわたしのそれまでの理解がいかに限定的であったかに気づき、ついには組織による聖句の適用がしばしば正当化できないものであることを認めるようになりました。

　例えば、「名」は他から区別するための「固有名詞」ではなく、評判あるいは個人が築いてきた人生の記録を指すことがあります。ある人が「名をあげた」とか、ある人の「名が傷ついた」とか言う場合、「リチャード」、「ヘンリー」、「ジョン・スミス」などその人を特定するのに使われる単語や語句ではなく、その人が得た評判を指しています。「名」の良し悪しは、その人の姓名とは何ら関係がありません。同様に、何か誤った道のためにある人の「名が傷ついた」と言う場合、文字通りの一般的な意味での名について話しているのではなく、はるかに大きな意味での名について話しています。つまり、「クリスチャン・グッドマン」という名で知

32　これらの記事は、後続の『聖書に対する洞察』にもほぼそのまま掲載されています。

られていても、この広い意味合いにおいては「悪い名」があるかもしれないということです。後者の「名」は明らかに、その人を一般に指す名前や呼称よりも重要です。というのも、その人自身が実際に**どういう人**で、**何をしたか**を扱っているからです。聖句に度々出てくるのは、このより広くて深い意味合いでの「名」なのです[33]。

「名」は何かを行う権威を指すこともあります。これが、「法の名において」とか「王の名において」とかいう表現が意味するところです。「法」には通常の意味合いでの固有の「名」はなく、「王の名において」に意味されるのは「ヘンリー」や「ルイ」、「フェルディナンド」など、誰かの名への言及ではなく、要求の根拠として王の権威と地位に訴えることを指しています。エフェソス1:21で使徒は政府と権威と力と主権、また「となえられるあらゆる名」について述べています。このことは、「名」がしばしば権威と地位を表していることを明確に示しています[34]。『ものみの塔』1991年1月15日号の聖霊に関する記事（5頁）で、組織はマタイ28:19の「父と子と聖霊との名において彼らにバプテスマを施す」という表現の意味合いを説明する中で、「名」という語のこの意味合いを事実上認めざるを得ませんでした。通常の一般的な意味での名は聖霊に付けられていないので、ここでこの語が別の意味合いで使われていることは明らかです。1944年12月15日号の『ものみの塔』（371, 372頁）［英語］には、早くも次のような記述があります。

> 子の名においてのバプテスマとは、イエス・キリストという御子の文字通りの名においてのという以上の意味を持ちます。名がその文字通りの意味以上のことを表しているのと同じです。その名には、御父が御子にお授けになったすべての栄誉、権威、勢力、職務が伴っています。

「イエス・キリスト」という文字通りの名と比較した場合の「子の名」について言えることは、「エホバ」という文字通りの名と比較した場合の「父の名」についても同様に言えます。

ですから、この同じ表現、つまり「名において」は、誰かの「名において」話したり行動したりしていると主張する者が、その誰かの代理人としての権限を主張していることを意味することもあります[35]。

結局のところ、ある人の「名」について語られるとき、実のところ言及されているのは、個人を指すのに使われる単なる単語や語句ではなく、その人自身、その人

33　箴言10:7; 22:1および伝道の書7:1などがその例です。

34　マタイ10:41を比較なさってください。ここでは、ギリシャ語で「預言者の名において」となっています（『王国行間逐語訳』［英語］をどうぞご覧ください）。また、フィリピ2:9-11; ヘブライ1:3, 4もどうぞご覧ください。『ものみの塔』1985年5月15日号（17頁）は、イザヤ62:2および「あなたは新しい名で実際に呼ばれるであろう」というイスラエルに向けられた言葉を引用し、その後で「その『名』は、それら現代の油そそがれた弟子たちが集められている祝福された状態に言及しています」と述べています。

35　出エジプト記5:23; 申命記10:8; 18:5, 7, 19-22; サムエル第一17:45; エステル記3:12; 8:8, 10; 使徒3:16; 4:5-10; テサロニケ第二3:6を比較なさってください。

の個性や人格、信条、記録、その人自身が**どういう人なのか**ということなのでしょう。（これと似ていますが、わたしたちは「憐(あわ)れみの名において」誰かに訴えるとき、憐(あわ)れみという性質が表し、象徴するものすべてに言及しているのです。）それゆえ、たとえある人の呼び名を知っていたとしても、その人が実際にどういう人なのかを知らなければ、真の、重要な意味での「名」を本当は知らないと言うことができます。

『助け』の本の「エホバ」の記事を準備するにあたり、わたしはヘブライ語学者のG・T・マンリー教授の次の言葉を引用しました。

> 旧約［聖書］中の『名』という言葉を研究すると、それがヘブライ語でいかに重要な意味を持っているかが明らかになる。名は単なるラベルではなく、その名を有する人の真の人格を表わすものである[36]。

ですから、「神の名を知る」ということは、単に神を指す何かの単語を知る以上のはるかに深い意味があります。出エジプト記6:2, 3はテトラグラマトンあるいは「エホバ」という名がモーセの時代に初めて知られたことを示していると主張する人々について、ヘブライ語教授のD・H・ウィアーはこう書いています。

> ［彼らはこれらの節を］他の聖句に照らして研究してこなかったのである。そうしていたなら、この句の中の名はエホバという語を構成している二つの音節［Yah weh］のことではなく、その名が表わしている考えを指しているに違いないということを認識していたであろう。我々は、『このゆえに、我が民は我が名を知らん』というイザヤ52章6節や、『彼らは我が名のエホバなることを知るべし』というエレミヤ16章21節、あるいは『なんじの名を知る彼らは、なんじに依り頼まん』という詩篇(へん)9編［10, 16節］を読む際、エホバのみ名を知るということは、その名を構成している四つの字母［YHWH］を知ることとはおおいに異なるということがすぐ分かるのである。それは、エホバが本当にその名によって表わされている通りの方であることを経験によって知ることである。（また、イザ19:20, 21;エゼ20:5, 9; 39:6, 7; 詩83編［18節］; 89編［16節］; 代二6:33と比較。）」――インペリアル聖書辞典、第1巻、856, 857ページ[37]。

36　『聖書理解の助け』885頁［英語］。ユダヤ教聖典の神の御名について論じて、ゲアハルドゥス・ヴォスも『聖書神学』（1959年、76f 頁）［英語］の中で、同様に次のように述べています。「聖書において名は常に慣用的な標識以上のものである。それは特性や歴史を表現している」。これと調和して、『ものみの塔』1945年2月1日号（41頁）［英語］は、御父の立場と権威についてまず振り返ってから、こう述べています。「エホバという名、すなわちその方がどういう方かを表す名についてこれらの事実を認識しなければ、有効なバプテスマを受けることはできません」。

37　『聖書理解の助け』888, 889頁［英語］もどうぞご覧ください。同じ資料が『聖書に対する洞察』第1巻399頁に掲載されています。

聖書の「名」という用語のこのはるかに深い意味を認識するようになったので、『聖書理解の助け』という本の「エホバ」という記事を書いた時、わたしはこの記述を入れました（1202頁）。

> イエス・キリストは地上にいた時、『御父の名を弟子たちに明らかにされました』。（ヨハ17:6, 26）それら弟子たちは、以前からその名を知っており、ヘブライ語聖書に記されている神の働きに精通してはいましたが、エホバをそれまでよりもずっとよく、もっとすばらしい仕方で知るようになったのは、「父に対してその懐の位置に」おられる方を通してでした。（ヨハ1:18）キリスト・イエスは、御父の業を行ない、独自の考えではなく、御父の言葉を語って、御父を完全に代表しました。（ヨハ10:37, 38; 12:50; 14:10, 11, 24）イエスが、「わたしを見た者は、父をも見たのです」と言うことがおできになったのはそのためです。――ヨハ14:9。
>
> 以上のことから、神の名を本当に知っているのは、神の従順な僕（しもべ）なっている人たちだけであることが分かります。（ヨハ一4:8; 5:2, 3と比較。）したがって、「彼がわたしの名を知るようになったので、わたしは彼を保護する」という詩篇91編14節のエホバの保証の言葉は、そのような人たちに当てはまります。み名そのものは何ら魔術的な力を持つものではありませんが、その名で呼ばれる方はご自分の献身的な民を保護することがおできになります。ですから、み名は神ご自身を表わします。それゆえに、箴言は、「エホバのみ名は強固な塔。義なる者はその中に走り込んで保護される」と述べているのです。（箴言18:10）これこそエホバに重荷を託す人たちがすることなのです。（詩55:22）同様に、み名を愛する（詩5:11）、み名に賛美を歌う（詩7:17）、み名を呼び求める（創12:8）、み名に感謝する（代一16:35）、み名によって誓う（申6:13）、み名を思い出す（詩119:55）、み名を恐れる（詩61:5）、み名を尋ね求める（詩83:16）、み名を信頼する（詩33:21）、み名を高める（詩34:3）、み名に希望を置く（詩52:9）とは、エホバご自身に関してそのようにするということです。神の名をあしざまに言うのは、神を冒とくすることです。――レビ24:11, 15, 16[38]。

このことは、「名」という用語がまったく同じように神の御子に関しても使われていることからも理解できます。使徒ヨハネが「しかし、彼は自分を受け入れた人、その名を信じた人々には、神の子となる力を与えたのである」と書いた時、「イエス」という名だけに言及しているのでないことは明らかです[39]。ヨハネは神の御子その人に、「神の子羊」として、神に任じられた人類の救済者、贖（あがな）い主、仲介者として**どういう方なのか**に言及しているのです。このことを認めて一部の翻訳者は「その名を信じた」の代わりに、「彼を信じた」（アメリカ翻訳）、「本当に彼を信じた」（フィリプス現代英語）、「彼に忠誠を誓った」（新英語聖書）と訳しています[40]。

38　同じ資料が『聖書に対する洞察』第2巻367, 368頁にあります。

39　ヨハネ1:12。

40　1988年に出版されたものみの塔の書籍 『啓示の書――その壮大な最高潮は近い！』280頁も、啓示19章12節とそこに言及されているキリストに割り当てられた、記された「名」――「彼自身のほかはだれもそれを知らない」――を論じるに際し、これが一般的かつ日常的な意味での名ではなく、「主の日の期間にイエスが享受しておられる地位や特権を表わしているようです」と大同小異で認めています。

単に「イエス」という名を使うだけで、あるいはその名を非常に頻繁に発音したり、その文字通りの名に絶えず注意を向けたりすることで、その人がキリストを純粋に信じる、キリストの真の追随者であることが証明されるでしょうか。明らかに、それ自体では、その人がキリスト者であることを実証するものではありません。また、その人が聖句の本当の意味合いにおいて、神の御子の「名を真に知らせている」ことを意味するものでもないでしょう。今日、何百万もの人々が「イエス」という名を日常的に使って、語っています。しかし、彼らの多くは、神の御子の真に重要な「名」を大きく誤り伝え、事実上曖昧なものとしています。というのも、彼らの行動や行いは、御子の教えや人格、生き方を反映したものとはあまりにもかけ離れているからです。彼らの生活は、御子の贖(あがな)いの力に対する信仰と一致する行動を伴っていません。それこそが「その名を信じる」ことに関わることであり、何かの単語や固有名詞を使うことではないのです[41]。

同じことが「エホバ」という名の使用についても言えます。個人や、人間の組織が、その文字通りの名をどれほど唱えたとしても、それを繰り返し使うことによる特別な義を主張したとしても、もし態度や行いや実践において、その方ご自身がどのような方であるか――そのご性質、なさり方、基準――を純粋に反映しないのであれば、聖句の意味合いにおいて真に「その名を知る」ようになったとは言えません。テトラグラマトンに表されるその方ないしそのご性格を本当に知っているわけではありません[42]。ですから、その名を使ったところで口先だけの奉仕に過ぎません[43]。「その名において」語ると主張しながらも、その方がみ言葉の中で述べておられることを誤り伝えたり、「その名において」誤った予言をしたり、「その名において」聖句に反する法や規則を考案して人に課したり、「その名において」不当な裁きや非難をしたりするならば、事実上、「その名をみだりに取り上げた」ことになります。彼らはその方の認可もなく、その方のご性質や基準、その方がどういう方かを反映することなく行動したことになります[44]。

同じことが、分派目的のため、すなわち、ある宗教グループを他から区別するための手段として何らかの形のテトラグラマトンを使うことについても言えます。実のところ、そのような関心に応えて「エホバの証人」という名称が発展しました。同様に、「その聖なる御名をほめたたえる」あるいは「その御名を神聖なものとする」というのは、単に特定の単語や語句をほめたたえるという意味ではありませ

41　マタイ7:21-23; ローマ2:24を比較なさってください。また、『聖書理解の助け』の「イエス・キリスト」に関する記事、924頁の「その『名』の深い意義」という見出し［英語］もどうぞご覧ください。同じ資料が『聖書に対する洞察』第1巻188頁にあります。

42　エゼキエル36:20を比較なさってください。

43　ホセア8:1, 2; マタイ15:8を比較なさってください。

44　このことについては、本書の第11章385-387頁［英語］をどうぞご覧ください。

ん。というのも、“単語をほめたたえる”または“称号をたたえる”ことなどできるでしょうか。むしろ、それは、その方自身をたたえること、その方とそのご性質、そのなさり方を畏敬と賞賛を込めて語ること、その方をこの上なく聖なる方と見て敬意を払うことを明らかに意味しています。

まことの神を特定する決定的な方法

もちろん、ほめるべき方を特定する必要はあります。しかし、そうするのに、たった一つの呼び名の使用に限定されるわけではありません。キリスト教聖典を書いたキリスト・イエスの使徒や弟子は、ほとんどのケースで神を「神」と呼びました。22ほどのケースで「神」と併せて「主」という用語を用い、約40回は「父」に言及して「神」という用語を用い、他の約1,275回は単に「神」と言っています。彼らがその用語を「エホバ」などの呼び名で日常的に前置きする必要性や強制力を感じていなかったことは明らかです。その前後の文脈から、誰について書いているのかがはっきりしていたからです。

ですから、「多くの『神』や多くの『主』」が崇拝されているという事実を認めながらも、使徒はこう述べています。「わたしたちには父なるただひとりの神がおられ、この方からすべてのものが出ており、わたしたちはこの方のためにあるのです。また、ひとりの主、イエス・キリストがおられ、この方を通してすべてのものがあり、わたしたちもこの方を通してあるのです」[45]。着目していただきたいのは、『新世界訳』の訳出においても、使徒パウロは諸国民の数多くの神々の中からまことの神を特定するためにここでテトラグラマトンを用いる必要性を感じなかったということです。（この点においても、パウロは今日のものみの塔組織の視点と実践を反映していません。）実際に、テトラグラマトンを専ら「ユダヤ人の神」に紐(ひも)づけて考える人もいたことでしょう。ローマ3:29のパウロの言葉は、自分が伝えている神がそのように限定されないことを明確にする必要があると、パウロが考えることがあったことを物語っています。パウロは多くの神々を崇拝していたアテネの人々に語りかけた際、「エホバ」や「ヤハウェ」などの名、あるいはそれと似た形のテトラグラマトンのいずれも使わず、まことの神をはっきりと彼らに特定しました[46]。もし混乱を避ける上で懸念があるのであれば、使徒書簡に頻繁に出てくる「わたしたちの主イエス・キリストの父」という呼び名ほど、まことの神をはっきりと特定する呼び名はないでしょう[47]。

45　コリント第一8:5, 6。

46　使徒17:16-34。

47　ローマ15:6; コリント第二1:3; 11:31; エフェソス1:3; コロサイ1:3; ペテロ第一1:3; ヨハネ第二3。

神のまことの名が御子を通して啓示される

わたしたちは自分の名を相手に知らせることで、そのぶん自分自身を明かすことになり、もはや匿名ではなくなります。また、そのように明かすことで、人と人との関係をより親密なものにし、互いに他人であるという感覚をある程度までなくす効果もあります。しかし、これまで述べてきたように、わたしたちがどういう人で、何を信じ、どのような性質を持っているのか、何をしてきて今何をしているのかを知るようになって初めて、相手はより重要な意味合いでのわたしたちの「名」を知るようになるのです。わたしたちが持っている名は実際には象徴に過ぎず、本当に重要な「名」ではありません。

キリスト教以前の時代、神はご自分の僕(しもべ)や他の人にご自身を啓示なさる際、テトラグラマトン（YHWH）に表される名を主にお用いになりました。しかし、真にきわめて重要な意味合いでのその「名」が啓示されたのは、至高にて全能なる方、聖なる義なる方、憐(あわ)れみ深く、慈愛に満ちて、真実にて目的を持った、約束に違わない方として、神がご自身を啓示なさったことによります。とはいえ、その時に成された啓示は、来るべき啓示に比べれば規模や重要度において小さなことでした。
完全な意味合いで神の「名」の荘厳な啓示がもたらされたのは、神の御子なるメシアの到来によってでした。使徒ヨハネは言います。

> 神を見た者はかつて一人もいない。父の御心に最も近い独り子、この方が神をお示しになったのである[48]。

神は御子を通してかつてないほどご自身——ご自分の実際の有り様とご性格——を明らかになさっています。この啓示によって神はまた、わたしたちが神とユニークで親密な関係——父と子の関係、神の子だけでなく相続人、神の王なる御子と共同の相続人となる関係——に入る道を開いてくださっています。ですから、神のメシア、イエス・キリストを信じる人についてヨハネはこうも言っています。「しかし、彼を迎えた者、そうした者たちすべてに対しては、神の子供となる権限を与えたのである。その者たちが、彼の名に信仰を働かせていたからである」[49]。

『聖書理解の助け』が完成して数年後、「名」という語の意味合いに関連してわたしが行ったリサーチを基にして、『ものみの塔』1973年5月15日号に掲載された「イエス・キリストの『名を信ずる』信仰は、どうして命をもたらすのか」と題する記事ともう一つ、1973年8月1日号に掲載された「あなたにとって神のみ名は何を意味しますか」と題する記事が出されました。これまで考察してきた「名」という用語の意味合いに関する、実質上すべての要点がそれらの記事に載っています。と

48　ヨハネ1:18、エルサレム聖書。新英語訳も同様です。
49　ヨハネ1:12。ローマ8:14-17; ガラテア4:4-7もどうぞご覧ください。

りわけ、二番目の記事は死の前夜にイエスが捧(ささ)げられた祈りについて論じており、その祈りの中でイエスは父にこうおっしゃいました。

> わたしは、あなたが世から与えてくださった人々にみ名を明らかに示しました。……わたしに与えてくださったご自身のみ名のために彼らを見守ってください。……そしてわたしはみ名を彼らに知らせました。またこれからも知らせます[50]。

イエスがどのようにして「神の御名をご自分の使徒に知らせた」かを問いかけた後、記事はアルバート・バーンズ著『福音書に関する説明的、実際的な注釈』（1846年）にある次のコメントを引用しています。

> ［これらの節の］み名ということばには、神の属性もしくは性質が含まれている。イエスは神の性質、律法、意志そして憐(あわ)れみある計画を知らせた。言い換えれば、イエスは彼らに神を明らかにしたのである。名前ということばは、多くの場合個人を指すのに用いられる[51]。

この引用の後、ものみの塔の記事は次のようにコメントしています。

> ですから、イエスが、地上での全生涯にわたる非のうちどころのない歩みによって、『み父について説明した』時、イエスは実際に『神のみ名を知らせていた』のです。イエスは、ご自分が神の強い後ろだてと権威とを持って語っていることを実証しました。それゆえイエスは、「わたしを見た者は、父をも見たのです」と言うことができました。ですから、初期のイエスの追随者にとって、神の「み名」は大きな意味をおびていました。

『ものみの塔』1973年8月1日号のこの記事には、元来分派的なものみの塔組織の基本見解を反映した記述が幾つも含まれていますが、それでも全体として「名」という語の聖書的な意味合いを正確に指摘していると言えると思います。その記事は、「神の御名」において何かを行うとは単に「エホバ」という名を使ったり発音したりすることよりもはるかに多くを意味することを繰り返して強調しています。その資料を今日読み返すのは興味深いことかもしれません。わたしがこの記事に書いたことは、組織によって出版が承認され、わたしの知る限り反論されたことはありませんでしたが、それ以来この種の情報が『ものみの塔』誌に載せられたことは一度もありません。ここに提示された原則をほぼ完全に無視しています[52]。

50　ヨハネ17:6, 11, 26。

51　幾つかの訳もこの認識を示し、ヨハネ17章の上記の節を訳すに際し、「み名を明らかに示しました」ではなく、「わたしはあなたを明らかにしました」（新国際訳）、「わたしはあなたを知らせました」（今日の英語訳）、「わたしはあなたに誉れをもたらしました」（フィリプス現代英語）,「わたしはあなたの本当の姿を明らかにしました」（アメリカ聖書）としています。

52　わたしはその号に、「神の目的におけるキリスト・イエスの比類のない役割」と題する記事も書き、その記事も神の御子が御父をどのようにして「知らせた」かに関する聖書的な証拠を論じています（453-456頁）。

『ものみの塔』誌は「背教者」として分類した人々を非難するに際し、「背教」の「証拠」として、エホバの証人の組織と同じようには「エホバ」という名の使用を重要視しないことを挙げています。ここに提示されたことに加えて、さらに多くの証拠が示しているのは、ものみの塔組織の用語の使用が正しいものであり、神の「御名」を正しく尊ぶ模範であるならば、キリストもその使徒も「背教者」となるということです。

キリストがお用いになった呼び名

キリスト教以前のユダヤ教聖典では、「エホバ」に言及している箇所が6,800以上あるのに比べて、神が「父」と呼ばれている箇所は十数例しかありません。その場合でも、その用語は主に神とイスラエルの民との関係について使われており、神と個人との関係に使われているのではありません[53]。

この親密な関係が実際に前面に押し出されたのは、神の御子が来られて御父を明らかになさってからです。『新世界訳』のキリスト教聖典には「エホバ」という名が正当な根拠もなしに237回挿入されています。とはいえ、キリスト教聖典のどの古代写本にもないものがこのように恣意的に取り入れられたとしても、「父」としての神に言及されている箇所のほうが顕著です。というのも、神はそれらのキリスト教聖典で**260 回**ほど「父」と呼ばれており、これには翻訳者による恣意的な用語の挿入など必要ありませんでした。

神に祈りの中で呼びかける時のエホバの証人の慣習とは逆に、イエスは一貫して「エホバ」とではなく「父」と神に呼びかけられました（弟子との最後の祈りだけでこの表現を六回用いておられます）。『新世界訳』においてさえ、イエスはどの祈りの中でも一度も「エホバ」と父に呼びかけたり、父をそう呼んだりなさっていません[54]。ですから、イエスが御父に向かって「父よ、御名の栄光をお示しください」と祈られた時、ここで「御名」という用語が父ご自身を表す、より完全で深い意味合いで用いられていることは明らかです。そうでなければ、イエスの祈りの中に「エホバ」などの具体的な呼称がまったく出てこないのは不可解です[55]。死の前夜に弟子たちと一緒におられた時もイエスは彼らへの話の中で、また長い祈りの中で、神の「御名」に四回言及なさいました[56]。しかし、弟子たちへの助言と勧め、そして祈りに満ちたその一晩の間に、イエスは「エホバ」という名をただの一度も使っておられません。むしろ、一貫して「父」という呼び方をなさり、その回数は実に五十回前後に及びます。翌日亡くなる時、イエスは「エホバ」という名を用い

53 申命記32:6, 18; 歴代第一28:6; 29:10; 詩編2:7; 89:26; イザヤ63:16; 64:8; エレミヤ3:4; 31:9を比較なさってください。

54 マタイ11:25, 26; 26:39, 42; マルコ14:36; ルカ10:21; 22:42; 23:34, 46; ヨハネ11:41, 42; 12:28; 17:1, 5, 11, 21, 24, 25。

55 ヨハネ12:28。

56 ヨハネ17:6, 11, 12, 26。

て叫ばれるのではなく、「わたしの神、わたしの神」と言われ、最後の言葉では、「父よ、わたしの霊をみ手に託します」とおっしゃいました[57]。では、キリスト者としてわたしたちは誰の模範に倣うべきでしょうか。二十世紀の一宗派の模範ですか。それとも、このような重大な時に神の御子がお示しになった模範ですか。

　イエスがご自分の弟子に祈りをお教えになった時に、ものみの塔組織がエホバの証人の間で発展させた慣習に従っておられたなら、「エホバ神」と呼びかけて祈るか、祈りのどこかにその名を含めるかするようにお教えになったでしょう。しかしそうはなさらず、ご自分の模範に従って、「天におられるわたしたちの父」と呼びかけて祈るようにとお教えになりました[58]。

　家族関係においてわたしたちは普通、父親に付けられた名が何であれ、「ジョン」とか、「リチャード」とか、「ハーマン」とか父親を呼んだり、父親に呼びかけたりすることはありません。もしそうするなら、わたしたちが父親とどのような関係を享受しているかを示すことにならないからです。わたしたちは父親に「お父さん」とか、もっと親しく「パパ」とか、「ダディー」とか呼びかけます。そのような関係にない者は、こうした呼びかけを使うことはできません。父親に付けられた名を含めて、より正式な呼びかけに制限されます。

　このように、キリスト・イエスを通して神の子となった人々について使徒は、「では、あなた方は子なのですから、神はご自分のみ子の霊をわたしたちの心の中に送ってくださり、それが、『アバ［「パパ」を意味するアラム語の表現］、父よ！』と叫ぶのです」と言っています[59]。この事実は、キリスト教以前に「エホバ」という名が強調されていたのに対し、キリスト教以後は天の「父」が強調されるようになった否定しがたい変化の理由を説明する上で、間違いなく大きな役割をはたしています。というのも、イエスがその用語をお選びになったのは祈り中でだけではなかったからです。福音書の記述を読めば明らかなように、イエスはご自分の弟子との会話の中でほとんど一貫して「父」と呼んでおられます。わたしたちの前に御子が開いてくださった父との親密な関係に入って、その関係を深く認識するようになって初めて、わたしたちは完全かつ純粋な意味で神の「名」を知っていると真に言うことができます[60]。

57　マタイ27:46; ルカ23:46。

58　マタイ6:6-9。ヨハネ15:16; 16:26, 27を比較なさってください。

59　ガラテア4:6; マルコ14:36; ローマ8:15。

60　マタイ11:27を比較なさってください。ルド・パーションはその論文の中で、イエスご自身やその後にキリスト者となった人々を含めてユダヤ人が神を指すのに「代用語」または代替となる語を多用していたことを実証しました。したがって、わたしたちは「神の国」という表現が「天の国」として表現され、「神」を指すのに「天」が用いられているのをよく目にします。（『新世界訳』においても「エホバの王国」という表現は見つかりません。）ものみの塔組織が推し進める見解が真実であれば、話したり書いたりしている人たちが「エホバ」という名に言及することを期待してもいいはずですが、実際には他の用語が使用されており、彼の論文にはそうした事例が数多く紹介されています。

神の御子によってテトラグラマトンは成就する

とはいえ、この強調における明確な変化に光を当てるようなさらに別の側面があります。テトラグラマトンに表される名（YHWH＝ヤハウェ、エホバ）は、「成る」という動詞（*hayah*ʼ） の形からきており、その動詞の使役形からきていると考える学者もいます。もしそうなら、テトラグラマトンは文字通りには「彼は成らせる、存在させる」という意味になるでしょう[61]。このことは、神がご自分の名についてモーセに尋ねられて、ある訳によれば、「わたしは自分が成るものと成る」とお答えになったことと調和しています[62]。多くの訳がここを「わたしは在るという者で在る」としていますが、『国際標準聖書百科事典』（第2巻507頁）［英語］はその訳についてこう述べています。

> 「わたしは自分が成る者／ものと成る」が望ましい。というのも、動詞の *haya* には成る――純粋なる存在のことではなく、実現すること、起こること、居合わせること――というより動的な意味合いがあり、出エジプト記のこれらの最初の章の歴史的、神学的文脈は神がモーセに、続いて民全体にご自分の内なる本質［または存在］ではなく、ご自分の贖罪(しょくざい)の意図を明らかにしておられることを示しているからだ。彼らにとって神はご自分の行いによってご自分が「成るもの」と「成る」ことを示されるのである[63]。

これに基づけば、テトラグラマトンに表される名（ヤハウェまたはエホバ）は神の民に対する神の目的に強調が置かれており、神の御子において、また御子を通して、その真の成就を見たと言ってよいでしょう。「イエス」（ヘブライ語でエーシューア）という名そのものが、「ヤー［またはジャー］は救う」という意味です。イエスにおいて、またイエスを通して、人類に対する神の目的がすべて完全に実現するのです。すべての預言は最終的にメシアなる御子を指し示しており、御子を中心に据えられています。啓示19:10で、御使いはヨハネに、「イエスへの証しがすべての預言に霊感を与える」と語っています[64]。したがって、使徒はこう言うことができました。

61　『聖書に対する洞察』第1巻399頁; 『国際標準聖書百科事典』第2巻507頁［英語］。

62　出エジプト記3:14の『新国際訳』脚注; 『アメリカ標準訳』脚注。

63　『新世界訳』が「わたしは自分のなるところのものとなる」と訳していることに関連して、『聖書に対する洞察』第1巻399頁はこう述べています。「それは、エホバが漸進的な行動によりご自身を種々の約束の履行者にならせる方であられるということを明らかにしています。したがって、エホバは常にご自分の目的を実現させられます。そのような名を正当に、また正式に帯びることができるのは、ただまことの神だけでしょう」。

64　『フィリプス現代英語』からの訳。ペテロ第一1:10-12もどうぞご覧ください。

> 神の約束がどんなに多くても、それはことごとくキリストにおいて「しかり」となったからです。それで、わたしたちはこの方を通して「アーメン」と唱え、神に栄光を帰するのです[65]。

キリスト・イエスにおいて、またキリスト・イエスを通して、神のすべての約束と贖(あがな)いの目的が最高潮に達したことは、ユダヤ教聖典と比較してキリスト教聖典で神への言及の仕方が明らかに変化したことの、さらなる説明となるでしょう。それは、神がなぜ御子の名にこれほどまでに注目させるように意図なさったのか、神の聖霊がなぜクリスチャンの聖書筆者にそうするよう霊感を与えたのかを説明しています。その御子は「アーメン」であり、「神の言葉」であり、「名」という語の完全かつ最も重要な意味合いにおいて「わたしは父の名において来ている」と言うことがおできになる方なのです[66]。

イスラエルの民がカナンに向かって旅をしていたころ、エホバは彼らの前に御使いを遣わし、彼らを導くと言われました。彼らはその御使いの導きに従うことになっていました。「わたしの名が彼のうちにある」とエホバが言われたからです[67]。それよりはるかに大きな意味合いで神はご自分の「名」が、地上の生涯におけるキリスト・イエスのうちにあるようになさいました。このように、ユダヤ教聖典の「エホバ」に関連した記述を含む一部の聖句は、キリスト教聖典の中で御子に適用されました。その根拠は明らかに、御父が御子に、ご自分の名において語って行動するすべての権力と権威をお与えになったことにあり、この御子はあらゆる面で御父のご性格と目的を完璧に表し示されたからで、御父の正当な王位継承者であられるからです[68]。

このようにイエス・キリストは、唯一無二の仕方で神を表し示され、御父のご性格や目的や物事の扱いをかつてないほどお知らせになり、神と親子関係に至る道を開かれることによって、そのすべてにおいて天の御父の真実かつ重要な「名」を知らせ、誉め称えられました。死の前夜に父への祈りの中で、「わたしは、わたしにさせるために与えてくださった業をなし終えて、地上であなたの栄光を表わしました」と真実を述べられた後、イエス・キリストは、「わたしは、あなたが世から与

65　コリント第二1:20の『新国際訳』。

66　ルカ13:35。

67　出エジプト記23:21。「名」という語の聖書的な意味合いを理解して、『新英語聖書』はここを「わたしの権威が彼のうちに宿る」としており、同じ部分を『アメリカ翻訳』は「わたしは彼のうちにわたし自身を表す」と訳しています。

68　ヘブライ1:10-12を詩編102:1, 25-27と、ローマ10:13をヨエル2:32と比較なさってください。マタイ23:39; ヨハネ1:14, 18; 5:43; 10:25; 16:27; 17:1-4; コロサイ1:15; ヘブライ1:1-3をどうぞご覧ください。だからといって、イエスがエホバ**になった**わけでも、エホバ**であった**わけでもありません。というのも、ユダヤ教聖典からキリストご自身が引用された聖句では、イザヤ61:1, 2や詩編110:1のように、明らかにエホバという名が御父に適用されているからです。（ルカ4:16-21; マタイ22:41-45をどうぞご覧ください。）もしキリストがエホバであったなら、これらの聖句にあるように、エホバがご自身に「油を注ぎ」、ご自身を宣教に「遣わし」、ご自身に「語りかけて」ご自分の右の座に「就く」ように告げるというわけの分からない場面に直面することになります。

えてくださった人々にみ名を明らかにしました。聖なる父よ、わたしに与えてくださったご自身のみ名のために彼らを見守ってください。わたしたちと同じように、彼らも一つとなるためです」と言うことがおできになったのです[69]。

恣意的な挿入によって神の教えがぼやける

この問題の最も深刻な側面の一つは、写本で「主」（ギリシャ語でキュリオス）となっている箇所の多くで「エホバ」という名を恣意的に挿入することよって、『新世界訳』がしばしば、御父が御子にお授けになった栄光ある役割と地位を甚だしく損なっていることです。ローマ10:1-17の使徒の論議を考えてみましょう。パウロの手紙のこの部分の主旨はキリストへの信仰にあり、キリストが「律法の終わりであり、こうして、信仰を働かせる者はみな義を得る」ことにあります。パウロは「わたしたちが宣べ伝えている信仰の『言葉』について論じ、「その『あなたの口の中にある言葉』、つまり、イエスは主であるということを公に宣言し、神は彼を死人の中からよみがえらせたと心の中で信仰を働かせるなら、あなたは救われるのです」と述べました。しかし、『新世界訳』は13節にさしかかると、その前後の文脈で、キリストを主とする信仰に完全なる焦点が当てられているにもかかわらず、ギリシャ語本文が「主」という言葉を使用している事実を脇へ置いて、ここで「エホバ」という名を挿入し、「『エホバの名を呼び求める者はみな救われる』のです」と訳出しています。確かに、これと同じ表現がヨエル2:32にあり、そこでは「エホバ」の名を呼び求めることについて述べられています。しかし、だからといって使徒書簡の古代写本から得られる本文上の証拠を覆すことが翻訳者に求められるでしょうか。「主」を「エホバ」に置き換える、そのようなことをする権利がはたして翻訳者にあるのでしょうか。むしろ、尋ねるべきは、**文脈**は何を示しているか、他の聖句は何を示しているかであるはずです。

　キリスト教聖典は、信仰のうちに御子の「名を呼び求める」ことと、御父の「名を呼び求める」こととは、いかなる意味でも相反しないことを明らかにしています。パウロは引用の前にも後にも、神の目的とご意志が御子キリストを通して救いをもたらすことであると論じています。御子は「父の名によって」来られたので、救いのために御子の「名を呼び求める」ことは同時に、御子をお遣わしになった父の御名を呼び求めることでもあります[70]。神は御子を通してご自身を啓示なさり、御子を見た者が父を見たことになるようになさいました[71]。キリストの弟子は、よ

69　ヨハネ17:4, 6, 11。前述の『ものみの塔』1973年8月1日号の「神の目的におけるキリスト・イエスの比類のない役割」という記事もどうぞご覧ください。

70　マタイ21:9; 23:39; ヨハネ5:43。また、御子の「名」を尊ぶことが同時に、御子の父であられる神に敬意を表すことでもあることを、キリスト教聖典の筆者がコロサイ3:17; テサロニケ第二1:12; ペテロ第一4:14, 16; ヨハネ第一3:23でどのように明らかにしているかにもどうぞ留意なさってください。

71　ヨハネ1:14-18; 14:9。

り深くて重要な意味でのイエスの「名」に信仰を置くことについて何度も語りました[72]。ペテロはペンテコステで、パウロが引用したヨエルの預言と同じ表現を引用した後、「罪の許しのためにイエス・キリストの名においてバプテスマを受けなさい」と群衆に語りました[73]。そして後にサンヘドリンに対して、「ほかのだれにも救いはありません。人々の間に与えられ、わたしたちがそれによって救いを得るべき名は、天の下にほかにないからです」と告げました[74]。また、コルネリウスや他の人たちに話した時、ペテロはキリストについて、「この方についてはすべての預言者［ヨエルを含む］が証しをし、彼に信仰を持つ者は皆、その名によって罪の許しを得る」と述べました[75]。タルソスのサウロが改宗した時、アナニアは幻の中でキリストに「あなたの御名を呼び求める者」について語り、後にその出来事を語ったサウロ（またはパウロ）は、アナニアの言葉を引用して、神の御心は自分、パウロが「義なる方を見、その口の声を聞いて」、自分の見聞きした事柄につき「すべての人に対してその方の証人」となることであったと述べました。そしてアナニアが次に、「立って、バプテスマを受け、その［キリストの］名を呼び求めてあなたの罪を洗い去りなさい」と語ったことを述べました[76]。

　このようなすべての証拠を前にして、なぜ現代の翻訳者が最古の本文上の証拠を覆し、ローマ10:13で使徒が述べている「主」を「エホバ」に勝手に置き換えるのでしょうか。数多くの事例で文脈は、語られている「主」が父なる神であることを明確に示しています。しかし他の事例では、神の御子、主イエス・キリストをより直接的に指しています。ローマ10章の改ざんに限らず、『新世界訳』が本文の237箇所に「エホバ」を挿入したことで（原語の写本の「主」という読みに代わって）、文脈がキリストへの適用を示しているか明らかに許容しているにもかかわらず、その適用が排除される結果となりました[77]。もし御子を讃え、御子に崇高な名を与え、その「名」を信仰の対象とすることが御父のご意志であるならば、御父がそうなさるのを反対する理由がわたしたちの誰にあるというでしょうか。同じように、イエスの使徒や弟子のうちのキリスト教聖典の筆者——そのほとんどがイエスと行動を共にし、イエスの言葉を直接聞き、イエスご自身がどのように神に言及なさったかを身をもって知っていたのである——が著書の中でテトラグラマトンを使わなかったとしたら、なぜわたしたちが、彼らはそうすべきだったという立場を事実上取って、霊感を受けた著書を編集してテトラグラマトンを含めてよいのでしょう

72　ルカ24:46, 47およびヨハネ1:12; 2:23; 3:18; 20:31; コリント第一1:2; ヨハネ第一3:23; 5:13を比較なさってください。

73　使徒2:38。

74　使徒4:12。

75　使徒10:42, 43。

76　使徒9:14, 17, 21; 22:14-16。

77　コリント第一7:17-23; 16:10; コリント第二3:14-18; エフェソス2:19-22; 6:5-9; コロサイ3:22-24; テサロニケ第二2:2; ヤコブ5:14, 15を比較なさってください。これらの節で文脈はキリストに言及しているか、少なくとも、そこで語られている「主」がキリストである可能性を明示しています。それでも『新世界訳』はそのような適用や可能性さえも否定して、「主」を「エホバ」に置き換えています。

か。もしそういうことをするなら、わたしたちは本当に神の「御名」に敬意を表し、神の主権とご意志に従っていることになるでしょうか。それとも、「神の名において」と言いながら自らの手で事を扱い、神の主権の枠外で行動していないでしょうか。

象徴を正しい視点で見る

聖句からの証拠すべて、特にイエスとその使徒の例に鑑みて明らかであるように思われるのは、どの宗教であれ、「エホバ」という名に焦点を当てて強い重きを置いても、それがその最も重要な意味において「神の御名」を知らしめ、神聖なものとしているという主張の正当性が証明されるわけではないということです。神が何千もの古代写本によってわたしたちのために保全されるようになさったキリスト教聖典の中で、いかなる形であれテトラグラマトンに焦点を当てている箇所はどこにもありません。キリスト教聖典は、神の御子が話の中でも祈りの中でもその呼称に重きを置かず、代わりに「父」という呼び方をなさったことを示しています。また、御子の使徒や弟子もその同じパターンに従っていたことを示しています。彼らの例に倣うことに消極的で、そうするのを恐れてさえいるように思えるのは、また別の誤った見解、価値判断の誤りの結果なのかもしれません。

人間は象徴（シンボル）に焦点を当てて、その象徴に表されている、より偉大なものを見ず、重要視しないという誤りをしばしば犯します。例えば、どの国の旗も敬意を表されます。敬意が表されるのは、国旗の生地のためでも国旗のデザインのためでもなく、国旗が政府、国、それが掲げる理想の象徴だからです。とはいえ、中にはそのようなエンブレムが常に象徴に過ぎず、それに象徴されるものと何ら等しいものではないということを忘れるという誤りを犯す人もいます。そういう人は象徴に対して大いなる崇敬の念を公言しながらも、それに象徴されるものを自らの行為によっておとしめ、愛国心があるとみせかけても、その国を成り立たせている法律や原則に違反する、または、それと調和しない言動や行為に携わります。エホバの証人も知っているように、1940年代の米国では証人がどの国の旗にも敬礼しようとしないために、証人に集団暴行を加えて、ぼこぼこに殴ったり、その財産を破壊したりする人がいました。そうすることでそれらの暴徒は国旗に象徴される国の法律と原則そのものに背き、国の憲法の規定と司法制度を侮り軽んじたのです。アフリカのマラウイでは、党員カードが同じように不当に重要視され、組織の教えと方針に従順に従って党員カードの購入を拒否した証人は殴打され、家を焼かれ、亡命を余儀なくされました。このようなすべての事例において、象徴そのものに極端でバランスの欠けた重要性が置かれたために、象徴に表されるものを敬うのではなくおとしめる行動につながったのです。象徴は変更され、置き換えられることもありますが、象徴に表されるものは変わらないのです。

宗教の分野でも、象徴に対して同じようなバランスの欠けた見方をする人がいます。イスラエルはそのような誤りを繰り返し犯しました[78]。何世紀もの間、エホバはご自身の臨在の象徴として契約の箱をお用いになりました。神殿の至聖所の契約の箱の蓋の上に現れる雲（明らかに奇跡的な光を放っていた）も同じように、エホバの臨在を象徴していました[79]。これらのものがいつかなくなるかもしれないと示唆することは、イスラエル人にとって冒とくであり、考えられないことでした。しかし、契約の箱も神殿そのものも破壊され、至聖所の雲が永遠に消えるのを神がお許しになる時が来ました。これらの象徴がなくなっても、神とその栄光が衰えるようなことは決してありませんでした。むしろ、このような象徴に対する神の優越性が示されました。それらの象徴はすべて、より良い、より偉大な事柄、現実のものの影に過ぎなかったのです[80]。

神の御子の亡くなられた方法から、十字架は歴史的に御子の死とそれが人類に意味する事柄の象徴としてキリスト教を奉じる宗教全般に用いられてきました[81]。使徒パウロはその刑具（『新世界訳』では「苦しみの杭（くい）」と呼ばれる）を、彼が宣べ伝えたいた良い知らせの真髄を表すものとして語りました[82]。しかし、ある人たちはそのような象徴をそれ自体が神聖であるとし、あたかも自分たちを害悪から、悪霊の力から守ってくれるお守りであるかのように魔法に近い力をその象徴に帰します。このように象徴を迷信的に曲解することで彼らは、神の御子――地上におけるその目的がこの象徴に集約されている――に偽っているのです[83]。

このような象徴について言えることは、神のご性格を含めて、その方を象徴するのに使われる語にも言えます。テトラグラマトンの四文字で表される御名（ヤハウェまたはエホバ）は、わたしたちの深い敬意に値します。というのも、キリスト教時代以前に神が人、特にご自分の契約の民であるイスラエルと関わられた長い歴史

78　その例として、民数記21:9; 列王第二18:4をどうぞご覧ください。

79　出エジプト記25:17-22; レビ16:2。

80　ヘブライ9:1-5; 10:1。

81　キリストの処刑に使われた道具が「杭」なのか「十字架」なのかを巡るものみの塔の論争はあまり意味がないとわたしは思っています。ローマ人が処刑のために十字架を頻繁に**使用していた**ことをわたしたちは知っています（これは今や一般に知られています）。そして、古代において十字架が性的な意味合いを持っていたとしても、人を処刑するのに使用された場合は性的な意味合いがまったくなかったことは明白です。ものみの塔協会は、ギリシャ語のスタウロスが「杭」や「棒」を指していると主張しながらも皮肉なことに、これに関連して棒が男根の象徴として非常に一般的で、その意味合いにおいて十字架と同じくらい性の象徴であったことにはまったく触れていません。『目ざめよ！』1964年7月22日号8-11頁［英語］および『ものみの塔』1974年11月1日号649, 650頁をどうぞご覧ください。

82　コリント第一1:17, 18; ガラテア6:14; エフェソス2:16; フィリピ3:18。

83　マタイ7:21-23を比較なさってください。襟に国旗を付けていても、その人が純粋に愛国心を持っていることの証明にはなりません。同じように、十字架を目立つように身に付けていても、その人がキリスト者であることが決定的に証明されるわけでもありません。中には十字架を身に付けていなければ落ち着かず、不安を抱くことさえあることを認めないわけにはいかない人もいるでしょう。そうであれば、そうした象徴への依存によって、それに表されるものを遠ざけ、現実のその重要度を奪っていないかどうかを直視していただきたく思います。

の中で、それは非常に重要な位置を占めていたからです。しかし、テトラグラマトンは、どのように発音されようとも、神の象徴に過ぎません。神の御名として使われているとしても、それに象徴される方と同等の重要性をその語に帰するのであれば、わたしたちは重大な誤りを犯すことになります。また、その語自体を、害悪から、悪霊の力から自分たちを守ることができる一種のおまじない、魔除け、お守りと見なすのであれば、それははるかに悪いことです。そうすることでわたしたちは、神の「御名」の真の重要な意味を実は見失っていることを示しているのです。御名を、国旗や十字架を掲げるように、でかでかと掲げることはできても、それはわたしたちがまことの神に純粋な畏敬の念を抱いていることの証明にはなりません[84]。

エホバの証人の中には、組織が取っている立場の多くがいかに神の教えから逸脱しているかを理解するようになった人や、組織から脱会した人もいますが、それでもこの状況を正すために神は何か**しなければならない**という気持ちを言い表すことがあります。「エホバの組織」と名乗っているからには神から特別な配慮を受けるに違いないと感じるのでしょう。これまで考慮した聖句による証拠すべてに照らして、主イエス・キリストの父であられる全能の神が、「神の御名によって」疑いなく語っていると主張する世界のどの宗教――「神の教会」運動、「キリストの教会」運動、あるいは何億もの信者を擁するローマ・カトリック教会など――よりも、「エホバの証人」という名の宗教運動に深い関心を寄せておられると信じる理由はありません。神が幾千もの他の宗教に問題や過失があっても放っておかれる一方でものみの塔組織の大掃除のためには特別な行動を取らざるを得ないと考えるのは、聖書的に理にかなっているとは思えません。イスラエル人ほど、テトラグラマトンに表される名（ヤハウェまたはエホバ）と密接に結び付いている民は地上にいません。「あなた方はわたしの証人である」という言葉は元々イスラエル国民に向かって発せられました。とはいえ、神はその国民を「正す」ことをなさいませんでしたし、御子もそうでした。国民（特に国の指導者）の側には、変化を望む気持ちがありませんでした。同じように、ものみの塔にも組織としてその気持ちがないという証拠があります。

神が「ご自分の御名のための民を取り出された」ことには、単にその方を指す語を用いるよりもはるかに深い意味があり、わたしたちが神の御名を神聖なものとし、告げ知らせる人々の一人であることを示すには、ヤハウェやエホバなど一つの語をただ繰り返し使用するよりもはるかに多くのことが求められます[85]。ちょうど旗を掲げたり振ったり、あるいは十字架を身に付けたりそれに接吻（せっぷん）したりすることは簡単でも、それらによって表される原則に一致して生きることははるかに難しいのと同じように、ある語を名として口にすることは比較的簡単ですが、そのような

---

84 詩編33:21; 118:10, 11; 箴言18:10など、神の御名を信頼し、御名によって敵に抵抗し、避難所として御名に駆け込むという聖句は、象徴に過ぎないその名によって表される方に信仰を置くことを意味しているのは確かです。

85 使徒15:14。

名に象徴される方を尊ぶことははるかに難しいのです。その方の子であることを生き方で示し、すべてのことにおいてその方に見倣い、その方の御子を模範とすることによってのみ、わたしたちは真の意味で御父の名を純粋に尊び、知らせることができるでしょう[86]。

86　マタイ5:43-48。

第17章

良い知らせの偉大さ

あなたがたを招いてくださった方から、こんなにも早くあなたがたが離れて、違った福音に従おうとしていることに、わたしは驚き入っています。—ガラテヤ1:6, エルサレム聖書。

キリスト者の自由の基盤は、御言葉に記されている良い知らせの中に見出すことができます。その良い知らせを告げ知らせることこそが自由への呼びかけなのです。それ以外のところへ導かれるのであれば、それは良い知らせではありません。自由へ導かれるゆえに、それは「栄光ある良いたより」、その始まりの当初から「大きな喜びとなる良いたより」、その良い知らせを分かち合うほど人々のためにできる素晴らしい奉仕はないのです[1]。それは人々に恐れ、罪悪感、不安からのはるかに大きな解放をもたらし、それらを自信、希望、思いと心の平安に変えていきます。しかし、そのためには、その良い知らせを、不純物の混じった人為的に操作された形で説いていてはできません。

良い知らせを世界に知らせるための緊急の取り組みの一端を自分たちは担っている、とエホバの証人が信じていることに疑いの余地はありません。エホバの証人は、自分たちが届ける音信を聞いて受け入れるかどうかで人々の命が左右されると信じています。この信条の深さやそれが生み出す動機は証人によって異なるかもしれませんし、実際に異なりますが、それでも少なくとも証人は全体として、ただ教会に通うだけの受動的な聞き手でないことは認めなければなりません。

ほとんどの証人にとって、ものみの塔組織が神の器として神に承認された唯一の組織であることの最も強力な証拠の一つは、この組織が「王国の良いたより」を知らせ、最終的な終わりに先立つと予告された「あらゆる国民に対する証し」を果たそうとしている地上で唯一つの組織であるという信条です[2]。60年ほどにわたってものみの塔の教えは、「羊とやぎ」のたとえ話と「あらゆる国」の人々が二つの級に分けられること、個人のとこしえの運命が天秤(てんびん)にかけられることは、エホバの証人がものみの塔の文書を配布して多少なりとも再訪する、その戸別訪問によって果たされているというものでした。現在では、「羊とやぎ」を分ける実際の裁きはまだ先のことであるとしながらも、その布教活動はすべての人にとって結果を左右する

1　コリント第二4:4; ルカ2:10。
2　マタイ24:14。

重要な役割を果たしていると見なされています[3]。証人に戸別訪問活動を促す際に組織はしばしば、エゼキエル書9章の幻に登場する「書記官のインク入れを帯びた人」に与えられたエホバの指示を利用してきました。そして、来たるべき滅びを免れる人の「額に印を付ける」使命をこの象徴的な人物が果たせる唯一の方法は、一人一人のところに行くこと、主にその家に赴くことであったと主張しています[4]。

ここでも、エホバの証人が、そしてエホバの証人だけが、この「印を付ける」仕事を世界中で果たしているとの主張がなされてきました。彼らの中の8,600人ほどの「油そそがれた」者たちが現代の「見張りの者級」であり、「もちろん、エホバの『見張りの者』の言葉を聴こうとしない人々には、生き残れる見込みはありません」ときっぱりと言われました[5]。彼らの音信を受け入れる者は額あるいは知性の座に救命の「印」を受けます。証人はその仕事に参加しないなら死ぬ者に関して「血の罪」を負うことになりかねないと言われています。この生死を左右する証しをし、印を付け、人を分ける仕事はすべて、1914年に存在していた世代の存命中に完遂されることになっていました。これがすべて真実であり、他の宗教とは別に自分たちの組織だけが単独にこの重大な世界的任務を果たしていることの証拠として、証人は絶えずさまざまな国での増加に関する報告を受けました。

それらの主張はどの程度妥当だったでしょうか。また、掲げられた目標はどの程度実現したでしょうか。

「世界的な証言」はどれほどグローバルなのか

1870年代後半に米国で始まったエホバの証人は、今日では212の国と島で活動しています。年間何百万時間も費やして証しを行い、何億冊もの出版物を何十もの言語で配布していることはすべて明白な事実です。ものみの塔組織が自らの音信を国際的に布告する点で顕著な成果を収めていると言うだけで満足していたなら、それに異議をとなえる理由は何もなかったでしょう。しかし、ものみの塔組織はそれをはるかに超えて、神はご自分の器としてこの組織を通し、しかもこの組織だけを通して良い知らせを全人類に知らせておられ、このようにして「地に住む者たちに、またあらゆる国民・部族・国語・民に喜ばしいおとずれとして宣明する永遠の良いたより」を携えているみ使いの幻を成就させておられると主張しています[6]。

組織が自分について抱いているイメージの一例として、『ものみの塔』1985年3月1日号に掲載された「地の暗闇のただ中で光を放つ」と題する、イザヤ書6章を扱った記事があります。この預言の8節から11節を論じる中で、記事は光が特に1919年以降に「放たれ」、「油そそがれた」証人の数が減少していることに言及した上

3　『ものみの塔』1995年10月15日号18-28頁をどうぞご覧ください。また、『良心の危機』第10章もご覧ください。そこには「1914年の世代」に関する主だった教えの変更について書かれており、その変更に伴って「羊とやぎ」に関する教えも変更されたに違いありません。

4　エゼキエル9:1-11; 『ものみの塔』1985年3月1日号14頁をどうぞご覧ください。

5　『ものみの塔』1988年9月15日号14, 15頁。

6　啓示14:6。

で、次のように述べています（16, 20頁）。

> この年老いてゆく人々のグループは、一人また一人とその成員が忠誠を保って地上の歩みを終えるにつれて、しだいに小さくなっています。いま残っているのは9,000人ほどです。しかし、幾百万という数の他の人々は、はとのように、「巣箱の穴」つまり「はと小屋」に群がり、神の組織に避難所を見いだしています。（［イザヤ60:8］新世界訳、新英訳聖書）それらの人たちは、特定の時期にパレスチナで見られるはとの群れ、まさに雲のように飛んで来て、実際に空が暗くなるほど数が多いはとの群れのようです。
>
> 次いでエホバは、ご自分の組織に語りかけ、「あなたに仕えない国民や王国は滅びうせ、諸国民は必ず荒廃に帰する」と述べておられます。［イザヤ60:12］誇り高ぶる世の諸国民すべて、および他の反対者たちはハルマゲドンで恥辱を被ります。エホバは……次のように宣言しておられます。「わたしはあらゆる国民を激動させる。あらゆる国民のうちの望ましいものが必ず入って来る。わたしはこの家を栄光で満たす」。（ハガイ2:7）しかし、迫害者、背教者、他の不敬な反対者たちは、エホバの証人が実際に神の組織を代表していることを渋々認め、「エホバの都市、イスラエルの聖なる方のシオン」に「身をかがめ」ざるを得なくなるでしょう。—イザヤ60:12-14。

「エホバは『速やかにそれを行なわれる』」と題された次の記事は、さまざまな国における顕著な数的な拡大の例を挙げ、その結論としてこう述べています（22頁）。

> わたしたちは、近年エホバがものみの塔の支部施設の拡大を非常にすばらしい仕方で顧みてくださったことに歓びを覚えます。今日、それらの支部には、「はと」の大群を助けるための備えができています。
>
> それでは、王国の良いたよりの光をさらに幾百万もの人々に輝かせる業に、わたしたちすべてがあずかりましょう。巣に戻るすべての「はと」に、エホバの組織の保護の城壁の内側にある「救い」の道を指し示し、その門のところでエホバへの「賛美」を増し加えてゆきましょう。

エホバの証人は確かに世界の多くの国々で著しい成長を遂げており、ある地域では他の地域よりもはるかに大きく急速に増加しています。ご覧のように、このような拡大が神の祝福を確信させる証拠として非常に重視されています。しかし、宗教の数的な成長ははたして、その宗教が神に特別に選ばれたことを示す安全な指標ないし指針なのでしょうか。

セブンスデー・アドベンチストやモルモン教といった宗教も、ものみの塔組織と同様に十九世紀に米国で生まれた宗教ですが、エホバの証人とほぼ同じ成長率を記

録していることが指摘されることはありません[7]。明らかに、もし数的な成長が神の是認と祝福の有無の判断基準であるならば、ローマ・カトリックの信仰が何世紀にもわたって、殊に四世紀以降、世界的に大きく成長したことは神の祝福を受けていることの証拠となるはずです。しかし、ものみの塔組織は自らの主張を裏付けるために用いた基準を他の宗教には適用しません[8]。

もし目標が国際的なステータスとメンバーシップであったなら、その目標は達成されました。しかし、滅びが訪れる前に――ハルマゲドンまで残り“数年”と言われるその間に――ものみの塔の音信を全人類に届けることが目標だったとしたら、その結果は達成にすこぶるほど遠いと言わねばなりません。

今や十億人を突破した中国の人口は世界人口の五分の一を占め、その巨大人口の中でエホバの証人はほんの一握りしかいません。

インドには約2万5,000人の証人がいますが、インド人口が十億人を超えているので、約4万3,000人に対して証人が一人ということになります。インドの証人の数が増加しているとはいえ（近年は3パーセントの割合で増加している）、インド人口も毎年約2万6,000人の割合で増えています。現在、インドの証人が「野外奉仕」に費やしている時間は一人当たり一日平均約一時間です[9]。この割合では、もし仮に一人にわずか二十分の「証言」で神の裁きが決まるとしても、一年間に証人が到達できるのは国民の一パーセント強にすぎません。しかし、インド人口の増加率は年間三パーセントです。しかも、「証言」に費やした時間の大部分は、「再訪問」や「家庭聖書研究」で同じ人に話をしたり、単に以前に網羅した「区域」に戻って話をしたりすることなのです。すべての要因――インド人口の年間増加率、証人の年間3%の増加率――が今と同じように続き、費やしたすべての時間の80%がこれまで「証言を受ける」機会のなかった人とコンタクトすることに専ら充てられたとすると、2014年までに証人が「生死を分ける」審判のための二十分間の証言を行えるのはインド人口の約半数ということになります。しかも、その機会が訪れる期間の長さは組織が描くシナリオに単純に合っていません。証人は常々、「わたしたちは『大患難』の瀬戸際に立っている」と言われているからです[10]。

人口1億4,100万人のパキスタンでは、この比率はさらに不釣り合いで、19万2,000人に対して一人の証人です。

中国、インド、パキスタンの人口を合わせると、世界人口の五分の二――実に、

7　例えば、1961年にエホバの証人は90万人、アドベンチストは120万人を報告しました。1984年にはエホバの証人は280万人、アドベンチストは400万人に増加しています。同じ期間にモルモン教の信者もほぼ同じ割合で増えています。数年前、モルモン教会（末日聖徒イエス・キリスト教会）は620万人の信者を報告し、そのうち220万人は米国外の約115の土地にいるとしています。「メンバーシップ」を決める基準はさまざまで、証人は「野外奉仕」の時間を報告した者のみをリストアップしますが、先に言及した他の宗教はより広い範囲を含めます。基準がどうあれ、伸び率ないし増加率がほぼ同じであることに変わりはありません。

8　1920年代にアフリカのザイールでシモン・キンバングによって始められたイエス・キリスト教会と呼ばれる宗教を、現代の一例として考えることができるでしょう。20世紀末に教会員は数カ国で700万人近くに達しました。

9　この平均は全時間の「開拓者」と「会衆の伝道者」の奉仕時間を合わせたものです。

10　『ものみの塔』1985年3月1日号21頁のとおり。

地球に住む五人に二人——を占めます。そして、この膨大な人口のうち、ものみの塔の音信を少しでも知っている人はほんのわずかです。正義と愛に満ちた神がこのようなひどく不均衡で脆弱(ぜいじゃく)な基盤の上に全人類の生死を分ける審判を下すことができると信じるのは、どの組織であったとしても単なるエゴイズムとしか思えません[11]。

これに加えて、アラビア、北アフリカ、西アフリカ、インドネシア、バングラデシュ、アフガニスタン、トルコなどイスラム教徒が多い国々にいる6億3,500万人余りについてはどうでしょう。これらの国でもコンタクトが取られてきたのは人口のほんの一握りです。1978年にわたしは「地帯訪問」の旅でモロッコを訪れた時、そこのものみの塔の宣教者たちから、イスラム教徒に証言しようとするのではなく、キリスト教徒の多いその国の少数のヨーロッパ人に限定して証言するようにとブルックリン本部から厳しく指導されていることを聞きました[12]。

事実、エホバの証人が言及に値するようなコンタクトを取っているのは、せいぜい地球人口の二分の一程度です。国によっては網羅率が高く、ヨーロッパや西半球の他の国々では数週間に一度という頻度で証人が家庭を訪問しています。とはいえ、ものみの塔組織が誕生した米国を含むそうした国々でも、戸口で語られることは短く、大抵はごく日常的にほとんどいつも文書の提供が中心となっているというのが実情です。大多数の人々は、組織が何を教えているのか、その音信が一体何なのか、漠然としか知りません。そのような国の人々にエホバの証人について知っていることを無作為に尋ねるだけで、証人のことを基本的には善い人と見てはいても証人の宗教についてその人々が知っていることといえば、戸別訪問で文書を配っていること、他の宗教と対立していること、輸血を受け入れないこと、選挙に行かないこと、あるいはそれに類する否定的な立場ぐらいであることが分かるでしょう。

多くの証人は基本的に善良なゆえに、自分たちの組織の布告に対する反応によって地球住民の永遠の命か永遠の滅びかの運命が決まるらしいという考えに心を乱されます。中国、パキスタン、インドのような国で何億人もの人がハルマゲドンで死ぬ（復活の可能性はない）ことは「共同責任」と呼ばれるものによって正当化されるとの見解が取られています[13]。しかし、その見解はそうした憂慮を打ち消すのにほとんど役立っていません。ある政府がその支配下の国でものみの塔組織の活動を制限する場合、国民は政府を支持しているのだから、ものみの塔組織とその音信を拒否した連帯責任を自動的に負うという主張は、これら何億人もの男女、子どもの永遠の滅びを正当化するための無理なこじつけであることが分かります。大多数の庶民がものみの塔組織の音信が何であるか微塵(みじん)も知らない、あるいはその存在にすら気付いていないかもしれないことを考えると、尚更そうです[14]。

11　これらの段落で引用された数字は『ものみの塔』2004年1月1日号から引き出したものです。
12　この規則は、布教活動のかどで国外に追放されるのを避けるためでした。
13　『ものみの塔』1971年4月15日号235頁; 1965年9月1日号526, 527頁;『目ざめよ！』1963年11月8日号27, 28頁［英語］をどうぞご覧ください。
14　例えば、『ものみの塔』1958年3月15日号112,113頁をどうぞご覧ください。

同様の理屈は、1980年にニューヨークでその地区に住むフランス語圏の証人（主にハイチ出身者）のために開かれた地域大会で語られた表現にも見られます[15]。ものみの塔の会長フレッド・フランズはプログラムの中で聴衆に向かって話をし、その中で以前ローマ・カトリックの司祭を目指して勉強し、現在エホバの証人と勉強している男性と交わした会話について触れました。この男性はハルマゲドンについて質問し、「エホバの証人になった人だけがハルマゲドンを生き残り、それ以外の人は永遠の滅びを受ける」というのははたして本当だろうかと尋ねました。それに対して会長は、「御言葉はそう示しているようだ」と答えたと言いました。男性は、「でも、幼い子どもでも？」と返しました。会長は、「まあ、小さなシラミはやがて大きなシラミになるし、小ネズミは成長して大人のネズミになる」と返答したと言いました。彼が大会出席者全員の前でこの経験と返答を語ったことは、そのような見解が妥当であると信じていたことをはっきりと示すものでした。

そのような答えに心を惹（ひ）き付けられた人ももしかしたらいたかもしれませんが、わたしには何とも言えません。しかし、そうでない人にとっては、ひどく心を乱されるものであったことに間違いありません。また、組織の主張が自己中心的であるがゆえに、組織が行っていることの重要性についての独断と誇張に満ちた主張にいくらかでも妥当性を与えるために人はこのような極端な視点を持つようになるのだろうとも思います。

組織はこれと同じようにきわめて排他的な立場を取っているゆえに、他の宗教団体が「王国の良い知らせ」を布告するために行ったこと、あるいは行っていることを少しも考慮に入れないか、少なくともその努力の重要性を極端に過小評価しています。1979年、西アフリカの上ボルタで証人の「家から家へ」の活動に同行した時、首都ワガドゥグでは複数のアフリカ言語が話されていたため、宣教者が二、三の聖書翻訳を持っていたのを覚えています。その時わたしは、そのような聖書翻訳がなかったら彼らの証しのかなりは著しく制限され、不自由なものになっていたであろう事実を考えました。しかし、それら聖書翻訳はものみの塔組織を通して手に届いたものではなく、他の宗教団体の宣教師や通訳者によって生産されたものでした。聖書の全部または一部を1,900以上の言語に翻訳した功績は実に驚くべきものです[16]。ものみの塔協会は、その功績の事実には注意を喚起しても、それを成し遂げた人々がエホバの証人ではないという理由だけで、その功績を認めることには消極的です。しかし、聖書は良い知らせの源泉であり、キリストとその使徒や弟子によって伝えられた良い知らせを元の形で、変更されず不純物の混じっていない形で読むことができる場所なのです。

上ボルタ（現在のブルキナファソ）だけでなく、セネガル、マリ、コートジボワール、ベニンを訪問して、それらの土地――主な宗教がアニミズムとイスラム教である――のいずれにおいても証人の数はせいぜい数百人しかいないことが分かりま

15　大会は8月7日から10日にかけて、エホバの証人のロングアイランドシティ大会ホールで開かれました。

16　『目ざめよ！』1990年7月8日号28頁。

した。しかし、カメルーンに到着すると、そこには1万人以上の証人がいるではありませんか。なぜこんなにも違うのでしょうか。大きな違いは、カメルーンではキリスト教を公言している人口の割合がはるかに多かったことです。この状況は、カトリックやプロテスタントなど他の宗教組織が先に布教活動を行った結果であり、ものみの塔組織がそこに登場するより前に達成されていました。このことは世界の多くの国でもそうで、ものみの塔の活動の成功の度合いは、どの国においても、それ以前に他の教会組織がその国に聖書を伝えた程度に並行していることが多いのです。証人がいる場所では実質どこでも、すでに他のキリスト教団体がそこにあり、殊に御言葉の翻訳において少なくともある程度道を切り開いていました。そのように教会システムがまだ基礎を据えていない所では、証人の努力によってかなりの数の改宗がもたらされることはほとんどありません[17]。

一世紀の使徒時代が終わって、その後の十七世紀間――1870年代後半にものみの塔組織がついに現れるまで――に、良い知らせを広めるために成し遂げられたことはほとんどないと思わせることは、マタイ28:18-20のイエスの言葉を甚だしく空虚なものにしています。イエスがご自分の追随者に堅く約束なさったのは、「わたしは世の終わりまで、いつも［つまり、どんな時でも常に］あなたがたと共にいます」ということでした。

証言の効果はいかほどか？

> *ラッパがはっきりした音を出さなければ、誰が戦いの用意をするでしょうか。これと同じように、あなたがたも舌で、良く分かる言葉で話さなければ、何を言っているのか、どうして分かってもらえるでしょうか。それでは空に向かって話していることになります。*―コリント第一14:8, 9, 新国際訳。

この証言活動の量と広がりはさておき、その質はどうでしょうか。チャート上の数字だけでは、これは分かりません。

表面的に見ても明らかに問題があるのが分かります。「良い知らせを宣明する」と呼ばれるものの大半を占めるのは、書籍や雑誌を単に提供して配布することであり、そのほとんどは読まれることもありません[18]。わたしは五十年の活発な奉仕の間、多くの国で何千人もの証人が戸別訪問するのに同行しました。彼らが人々に語

17　中国（かろうじて証人が足場を築いている）でも、1966年から1976年にかけて暴力に訴えた文化大革命以来、4,000ほどのプロテスタント教会が再開しています。1980年以降、中国では290万冊もの聖書が生産され、1986年には聖書協会世界連盟（UBS）から500万ドルの印刷設備費が提供され、生産量が大幅に増えました。政府の強い制約が依然として残っていることを考えれば、このことは尚更注目に値します。しかし、この仕事を推進し成し遂げている人々は皆、ものみの塔の教理によれば、キリスト教の大いなる妖婦であり暴力的な敵である「大いなるバビロン」に分類されるのです。

18　第6章188, 189, 198, 200, 203頁［英語］に引用されている、時間および文書「配布」の報告が一般的にほとんどの「伝道者」の目標であるという趣旨の、高位の代表の発言をどうぞ参照なさってください。

ったことが、キリスト教の効果的な証しと言うにふさわしいものであると感じたことはほとんどありません。このような活動によって、み使いの指示のもと人々を羊とやぎの階級に分けて、生死を分ける天秤（てんびん）にかけるという主張が何十年にもわたってなされてきました。戸別訪問でわたしが聞いた証言――それに関しては、組織の「野外奉仕」の指示に従ってわたし自身が行った証言も含む――を受け入れるか否かで、公正な神が、人が救われるに値するかどうかを判断なさるなどとは、わたしには信じられません。ほとんどの聞き手に残る全体的な心象は間違いなく、宗教文書を売ったり、特定の分派の信条を唱えたりすることに関心がある人たちというものでしょう[19]。

同様に重要なのは、訪問した人をさらに援助しようという真剣な関心が一般的に欠けていることです（わたしが記憶している限り、これはこの組織につきものの態度です）。もちろんこれはすべての証人に当てはまることではありませんが、生涯にわたって証人と関わってきた経験から、そうでない証人はむしろ例外であるということを、他の人の証言に加えて証しすることができます。ほとんどの証人は、一時間かそこらの戸別訪問で証言に費やすという「義務」を終えると、満足感に浸ります。「時間を入れる」ことがなされ、これが主な関心事であることは明らかです。文書を受け取った人の大多数は再訪問されることはありません。膨大な量の文書が配布される一方で、この大規模な配布の効果は驚くほど限られています。

ある長年の長老は、1970年代後半に組織からコメントを求められて、本部にこう書いています。

> わたしたちはアメリカ全土をわたしたちの文書で埋め尽くしました。世界の他の地域も同様です。出版した何百万冊もの書籍や雑誌、小冊子のうち、どれだけの割合が読まれることがあるのかを正直に自問すれば、読まれているのはごくわずかであることが分かって驚くでしょう。
>
> 兄弟たちの間でさえそうで、事実を直視すれば、献身した家庭に入って来る文書のうち大部分の兄弟に読まれたことがあるのは、おそらく半分以下でしょう[20]。

尊敬されている別の長老も、組織から観察を求められて、その返信にこう書いています。

> 前述したように、わたしたちの文書は伝道者［証人］にも一般の人にも読まれていません。伝道者の三分の一ほどは文書を読んでいますが、一般の人はもっと少ないでしょう。実際に幾人かの長老から、384頁や416頁の書籍を一般の人に配布することに罪悪感を感じると言われたことがあります。火曜日の夜にそれらの書籍を勉強して疲れるもの

19　バプテスマを受ける人の数に比べて、毎年世界中で膨大な時間が費やされていることも、この非効率性を示す動かない証拠です。1981年から1990年までの十年間で、バプテスマを受けるまでに至った人に対し、一人当たり平均3003時間の野外奉仕が必要でした。これは一人の人を見つけてバプテスマに導くために、一日8時間を375日間費やすことに相当します。現在の平均は、1950年代の平均の二倍以上です（当時、バプテスマを受けた人に費やした野外奉仕時間は一人当たり平均1283時間でした）。

20　生前は著名な長老であり、組織による不動産取得の中心人物であったダラス・F・ウォレスからのメモランダム。

> だと感じたからです。二度目は読まないし、自分たちがそう感じるなら、まして一般の人は読む気になるはずもないと思うのです[21]。

なされている証言の大部分は実質上「空に向かって」発せられており、それでは伝える効果がありません。何億冊もの出版物の配布それ自体があたかも組織としての達成感となっているかのようであり、大多数が読まれないままであることに対してはこれといった危惧はないのです。書籍や雑誌の戸別配布に代わる、あるいはもっと効果的に人々を助ける方法を探るどころか検討すらされていないのです。巨大な出版システムが構築され、大量の文書が出口を求めて着々と生産されています。配布の必要性が他のもっと重要な必要性よりも優先されます。組織の野外奉仕の月刊紙『王国宣教』はかつて、「家から家へ」の活動において聖書そのものにもっと重点を置くように促したことがありました。しかし、数ヶ月後には書籍や雑誌の提供を続けるよう証人に思い起こさせる記事が必ず掲載され、文書の配布に主眼を置くいつものパターンに戻るのです。

神の御子についての良い知らせは「栄光ある良いたより」と呼ばれています[22]。その布告を、どこかの宗教体制の分派的文書の配布に限定したり、それと同一視したりすることは、良い知らせの壮大さを計り知れないほど減ずることであり、それを拡大するのでなく矮小化(わいしょうか)し安っぽくすることに他なりません。

過去の時代に他の宗教グループによって行われたいかなることもすべて割り引いて、『ものみの塔』1981年8月1日号17頁はこう述べています。

> キリスト教世界のさまざまな宗教組織が幾世紀にもわたって行なってきた王国の福音伝道の業と、第一次世界大戦が終わった1918年以降エホバの証人が行なってきた宣べ伝える業とを、正直な心を持つ人に比較させましょう。それらは、一つの、同類のものではありません。エホバの証人が宣べ伝えているのは、真実の“福音”つまり「良いたより」です。それは異邦人の時が終わった1914年にみ子イエス・キリストが即位することによって設立された神の天の王国に関するものだからです。

ものみの塔組織は自らも認めているように、独自の特別な“種類”の良い知らせを持っており、それはある日付と切っても切れない関係にあります。しかし、これによって次のような疑問が起きます。

元の良い知らせか、それとも改変版か

先に述べた要素よりもさらに重要なのは、このように宣べ伝えられている「王国の良い知らせ」が、キリストとその使徒たちによって宣べ伝えられた「王国の良い知らせ」とはたして同じものであるかということです。イエスの使徒たちが理解していた「良い知らせ」が何であったかは明白に分かります。聖書を取り、『使徒た

21　チャールズ・F・ライベンスペルガーが提出した1978年3月1日付けのメモランダム。彼は本部の元スタッフで、現在も著名な長老です。

22　コリント第二4:4。

ちの活動』の書や使徒たちのさまざまな著述を読むだけで、彼らが伝えた良い知らせとエホバの証人が戸口で語っている良い知らせとの相違に気づくはずです。

ものみの塔のメッセージは、ネガティブな「世界情勢」に対する懸念と、それがもたらす諸問題からの早期救済の希望に焦点を合わせており、その希望は新しい天の政府が指導する絶えず目前に迫る「新しい世」に入ることで実現します[23]。

それは間違いなく大きな魅力があります。厄介な難題をもたらす既存の外的圧力のほうにより差し迫った懸念を抱くのが人の性として普通だからです。証人が「王国」について考えるとき、それが政府であるとの考えが支配的であり、その政府についての見方は現代の政府についてのそれとほとんど変わりありません[24]。ものみの塔協会は実際、「王国」と現代の政府との類似点を引き出す記事や講演の筋書きを発行しており、両者における行政、立法、司法、教育の側面を描いています。その中には、王国が1914年以来「政府」として機能している証拠として、「成文律法を司って与えている」、臣民に「教育プログラムを施している」、さらにそのようなプログラムに「資金調達」していることも含まれており、王国政府の現在の「人口」とさまざまな小国の人口と比較することまでしています[25]。

これに関連して、ものみの塔の執筆者が、他の宗教、殊にカトリック教会の非を責めておいて自分たちの組織もそれと同じことをしていることに気づかないのは驚きです。例えば、『ものみの塔』1984年12月1日号は、教父アウグスティヌスが王国を地上の教会と同一視したことを批判的に述べ、その教えの影響について次の要約を引用しています（6頁）。

> キリストは教会の位階制を通して神の国の王とされている。神の国の領域は、教会の権力や権威の及ぶ領域と境界線を同じくする。天国は、世界における伝道や教会の発展によって拡大する。

しかし、これはものみの塔組織が行ってきたこととほぼ同じことであり、そのメンバーにとって「王国を第一に求める」とは本質的に、「目に見える組織」を支持し、それに従い、その拡大のために働くことを意味します。組織はその領域内で「人口」が増加していることを自慢し、組織と統治体に服することは王としてのキ

23　『ものみの塔』1983年7月15日号16-21頁; 1982年8月1日号8-11頁。それは天の政府ですが、地上に代表者、つまり「君たち」を持つことになっており、その中には、キリスト教以前の著名な神のしもべや、現代の証人の中から「資格のある」人が含まれています。『ものみの塔』1989年8月15日号17頁;『世の苦難からの人間の救いは近い！（1976年）353-359頁をどうぞご覧ください。

24　このような比較を行うのも、王国への言及の中で王国を単なる「政府」ではなく、「現実に存在する政府」、「実際の政治上の取決め」としていることから暗黙のうちに認められるからです。例として、『聖書から論じる』105頁;『ものみの塔』1982年8月1日号9, 10頁をどうぞご覧ください。

25　その例は、『世を照らす者として輝く』（「開拓者」の証人のための1977年版マニュアル）108-111頁［英語］;『ものみの塔』1988年6月15日号5頁に見られます。『ものみの塔』1982年8月1日号10頁には、米国、英国、ソ連の政治首都と、王国を象徴する山の図版が掲載されており、そのキャプションには「人間の諸政府が現実のものであるのと同じように、天の王国も実際の政府である」とあります。『ものみの塔』1991年1月1日号4頁には、証人の「国民」は今やその数において「国連に加盟している159か国のうち約60か国」をしのぐと記されています。

リストに服することと等しいとの見解を表明しています[26]。神の「典型的な政府」であるイスラエル国家に対してもともとは語られたメシアに関する預言を常に自分に当てはめています。例えば、『ものみの塔』1988年1月15日号には次のように書かれています（16, 17頁）。

> 「あなたはこの国民を増し加えられました。エホバよ、あなたはこの国民を増し加え、ご自分に栄光を添えられました。あなたはこの地のすべての境を遠く広げられました」と、喜びにあふれて叫びます。（イザヤ26:12, 15）世界中の210の国や地域で、エホバはご自分の霊的な国民に、羊のような人々を引き続き加えておられます。幾十万という新しい仲間たちがバプテスマを受けています。特別開拓者、正規開拓者、補助開拓者の合計は、最高の月で50万人以上に達します。さらに多くの王国会館や大会ホールが建設されており、幾つかのものみの塔の支部では、ベテル・ホームと工場を拡張し、印刷施設を付け加えています。増加はとどまるところを知りません。
>
> こうした拡大が生じているのは、「平和の君」が地上における神の民の事柄を指導しておられるからです。イザヤが自分の預言の前のほうで述べているとおりです。「ダビデの王座とその王国の上にあって、君としてのその豊かな支配と平和に終わりはない。それは、今より定めのない時に至るまで、公正と義とによってこれを堅く立て、支えるためである。実に万軍のエホバの熱心がこれを行なう」。（イザヤ9:6, 7）この言葉は今日、何と大規模に成就してきたのでしょう。

この記事が述べているように、その「成就」は、真に霊的な面においてではなく、数的な成長——組織の権威の下にもっと多くの人を連れて来る——および資産、建物、設備における組織の拡張に見られるのです。ものみの塔が王国を「地上の目に見える組織」と同一視したことは、アウグスティヌスが王国を「教会」と同一視したことと似ています。

「政府」という考えの絶え間ない強調は、自分の考えや良心を宗教システムに従わせようとする証人の意欲、遵守しなければならない数多くの組織上の規則や方針を次々に押し付けられても、それら「神権律法」を受け入れようとする証人の意欲に疑いなく大きく寄与しています。このような権威主義的な取り決めにおいては会衆の長老や旅行する代表が単にキリストの謙遜な奉仕者および仲間の弟子として見なされるよりも、機能する政府システムの法律と政策を管理する権限を与えられた「政府の代表者」として見なされるほうが、都合が良いのです[27]。

この「政府」重視に付随して、ものみの塔協会は少なくとも1935年以降、あるフランス作家が「霊的物質主義（スピリチュアル・マテリアリズム）」の福音と表現したものを発展させてきました。つ

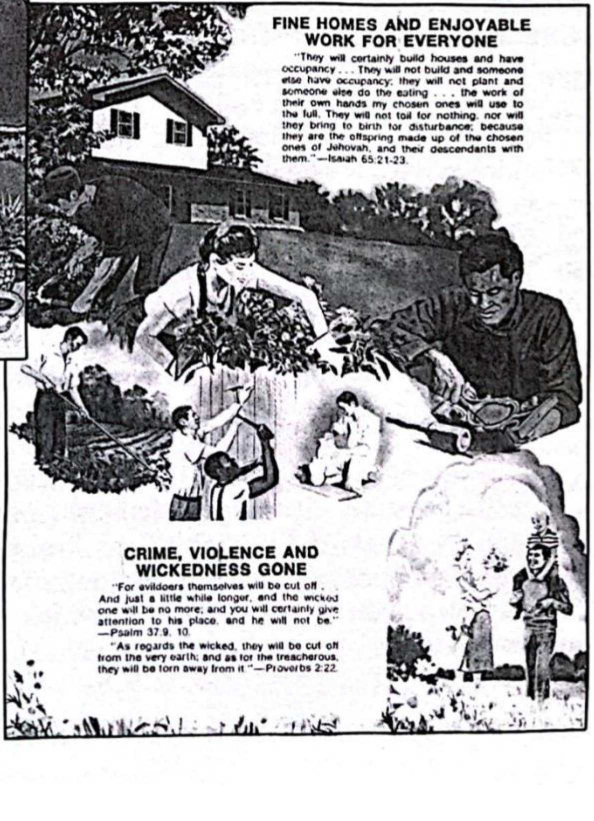
26　第12章426-429頁［英語］をどうぞご覧ください。

27　この政府的な権威が発するオーラをさらに強めているのが、それら長老のうちの「資格のある人」が新秩序で「君主」になるという教えです。「主たる者の地位を無視し、栄光ある者たちをあしざまに言う」というユダの言葉は、「任命を受けたクリスチャンの監督として忠実に仕える、キリストの油そそがれた追随者たち」および「会衆内の責任ある立場にいる人々」にも適用され、「栄光ある者たち」と言及されているこれらの男子に服従を示さないことに警告を与えています。『ものみの塔』1982年11月15日号28, 29頁; 1979年4月15日号25頁をどうぞご覧ください。

まり物質的な欲望を霊的な言葉で包んで訴えかけるのです。これは、物質的、身体的な恩恵を間もなく無限に享受できるという見込みを絶えず強調することによって行われています。選りすぐりの食べ物が豊富にあり、素敵な環境に美しい家々が建ち、老化に伴うしわや衰え、痛みから死のない若さに伴う生き生きとした健康、美しさ、強さへの回帰―これらすべてが、課税、インフレ、健康保険や生命保険の高額費用、事故、災害、犯罪、戦争もなくて手に入るのです。正気の人なら、そのような見込みに魅力を感じないはずがありません。そのような変化を起こせると人々に確信させることができる政治家なら、どの国でも即座に選挙に勝つでしょう。しかし、そのような問題のない、物質的にも身体的にも理想的な生活を望む動機には、ポンセ・デ・レオンが永遠の若さの泉を求めたのと、あるいはムハンマドの追随者が地上の歓びに非常に似通った「第七の天国」の楽園を望んだのと同じく、さほど霊性は求められませんし、もちろんキリスト教の実践もさほど求められません[28]。

28　『ものみの塔出版物索引1986-1989』の「王国」の見出しには「地上に住む人々が受ける祝福」というサブトピックがあります。その中には「イエス・キリストを父親とする」、「エホバとの関係」、「霊的な繁栄」などの項目もありますが、それらは43ほど挙げられている項目のごく一部です。そのほとんどは、「赤ちゃんは健康」、「うつ病が治る」、「汚染がなくなる」、「経済管理」、「経済奴隷制がなくなる」、「砂漠が花を咲かせる」、「自然環境が回復される」、「自然の力は制御される」、「食料は豊か」、「人口の釣り合い」、「身体障害が取り除かれる」、「森林は回復される」、「動物との平和」、「犯罪がなくなる」、「貧困がなくなる」などを扱ったものです。このような項目が多いのは、参照されている雑誌や書籍の中で、約束された物質的・身体的な欲望の充足に重きが置かれている度合いを正確に反映しています。

一世紀に告げ知らされたものとは異なり、組織が説く良い知らせは、身体的な感覚や欲望に強く訴えるものです。コリント第二4:16-18；コロサイ3:2などの聖句と比較なさってください。



1982年の出版物、『あなたは地上の楽園で永遠に生きられます』157-162ページからの挿し絵。これらは身体的な欲望に訴える典型的な例で、特に1935年以降に見られます。

　このすべてにおいて大きな問題なのは、キリストの追随者が宣べ伝えた、新約聖書に記されている良い知らせと比較すると、それが大きく改変され、装飾を施された良い知らせであるということです。キリストの追随者が伝えた音信、使用した言葉は、「政府」にではなく、神の御子キリスト・イエスその人に焦点を合わせてい

ます[29]。「キリストの王国」という表現は、第一義に「キリストの治世または統治」、「キリスト王権の支配」という意味を持っています[30]。キリストに王権をお与えになったのは神であり、これは神ご自身の取り決めであるため、「神の王国」という表現がキリスト王権の支配の同義語としてしばしば使用されています[31]。

キリストの「王国」について語るということは、主としてキリストの「支配権」について語ることであり、このことを念頭に置いて「王国」に言及している聖句を読むなら、ものみの塔の出版物に見られるのとはかなり異なった意味が伝わってきます。キリストの使徒たちの表現を読むだけで、彼らが「王国」について語るとき、それは主に神の御子その人とその方の主権に焦点を合わせていたことが分かります。「王国の良い知らせ」という表現は、単に「キリストの支配権に関する良い知らせ」という意味なのです。

「良い知らせ」という表現は、新約聖書に百回以上出てきます。その中で「王国の良い知らせ」という表現は八回しか出てきません。それ以外ではすべて、良い知らせとは「キリストについての良い知らせ」（あるいはそれに似た表現）であると明記されているか、文脈からして「政府」ではなくキリストその人に言及していることが分かります。

良い知らせの基盤と真髄

使徒や仲間の聖書筆者はメシアの支配権とその影響について説明する際に何を強調したでしょうか。彼らは一貫して、キリストの贖(あがな)いの犠牲、キリストが全人類のために王たる罪と死に勝利なさったこと、御父が復活した御子に権威をお与えになって、御子を信じるすべての人を罪と死の報いから解放なさったことを指し示しています。それこそが―今も昔も―聖書そのものがわたしたちに伝える良い知らせなのです。聖書の良い知らせは、1914年であろうと他の日付であろうと、ある日付に注目したり結び付けたりするものではありませんし、人を魅了する身体的・物質的恩恵が「すぐそこまで来ている」と言って惹(ひ)き付けるものでもありません。それは、

29　使徒8:12を5:42, 8:4, 5, 35と比較なさってください。

30　新約聖書に出てくる「王国」という語はギリシャ語の *basiléia*《バシレイア》に由来しており、ものみの塔協会がそれに与えようとしている「政府」という現代的な意味はありません。『新約聖書神学大辞典』が述べているように、この語は「王たる者のさま、状態、すなわち王の尊厳を指し、第二に、王が治める領土におけるその尊厳の表現を指す。七十人訳聖書、フィロ、および新約聖書では、尊厳の意が第一義となって」います。東洋の国々で王国が（権力と権威に関して）王その人に宿っていたように、焦点は人にあります。参考文献を総合すると、その意は「王権」または「治世」の意であり、現代人が考えるような政府組織のような概念ではないことが分かります。*basiléia* という語の意味は支配権が行使される領域を指すこともありますが、その意は副次的なものです。

31　ルカ19:11-15; 啓示12:10とどうぞ比較なさってください。『新世界訳』はルカのこの箇所の12節と15節で *basiléia* を「王権」と訳していますが、幾つかの版の脚注では代わりの訳として「王国」を挙げています。ルカ19章のたとえ話に登場する身分の高い人が遠くの国に出かけたのは、「政府」を授かって戻って来るためではなく、王権と王としての権威を授かって戻って来るためでした。

一つの出来事、神の御子がメシアとしての第一の使命を果たしてわたしたちのためにご自分の命を捧(ささ)げられたこと、その後神の右に復活して、そこでわたしたちの擁護者として奉仕なさっていることに結び付いているのです[32]。だからこそパウロはコリントの信徒たちに、「わたしは、あなた方の間では、イエス・キリスト、しかも杭(くい)につけられたキリスト以外には何をも知るまいと決めたのです」と言うことができたのです[33]。

良い知らせの中心となるこの出来事は1900年前の出来事であるとはいえ、今日のわたしたちすべてにとって最も重要な出来事であることに変わりはありません。その恩恵の全容をわたしたちが個人的に実感するのはまだ先のことだとしても、人類史上最も重要な出来事が当時起こったという事実は変わりませんし、未来のいかなる出来事によっても凌駕(りょうが)されることはありません。未来は過去のその行為に否応無しに支配されています。わたしたちの将来に待ち受けているどんな恩恵も、現実にはその行為の事後の効果なのです。

使徒たちはキリストの死と復活というその出来事の圧倒的な最終結末と決定的な先取性を認識し、それによって可能となった和解と贖(あがな)いに信仰を置くことの効果を認識し、そのような観点で物事を見ていたのです。そのようにして初めて、自分たちや仲間のキリスト者について、贖(あがな)いの犠牲によって可能となった至上の祝福と恩恵をあたかもすでに持っているかのように語ることができたのです。

神の約束の将来の成就を減少させてまで現在に焦点を合わせることには疑いなく危険があります。（コリント第二4:8; 5:1-10を比較なさってください）この間違った視点の例がテモテ第二2:17, 18に示されています。（コリント第一15:12も比較なさってください）希望はキリスト者の主要な要素であり、希望は将来のことに関連します。（コリント第一13:13）

とはいえ、神の約束の多くがキリスト者の生活に霊的な意味で現在適用されていることを認識しないことには、弊害があります。神の僕が聖霊によって「証印を押される」または「押印される」ことは、約束の相続財産を保証する「誓約」、「手付金」（「前金」, アメリカ翻訳; 「事前の印」, 新世界訳）でもあります。（エフェソス1: 13, 14）このように神の約束の多くが現在適用されていることは、信仰を強め、希望を強める効果があり、真剣に認識するに値するのです。

明らかに、キリスト者の希望が完全かつ全面的に実現するのはまだ先のことです。使徒ペテロはこのように、「神の約束によってわたしたちの待ち望んでいる新しい天と新しい地」について書いています[34]。同時に、ペテロも新約聖書の他の筆者も、神の約束の多くが信者に対して実際に、あるいは霊的な意味ですでに成就しつつあると語っています。それらの約束は霊的な見込みであると同時に霊的な現実で

32　ヨハネ第一2: 1, 2。また、使徒2:14-36; 10:34-43に記録されている、ペンテコステおよびコルネリオの家で異邦人に語りかけた時のペテロの説教もどうぞ考慮なさってください。

33　コリント第一2:2。テモテ第二2:8と比較なさってください。

34　ペテロ第二3:13。

あり、聖書がそれらの約束を述べる際には“すでにと同時にまだ”の要素を持つものとして表現されることもあります。究極的な成就がまだ将来であることを見失うことはありませんが、啓示21:1-5の箇所に述べられていること――証人が将来の「新しい世」の描写としていつも言及する――の多く、もしかすると全体は、現在成就していることが分かります。啓示に先立つ新約聖書の著述において、「新しいエルサレム」によって生み出されるとして述べられている事柄のほとんどが、ある意味で、それらが書かれた当時にすでに存在していたものとして語られていることも証人は見落としています[35]。

たとえば、啓示21:3は、「神の天幕が人と共にあり、神が彼らと共に住み、彼らがその民となり、神みずから彼らと共におられる」ことを述べています。神の御言葉は、キリストの贖(あがな)いの犠牲が、信じる男女を神と和解させ、神との敵対状態から平和と友情の状態へと導いたことを示しています[36]。そのため、使徒はまさにその当時のキリスト者を、「神の霊が宿っている」「生ける神の神殿」、「神が霊によって住まわれる所」として語ることができ、啓示21章にあるのとまさに同じ表現のイザヤ書の預言を引用することができました。

> 神が言われたとおりです。「わたしは彼らの中に住み、彼らの中を歩くであろう。そしてわたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」[37]。

神が人と共に住まわれ、人がその民となるというこの約束を、使徒は成就したものとして提示しています。将来のこととしてではなく、すでに効力がある関係として提示しているのです。仲間の使徒ペテロも、「あなた方はかつては民ではありませんでしたが、今は神の民である」とはっきりと述べています[38]。キリストの犠牲と、それによって可能になった御父との和解のゆえに、啓示の記述に描かれているように、「神の天幕」は一世紀において確かに人と共にあり、神は今や彼らの間に

35　啓示1:1によれば、ヨハネに与えられた啓示は、「ほどなくして必ず起きる事柄」を示すためでした。その幻は特に神の究極の裁きに関連して未来を頻繁に指し示していますが、啓示を読むと、述べられている事柄の多くはすでに起こったか、その時に起こっていたことが分かります。ほんの一例として、2章と3章は小アジアの7つの会衆の未来のことではなくその当時の状態を扱っています。4章の神の天上の栄光、犠牲の子羊と子羊による人類の買取に関する幻は、未来の状況や出来事ではなく、当時の状況や出来事に関するものでした。啓示22章の「命の水の川」も当時流れており、「だれでも」来て「命の水を値なくして受けなさい」との招きは、遠い未来まで待つ必要はなく、良い知らせを人々に知らせることですでになさていたのです。（啓示22:1, 2, 17。ヨハネ4:7-14; 6:35; 7:37, 38を比較なさってください。）これらの幻を、新約聖書の他の箇所で述べられていることと比較して初めて、現在か未来かの要素や適用を決めることができます。というのも、象徴的なものは、他の箇所で事実として明確に述べられているものによって常に理解されなければならないというのが決まりであって、その逆はあり得ないからです。

36　ローマ5:10; 8:7; ルカ16:9。ヤコブ2:23を比較なさってください。

37　コリント第二6:16。コリント第一3:16; エフェソス2:22もどうぞご覧ください。

38　ペテロ第一2:10。

住まわれ、彼らはその民となったのです[39]。

　啓示の記述の4節には、神が「彼らの目からすべての涙をぬぐい去ってくださり、もはや死はなく、嘆きも叫びも苦痛ももはやない」と記されています。この聖句の最初の部分、神がすべての涙を拭い去ってくださり死がなくなるという部分は、イザヤ25:8と内容が完全に一致しています。コリント第一15:54で使徒パウロはイザヤの預言のこの部分を引用していますが、それは地上の楽園の状態を指してではなく（ものみの塔出版物がよく行っているように）、キリスト者の復活と死すべきものから不滅のものへの移行に関連しています。しかし、ある意味で、彼らにとって「死に対する勝利」はすでに得られており、死の「とげ」は取り除かれているのです。キリスト者は肉体においてはまだ死にさらされていましたが、非常に重要な意味で、死の力を超えており、それに勝るキリストの贖(あがな)いの力に信仰を保つことによって死の力を超えたままでいることができました。「自分の罪過と罪にあって死んでいました」が、神が「生かして」くださったことを知っていました[40]。罪に対して死んで「命の新たな状態」によみがえった彼らにとって、「王たる死」の支配は終わりました。キリストの支配権を通して、彼らは「王たる死」の支配と掟(おきて)の下にもはやいませんでした[41]。そのため、使徒ヨハネは、「わたしたちは、自分たちが兄弟を愛しているので、［死から命に移るではなく］死から命に移ったことを知っています」と言うことができました[42]。そう言うことによってヨハネは、イエスが語られた、ご自分に信仰を置く者はその信仰のゆえにすでに永遠の命を持っているのと同じ表現を繰り返しただけなのです[43]。だからこそイエスは、「わたしに信仰を働かせる者は、たとえ死んでも、生き返るのです」とだけでなく、「生きていてわたしに信仰を働かせる者はみな決して死ぬことがありません」とも言うことがおできになったのです[44]。これらの力強い言葉はどれも、「もはや死はない」という啓示の言葉と同等の力を持っており、それらの言葉はすべて、キリストの贖(あがな)いの結果がすでに追随者の間で有効であったことを示しています。

　嘆き、叫び、苦痛に関しては、キリストは以前の預言で予告された使命を果たすため、すなわち「貧しい人に良い知らせを伝えさせ……打ち砕かれた心を包み……悲しむすべての人を慰め……悲しみの代わりに歓びの油を、絶望の代わりに賛美の衣を

39　またヘブライ8章から10章にかけて、霊感を受けた筆者は、神がその民イスラエルの間に象徴的におられた以前の地上の幕屋が、より偉大な神の天の「天幕」を表現していたことを示し、これが「今すでに来ている定められた時のための例え」であったと述べています。（ヘブライ9:9）さらに、天の天幕がすでに存在していたこと、「すでに実現した良い事柄の」大祭司としてキリストが罪深い人類のために当時もそこで奉仕しておられたことも明らかにしています。（ヘブライ9:11）

40　エフェソス2:1。

41　ローマ5:21; 6:4。

42　ヨハネ第一3:14。

43　ヨハネ3:36; 5:24, 39, 40; 6:47; 20:31。

44　ヨハネ11:26。ローマ6:9-11と比較なさってください。

与えさせる」ためにまさに来られました[45]。キリストはその使命を果たされ、ナザレの会堂で「あなた方がいま聞いたこの聖句は、きょう成就しています」とおっしゃることができました[46]。「いま泣き悲しむあなた方は幸いです。あなた方は笑うようになるからです」と約束なさいましたが、その約束が遠い未来に成就するのを待つ必要はありませんでした。山上の垂訓の他の部分も同様に、その実現を見るのに長い時を待つ必要はありませんでした。キリストの弟子は、人の手による虐待に苦しんで「叫び」を発するのではなく、喜び踊ることになっていました[47]。

「苦痛」が取り除かれることに言及されているからといって、この啓示の幻の成就が専ら未来のものであるとする必要はありません。それが病気や身体的外傷にしばしば伴うような苦痛であることを、決して文脈は指し示していません。使徒ヨハネが使用した言葉（ギリシャ語の *pónos*《ポノス》）は、基本的に「労苦」を意味し、含意によってのみ「苦痛」または「苦悩」を意味するため、どう訳すかは訳者の選択の問題となります[48]。そういうわけで、D'Ostervald によるフランス語訳では、その語に基本的な意味を割り当てて *travail*（労苦）とし、Nacar-Colunga と Bover- Cantera によるスペイン語訳では、どちらも *trabajo*（仕事）としています[49]。キリストは、「労苦し、荷を負っている」すべての人に、ご自分のもとに来て、――その時、そしてその時以降――魂にさわやかさと安らぎを得るようにと呼びかけられました[50]。彼らの宗教指導者は、厳格で容赦のない律法主義、また具体的な仕事を通して神のみ前に正しい立場を得ることを強調することによって、人々に重荷を背負わせていました。イエスはこれを人の肩に重い荷物を背負わせることに例えられましたが、それは確かに苦痛を伴うものであったでしょう。神の御子がもたらした良い知らせは、人々をこれらの重荷一切から解放し、重荷となる要件を満たそうとすることから来る挫折感や倦怠感（けんたいかん）から解放し、そうした苦悶（くもん）による感情的・精神的苦痛を終わらせました[51]。

「以前のものは過ぎ去ったのである」、「見よ！わたしはすべてのものを新しくする」という表現も、使徒による著述――遠い未来に限定されることなく、その時の関係や状況に言及した――に明らかに類似しています[52]。使徒は、啓示とほとんど同じ言葉遣いでこう書いています。

したがって、キリストと結ばれている人がいれば、その人は新しい創造物です。古い

45　イザヤ61:1-3, 新国際訳。
46　ルカ4:18-21。
47　ルカ6:22, 23。ヤコブ1:2, 9, 12を比較なさってください。
48　『新英国人のギリシャ語コンコーダンスおよびレキシコン』738頁［英語］をどうぞご覧ください。
49　『エルサレム聖書』は「悲しみ」としています。
50　マタイ11:28-30。
51　マタイ23:1-4; 12:1-13; 15:1-11。使徒ペテロも使徒15:10で、律法そのものを「父祖もわたしたちも負うことのできなかったくびき」であると語っていることにも着目できます。キリストはそのような重いくびきから彼らを解放なさったのです。
52　啓示21:4, 5。

> 事物は過ぎ去りました。見よ、新しい事物が存在しているのです[53]。

まさにその時この言葉は真実でした。古い契約は新しい契約に取って代わられ、神の掟(おきて)は今や御子に結ばれた人々の心に書き記されていました。以前は罪のうちに死んでいたキリスト者は、あたかも新たに生まれたかのように新しい人生を生きるためによみがえらされ、霊の新しい方法で仕えるのであって、書かれた法典の古い方法で仕えるのではありません。ユダヤ人も異邦人も信徒は「一人の新しい人」に作り上げられ、神と和解し、神の子としての関係に入ったのです。新たな力が彼らの思考を形作り、彼らは古い生き方を捨て去り、造り主の姿に倣って絶えず新たにされてゆく新しい生き方を身にまといました。神に近づくのに人間の祭司職に従属したり頼ったりすることはもはやなく、彼らの唯一の大祭司であられ仲介者であられる神の御子が開かれた「新しい生きた道」によって全面的に保証されて神に近寄ることができるようになりました[54]。上記のすべての事例において、“すでに”および“まだ”の要素が当てはまり、究極の実現への希望はまだ成就していませんが、その希望は現在有効な恩恵の分与によっておおいに強化されているのです。

王国へ移される

キリストの犠牲的な行為は弟子に驚くべき変化をもたらし、真に新たな関係への驚くべき入り口となりました。キリストは霊的な「国民」を確かに支配しておられますが、それはキリストに信仰を置き、キリストを霊的な頭として、自分と神との間の唯一の仲介者として服する地上のすべての人によって構成されています[55]。組織従属、境界線、数的な成長は、これとは何の関係もありません。また、メシアの預言の成就とも関係ありません。これらの預言は確かに成就していますが、ものみの塔組織の説明よりはるかに広範に、はるかに異なる方法で成就しています。

神の僕がキリストの王国に移されることは、組織団体とも1914年という日付ともまったく関係がなく、キリストが自らの犠牲によって贖(あがな)いを備えられた一世紀にまでさかのぼります。聖句は、キリストの弟子が当時でさえ「闇の権威から救い出され」、「神の愛する御子の王国へと移された」ことを示しています[56]。それゆえ、使徒パウロは神についてこう言うことができました。

> キリスト・イエスとの結びつきにおいてわたしたちを共によみがえらせ、天の場所に共に座らせてくださったのです[57]。

パウロはこのことを未来のこととして語っておらず、「よみがえらせてくださ

53　コリント第二5:17。
54　ヘブライ8:7-10; ペテロ第一1:3; ローマ6:11; 7:6; 8:10-14; エフェソス2:14-18; 4:22-24; コロサイ3:9, 10; ヘブライ10:19-22。
55　ペテロ第一2:4-9; コリント第一11:3; テモテ第一2:5, 6。
56　コロサイ1:13。
57　エフェソス2:6。

る」ではなく「よみがえらせてくださった」、「座らせてくださる」ではなく「座らせてくださった」と過去形を使って、彼らが「神の愛する御子の王国」に移されたことによってもたらされた霊的に高い立場を表現しました。「闇の権威」から解放されたことで、彼らは今や天の王であられる神の御子と共に座っているかのようでした。

イエスはこうおっしゃいました。「温和な気質の人たちは幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。……平和を求める人たちは幸いです。その人たちは『神の子』と呼ばれるからです」[58]。キリストの死と復活とその力を信じる信仰の結果、キリストの追随者は今や「神の子」となり、それゆえキリストの共同相続人となり、「地とそれに満ちるもの」が属する神の相続人ともなりました[59]。神の王室に今や彼らは養子として迎えられたのですから、使徒は現在形で仲間のキリスト者にこう語ることができました。

> すべてのものがあなた方に属している……。パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、世であれ、命であれ、死であれ、今あるものであれ、来たるべきものであれ、すべてのものはあなた方に属しています。一方、あなた方はキリストに属し、キリストは神に属しています[60]。

同じように、使徒ペテロも現在形でこう書いています。

> あなた方は、「選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、特別な所有物となる民」であり、それは、闇からご自分の驚くべき光の中に呼び入れてくださった方の「卓越性を広く宣明するため」なのです[61]。

彼らは単なる神の祭司ではなく「王なる」祭司であり、ギリシャ語で「王なる」という語（*basileios*《バシレイオス》）は「王国」（*basiléia*《バシレイア》）と同じ語源です。ペテロは手紙を宛てたキリスト者がその時すでに「王の系統の祭司」または「祭司の王国」であったと述べています[62]。ヨハネは啓示1:6でキリストについて述べる際、「この方はわたしたちを、ご自分の神また父に対して王国［王宮, 新英語訳聖書］とし、祭司としてくださったのである」と過去形を用いています。啓示の書の後の表現を理解する際には、これらをすべて考慮しなければなりません。例えば、啓示5:10にはこうあります。

> 彼らをわたしたちの神に対して王国また祭司とし、彼らは地に対し王として支配する

58　マタイ5:5, 9。

59　ローマ8:14-17; ガラテア3:29; 4:4-6; コリント第一10:26; 詩編24:1。

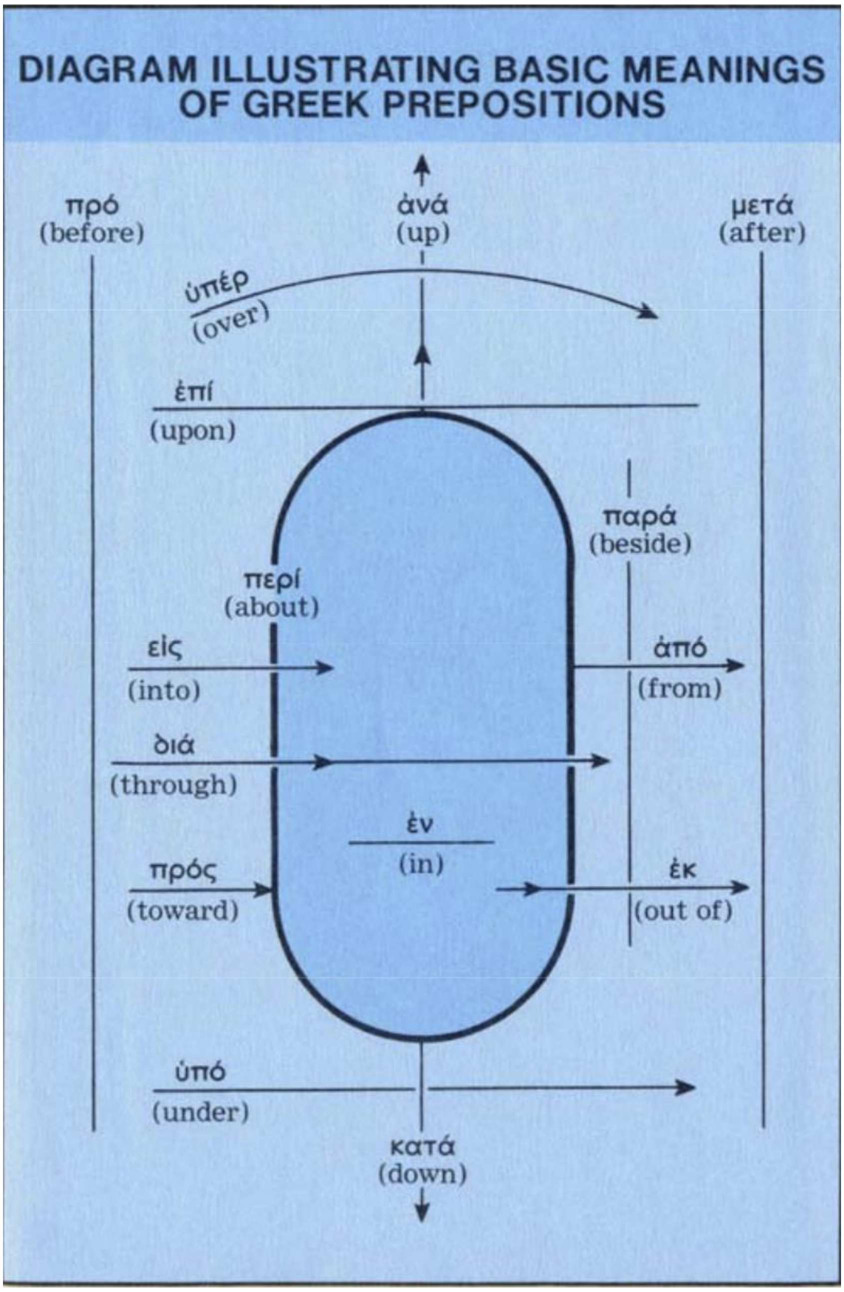
60　コリント第一3:21-23; ローマ8:17; ガラテア4:6, 7。

61　ペテロ第一2:9。

62　このギリシャ語の理解は、ギリシャ語セプトゥアギンタ訳（七十人訳）の 出エジプト記19:6にも示されており、そこではヘブライ語で「祭司の王国」という表現が使われています。『エクスポジターのギリシャ語訳聖書』第5巻 57頁［英語］をどうぞご覧ください。

のです[63]。

新世界訳はここを「over the earth」（「地に対し」）としていますが、『王国行間逐語訳』の巻末にあるものみの塔の表では、ここで使われているギリシャ語の前置詞（*epi*）の基本的な意味が「upon」であることを示しています。「over」（ギリシャ語の *hyper*）ではありません。epi は、文脈上その基本的な意味からの変更が必要な場合は「over」と訳されることもありますが、そのような変更はご覧のようにここでは<u>必要ありません</u>。そのため、他のすべての訳は実質、「<u>on</u> the earth」または「<u>upon</u> the earth」（「地上の」）としています。



いずれにせよ、先に引用した使徒による陳述はすべて、地上にいたキリストの弟

63 『ギリシャ語聖書　王国行間逐語訳』［英語］を見ると、「支配する」と表現されている動詞は、ギリシャ語では現在形で、「彼らは支配している」となっています。

子が霊的な意味ですでに「神の王国また祭司」であったことを明確に示しています。彼らは神の王室の一員であり、王の子であり、王の力が彼らの上に、彼らを通して働いていたのです。全宇宙の王の子としての王統の地位は、地上の威厳や富、政治権力の行使、人の上に立って人より優れているかのごとく君臨することでは表現されませんでした[64]。しかし、諸国民を「手おけの一しずく、はかりの上の塵(ちり)の薄い層のようにみなされ」、地に住むすべての者を「無き者のようにみなされ、天軍の中でも地に住む者たちの中でもご意志のままに事を行なっておられる」彼らの父はご自分の主権をもって、彼らに王室の代表としての権限をお授けになり、王の命令と裁きを声を大にして語るという地上での使命を達成できるようになさいました[65]。はるか昔、エホバはエレミヤを「諸国の民と王国の上に任命」なさり、「それは根こぎにし、引き倒し、滅ぼし、打ち壊すため、建てて、植えるため」でした。エレミヤを文字通り支配者として彼らの上に置くことによってではなく、単に「ご自分の言葉をエレミヤの口に入れる」ことによってそうなさったのです。というのも、神の言葉は力強く、それに抗うことはできず、神がお告げになることは果たされたのも同然だからです[66]。預言者によって人類に語られた神は、今や御子によってわたしたちに語られ、御子が語られた言葉やメッセージはそれ自体が全人類を「裁くもの」でした[67]。御子は昇天して以来、「天と地におけるすべての権威」を行使しておられ、その弟子であり地上にいる共同相続人である人には、御子の言葉を知らせるという王室の一員としての特権があります。改ざんや不純物のない状態で提示されるならば、その言葉には裁きの効果があります[68]。御子の弟子として彼らは、神の主権の力が自分の後ろ盾となってくれるとの確信、神の王室の一員である自分を祝福して支えるために神がお用いになることができないもの、あるいはお用いになろうとしないものは何一つ地上にないとの確信のもとに仕えます。この地上での目的を果たしていくために本当に必要なものを欠くこともなく、真に永続的な価値を持つものを失うこともありません。こうあるからです。

> もし神がわたしたちに味方してくださるのであれば、だれがわたしたちに逆らうことができるでしょうか。わたしたちすべてのためにご自身の子を惜しまず捧(ささ)げられた方が、どうして御子と一緒にすべてのものをもわたしたちに恵み深く与えてくださらないことがありましょうか。……だれがわたしたちをキリストの愛から引き離すでしょうか。患難か、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。……いや、これらすべてのことにおいて、わたしたちはわたしたちを愛してくださった方によって輝かしい征服者になっているのです。わたしは確信しています。死も命も、天使も悪霊も、現在も未来も、どんな力も、高さも深さも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエ

64　コリント第一4:8; 啓示3:17, 18を比較なさってください。
65　イザヤ40:15, 17; ダニエル4:35; 使徒17:30, 31。
66　エレミヤ1:9, 10; イザヤ55:11; 44:26; ローマ4:17。
67　ヘブライ1:1, 2; ヨハネ12:48。
68　マタイ28:18-20; 使徒13:44-48; 28:23-28。

スにおいて現れた神の愛からわたしたちを引き離すことはできないのです[69]。

霊的な祝福の優れた価値、そのきわめて重要な価値を見る人にとっては、これは実に最高の知らせです。しかし、人間が組み立てた代替の良い知らせの中で「近未来」として絶えず描かれている物質本意の恩恵に思考と欲望を集中するように仕向けられると、人は惜しくも本来の純正な良い知らせが見えなくなってしまいます。

これについて考えるならば、証人は一世紀に伝えられた良い知らせが、いつも自分が聞き、読み、戸口で話しているものとは、あたかも元の良い知らせが古臭くなり、時代遅れとなり、現在にそぐわないものであるかのように異なることに気づかないはずがありません。使徒パウロはコリントの信徒のところに行った時、「あなた方の間では、イエス・キリスト、しかも杭（くい）につけられたキリスト以外には何をも知るまいと決めた」と述べました[70]。もしものみの塔の旅行する代表が今日このような発言をしたとしたら、まるで違う宗教の人であるかのように疑いの目で即座に見られるでしょう。もし集会で話し手がエフェソス人への手紙などパウロの手紙のどれかを、聴衆にそれと断らないで要約したとしたら、彼もまた聴衆が慣れ親しんでいるのとは違う言葉を話して「どうも変である」、あたかも違う宗教の代表であるかのように見られるでしょう。あの霊感を受けた手紙をあらためて見返し、これについて考えるならば誰もがこのことが真実であると認めるだろうとわたしは思います。

先に述べたキリスト教の壮大な教えを考察するために充てられる時間は圧倒的に少ないですが、それも驚くにあたりません。その教えは、組織の全メンバーの一パーセント未満（実際には一パーセントの十分の二［0.2%］）にしか当てはまらないと見なされているからです。

人生を変える良い知らせのパワー

今日の世界と既存の政治支配は、紛れもなくわたしたちすべてに多くの問題、苛立ち、フラストレーション、困難、さらには苦しみを生み出しています。しかし、それらすべてをもってしても、王たる罪と死の支配がわたしたちに及ぼす、悲惨で、人にとって不可避で取り返しのつかない影響とは比べ物になりません[71]。一世紀にもたらされた良い知らせとは、キリストの贖（あがな）いの行為に信仰を置く人は、罪深い状態によって引き起こされた罪の意識の重荷から今や解放され、その罪が完全に赦され、神と和解して平和で友好関係のうちにあるというものでした。さらに言えば、いと高き方の子として、神の家族に今や迎え入れられたというものでした。

律法契約の下で特別な祭司階級によって繰り返し捧（ささ）げられてきた犠牲は、罪とそれに伴う罪悪感を絶えず思い起こさせるもので、長年にわたってどれほど多くの犠

69　ローマ8:31-39, 新国際訳。
70　コリント第一2:1, 2。
71　ローマ5:21。

牲を捧げてきたとしても、義と命の報いを実際に獲得するには不十分であるとの実感が人々に常にありました。しかしキリストはたった一度のご自身の犠牲によって、人々が罪を贖う犠牲をこれ以上捧げなくてもよいようになさいました[72]。神のしもべは今やまったく異なる形の犠牲、賛美と愛の犠牲を捧げることができます。それは手順や規定に従って捧げられるものではなく、心に動機付けられて自由に自発的に捧げられるものであり、そこには罪を償うという意識も、罪の負債やそれに伴う罪悪感を取り除くという意識もありません。それら一世紀のキリスト者は「神の安息」に入り、自分の義を立てるための奮闘の積み重ねは今や過去のものとなりました[73]。

それ以前は、神殿の至聖所に象徴されるように神のみ前に近づくのは少数の祭司職に限られていました。それ以外の者がそこに入って近づこうとすることは命懸けでした。しかし、キリストが神の右の座で天の大祭司となられた今や、キリストに従う人は皆、一個人として一人ひとりが、「イエスの血によって聖なる場所へ入る道を大胆に進む」ことができ、人間のいかなる仲介者に頼らずとも、「はばかりのないことばで過分のご親切のみ座に近づく」ことができるようになり、現にそうするように励まされました[74]。自分の弱さや至らなさのために完璧に到達し得ないことを絶えず思い起こさせる法典の下にはもうおらず、今や神の律法が思いと心に書きつけられていました。神を知るように教える専門の祭司級をもはや必要とはせず、「最も小なる者から最も大なる者に至るまで」皆、神を知り、神はもはや「彼らの罪を思い出さない」のです[75]。神への奉仕は、かつてないほど真の喜びの源泉となり得ました。

良い知らせのパワーには人に喜びをもたらし、強める力がありますが、エホバの証人の大多数にとって、その力の多くは奪われています。キリストを通して神がわたしたちのためにすでにしてくださったことの偉大さ、罪、死、世とその支配者にキリストが勝利なさったことの至上の意義、キリストに信仰を働かせる人すべてに開かれた関係の祝福は、深刻なまでに軽視されています。このようなことはすべて、キリスト者に二つの階級があり、大多数を占める一方の階級は自身では神との関係を持たず、もう一方の階級との結び付きによってのみ神との関係を持つという教えを組織が守ろうとするからなのです。元の良い知らせと、それがもたらすすべてのものは、ほんの数千人に適用されるとして制限され、「まもなく享受する」、「すぐそこまで来ている」物質的・身体的な恩恵の福音によって背後に押しやられ、影が薄くなっています。メンバーの大半は、新しい契約への参入、および現在の完全な罪の赦しとそれによって生み出される義の立場と神の子としての関係はまだ彼らのものではないと告げられています。ものみの塔の教えは、彼らにとって事

72　ヘブライ10:1-4。
73　ヘブライ4:3, 10。
74　ヘブライ4:14-16。
75　ヘブライ8:10-13; ガラテア4:6-9。

実上、時計の針を戻して、キリストの来臨と贖(あがな)いの行為以前の時代の人々がいたのと同じような状況を作り出しています。これら「大群衆」と呼ばれる階級の何百万人もの人々は、イスラエル国民の中でも民が祭司階級と祭司でない階級に別れていた旧約時代にまだあたかもいるかのようです。こうして、四百万人ほどの「油そそがれていない」人々は、現在組織にいる「油そそがれた」人々との関係によってのみ、神に近づき、神と共にあることができると告げられています[76]。これは事実上、「油そそがれた」人々が他のすべての人のために祭司職として仲介し、神に受け入れられるようにしていることを意味します。後者が行う奉仕の捧(ささ)げ物は、その脈絡の中で行われなければ何の効力も持ちません[77]。キリストが仲介なさっているのは、地上に残っている8,000人かそこらの「油そそがれた者」のためだけであり、彼らと結び付いているそれ以外の何百万もの人のためではないとされています[78]。

旧約の状態に戻る

旧約の下で祭司職は、すべての困難な事件を決定する上級裁判所の役割を果たし、律法に述べられているように、その決定には拘束力がありました。

> 彼らが司法上の決定の言葉をあなたに言い渡すのである。そしてあなたは、エホバの選ばれる場所から彼らが言い渡すその言葉のとおりに行なわなければならない。よく注意してすべて彼らが教え諭すとおりに行なうように。彼らが指摘する律法に従い、彼らが述べる司法上の決定のとおりに行なうべきである。彼らが言い渡す言葉から右にも左にもそれてはならない[79]。

ものみの塔組織とその統治体によって言い渡される決定を今日のエホバの証人がどう見ているかについて、これ以上の説明はないでしょう。組織とその統治体はあたかも旧約の祭司職に就いているかのごとく彼らのために立っているのです。『良心の危機』の中で、旅行する監督が緑の表紙のものみの塔の出版物を掲げて、「協会が黒だと言うんだから、**この本は黒い！**」と言ったこと、そのような表現を使った人が他にもいたことに言及しました[80]。わたしなら、このようなあからさまな盲信

---

76 ものみの塔の出版物は、ゼカリヤ8:23の「諸国のあらゆる言語から来た十人の者が一人のユダヤ人のすそをとらえる」という部分を、エホバの証人の油そそがれていない「大群衆」が「油そそがれた残りの者」の裾を比喩的につかんでいることに適用し、啓示3:9を利用して、これら油そそがれていない者について、「それらの人々はイエスの油そそがれた兄弟たちのもとに来て、霊的な意味で彼らに「身をかがめ」ます。なぜなら、それらの人は、『神が彼らと共におられることを聞いた』からです。これらの人々は油そそがれた人たちに仕えます」と述べています。『啓示の書―その壮大な最高潮は近い！』60, 61頁をどうぞご覧ください。また、『ものみの塔』1988年1月1日号16 頁、『「平和の君」のもとで得られる世界的な安全』（1986年）88, 89頁も併せてご覧ください。

77 出エジプト記30:30-33; レビ記2:1, 2; 5:10; 17:1-5; 民数記4:15, 17, 18; 18:7とヨハネ第一2:20; ヘブライ4:14-16; 8:1, 2, 10-12; 10:19-22; 13:15, 16を比較なさってください。

78 『ものみの塔』1989年8月15日号30, 31頁。

79 申命記17:8-13。

80 『良心の危機』384頁。

の提唱、知性をまったく欠いた発言は、それが何であったかが認識され、その愚かさかゆえに死に絶えて、すぐに消え去るだろうと思ったでしょう。しかしそれから何年経っても、この同じ表現が米国だけでなく、オーストラリアを含む他の国々でも使われていることを、わたしと文通し、現在も組織の中にいる人たちから聞いています[81]。さかのぼること1541年、イエズス会の創立者イグナティウス・ロヨラは、その著書『霊操』の中でこう書いています。

> 教会組織がそう決めるのであれば、自分には白と見えることでも本当は黒なのだと常に信じるべきである。

今日、ロヨラに同意するカトリック信者はほとんどいないでしょうが、この言葉はエホバの証人のほとんどとは言わないまでも多く、特に旅行する監督の間に培われたメンタリティーを正確に表しています。

一部の旅行する監督や長老の間で盛んに使用される“受けの良い”表現は、「もし組織がわたしたちにジャンプしろと言うなら、わたしたちが持つべき唯一の疑問は『どのくらい高く？』である」というものです。同様に、ある教えの真実性や聖典性を疑問視する人に対してこれらの人が返答によく使う決まり文句は、「組織と一緒に間違うほうが、正しくあって孤立するよりもましだ」というものです。このような個人的判断の放棄は、責任を担う「資格がある」と組織から見なされている人がどういう人なのかを物語っているだけではありません。このような信じられないほど浅はかな決まり文句や盲目的で無思慮な服従を求める呼びかけが、組織からも、それを聞く大多数の人からも強く否定されないのは、今の組織とその統治体が古代イスラエルの祭司職と等しく見なされている度合いをも明らかにしています。これらの表現はどこからどう見ても旧約の言葉、「彼らが言い渡す言葉から右にも左にもそれてはならない」を繰り返すものです。組織とその統治体は、アロンの祭司職が立っていた場所に立っています。その有様は、まるで解放のメシアがまだ来られていないかのようです。

このいわゆる何百万人もの「大群衆」は、祭司でないイスラエル人よりも立場が低いと言わざるを得ません。というのも、ものみの塔の出版物で彼らは「霊的な異邦人」に例えられているからです。イスラエルに住む異邦人は、神の神殿に近づく場合、異邦人の庭にある壁で止まらなければなりませんでした。その壁には、「異国の者は聖域の周囲の柵と垣の内側に入ってはならない。見つかった者は責任を問われ、死をもって罰せられる」と刻まれていました[82]。イエスがユダヤ人と異邦人を隔てる壁、すなわち人が「イスラエルの市民権から除外され、約束の契約に対してよそ者となる」原因となった壁を、ご自分の死によって取り壊されたのに対して、ものみの塔組織は新たな壁を築き、「油そそがれた霊的なイスラエル人」（現在、

81　この情報をオーストラリアから寄せてくれた人はドイツからの移住者でした。「緑」を「黒」にする組織の権限について、長老の集まりで地域監督が述べたこの表現を聞いて、彼は心の中で「ハイル・ヒトラー！」とつぶやいたと書いています。

82　『ものみの塔』1973年1月1日号29, 30頁; 1973年3月1日号153, 154頁; 『聖書に対する洞察』第1巻1229頁をどうぞご覧ください。

8,600人ほど）を霊的な異邦人（何百万人）から霊的に分けて、後者を比喩的な異邦人の庭に配置したのです[83]。異邦人がその庭にある隔ての壁を越えることは冒とくと見なされました。「油そそがれていない」人が、ものみの塔の教理によって築かれた霊的な「壁」を越えること――主の晩餐（ばんさん）で表象物にあずかったり（聖書的には、贖（あがな）いの犠牲に対する信仰の表明に他ならない行為）、キリストが人類のために仲介なさった新しい契約の当事者と自分を見なしたりすることによって――も、同じような「冒とく」、聖域への侵入として扱われます。

新約聖書でさえ、彼らのために彼らに向けて書かれたのではなく、「油そそがれた者」のために「油そそがれた者」に向けて書かれたと教わります。しかし、新約聖書に記されているすべての責任は組織によってなぜか何百万人もの「油そそがれていない」メンバーに適用される一方で、主要な特権は差し控えられるというパラドックスがあるのです。ある意味で、組織のその矛盾した見方は、キリストの共同相続人であること、いわゆる「油そそがれた者」だけが占めると言われる立場が、「大群衆の階級」よりも要求の少ない特権であるかのように見せています。「油そそがれた」者は神の子として義とされる特権的な立場にすぐに入り、その死に際しては比較的少ない年数の「奉仕」であったとしても相続を保証され、神の裁きの日に直ちに――千年後ではなく――神のみ前に受け入れてもらえます。「大群衆」の階級はそうではありません。「彼らの時」はまだ来ておらず、もしその時を見たいなら、組織の指導の下で義務的に労するだけでなく、その後は「大患難」に耐えなければなりません。しかし、それで終わりではありません。その後、千年間試されます。千年王国は「千年の審判の日」と表現されているからです。キリストの犠牲によって、信者は律法の下から神の過分のご親切、すなわち恵みに導かれました。ものみの塔の見解では、ハルマゲドンを生き残った人々は律法の下に戻ります。『大いなるバビロンは倒れた！神の王国は支配する！』の本は、啓示20:12, 13の説明の中でこう述べています。

> 使徒ヨハネが開かれるのを見た「巻き物」は、裁きのみ座の前に立つ人々が過去に地上で送った生活の記録ではなく、エホバの律法の書です。すなわち、キリストの千年統治中に地上のすべての人に対するご意志が記された出版物です。これら律法の「巻き物」に書かれている事柄が出版されて知られるようになった後、人々は「その行いに従って」、その巻き物にどのような掟（おきて）や指示が書かれているかによって裁かれます。現世での行いや、巻き物が出版される前の行いによって裁かれるのではなく、裁きが始まったその後の行いによって裁かれるのです。
>
> 千年の裁きの日の期間中、エホバの裁判官であられるイエス・キリストは、自らを不適格とした人間に滅びの判決を下すことがおできになります。しかし、この裁きの日までにすべての人は義を学ぶ機会を与えられるでしょう。（イザヤ26:9; ペテロ第二3:8）たとえキリストの千年の裁きの日の期間中に従順であることを証明し、義を学んだとしても、千年の終わりにサタンと悪霊たちが解き放たれた時にエホバの普遍的な主権に対

83　エフェソス2:11-18, 新国際訳。

> する揺るぎない献身という最後の試練を通過しなくてはなりません。それから、「大きな白い座」に座っておられる方の前に、仲介者を介することなく、自らの責任において立つことになります。もし彼らがエホバ神への忠順をもってこの決定的な試練を通過すれば、その時初めて、万人の最高裁判官は「命の巻き物」に彼らの名前を書き入れ、彼らが地上の楽園で完全な人間として永久に命を楽しむことを認可なさるのです[84]。

このような想像力任せの逆転の発想を合理化できる組織があり、一世紀の良い知らせを「調整する」権利が自分たちにあるとし、良い知らせを自分たちの発達させた教義体系に合わせるために「台本の書き直し」をするなんて信じられないように思えます。一世紀の良い知らせを自分たちの二十世紀版と置き換えて国際的に布告することは、良い知らせをすべての国民に宣べ伝えるというイエスの預言を成就するものではあり得ません。「王国のこの良い知らせは全世界に宣べ伝えられる」とおっしゃった時イエスは明らかに、ご自分がお伝えになった良い知らせ、ご自分の使徒や弟子によってその後伝えられた良い知らせを指しておられたのであって、千九百年後にどこかの宗教運動の出版物や雑誌の中でだけ見られる、その良い知らせの書き直しの台本を指しておられたのではありません。一世紀に伝えられた元のその良い知らせは、今も更新の必要がなく「永遠の良い知らせ」であり、「聖なる者たちに一度かぎり伝えられた信仰」の基盤なのです[85]。

84　『大いなるバビロンは倒れた！神の王国は支配する！』644-646頁［英語］をどうぞご覧ください。これより後に出版された『啓示の書―その壮大な最高潮は近い！』の296頁にも、ハルマゲドンの生存者について、「イエスが彼らを「命の水の泉」に導き続けられるにつれ、彼らを裁くことは、千年間続けられなければなりません」と書かれています。

85　啓示14:6; ユダ3。

第17章

キリスト者の自由という課題

わたしの言葉にとどまるならば、あなたがたは本当にわたしの弟子であり、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする。……もし子があなたがたを自由にすれば、あなたがたは本当に自由になる。—ヨハネ8:31,32, 36, 改訂標準訳。

主の霊のあるところに自由がある。—コリント第二3:17, 改訂標準訳。

神の御子の追随者は、御子がお与えになる自由を愛します。それを大切にして保持するために、必要なら何でも犠牲を払います。その自由は政治的な自由以上のものです。退廃への隷属がもたらすフラストレーションから、神の御前での罪の意識から、死への恐れから、人や悪魔への恐れからわたしたちを自由にしてくれます。というのも、「死の束縛から解き放たれ、神の子たちの自由と輝きにあずかる」希望を伴っているからです[1]。

また、御子がお与えになる自由は、自分がなりたい人になる自由、なろうとする自由、一人一人がユニークなパーソナリティを発揮しつつも自分の従う方の生き方を反映する自由でもあります。パウロはペテロではなく、ペテロはヨハネではありませんでした。マリアもプリスキラではなく、プリスキラもドルカスではありませんでした。しかし、それぞれが自分の従う方、神の御子と仰ぐ方の教えと資質と精神を、自分の生き方に反映させたのです。そのような個性には、課せられた結束や厳格な画一性による非人格化——時には非人間化——を抑止して抑圧する美しさがあります。人は「さやの中の豆」のようではなく、庭に咲く花々のように個性的で、多様で、時には対照的でもありながら、雑草のようでもなく、醜くもなく、悪臭もなく、すべて溶け合って庭全体の美しさに寄与することができるのです。

全体主義的な支配はそれが政治的なものであれ宗教的なものであれ、個性を恐れて、それを脅威と見なします。そうした恐れは、弱さの表れであって強さの表れではありません。同様に虚偽は真実を恐れ、その光から身を縮め、それから隠れようとします[2]。攻撃ないし狡猾(こうかつ)な手段によって光を消し去ろうとするかもしれませんが、正々堂々、真実と向き合おうとはしません。強制的な画一性に基づいた結束は、外見上は強固に見えても実際はもろいものです。真実と愛——結合の完全なきずな——に基づく結束とは異なり、そうした課せられた結束には内面の自然な強さ

1　ローマ8:21, 新英語訳。

2　ヨハネ3:19-21。

がなく、操作、威圧、恐れによってしか生き残れません[3]。

カリフォルニアに住むある女性からの手紙を思い出します。彼女は娘たちと一緒に証人と勉強し、集会に出席し、戸別の奉仕活動に携わるようになりました。こう書いています。

> 証人と勉強を始めて一年ほどになりますが、組織のあらゆる見解に従わせようとするプレッシャーがますます強くなっています。最初は楽しくてためになる勉強であったものが、自分自身の霊的なアイデンティティーを押し殺すものになってしまいました。興味深いのは、この種のプレッシャーを感じている間は、はっきり考えることが難しくなるということです。サタンの体制に従い、「神の霊感を受けた」組織から離れて行くのではないかという恐れが植え付けられてしまったのです。

往々にして自ら多大な犠牲を払いながらも脅しに屈せず、真理を求めて、それを知らしめた過去の人の模範に、口先だけの賛同を与えるのは簡単なことです。ものみの塔の出版物には、先の殉教者や改革者――息の詰まるような宗教検閲の力に抵抗し、宗教的権威の重圧や激しい非難にも屈しなかったウィクリフ、ティンダル、ミカエル・セルベトゥス、ヤン・フスのような人――が示した真理と良心への忠誠を褒める記事がしばしば載っています。また、組織的権威や教えへの忠誠よりも神の言葉の真理への忠誠を優先すると宣言した、ワルドー派、ロラード派、再洗礼派など、さまざまな離脱、ノンコンフォーミスト（「服従しない人」の意）、少数派のグループを称賛する記事もあります[4]。しかし、これらすべてにおいてイエスの時代の宗教的権威者との類似性に人は驚かずにはいられません。イエスは彼らについて、「預言者の記念碑を建て、昔の義人の墓を飾り立てて、こう言っている、『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の殺害に加わってはいなかっただろう』と」言われました。その公言にもかかわらず、それらの宗教指導者の歩みは彼らがその祖先――組織的に拒絶された預言者を死に至らしめた――と同じ精神を抱いていたことを示しています[5]。これと相並ぶように、過去において異論を唱えた個人やノンコンフォーミストのグループを敬いつつも、それらの人に対して使われたのと同一の武器――組織的検閲、脅し、プレッシャー、抑圧と破門――を用いて、ものみの塔組織は今日、組織の教えと権威の行使の正当性について自由でオープンな議論をしようとする一切の試みを封じています。組織に異端のレッテルを貼られた者は、すべてのメンバーから死んだ者と見なされることになっています。自分の信念を貫いた過去の男女の勇気を称賛しながらも、現在同じ歩みをすることは、分裂的で高慢な精神から生まれたものであり、神への反逆の証拠であるとして厳しく非難し、そうするに際して組織は、教会が過去に用いた断罪を強く彷彿（ほうふつ）とさ

3　コロサイ3:14。

4　たとえば、『ものみの塔』1981年11月1日号12-15頁は、ワルドー派を形成する「異論を唱えるグループ」が大胆にも教会のさまざまな教えに反対の声を上げ、「宗教上の真理の唯一の源は聖書にある」と考え、「イエスが神と人との間の唯一の仲介者である」とも信じていたことを述べています。

5　マタイ23:29-35, フィリプス現代英語。

せるような言葉を用います。とはいえ、自由のために立ち上がったそのような男女の模範によって人類の歴史がより豊かになったのは確かでしょう。

自由人として霊的成長を遂げる

> *わたしの兄弟たち、子どもとなってはいけません。知性を働かせてください。悪については赤ん坊のように純真であり、物の考え方については立派な大人になってください。*—コリント第一14:20, フィリプス現代英語。

キリスト教の教え全体が目指すところは、わたしたちが霊的に成熟し、大人のキリスト者になることであり、それは「キリストの満ち満ちた身の丈によって測られ」ます[6]。ある翻訳では、パウロがエフェソスのキリスト者に向けて語った言葉がこう表現されています。

> わたしたちはもう赤子であってはなりません。誤りを作り出す人間の悪巧みによって起こるさまざまな教えの風に吹き回されたり、もてあそばれたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を堅く守り、頭であるキリストとの完全な結びつきを目指して成長していかなければなりません[7]。

子ども時代は、ほとんど責任がなく、選択や個人的決断が比較的少ない時期でもあります。子どもは、親や他者にこの責任を果たしてもらい、基準を設けてもらいます。特に幼いうちは、彼らに依存し、一人にされるのを恐れ、彼らがいないと不安がります。成人すると通常、そのような依存から解放され、それに伴って責任と多くの選択や個人的決断が生じます。その移行は容易なものではありません。とはいえ、それはわたしたち一人ひとりが踏み出さなければならない一歩であり、そうでなければわたしたちの発育は阻まれてしまいます。幼子のような状態にしがみついていては、大人として成功することは望めません。わたしたちの幸せと、何であれ人生で成し遂げる真に価値のある事柄は、大人としての責任を喜んで引き受けるかどうかと切り離せない関係にあります。子どもなら許されることも大人には許されないことが多いものです。使徒パウロが表現しているとおりです。

> 幼子だったとき、わたしの話、わたしの考え、わたしの判断は幼稚だった。成人した今、幼稚なこととは縁を切った[8]。

他者を過剰に統制することを望み、他者とその思考を支配しようとするシステムだけが、人を幼子のような状態のままにさせることを望みます。人の成長によってシステムへの依存度が低まり、自ら優れた判断を下す力と能力が高まるのを、妨げたり阻止したりさえします。使徒は、キリストがご自分の追随者に「人々の賜物」

6　エフェソス4:13, 新英語訳。
7　エフェソス4:14, 15, アメリカ翻訳。
8　コリント第一13:11, 新英語訳。

をお与えになったことを述べています。しかし、使徒であれ、預言者であれ、福音宣明者であれ、牧者であれ、教える者であれ、それらの人が与えられたのは、まさに人々の「成長」に資するためであり、それぞれが頭であられるキリストのようになって、霊的に成熟した大人として独り立ちできるようにするためでした。子どものように、それらの人に依存したままでいるためではありません[9]。それらの人は、ものみの塔組織がするように、「あなたは知っていることをどこで学んだのか。わたしたちからではないか」と言って他者に恩義を感じさせるべきではなく、ましてそのような根拠に基づいて、自分たちの指導に従う義務があると感じさせ、そうしない人を恩知らずとか不敬であるとか思うべきでもありません。むしろ、使徒と共にこう言うべきです。

> アポロはいったい何者でしょうか。また、パウロは何者でしょうか。ただあなたがたを信仰に導いた人にすぎません。それぞれ主から課せられた分に応じて仕えているのです。わたしが種を植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、植える者も水を注ぐ者も取るに足らず、大切なのは成長させてくださる神のみです[10]。

「取るに足りない」とは、何者でもないということです。神の真の僕は、他者に恩義を感じさせるという考えをはねつけるでしょう。自分が相対的に取るに足らない無力な者であること、成し遂げられるすべてのことにおいて神の力と知恵が何よりも重要であることを認めているからです[11]。パウロが述べている通りです。

> いずれにしても、兄弟、あなたに誰か特別な権限でも与えたのですか。［友よ、あなたを重要人物としているのは誰ですか, 新英語訳］。あなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、どうしていただかなかったかのように誇れるのですか［なぜ自分の手柄にするのですか, 新英語訳］。……
> 欲しいものは何でも持っている、すでに富んでいる、わたしたちを抜きにして自分の王国を有しているとでもいうのですか。……わたしたちはキリストのゆえに愚かな者となり、あなたがたはキリストにあって学識者となりました。わたしたちは無力ですが、あなたがたは影響力が強いのです。あなたがたは名士で、わたしたちは何者でもありません[12]。

そのような僕がキリスト者の奉仕において何らかの知識や理解や能力を持っていたとしても、それらはすべて贈物として神から受けたものでした。誰にせよ、どのような奉仕をしたにせよ、それらの人はみな同胞のキリスト者への「贈物」となったのであって、同胞を取り仕切る統治者となったのではありません。その感謝が生み出す恩義と義務感は、贈り主に向けられるべきで、贈られた物や人に向けられるべきではありません。ですから、使徒は同胞のキリスト者にこう言っています。

9　エフェソス4:8, 11-16。
10　コリント第一3:5-7, 新国際訳。
11　ガラテア2:6; 6:3を比較なさってください。
12　コリント第一4:7, 8, 10, エルサレム聖書。

ですから、もう人のことを自慢してはいけません。すべてはあなたがたのものなのです。パウロも、アポロも、ケファ［ペテロ］も、世界も、生も、死も、現在のことも、将来のことも、一切はあなたがたのものであり、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです[13]。

誰であろうと、その人たちは事実上、贈物の受取人の所有物であって、所有者ではありません。信者から成る共同体（コミュニティー）に属しているのであって、共同体が彼らに属しているのではありません。同胞に義務を感じさせて自分に仕えさせたり、自分の言うがままにさせたりするのではなく、同胞のために奉仕します。

幼子のような信頼――誰に？

幼子のようであること、依存心を持つこと、優れた源に指示を仰ぐことが、御言葉の中で否定されているのではありません。重要なのは、幼子のようなその態度が誰に向けられているかという点です。弟子たちの質問に答えてイエスは一人の幼子を呼び寄せ、弟子たちの前に置いておっしゃいました。

> あなたがたによく言っておきます。心を入れ替えて幼子のようにならなければ、決して天の国には入れません。ですから、この幼子のように自らを小さくする者が天の国でいちばん偉いのです。このような幼子をわたしの名の故に迎える者は、わたしを迎えるのです。しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがましです。……確かにつまずきは避けられません。ですが、人をつまずかせる者は不幸です[14]。

幼子のような信頼と信仰は、人や宗教システムにではなく、「**わたし**を信じる」とあるように、キリストに向けられるべきだったことに注目していただきたいと思います。そして、キリストを信じることは、キリストの父――わたしたちもその方の子となる――を信じることでもあります。聖書のどこにも、人に信仰を置くようにと指図したり勧めたりする箇所はありません。確かに、聖書の中には、使徒のある者たちが他者への手紙の中で、「子たち」「小さな子たち」「わたしの子たち」という表現を使ったり、自分たちのことを父と子の関係で語ったりしている事例が見られます。しかし、これはパウロとコリントやガラテアやテサロニケの信徒との関係のように、使徒が良い知らせ、すなわち命の音信をその人たちに最初に伝えたことによる個人的な関係を表すために、ないしは使徒ヨハネの場合のように、年長の教師が自分より信仰に若い人に対して親しみを込めて呼ぶためになされたことを証拠は示しています[15]。彼らは父親のような気遣いを表したのであって、それは父親の権威的統制ではありませんでした。この個人的な枠を超えないように注意していたからこそ彼らは、「地上のだれをも父と呼んではなりません。あなたがたの父は

13　コリント第一3:21-23, 新国際訳。
14　マタイ18:1-7, エルサレム聖書。
15　コリント第一4:14; コリント第二6:13; ガラテア4:19; テサロニケ第一2:7-11; ヨハネ第一2:1。

ただ一人、天におられる方だからです」というキリストのご命令を人に犯させるような罪を犯しませんでした[16]。霊的な奉仕に携わる、あるいは携わっていると主張する人にわたしたちが寄せる信頼や確信は、決して絶対的ではあり得ず、天におられる命の与え主なる方のご意志と知恵を彼らがどれほど忠実に反映しているかに常に左右されます。もし彼らへの信頼や確信が信仰の域に達するようなことがあるとすれば、それは行き過ぎです。

また、キリストのご命令を巧妙に回避するために霊的な父とではなく、霊的な「母」であると主張して、別の方法で霊的な「親権」を行使しようとする試みによっても、キリスト者としてのわたしたちの個人責任が侵されたり、乗っ取られたりすることがないようにすべきです。父親は母親を通して命を子に渡します。つまり、子にとって母親も命の源です。神はその役割をいかなる人間の取決めにも、いかなる種類の組織にもお与えになっていません。御子だけが神と人との間の仲介者であられ、御子だけが「道であり、真理であり、命であり」、御子を通らなければ誰も父のもとに行くことはできないのです[17]。いかなる組織であれ自分たちを認めなければ永遠の命を得られないと主張するものは、その真理を否定しているのであり、キリストの役割を奪い取っているのです。

父親が不在の場合、母親が子どもたちに指示を与えたり、家族に対して母系制のような権威を行使したりすることさえあります。すでに（第4章で）見てきたように、ものみの塔組織は、「神の宇宙的な組織」と呼ばれる天的な「母親」の存在を唱える一方で、自分たちが地上の「経路」としてその「母親」に代わって指示を出し、子どもたちを養っていると主張します。現実には、「天的な母親」に関してなされる主張と「母親」に表されるべき敬愛と敬意はすべて、一種の代理母となっている地上の組織に実際に適用されているのです[18]。

16　マタイ23:9。

17　テモテ第一2:5, 6; ヨハネ14:6。

18　『ものみの塔』1985年10月15日号（30, 31頁）の「読者からの質問」にはこうあります。「地上にいる油そそがれた残りの者たちは、厳密な意味ではまだ『上なるエルサレム』の一部にはなっていません。しかし、天的な命の見込みを持つ霊的子たちという類例を見ないその立場のゆえに、また神の天的『妻』を代表しているゆえに、エホバはそれらの者たちがご自分の妻なる組織を反映していると見て、その天の妻となる組織に対する命令や預言、約束、慰めの言葉などに彼らのことを含められることがあります」。

SHOW RESPECT *for* JEHOVAH'S ORGANIZATION

"My son, keep your father's commandment, and forsake not your mother's teaching. For the commandment is a lamp and the teaching a light, and the reproofs of discipline are the way of life."—Prov. 6:20, 23, RS.

THE children of Christendom are children of this system of things, for Christendom is a dominant part of it. Christendom's children have a lamp, the Bible, in hundreds of millions of copies in many languages; but to them it is as an unlighted lamp. Why? Because the father of this system of things and his slovenly offspring "Christendom" have blinded their minds to the light of the lamp. Worse than that, they have deliberately thrust their children out without due appreciation for their lamp and have allowed them to wander about in a bedarkened and almost destitute condition. Even the lamp that they carry, veiled as it is to them, would have been wrested away from them if a more powerful hand had not prevented it. That is the

1 Who are Christendom's children, and what is their condition?

1980年の世界本部での騒乱期に、わたしの知人が中西部の旅行する監督（巡回監督）と電話で話をし、組織の行動に対する懸念を口にしたことを思い出します。巡回監督の答えはこうでした。「ママは正しいかもしれないし、間違っているかもしれない。でもママには変わりないだろう」。彼の言うママとは、ブルックリンを中心とする本部組織であり、何かの天上の存在ではありません。そして、これがエホバの証人の大半の見解であるというのが現実です。他の宗教でも、自分たちの権威を強めるために同じような考え方が育まれています。しかし、それはキリスト教の教えとは異質の概念です。神が過去に天界からの使者を含む、さまざまな手段によって人に語られたのに対して、今や御子を通してわたしたちに語っておられ、御子によって、また聖霊の指導を通してわたしたちを導き続けておられるという、その真理の力を事実上弱めています[19]。聖書のどこにも、啓蒙の源として「天の組織」とその「地上の経路」に頼るように促されてはいません。そうではなく、天の父とその御子に助けを仰いでお二方が人類にお与えになった音信を理解して適用するよう

19　ヘブライ1:1, 2。

にと一貫して教えられています[20]。

古代において、子どもはしばしば「養育係」の下に置かれました。養育係は今日の「家庭教師」と呼ばれる人とは異なり、子どもを教えるのではなく、子どもを教師や学校に導き、必要なしつけも行いました[21]。このことを例にとって、パウロはこう書いています。

> この信仰が来る前は、わたしたちはみな律法の力のもとに幽閉されており、唯一の解放の望みはやがて示されることになっていた信仰だけでした。わたしたちがキリストの学校に行き、キリストを信じる信仰によって義とされることを学ぶまで、律法はわたしたちをみる厳しい養育係のようなものでした。ひとたびキリストへの信仰を持てば、わたしたちは養育係の権威から完全に自由になります。その信仰を持った今、あなたがたはみな神の子なのです[22]。

今、何かの地上のシステムとその法に自分を服従させ、それらが神への崇拝と行いを定義して規制するのを許すことは、キリストが来られる前の時代に時計の針を戻すことです。それは事実上、キリストが成し遂げられたことを無効にし、キリストの行動がわたしたちにもたらした自由を無効にすることになります。わたしたちは奴隷とそう変わらない子どものような境遇に逆戻りすることになるのです。使徒がこのことをこう表現している通りです。

> わたしの言う意味はこうです。相続人は未成年である間は、全財産の持ち主であっても奴隷と何ら変わりがなく、父親が定めた期日までは後見人と管理人の監督の下に置かれます。わたしたちもそうでした。未成年であった時は、この世に属する初歩的な考えの奴隷でしたが、その期間が終わると、神は御子を女から生まれさせ、律法の下に生まれさせて、お遣わしになりました。それは、律法の下にある者に自由を買い取って、わたしたちに子としての身分を授けるためでした[23]。

イエス・キリストは使徒の土台の上に会衆を設立なさいましたが、わたしたちはその会衆を頭として仰ぐようになどと決して教え諭されていません。「すべての男

20　目に見える地上の組織を通して天的な母が導くという概念の主張を裏付けるために、ガラテア4:21-31の聖句が用いられます。そこでは、サラとハガルという二人の女性が登場し、象徴的に用いられています。しかし、筆者のパウロは、これらが「二つの組織」ではなく、「二つの契約」を表していると述べています。パウロが論じていたのは、もはや「律法のもとにいる」のではない（21節）ということでした。彼は神との契約関係について論じ、最初のがシナイで与えられた古い契約で、それを奴隷女のハガルによって表し、次に天からもたらされた新しい契約を自由な女サラによって表しました。一方の契約の子ともう一方の契約の子について説明しながら、彼は新しい契約によって、またそれによってのみ、人は神と和解し、それゆえに神の子、「組織の子ども」ではなく「約束の子ども」（28節, フィリプス現代英語）として命を得ることを示しました。この記述には、「組織」という概念そのものがありません。論じられているのは契約についてです。であれば、わたしたちは霊感を受けた使徒が重点を置いたところに重点を置くべきではないでしょうか。

21　『聖書理解の助け』1620, 1621頁［英語］、または『聖書に対する洞察』の該当箇所（第2巻1078頁）、または他の聖書辞典をどうぞご覧ください。

22　ガラテア3:23-26, フィリプス現代英語。

23　ガラテア4:1-5, 新英語訳, 欄外の訳。

の頭は」、会衆でも、それを構成する人でも、その中で羊飼いとして行動する人でもなく、「キリスト」なのです[24]。それは、神に任命された、わたしたちの人生を方向づける源として、わたしたちが人生の決断と選択を下すに際し、聖なる御霊によって確かな指針を仰ぐ方として、キリストを受け入れることを意味します。したがって、信徒から成るキリストの体のうちの誰かに――それが誰であろうと――敬意、信頼、従順を示すようにという勧めはどれも、常に相対的なものと見なさなければならず、決して絶対的なものではありません。もしキリストが本当にわたしたちの頭であるならば、人間を源とするいかなる指示、助言、勧めもすべて、キリストの言葉と教え、キリストの模範とその示された資質とに照らし合わせて吟味しなければならないでしょう。区別なしに受け入れることは、子どもじみた愚かさであるだけでなく、危険でもあります[25]。それはキリストの頭の権を否認することでもあります。宗教指導者への盲目的な服従や従順は、キリストへの信仰のしるしでもなければ、信心深さの証拠でもキリストの神聖な立場への敬意の証拠でもありません。キリストの頭の権を受け入れることには、その頭の権が真に表し、そこから生じるものと、そうでないものとを見分ける責任が伴います。そして、その責任は他者に負わせることはできません。自分で担わなければならないのです[26]。

自由への呼びかけは、神の御言葉の中に暗に含まれています。それなのに多くの人が自由の探究をためらったり、果たせなかったりするのはなぜでしょうか。

自由への恐れ

恐れることは罰を予期することであり、恐れる人は愛においてまだ不完全なのです。―ヨハネ第一4:18, エルサレム聖書。

キリスト者の自由は、すでに述べたように、単に消極的自由――信じない自由、しない自由――ではなく、主として積極的自由、信じる自由、する自由、なる自由です。

奇妙に思えるかもしれませんが、多くの人はそのような積極的自由、あるいはその見込みだけでも恐ろしいと感じます。というのも、その自由とは、自分の思いと心の中で至った理解と確信に基づいて――誰かの思いと心の中でもなく、他人の解釈や理屈によるのでもなく――結論を出し、個人的選択と決断を下し、その結果を受け入れるという責任を負うことであるからです。まさにその理由から人類の大半は自由から逃れようとします。そして、逃れる手段として、自分のために決断を下し、良心となり、人生の選択を指示する権限を有するかのごとく振る舞うものにしばしば服従します。もし自由を服従に引き換えるこの意志がなかったなら、第一次世界大戦後に出現した全体主義体制があのように権力を握ることは決してなかった

24　コリント第一11:3。
25　ガラテア1:6-8; 3:1-3; 5:7-9; ヨハネ第一4:1を比較なさってください。
26　コリント第二13:5; エフェソス4:14, 15; ガラテア6:4, 5; テサロニケ第一5:21, 22。

でしょう。そうした勢い、それが大衆に及ぼす驚くべき魅力について、ドイツ生まれの社会学者エーリッヒ・フロムはこう書いています。

> ……人間のすべての社会的個人的生活を、たくみに支配するようになったこの新しい組織の本質は、ごく少数のひとびとは別として、すべてのひとびとが、自分で支配することのできない権威への服従をすることであった。……数百万のひとびとが、かれらの父祖たちが自由のために戦ったと同じような熱心さで、自由をすててしまった[27]。

このような人間の傾向がいかに蔓延(まんえん)しているか、そしてその根底にある理由を、別の情報源はこう述べています。

> 自分の行為の責任を回避しようとするときはいつでも、その責任を誰か他の人ないし組織、あるいはもの(エンティティ)に被(かぶ)せようとしていることになる。しかしこれは、自分の力をそのもの――「運命」であれ「社会」であれ、政府、企業、親分であれ――にゆずり渡すことにほかならない。……責任にともなう苦痛を避けようとして、何百万、いや何十億という人が、日々自由から逃走しようとしている[28]。

信仰の分野においても、他の分野と同様、多くの人は自分のために他者に考えさせ、選択させ、決断させるほうが楽であると感じます。物質的な事柄ではそれほどそうしたくなくても、霊的な事柄や倫理的な事柄ではそうするでしょう。その信仰は「借り物の信仰」です。彼らが信じるのは概ね、他者が信じたからであり、自分こそは正しいという他者の自信に満ちた主張を受け入れるからです。彼らは、組織のメンバーになって、どこかに属することに安心感を求めます。道徳上の問題から逃れようとして、自分のために人生を方向付け、良心上の事柄を決定する責任を負ってくれるシステムに服従します。使徒はガラテアの信徒に向けて、「あなたがた、律法の下にいたいと思っている人たち」と述べています[29]。同じように今日でも多くの人が、物事を「逐一説明してもらい」、規則という形で示してもらうことを望みます。そうすれば決断する責任から解放された気分を味わえるからです。ヘブライ人への手紙の筆者の言葉を借りれば、彼らは端的に言ってキリスト者として「成長していない」のです[30]。

人生の基本的真理の一つは、人生そのものが難しいということです。それは多くの点で、問題に向き合ってその解決策を探ることが、痛みを伴うプロセスだからです。問題のない人生などなく、それが引き起こす精神的苦痛は肉体的苦痛を凌(しの)ぐこともあります。そのため人は苦痛を避けようとして、問題を無視したり、それに向き合うのを拒んだり、どんな手段を使ってでもそれから逃れようとしたりする傾向があります。メンタルヘルスケアに長く携わる人であれば、これがよくあることで、有害でさえあることを知っています。先に引用した情報源がこう表現している

27　エーリッヒ・フロム著『自由からの逃走』11, 12頁、東京創元社（1980年出版）。
28　M・スコット・ペック著『愛と心理療法』43頁、（実務教育出版, 2024年）。
29　ガラテア4:21, アメリカ翻訳。
30　ヘブライ5:12-14。

とおりです。

> 問題と、そこからくる苦しみを回避する傾向こそ、あらゆる精神疾患の一次的な基盤である。……なかには、問題とそれにともなう苦しみを何としても避けて安易な道を見つけようとし、善にしてまっとうな一切のものからますます離れ、入念に幻想の世界を作りあげて、現実をまったく排除してしまう人もいる。カール・ユングの簡潔で洗練された言葉によれば、「神経症とはつねに、当然引き受けるべき苦しみの代用物なのである」[31]。

ものみの塔組織が供給する心の「食物」は、個人の責任をシステムとその指導者にシフトすることを促すだけではありません。これまで見てきたように、人が理想的で、事実上問題のない霊的な環境を享受しており、ただ「組織の指示に従って」いればすべてがうまくいくということを信じようとする気持ち――それとは正反対の証拠があっても――を掻(か)き立てて、幻想的な人生観を養ってもいます。多くの人は、あるいはほとんどの人は、それを信じることにします。そのほうが楽だからです。しかし、実現したかに見える逃避は、結局のところ、回避した正当な苦しみよりも代償が大きいことが判明します。というのも、この幻想を維持するには、生涯にわたって教え込みに従い続け、組織の要求に応えられないことによる罪悪感を一時的に和らげる行為を日々続けるしかないからです。自分の精神機能が束縛され、ある方向に向けられ、思いやりや心の広さが制限されるのを許すことが求められます。その長期的な損失は、現実を直視し、それに対処するのに費やされたであろう鍛錬や努力よりも、最終的には高くつくことになります。

1985年、ニューヨーク州のある男性がわたしに宛てた手紙の中でこう書いています。

> わたしも四十八年間「真理のうちに」いて、心を尽くして奉仕してきました。また、わたしたちの年代のほとんどの証人が体験したような侮辱や投獄もすべて受けてきました。今になって、自分たちが愛するようになった組織を思いやりがなく冷淡なものと見るのは、トラウマになるほど辛いことです。わたしをさらに悩ませるのは、しばらく前からそれに気づいていたけれども、心のうちを打ち明けられなかったことです。良心を表明することを恐れたせいで、自分が「真理を知った」ころよりも劣った人間になってしまったと感じます。そのため、わたしは自分が好きではありません。少なくともあなたの本はわたしにそのことを理解させてくれました。恐れが抑制力として働き、恐れがあるうちは完全な愛を行使することができないということを、ヨハネは実に生き生きと注意喚起してくれました。―ヨハネ第一4:18。

彼が言うことは多少なりともわたしたち全員に当てはまることだと思います。つまり、神から授かった精神力を自由に使い、愛、憐(あわ)れみ、慈悲を自由に表現し、必要ならどこであろうと、どんな状況であろうと真実を語ることにおいて、わたしたちはみな何かしら<u>弱くなった</u>ということです。もちろん、すべての人が同じ程度に影響を受けるわけではありません。個人的な誠実さをそれなりに保持できる人、厳

31　『愛と心理療法』16頁。

格な型にはめられることにある程度抵抗できる人もいます。しかし、そうであっても、すべての人が損失を被る——先ほど引用した手紙の表現を借りれば、必然的に「人間らしくなく」なり、キリストを反映するのが難しくなる——ことに疑問の余地はないとわたしは思います。新しい律法主義とその「文字による掟（おきて）」が律法契約の掟（おきて）に取って代わり、使徒の言葉にあるように比喩的な覆い（ベール）が掛かったままです。その覆いは「彼らの心に掛かって」、御子によって可能になった神の御前での新しい立場の栄光のビジョンを曇らせ、鈍らせています[32]。その立場が意味するものを直視することへの恐れは、「はばかりのない言い方」を阻み、キリスト者の自由を特徴づけるオープンさ、ストレートさ、率直さではなく、しばしば秘められた感情、覆い隠された婉曲的（えんきょくてき）な表現につながります。使徒はこう述べています。

> 主は御霊であられ、主の御霊のあるところには自由があります。そして、顔の覆いなしに主の栄光を映し出しているわたしたちは皆、御霊であられる主から来る栄光を増し加えながら、主に似た者に変えられていくのです[33]。

このシステムへの服従によって生じる最も深刻な損失の幾つかは、知らない間に徐々に累積していく類いのものです。そうではないものもあり、自分に代わって他者に考えさせることの影響はより明白です。

アメリカ東部のある女性のことを思い出します。彼女の夫は、その地域で最も早くからものみの塔組織の仲間になった家庭の出身でした。彼は「会衆の監督」となり、証人コミュニティーの「柱」でした。しかし、中年になって突然亡くなりました。終末が近いという組織の保証に不動の信頼を置いていた彼は、物質的な事柄をあまり重要視してきませんでした。それで彼の死後、残された妻が自活するためのものはほとんど何も残されておらず、五十代の彼女は事実上生きていくための職を探さなくてはなりませんでした。彼女が見つけた老人ホームでの仕事は制服の着用が義務付けられており、勤務時間が王国会館での集会時間までぎりぎりのことがあり、そういう時は集会に制服を着て行きました。でも、コメントするために手を挙げても、なぜか指されなくなったことに彼女は気づき、長老に尋ねると、着ている制服（「ふさわしくない服装」と見なされた）のためだと言われました。彼女とその夫の長年にわたる奉仕、やもめとして彼女が直面した困難は考慮されていないようでした。

わたしは最近、ある男性と電話で話をしました。彼は若いころ、学業で傑出した成績を収めましたが、奨学金の機会を断り、高校を出ると開拓者になり、その後世界本部で数年間奉仕しました。本部を去った後は巡回監督となり、後に地域監督となりました。結婚し、やがて子どもも生まれました。そのうち大企業に就職し、うまくいっていました。しかし最近、経営陣の人事異動があり、彼の仕事が危うくなりました。彼が言うように、五十代になった今、彼が知る分野のほとんどの会社で

32　コリント第二3:14-16。

33　コリント第二3:17, 18, 新国際訳。

「必須」に近いものとなっている学位もなく、彼は宗教システムに暗黙の信頼を置いてそのプレッシャーに服すること、宗教システムが目の前に掲げる以外のものに目をつぶることの結果をかつてないほどに痛感しています。

わたしがまだ統治体のメンバーだったころ、本部スタッフのケン・パルシファー——本部組織の一員になる前は旅行する奉仕をしていた——との会話の中で彼がわたしに言った言葉を思い出します。ある日、彼はわたしのオフィスに来て、少し時間があるかと尋ね、組織内の若者たちについて懸念を表明しました。要するに、こう述べたのです。『わたしたちは若い人たちに、高校を卒業したらすぐに開拓を始めるかベテルに来るか、どちらかを勧めます。多くの人がそうします。後に彼らは結婚し、子どもができて開拓をやめるか、ベテルを去るかします。仕事を見つけなければなりませんが、給料の良い仕事に就くことはできず、見つかる仕事は何でもしなければなりません。他の出費と共に、病院代もかかります。このような困難な状況は、まだ調整期間中のことが多い結婚生活に強いストレスを与えます。時には結婚生活が破綻することもあります』。現代社会で生きていくための若者たちの純粋な準備を妨げて、わたしたちは彼らに対して正しいことを行っていないと思うと彼は言いました。わたしは同意するしかありませんでしたが、組織の視点を変える望みは現実的にないように思われました。

1971年、東洋で開かれた一連のものみの塔地域大会に関連したツアーで、ツアー参加者の一人に、数年前にわたしたち夫婦がピッツバーグで会ったとても魅力的な女性がいました。彼女が足をひどく引きずって歩いているのにわたしは気づき、友人に尋ねたところ、股関節の病気にかかったとのことでした。何か治療はできなかったのかと尋ねると、友人は、そうできた、医師たちは手術を望んだが、彼女がそれを先延ばしにしたんだ、と言いました。その理由を尋ねると、『1975年さ、知っているだろう』という答えが返ってきました。彼女の脚はすでにもう片方の脚よりも数センチ短くなっていました。1975年が過ぎても、彼女の状態は変わらず、今やもう手遅れでした。

これらは何千もの似た事例のほんの幾つかに過ぎません。組織は現在、すべての問題に対する「最終的な解決」の具体的な日付を提示していないとはいえ、「新秩序の門口に立っている」というその度重なる保証によって、問題解決に対する人の姿勢に影響を与え、現実に対する歪(ひず)んだ見方を与えています。幻想の希望を信じ続けるために現実から目をそらすことの影響については、幾つも証言を得ることができます。わたしたちは普通、人の限られた資産を全くの投機的な根拠に基づいてベンチャーに投資させ、その結果、取り返しのつかない金銭的な損失を被らせるような人を嫌悪の目で見ます。しかし、お金よりももっと大切で、もっと価値があり、もっとかけがえのないものがあります。時、日、月、年といったわたしたちの時間は、命そのものの「通貨」です。そのリソースには限りがあります。たとえ80歳まで生きたとしても、生まれた時にわたしたちが自由に使える資金は3万日ほどしかないということにわたしたちは気づかなくてはなりません。40歳でその3万日の半分が

もう使われていて、50歳になるころには1万1,000日、60歳には7,000日しか残っておらず、それ以降命の「銀行口座」の残高はどんどん減っていきます。昔、詩編作者はこう書きました。

> わたしたちの歳月は、ため息のように消え去ります。わたしたちの寿命は七十年、力がある人でも八十年です。慌ただしいその歳月は労苦と悲しみであり、瞬く間に過ぎ去って忘れ去られます。……どうか日々の正しい過ごし方を教えてください。わたしたちが知恵の門に入ることができるように[34]。

時間がいかに貴重であるかに鑑みれば、わたしたちは他の人が時間をどのように投資すべきかについて、自分の見方を押し付けたり、その投資を誘導してコントロールしようとしたりすることがどうしてできるでしょうか。神の御言葉に示されている神の叡智(えいち)から自分自身が恩恵を受けている限りにおいて、他の人を励ますことはできるし、実りの少ない投資に反対し、健全な投資を勧めることさえできます[35]。しかし、これは自分が推進する活動や関心事にのみ投資するよう促して、人に圧力をかけ、そうしなければ愚かな浪費であるとほのめかすこととはまったく異なります。

であるならば、他の人の考えや体験、相対的な知恵に感謝することはあっても、自分の時間を誰かにコントロールされ、限られた命の資金の使い道を実質的に指図されるようなことは決して許してはなりません。過去にそのようなことを許してきたかもしれませんし、そうすることで自分が下手な投資をしてきたことを認めたくないのも自然な傾向です。何年も、ことによると何十年もの歳月を費やして幻想を追い求めてきたことに気づいて、それを受け入れることは、痛みを伴います。その可能性について考えることさえ苦痛であるため、考えることを拒み、厳然たる事実をシャットアウトし、これまでと同じように続けることを好むかもしれません。しかし、「さらに資金をつぎ込んで」も損失を取り戻すことはできません。

ここでもまた自由への恐れが、多くの人に重くのしかかり、特定の組織につながっていないと考えるだけで気持ちが萎えてしまうのです。先に言及したメンタルヘルスの情報源は、なぜ多くの人が自らを自由にすることをためらうのかについて、このように説明しています。

> 多くの患者に見られるこの「無気力」の根源は、ひとつには、自由の苦しみから部分的あるいは全面的に逃れたいという願望、したがって、自分の問題と人生に対する責任を、部分的あるいは全面的にとれないところにある。彼らが無気力と感じるのは、事実上、自分の力を放棄してしまっているからである。彼らが治ろうとすれば、早晩、おとなの生活はすべて、個人の選択と決断の連続であることを学ばねばならない。このことを全面的に受け入れることができれば、彼らは自由な人間になる。受け入れられない程度に応じて、ずっと自分を被害者と思い続けることになろう[36]。

34　詩編90:9, 10, 12, 新英語訳。
35　コリント第一7:29-31; ガラテア6:9, 10; エフェソス5:15-17。
36　『愛と心理療法』44頁。

霊的成長を妨げるその他の恐れ

わたしは以前、出産に立ち会う機会に恵まれました。へその緒が切られ、赤ちゃんが母親のお腹の上に置かれた時、母親はこう言いました。「さあ、おちびさん、これであなたも独り立ちよ！」と。それは新しい命――唯一無二の個人の命――の始まりであり、わたしは今でも彼女が赤子にかけたその言葉を聞いた時の感動を思い出します。しかし、その出産がもたらした「独り立ち」は初めのうちはごくささやかなものです。へその緒は切られても、赤子はまだ他者のケアにどうしようもなく大きく依存しています。赤子、または幼い子どもでさえも、一人にされることへの先天的な恐れ、無防備意識を持っています。幼子にとって長いこと一人にされることは死を意味します。

　成長と成熟のプロセスは、自立という概念に応じることを学び、一人の人として全責任を負う準備を徐々に整えていく過程です。それは簡単なプロセスではありません。そのプロセスを通るよう子どもを導こうとしたことのある親なら誰でも良く知っているでしょう。思春期は、少年少女が依存から自立への分岐点にさしかかる時期であり、子どもにとっては苦痛や悩み、しばしば混乱する時期でもあります。その移行がうまくいくか否かは、その後の人生に永続的な影響を及ぼします。わたしたちの霊的成長においても同じことが言えます。

　心的にも霊的にも成長する上で、さらには自由がもたらす責任を受け入れる上で妨げとなる要素の中に、孤独への恐れ、不安感、無力感があるかもしれません。もう小さな子どもではないとはいえ、わたしたちは未だに他者の必要性を生得的に感じますし、それは無理のないことです。大人になった今でも大概わたしたちは生活の多くの面で他者を頼りにしており、さまざまな危険から身を守ってもらい、必要な食物を育てて届けてもらい、病気や老齢の時には面倒をみてもらい、そのほか多くの必要を満たしてもらっています。また、成長と共に、自分が生きている世界と比較して自分自身がいかに小さくて取るに足りない存在であるかについに気づくことになります。孤独感や孤立感は、それゆえに不安や心細さ、無力感、不確実感を生み出し、より大きなものに浸ることによって、こうした感情から逃れようとする強迫観念を作り出すことがあります。中には、構造化された何かのシステムに所属し、そのシステムが象徴している外的権威に服従する以外に、個人の自己認識（アイデンティティー）、安心感、強さ（ストレングス）をまったく感じない――人生の意味すら感じない――人もいます。そのような人は疑念や不確実感が後に生じても、それを鎮めるためだけに服従を強め、確実性を言い張るシステムの主張を事実上心に受け入れさせることさえあります。問題意識を抑圧したりシャットアウトしたりすることで、それは問題があたかも存在しなかったかのようです。その結果生じるのは、真の慰めというよりも感情の麻痺（まひ）であり、癒しというよりは鎮痛です。

　キリスト者の自由は孤立を助長するものではありません。だからと言って、単なる「帰属意識」と引き換えに、自分個人や個人の忠誠を何かのシステムや組織に捧（ささ）

げることで孤立から逃れるように、わたしたちを駆り立てるものでもありません。むしろ、それには愛に動機づけられた他者との関係、それを有用で生産的な協力行動によって自発的に表現することが求められます。

規模のいかんによらず組織に浸かってきた人にとって、離脱を考えるというのは不安を引き起こします。閉ざされた社会の中で生き、その絆（きずな）によって安心感や帰属感を得ていたのが、今や、その閉ざされた社会の外で生きていくという課題に直面することになります。その見通しのために、不安や無力感が再び押し寄せてくるかもしれません。組織はしばしばそうした感情につけ込み、自分たちから出ることは敵対的な世で本質的に孤独で弱い存在になることを意味すると感じさせます。「ここを出てどこへ行くのか」というのが、エホバの証人の間でよく聞かれる問いです。

初期キリスト教の時代に支配的だった状況と、その当時のキリスト者が直面した問題を考えるならば、自分の考えを整理するのに役立つかもしれないと思います。弟子たちを自分の追随者にしようとする者についての使徒の警告は、すでに成就していました[37]。ディオトレフェスのような人たちの方針に従わないなら、会衆から追放されると信者は脅されていたのです[38]。啓示2章と3章の7つの会衆に対するイエスのメッセージは、世界の畑で予告通りに、麦の中に毒麦が「まかれた」ことを明らかにしています[39]。信仰、愛、真理からの逸脱を暴き、必要な改善が早急になされないならばイエスの恩恵とサポートが撤回されることを伝えています。

例えば、紀元三世紀の人が、自分が住んでいる地域で、キリストの頭の権が人に奪い取られ、良心を犠牲にしてしかそれに適応できないような事態になったと感じ、キリスト教の真理と精神と愛が巧妙に曲解され、そのためにキリスト教の信用が失墜していると感じたなら、どうするでしょうか。エフェソスやテサロニケなど、使徒パウロが個人的に奉仕した場所にその人は住んでいるかもしれません。脱退の意向をどのように表明したとしても、他の人からこう言われるでしょう。「どうして脱退なんてできるんだ。キリストの使徒であるパウロが自らこの地に良い知らせをもたらし、今日まで続くキリスト者の集まりを始めたことを知らないのか。もし何か誤りがあれば、キリストはそれを正してくださるし、わたしたちはそれまでただキリストを待つのだ。あなたは自分が知っていることをどこで学んだのか。この集まりを通してではなかったのか。脱退してどこへ行くのか。外には異端者と異教徒しかいない。この規模の集まりをほかにどこで見つけるというのか。一人っきりになるか、どこか小さな分派に入るか、そのどちらかになってしまうぞ」。

三世紀のその人がそのような議論に打ち負かされ、良心的感情を抑え、深刻な過ちに目をつぶり、あらゆる反対の証拠にもかかわらず、それらが願わくば変わることを信じたとしたら、どのような結果になっていたでしょうか。受動的適応の道を

37　使徒20:29, 30。
38　ヨハネ第三9, 10。
39　マタイ13:25, 38, 39。

取ることで、キリストがラオディキアの信者に言われたように、「あなたは冷たくもなく熱くもない。そのどちらかであればよいが、そのどちらでもなく、ただ生ぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている」と言われる人々の一人にならないという保証がはたしてあるでしょうか[40]。キリスト教指導者を自称する人々の多くが当時踏み出した道は変わることがなく、階層システムが構築されるまで続きました。もし先ほどの三世紀の人が受動的適応の道を取り、子どもや孫にも同じことをするように励ましたとしたら、彼らはみな最終的にはその階層システムの従順な臣下となったことでしょう。もしわたしたちがその時代に生きていたとしたら、そのような結果を受け入れることができたでしょうか。その答えが肯定でない限り、わたしたちは受動的適応を励ます今日の議論を受け入れたり、説得力があると感じたりすることはないでしょう。

確かにその時代の人々は、「もし誰でもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るでしょう。そして、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに行き、その人と共に住みます」という約束に信仰を働かせる必要があったでしょう[41]。信仰の必要性は今も昔と変わりません。窮地に立たされたダビデのような状況に直面するとしても、わたしたちは信仰をもってダビデと共に神にこう言うことができます。

> わたしの救いの神よ、わたしを追い出さず、わたしを捨てないでください。父と母がわたしを捨てても、エホバがわたしを迎え入れてくださいます[42]。

自分の動機を吟味する

真実はわたしたちを試みるものであり、そこから逃げたり、隠れたり、目を閉ざしたりすれば、自分自身を傷つけるだけです。真実はわたしたちの信仰を試します。わたしたちは、支え守ってくださる神とその御力に対してどれほどの確信を持っているでしょうか。自己吟味は痛みを伴うことがあるとはいえ、必要なことです。使徒はこう書いています。

> 自分を吟味しなさい。あなたがたは信仰の生活を送っていますか。自分を試してみなさい。イエス・キリストがあなたがたの内におられることを悟るはずです。あなたがむろん失格者なら話は別ですが[43]。

わたしはどのような宗教に入っている人でも、その人がその宗教に対してある特定の行動を取るように圧力をかけるつもりはありません。ものみの塔組織の現メンバーである何百人もの人々とこれまで連絡を取り合ってきましたし、その中には長

40　啓示3:15, 16, エルサレム聖書。
41　ヨハネ14:23, エルサレム聖書。
42　詩編27:9, 10, アメリカ標準訳; ヨハネ10:28, 29もどうぞ参照なさってください。
43　コリント第二13:5, 新英語訳。

老として奉仕している人もいます。わたしが一度でも彼らの立場を軽んじたとか、何としても彼らを脱会させようとしたとか言える人は一人もいないはずです。その段階を踏むのであれば、それはまったく個人的決断に基づくべきであるとわたしは信じます。当人だけがそのような段階を踏むことの責任を負うべきであることは、多くのケースで十分すぎるほど結果が明らかにしています。誤りがあるというだけで、そこからの離脱が道徳的義務となるわけではありません。まったく誤りのない宗教システムなどないとわたし個人は考えます。わたしが証人の宗教をやめるに至った決断は、単に誤った教えが数多くあるというだけのことによるのではありません。そこにとどまる人の多くは、教え全体の正しさについて納得しているからではなく、「ここより他にない」と思っている、あるいはそう思っていると信じているからです。これはもちろん、証人以外の宗教の多くに属している人にも当てはまることです。宗教に入っている人のすべてが、自分の自由をその宗派に引き渡し、キリストにあって自由を得るにはその宗派から自由になる必要があると感じているわけではないことは、わたしも承知しています。とはいえ、どこに属していようとも、個人的精査はしたほうがよいでしょう。

　また、さまざまな教えの欠点や、組織的見解が重視されてそれらに誤った重きが置かれているのを見抜いてはいても、家族関係への配慮からその宗教との決別を避けようとし、自分の言動に慎重になる人もいます。高齢の親を持っていて、その宗教にずっと居続ける人をわたしは何人も知っています。それらの人は、もし自分が組織から破門されたら、そのショックで親は命の危機にひんするかもしれない、あるいは今自分が親にしている個人的な援助やサポートを断ち切られるかもしれないと感じています。他にも、その宗教と公式に断交すれば、徹底的に教化されている配偶者のゆえに、結婚生活にも同じような断交が生じるだろうという確信から、慎重を期する人もいます。ある束縛や不幸を耐えることは、他者への配慮に動かれてなされる場合、その人が払う犠牲と見なされているように思われます。これには明らかに限界があり、たとえ家族関係のためであっても、キリスト教の実践を誤り伝えていると思う教えや方針を積極的にサポートすることを正当化することはできません[44]。

　しかし、世俗の世界である程度の成功を収めてきた人は、規模がそれなりに大きく、組織的な強みと人員を持つ組織から単に離れたくないだけなのかもしれません。恐らく、世で成功を収めたのと同じ世俗的能力を宗教的文脈においても用いたいと感じる、あるいは資金を寄付したり貸し付けたりして、その結果、権威ある人とより親密で特権的関係を享受するのでしょう。証人の宗教は、他の幾つかの宗教もそうですが、そのような傾向のある人に特に適しているとわたしは信じます。初期の歴史ではそうでもありませんでしたが、今日ではそうです。組織が仕事、拡張、大きな集まりといったビッグプロジェクトに力を入れるため、世俗的な管理職の経験があって、そうしたものを好む人が輝くことのできる雰囲気があります。も

44　マタイ10:37。

っと規模の大きな宗教では、英語のイディオムにあるように彼らは「大きな池の小さな蛙」かもしれません。ものみの塔組織は、彼らがインパクトを与えて注目されるのに十分なほど小さく、それでいて、そこでの昇格によって自己重要感をさらに感じるのに十分なほど大きいのです。彼らは洞察力があって、組織の教えや方針の欠陥性や、それらと、キリストおよび聖書の教えとの相違を見抜くことができるかもしれません。そのことについて懸念を感じたり、その懸念を慎重に表明したりすることもあります。多くの場合、他の人よりも発言力があり、統治体のメンバーのような権威ある人たちに自分の考えを表明することができます。組織に強力な財政支援をしていることが知られている場合は尚のことです。このようなことをした人をわたしは知っています。彼らは大概、自分の意見がほとんど効果がなく、金銭的な贈物ほど歓迎されなかったことに失望することになります。もし財政支援をやめれば、享受している親密さが薄れ、自分の懸念を表明したことでかえって身を危険に晒すことになりかねないことを百も承知しています。しかし、満足のいくような移籍先、規模や強みにおいて匹敵する宗教システムが他に見当たらないので留まるのです。未練に感じる要因に意図的に、おそらくは意識的に気づかないようにしているのかもしれません。しかし、その道は、少なくともヨハネ12:42, 43にある観察と類似しています。

> しかし、権威者の中にも彼［キリスト］を信じる者は多くいました。ただ、会堂から追放されるのを恐れて、パリサイ人の手前、彼を認めようとしませんでした。彼らは神からの誉れよりも、人からの評判を重んじたからです[45]。

タルソスのサウロは、これらの人と同じかそれ以上に傑出していたことに間違いはありませんが、自分があれほど力を注ぎ込んできたシステムの中で名声を失うことを厭いませんでした。また、自分の民が属する主要な宗教を離れて、唯一の「ビッグ」イベントと言えば、その宗教史の始まりにおいて何千もの信者が洗礼を受けたことぐらいで、その後はそれに匹敵するようなものは何もない人たちと付き合うことを厭いませんでした。その人たちは聖書と歴史の両方が証言するように、全国的な集まりも国際的な集まりもなく、建設プロジェクトもなく、宗教目的のために捧げられた自分たちの建物も持っておらず、一大生産に携わっておらず、数的要素を重視せず、集中的ないし広範な管理体制を擁していませんでした[46]。多くの人が取った道とは著しく対照的に、パウロはこう述べています。

> では今わたしは誰に喜ばれようとしているのでしょうか。人にでしょうか、それとも神にでしょうか。わたしが求めているのは人の歓心だとでも言うのでしょうか。もし今なお、それを欲しがっているとしたら、わたしはキリストの僕ではないでしょう。

45　『新英語訳聖書』より。

46　注目したいのは、ある時や場所におけるキリスト者の数に関連して数字が用いられているのは、「使徒の活動」だけであり、それらは常に推定に過ぎないということです。使徒1:15; 2:41; 4:4; 19:7を比較なさってください。

> 神が恵みをもってわたしを召され、……御子をわたしの内に現すことにされた時、わたしはこのことを立ち止まって誰かに相談することはせず、また、わたしより先に使徒となっていた人たちに会うためにエルサレムに上ることもせず、すぐにアラビアに出て行き、そこからまっすぐダマスコに戻りました。それから三年後、ケファを訪ねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在した時も、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒には誰にも会いませんでした。神の御前で断言しますが、ここに書いていることはその通りで、偽りではありません[47]。

パウロはユダが書いているような、「利があると見ればすぐに人にこびへつらう」という手合いの人ではありませんでした[48]。しかし、そのようなこびへつらったり、権威ある人に好印象を与えようとしたりすることは、証人の組織内では驚くほどよく見られることで、組織の好意および組織内での立場を得たり維持したりすることへの関心は、かなりの割合の長老や旅行する代表者の行動においてしばしば明白です。組織がそれらの人に対してある程度の力やコントロールを行使できているのは、あらかたそのような立場への関心のためです。そのために、人は自分が間違っていると思う方針を強要して組織の好意を失わないようにすることさえあります。彼らは自分の自由と道徳的忠誠を犠牲にして、そのようなことをするのです。

こうした要素が原動力となるのは、別に世俗的な成功や能力を持つ人に限られたものではありません。はるかに地味な経歴の人や恵まれない人にすらしばしば等しく当てはまります。ものみの塔の組織的取決めは、それらの人が組織の目標を勤勉に満たし、その活動プログラムに熱心に参加し、膨大な時間を報告することによって社会的ステータスの著しい向上の達成を可能にするかもしれません。これらすべてによって最終的に長老職への道が開かれるかもしれません。今では百人かそれ以上の聴衆を前に長時間の話をするかもしれませんが、いっぽう、こうした公的立場がなければ十数人にわずかでも話を聞いてもらうのも難しいかもしれません。もっと立派な経歴の持ち主と同様にそれらの人も、今享受しているステータスを危うくするようなことをしたり、言ったりすることにためらいを感じるかもしれません。キリスト教は謙虚な人に訴えるもの、存在価値を与えるものでなければならず、その訴えかけは先ほどの根拠に基づいてなされるべきではないし、個人の存在価値も人が作ったそのような基準で測られるべきでもありません。このことを真剣に考えるなら、自分になされる上辺の評価は、本質的には組織の目標推進のために自分が何を与えることができるかによるのであって、自分が霊的な人としてどんな人であるかではないことに気づくはずです。これには大きな違いがありますが、多くの人は上辺の利益のためにその違いを無視することを選びます。これもまた、キリスト者の自由ではなく、自ら招いた束縛の一種です。

ですから、自己吟味をする際に重要なのは、どんなに苦しくとも自分が置かれた状況の現実を直視し、意識的決断――純粋に自分自身のもの――を下してきたかどうかを問うことです。決断を避けても解決にはなりません。以前の章で紹介した元

47　ガラテア1:10, 15-20, エルサレム聖書。
48　ユダ16節, エルサレム聖書。

司祭のチャールズ・デイビスは的確な分析をして、こう述べています。

> 幸福とは、意識を狭めることによって得られる平穏［無活動］ではありません。幸福になるために人は自由人として自分にふさわしい自律性を受け入れなければなりません。……ただ他人のすることや言うことに従って、何か起きるのをじっと待っているだけでは、個人の存在価値は低下します。
>
> ……正直に考えるためには、人は深く根底に影響するような疑念や疑問と向き合わなければなりません。……このような状況で誘惑となるのは、ただ流されること――意図的な個人選択を放棄し、他人の考え、行動、発言に自分を合わせてしまう――ことです。

単に他者につられて自分の宗教を離れ去る人がいるいっぽうで、多くの人がその同じ自己決定と意識的決断の欠如のために自分の宗教に留まると述べた後、彼はこう付け加えています。

> 根本的決断を個人的に下すよりも、外的権威に従い続けるほうが楽です。……しかし、自由になれない、あるいはなることを拒むことは、やがて人生に倦怠感（けんたいかん）をもたらし、真の幸福を排除します。袂（たもと）を分かつことが真に個人的決断であるのなら、その激変と困難に耐えることのほうが長い目で見れば良いのです。
>
> わたしは自分を手本として示しているのではありません。……また、自分が他の人よりも勇気があると考えているわけでもありません。わたしが決断を表明した後に人々がそのテーマについて手紙をくれるまで、勇気のことが頭に浮かんだことはありませんでした。当時のわたしの考えを支配していたのは、自分にはどうしても個人選択が必要ということでした。自分の疑念と向き合い、自分が本当は何を信じているのかを自問し、どんな結果になろうとも自分の純粋な確信に調和して行動しなければなりませんでした。もし、この困難がいずれすべて解決するだろうという漠然とした希望を抱いて物事を流し、問題に見て見ぬ振りをし、確固とした行動を取るのを拒んでいたなら、本当の自分を破壊し、悪化の一途を辿（たど）っていたでしょう[49]。

彼の体験と気持ちは、わたしだけでなく、わたしが知っている多くの人の体験と気持ちと重なっています。

個人的な関係――重要な要素

キリスト者の自由という課題に向き合う上で重要なのは、神とキリストとのわたしたちの関係は主として個人的なものであるという認識です。罪と死の奴隷状態から贖（あがな）い出してくださった方に対して深い個人的責任感がなければなりません。使徒はこう書いています。

> あなたがたは代価を払って買われたのです。人の奴隷となってはいけません[50]。

49　『良心の問い』23, 24頁［英語］。
50　コリント第一7:23, 新英語訳。

神の御子がわたしたちのために払われた代価は、磔(はりつけ)によって注がれたご自身の命でした。わたしたちが「罪に死んで、義に生きる」ようになるために「わたしたちの罪をご自分の身に」負ってくださったのです[51]。「その代価は尊い血によって支払われました」[52]。その代価はあまりにも高く、それを払ってくださった方にわたしたちが感謝と献身のうちに負っているものを軽んじることなどできないものです。その代価によって、神の御子は神の御目的と御心に従って唯お一人、わたしたちの主人となり、わたしたちはその方の僕となりました。払われた代価が自分にとって意味があるのであれば、自分と自分が仕える方との間に、いかなる人も、いかなる人の集団も入らせてはなりません。神の真の僕であれば誰もそのような形で入ろうとはしないでしょう。パウロは、コリントのキリスト者がパウロを含めて人を間違った見方で見ているために彼らの間に深刻な不和が生じているのを知って、こう言いました。

> わたしが言いたいのはあなたがたが掲げているスローガンです。「わたしはパウロにつく」、「わたしはアポロに」、「わたしはケファに」、「わたしはキリストに」といったこれらのすべてです。キリストは幾つにも分けられてしまったのでしょうか。パウロが、あなたがたのために十字架につけられたのでしょうか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのでしょうか。クリスポとガイオのほかは、あなたがたの誰にも洗礼を授けなかったことをわたしは感謝しています。ですから誰一人としてわたしの名によって洗礼を受けたなどと言うことはできないのです[53]。

キリストに従うと公言する者が、自らを他者の上に立つ統治者とし、自分が与えるどんな指示にも真心と細心の注意をもって守るように呼びかけ、さらには洗礼時の質問事項に組織への忠誠という概念を盛り込んで、神とキリストの「名」または「権威」によってだけでなく、自らの率いる組織の「名」によって洗礼が行われるようにするとき、このようなことをする者は、パウロが投げかけた次の問いに答えなければならないでしょう。あなたはわたしたちのために十字架につけられたのか。このような服従を求めるからには、あなたは自分自身の命の血という代価を払ったのか。これらの問いにその者が「はい」と答えられない――そして答えられるはずもない――のであれば、わたしたちは到底その者が求める事実上完全な服従をその者に示して、なおかつ、わたしたちのためにそれこそ死んでくださった方に忠誠を示すことはできません。わたしたちは二人の主人の奴隷にはなれないのです[54]。

神の御子はわたしたちをご自身と御父との個人的な関係に導いてくださったのですから、わたしたちの忠実さを判断するのは人でも人の集団でもありません。神の御子との関係は、他のすべての関係に勝ります。パウロはこの事実を意識しており、すべての行動においてそれに導かれるようにしました。これまで見てきたよう

51　ペテロ第一2:24, 改訂標準訳。
52　ペテロ第一1:19, 新英語訳。
53　コリント第一1:12-15, エルサレム聖書。
54　マタイ6:24。

に、彼が気にかけていたのは、人に認められることではありませんでした。それゆえに彼はコリントのキリスト者にこう言うことができました。

> あなたがたが、いや、人間のどんな法廷がわたしをふさわしいと判断しようがしまいが、わたしはいっこうに意に介しません。わたしは自分で自分を裁くことすらしません。確かに、わたしは良心に恥じるところはありませんが、それでわたしが義と認められるわけではありません。わたしを裁くのは主お一人なのです。早まって裁くことがあってはなりません。主が来られるまでは、そのことは放っておきなさい。主は暗闇に隠されていることをすべて明るみに出し、人の心の企てをあらわにされます。その時には、一人ひとりがふさわしい誉れを神から受けるのです[55]。

一人ひとりが神とキリストとの個人的な関係を持っていることの多大な影響を十分に理解していない人に、彼はこう書いています。

> 他人の僕を裁くとは、いったいあなたは何者ですか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、彼は立つようになります。彼の主人は、彼を立たせることができるからです。......わたしたちは皆、神の法廷の前に立ち、......わたしたち一人びとりは申し開きをしなければなりません[56]。

そのような裁きの時、わたしたちはパウロのように、いかなる宗派や宗教組織のメンバーとしてではなく、一個人として神の法廷の前に立ちます。どこかのグループの人たちが信じたことを自分も信じたかどうかではなく、そのグループの人たちがしたことを自分もしたかどうかでもなく、そのようなグループの引率者の指示に従うことによってグループへの忠誠を示したかどうかでもなく、自分が一個人としてどういう人で何をしているかによって裁きが下されるのです。わたしたち「一人ひとり」が個人的に自分で答えるのです。そして、父との間の弁護者かつ仲介者は、ただお一人キリストであられ、どこぞの組織の指導部ではないのです[57]。

組織に属していても有利な裁きを得ることができないことは、わたしたちが組織の規則や指令に従うことによってではなく、「自由の律法によって」裁かれることにも表れています[58]。その自由の律法とは「王たる律法」、「最高の律法」、「主権者の律法」であり、それは愛の律法です[59]。わたしたちは自分がしていること、自分が取っている態度そのものが純粋に愛によるものであるかどうかを絶えず自問する必要があります。

もしわたしたちがある特定の活動に毎週決まって携わっているという理由で独善的な態度を取ったり、何かしない事柄に基づいて、自分たちの宗教コミュニティー外にいるすべての人よりも優れていると自分を見なしたりしているのなら、わたしたちは、律法に定められた行為を規則的にしているという理由で自信満々になって

55　コリント第一4:3-5, エルサレム聖書。
56　ローマ14:4, 10, 12, 新英語訳。
57　テモテ第一2:5, 6; ヘブライ4:14-16; 7:25; ヨハネ第一2:1, 2。
58　ヤコブ2:12, エルサレム聖書。
59　ヤコブ2:8, 新国際訳、エルサレム聖書、新英語訳の訳。

いる、イエスのたとえ話に出てくるパリサイ人とは違うとどうして感じることができるでしょうか[60]。イエスはこのパリサイ人の行為を非難されたわけでも、さまざまな悪事を避けていることを責められたわけでもありません。イエスが非難なさったのは、その人の根底にある態度、自画自賛の精神、他者に対する愛のない視点であり、それによって彼のしているどんな行為もその価値を失いました。そのような態度はパリサイ人の典型であったため、イエスは弟子たちに、「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入ることはできません」と言われました[61]。当時の律法学者やファリサイ派（パリサイ人）はもういませんが、彼らに象徴される律法主義的で排他的な態度は今でもあり、それは隣人愛とは相容れないものです。

そのような態度を誘発して助長する環境から解放される時、わたしたちの活動と神への奉仕を規制・支配・体系化しようとし、その一方で、このすべてに従順に従うことでわたしたちが「特別な」存在になり、そうしない人よりも優れていると感じさせるシステムから解放される時、その時にわたしたちはキリスト教の実践という真の課題に向き合うことになります。自分の心と個人の信仰に突き動かされるのも今や自由です。わたしたちの愛はどれほど深いでしょうか。その愛は何をするようにわたしたちを駆り立てますか。他者への関心はどこまで広がっているでしょうか。どれほど他者の益と助けになり、他者に奉仕しようとしているでしょうか。神の御子が生きた人生は、どこまでわたしたちの心に響き、わたしたちを引き上げ、視野を広げ、感謝を深め、考えを広げたでしょうか。使徒の祈りはこうです。

> 信仰によって、あなたがたの心にキリストが愛のうちに住まわれますように。キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを、あなたがたがその愛に深く根ざし、その愛を堅固な土台として据えることにより、すべての神の民と共に理解し、人知を超えたその愛を悟ることができますように。そうして、神ご自身のあふれる豊かさに満たされますように[62]。

望むと望まざるとに関わらず、わたしたちは皆、善かれ悪しかれ他者に影響力を行使しています。日常生活での言動のみならず、言動の背後にある精神、自分にとって何が大切なのかの表し方、どのような価値観に導かれているか、どのような関心や目標に駆り立てられるのか、これらすべてが絶え間ない影響力の行使です。もし伝道の書の筆者が言うように、「一人の罪人が多くの良いものを滅ぼすこともある」のであれば、一人の正しい精神の持ち主が周囲に大きな益をもたらすことができるのもまた真実です[63]。その影響力は、一見小さく見えますが、水面に落ちた小石のように波紋を描いて絶えず広がっていきます。その直接的な影響は身近な人――配偶者、子ども、親、親戚、友人――に必然的に及びます。彼らを通じて、また家

60　ルカ18:9-14。
61　マタイ5:20, 改訂標準訳。
62　エフェソス3:17-19, 新英語訳。
63　伝道の書9:18。

族や友人の輪を超えたつながりを通じて、その影響は外へと、わたしたちが気づかないところに広がっていきます。

わたしたちが何か「大きなもの」の一部、規模と強みを目に見える形で誇るどこかの宗教運動の一部でないからといって、それで自分の信仰が弱まったり、人生で真に価値ある事柄を何か成し遂げるには自分は弱小すぎると感じたりすべきではありません。世界情勢に目に見える顕著な「インパクト」を持っていることが、人の信仰や信仰の行いの価値を決める基準ではありません。それはある宗教の信仰体系が正しいことの証明にもならないのと同じです。キリスト者の影響力は、パン生地に含まれる酵母のように静かに働きながら、誇示や喝采がなくても真の善を成し遂げる、謙虚で控えめな性質のものであっていいのです[64]。繰り返しになりますが、人間的観点から見てパワーと強みを表すものを好むのが人間の性なのかもしれませんが、信仰はそうしたものを必要としません。

神の御子によれば、わたしたちは自分の行い、御父への賛美を誘発する行いによって、人々の光となります[65]。その行いは、外圧やプログラミングによる産物ではなく、自分自身の思いと心の産物でなければならず、自分が良い知らせに啓発されたこと、良い知らせが人生を満たし、人生を変えた証しになることを示すものでなければなりません。プログラムされた「宣べ伝える業」の時間中に、宗教刊行物に書かれている規定の論題や表現を使って話すだけでは、この使命を果たすことはできません。イエスの弟子ヨハネが表現したように、「愛は言葉や口先だけではだめで、本物でなければならず、行動に示さなければなりません」[66]。毎日24時間、生涯を通じて自分が何者で何をするかによって、良い知らせの啓発的効果を反映させることによってのみ、わたしたちは世を照らす光となることができるのです。

不確実性に対処する

人間の傾向としてわたしたちは、信条に関するあらゆる疑問を解決し、いかなる不確実性からも解放されたいと願います。「真理」とは何でしょうか。わたしたちはいったい何を信じたらいいのでしょうか。不確実性に伴う痛みから逃れたいがために、そのことを教えてくれ、そのことと格闘しなくてもよいようにしてくれ、自分のために明確な道を示してくれる人がいれば、大抵の人はそれを喜びます。あらゆる疑問に対する答えを持っていると主張する組織は多くの人を惹(ひ)きつけます。成熟した人としてわたしたちは、それらの答えをすべて持っている人間などいないこ

64　ルカ13:20, 21。

65　マタイ5:14-16。ギリシャ語の *erga*《エルガ》という用語は、「仕事」と訳されたり「行い」と訳されたりしますが、どちらの場合も、ある種の「組織された」活動に参加するという考えを伝えるものではありません。むしろ前後の文脈から分かるように、イエスはご自分の話を聞いている人々が日常生活で、また日々の他者と関わりにおいて何をすべきかを語っておられました。

66　ヨハネ第一3:18, 新英語訳; ここでの「行動」とはギリシャ語の *ergon*《エルゴン》を訳したもので、*erga* の単数形です。

と、答えがないからといって精神的成長が妨げられるわけではないことに気づく必要があります。『愛と心理療法』の著者が鋭く観察しているとおりです。

> 多くの人が、受動性、依存性そして恐れと怠惰から、その道を一センチずつたしかめ、一歩一歩が安全で、しかも価値あるものだと保証を求める。しかしそうはいかない。精神的成長の旅は、勇気と主体性、独立した思考と行動が必要だからである[67]。

キリスト教の実践も旅であり、その旅は生涯続きます。疑問や不確実性とは無縁の旅ができると考えるのは非現実的です。とはいえ、ゴールと、そのゴールに向かっているという保証は決して疑う必要はありません。アブラハムは、彼のような信仰を持つすべての人々の「父」と呼ばれています[68]。メソポタミアにいた時、彼は付き合いの長い人々の中で、慣れ親しんだ環境の中で暮らしていました。そこでは基本的な型に従って生活が営まれており、そのすべては疑問や不確実性を最小限に抑えるのに役立ちました。しかし、そこへ神の召しがあり、自分の国や民を離れて見知らぬ土地に行き、それまで知らなかった人たちの中で暮らすことになりました[69]。その時から多くの疑問や不確実性に直面し、その中には彼の生涯中に十分に答えられなかったものもありました。とはいえ、息子イサクの誕生に関連して彼について記されている事柄は、彼の全生涯に当てはまります。

> 彼は神の約束を不信のゆえに疑うようなことはせず、むしろ信仰によって強められ、栄光を神に帰しました。神は約束なさったことを果たすことがおできになると確信していたのです[70]。

わたしたちにはアブラハムの模範があります。同じような旅をするように、信仰のうちに一歩を踏み出して、必要が生じるたびに神に導きを求めて信頼し、旅路の不確実な部分に伴うかもしれないどんな痛みをも恐れないように、わたしたちは呼びかけられています。人間の性(さが)はそうでなく、単に「腰を落ち着けて」、あらかじめ決められ、パッケージされた信条を採用することで、前進のための努力から解放されることを好むかもしれません。キリスト者を自称する人の多くはこのような選択をしているように見えます。知識や理解、問題対処能力の成長に努力を傾けるよりも、自分の宗教と、自分の必要を満たしてくれるその見かけ上の便利さに「心地よさ」を感じるほうを好みます。しかし、個人的な努力こそが、信仰と愛の強さに大きく貢献するのです。激しい活動それ自体が――「閉ざされたシステム」にそれがすべて限定されていなくても――停滞を防ぐ保証にはならないということに、わたしもそうでしたが、人は気づいていないのかもしれません。運動量は多くても、ひき臼を回すための激しい活動をしたところで、結局はスタート地点に戻るだけなのです。自分が置かれている状況の現実に気づくのは、人が本当に動き始め、キリ

67　335頁。

68　ローマ4:16。

69　ヘブライ11:9-11。

70　ローマ4:20, 21, 新改訂標準訳。

スト者の旅において前に向かって進み続ける時なのかもしれません。そうして初めて、自分の属している宗教団体がいかに足かせとなって自由を束縛していたか、惰性と無気力がどの程度自分の信仰生活を特徴づけ、規定していたのかが分かるのかもしれません。

同じような傾向を反映して、人は確実性を主張するシステムから離れ、押し付けられた信条から解放されると、今度は聖書に関連した疑問をすべて早く解決したいと感じ、退けた信条に代わり新しい信条、「正しい」信条を求めるかもしれません。しかし、どのような分野であれ急ぐことは賢明ではありません。むしろそれは本筋から逸れて誤りに繋(つな)がることが多いのです。古い誤りが新しい誤りに取って代わられるだけかもしれず、これに気づいた時は引き返さなければならず、貴重な時間を得るどころか、むしろ失うことになりかねません。必要なのは早さではなく、揺るぎない決意です。神の御霊の実の一つである自制があれば、信仰の旅において耐え忍び、平静と辛抱を保つことができます。これらの特質があれば、理解と知恵を一層増すことができることに気づいているからです。それは急いでは決して得られないものです。

自己中心の偽りの自由

キリスト者の自由は律法を、神を喜ばせる手段として、人生に意味と妥当性を与えて個人の存在価値と自己実現を感じさせる方法として遵守することの無益さからわたしたちを解放してくれます。それは、自分の利を求める生き方に伴う隷属から自由にしてもくれます。その自由を守るよう同胞である信者を促すにあたって、使徒は彼らの生活が「愛によって表される信仰」の生き方であるべきだと述べました。キリスト者の自由は愛のうちに築かれ、愛によって守られ、愛なしに存在しえず、「愛は自分の利益を求めず」、利己的でありません[71]。愛は他者に表現されるものでなければならず、その表現がなければ枯れて萎んでしまいます。わたしたちが他者に進んで関心を持ち、手を差し伸べ、その益になろうとする時（その結果、他者から益を受けるかどうかは別として）、わたしたちの自由の範囲と領域が縮小することはありません。むしろ、その次元が最大値に、その潜在的可能性が最大限に拡大します。不完全な世界で、これを信じて行動するには信仰が必要です。何らかの形の宗教的隷属から自らを解放し、己を喜ばせることにただ日々を費やす存在に身を置く者は、ある形の隷属から別の形の隷属に移ったに過ぎません。愛と信仰を表現するために自由を使うことをしないなら、視野の狭い人生を送ることになり、広い地平線ではなく自分自身の利益、追求、大望しか見えない「トンネルの中から外の世界を覗(のぞ)くような視野」に苦しむことになります。自分の人格とその潜在的可能性を巧みに支配しようとして徐々に締めつけてくる内的・外的な力の影響を受け

71　ガラテア5:6, 新国際訳; コリント第一13:5。

ることになります。究極的に、自分を喜ばせることは人生を向上させるどころか、人生から真の価値と意味を奪い、人生を空っぽにするだけなのです。

キリスト者の自由を受け入れたわたしたちはうれしいことに、愛をどのように表現したらよいかについて、何らかの規則を決める厳格なシステムに縛られていません。わたしたちの愛の表現は神の御霊の実であり、自由かつ自発的になされるものです。というのも、「このようなことを扱う律法はない」からです[72]。

とらえにくいバランスの質

> *あなたは、どんな状況にも冷静でいなさい。心の平静とバランスを保ちなさい。常に安定していなさい。*――テモテ第二4:5, 新国際訳, フィリプス現代英語, 改訂標準訳。

バランスとは、精神的・感情的に安定していること、冷静であること、人を従わせようとする圧力に抵抗し、考えと行いの両方において極端を避ける能力を指します。「バランス」という語は聖書翻訳にほとんど出てきません[73]。しかし、理解、洞察、分別の勧めの中に暗に含まれています。というのも、バランスはそうした資質から生まれるからです。そのことを最も良くわたしたちに示しているのは神の御子の生涯であり、御子がおっしゃったこと、行われたこと、そして何よりも人としてどんな方であったかであるとわたしは信じています。使徒たちは、師のうちに見て学んだバランスの影響を反映しています。

先に述べたように、人生の大部分は程度の問題が関係しています。食べ物に対する適切な態度を大食に変えるのは何でしょうか。あるいは、お金に対する適切な態度と、それでもって稼ぐことを貪欲に変えるのは何でしょうか。それは、わたしたちがそうしたものをどの程度注視するかです。怠惰と仕事中毒、禁酒と酒飲みのように、両極端を見るほうがはるかに簡単なのは明らかです。いっぽう、両極端の間に正確な境界線を引いて、それぞれがどこから始まるかを決めるのは難しいとはいえ、その間にはそれなりに広い領域があります。バランスとは、人生のあらゆる局面において両極端を避けるように舵(かじ)取りをすることであり、目に見えない境界線を越えようとしている時に、どちらの方向にせよ、それを察知することです。

わたしたちがキリスト者の自由とその行使について健全な見方を持つためには、そしてそれが永遠の命というゴールにわたしたちを導くものとするためには、バランスの質が切実に必要と思われます。とりわけ、かなり絶対主義的な――信条と人生に関するすべての重要事項について絶対的真理を有していると主張する――宗教

72　ガラテア5:24, 新英語訳; コリント第二1:23, 24を比較なさってください。

73　テモテ第二4:5で「安定」または「平静とバランス」と訳されているギリシャ語の用語 *nepho*《ネフォ》は文字通りには、酔いに代わる素面と関連していますが、比喩的には「あらゆる類いの曖昧さとは正反対」のものという意味合いを持っており、「冷静な判断力は、個人生活でも公的生活でも高く評価されます」。（新約聖書神学大辞典、要約版、633, 634頁［英語］）

システムの中で何年も過ごし、その後そのようなシステムから離れると、人は不確実性を感じるだけでなく、安定と方向性を失ったかのような感覚に陥るかもしれません。すべてについて「真理」を持っていると信じる極端から、どれついても真理を持っていないと感じるようになり、教えられたことをほぼ自動的に受け入れる極端から、すべてに批判的になり、信じてきたことすべてを疑うようになる——ほとんど知的パラノイアの一形態である——のは容易いことです。

何を読むかは自由です。しかし、もし自分が今読んでいるものに批判的な判断力を働かせないなら、過去にわたしたちを誤りに導いたのと同じような欠陥のある論議の餌食になるだけかもしれません。論議されていることはまったく違うかもしれず、正反対ですらあるかもしれません。しかし、もしその論議が単なる断言や証明されていない仮説、もっともらしさだけに基づいた訴え、証拠の歪曲（わいきょく）、知的な脅し、権威の専横（学問的または学術的権威を含む）といった欠陥のあるものであれば、それはわたしたちをある精神的隷属から別の精神的隷属へと、ある一群の人に従う弟子から別の一群の人に従う弟子へと導くだけかもしれません。元証人で、明らかに知的な人の中には、ものみの塔の出版物の中にある誤りや虚偽を見抜くことができたのに、今読んでいるものの中にある本質的に同じ形態の誤りや虚偽を見抜くことができないように見える人がいるのに、わたしは驚きます。そういう人たちは、ものみの塔から出版されたものと同じくらい歪（ひず）んで偏った論議を展開することがあります。

同様に、自由の行使を単なる無責任または放縦に転換して、自由の行使において極端に走る傾向があるかもしれません。一世紀にパウロは、しばしば二つの極端な陣営に別れた人々——ある者は律法主義の狭量さと厳格さを唱え、ある者はキリスト者の自由を無法の言い訳にして律法主義の厳しさを基準のない何でもありきの無味乾燥に置き換えていた——の中で骨折りました。当時このような両極端を避けるためには霊的なバランスが必要でしたし、それは今も同じです。

権威主義的な宗教——そのような宗教は数多くある——から脱退した人の中には、親の支配から自由になってすぐに、依存中にできなかったことをすべてするようになる若者のように反応する人もいます。そのような宗教システムから抜け出た人はその後、その宗教が禁じていた行いや慣習にすぐに携わることで、自分の自由と独立を誇示するかもしれません。しかしながら、御言葉の中で特に非難されていないとはいえ、その慣習自体に否定的側面があるかもしれません。そのような歩みにメリットはありません。それは幼稚さの表れで、自由とは責任を持って行使されなければならず、そうでなければ新たな隷属または依存症につながるだけであるということを理解していないことを表しています[74]。

非常に教条主義的な宗教に幻滅すると、教義そのものを否定的に、ないし重要性が低いととらえ、愛だけがものを言うという態度が生まれるかもしれません。御言

74　ペテロ第二2:17-20を比較なさってください。

葉の知識、朗読、黙想が多少なりとも軽視されます。これは、多くの人が「**教義**（ドクトリン）」というと、公式なドグマ（正統的な真理とされている宗教上の教え）、それもかなり複雑な解釈を伴うドグマを思い浮かべるからかもしれません。しかし、「教義」という言葉自体には「教える」という基本的な意味があります。御言葉の中で、それは単に信条や概念に関する教えではなく、行い、その人の生き方についての教えも包含します[75]。「隣人を自分のように愛する」ことは、神の御子の教義または教えそのものです。

また、人は逆に教義を強調するあまり愛の重要性を軽視することがあります。そうするのは、教義または教えが、目的のための手段であって、それ自体が目的ではないということに気づかないからです。ユダヤ教聖典の要旨は神への愛と隣人への愛を人に教え込んで広めることに尽きるとイエスが述べておられることは、キリスト教の教義または教えの究極的な目的もそこにあるという信条の正しさを証明しているように思います[76]。わたしたちの生き方、同胞の人間に対する態度、そして付き合い方に関するイエスの教えは、多くの人が一般に「教義」と考えるものではありませんが、すべて「健全な教義」です。

知識は大きな価値となりうるし、そうあるべきでもあります。教えることは、知識を増やし、広げることを目的としています。しかし、知識もまた、それ自体が目的ではありません。御言葉は、「教え、戒め、矯正し、義に沿って訓練するのに有用です。それによって、神に属する人はみな、どんな善い働きをも行うことができるように整えられるのです」と、そのように表現されています[77]。知識は、自分のみならず他の人のためにもなる能力をおおいに高めることができます。そして、知識を有することの価値を決めるのは、知識を用いることです。使徒はこう述べています。

> たとえ、預言する力を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識を理解していても、また、山を移すほどの全き信仰を持っていても、愛がなければ、わたしは無に等しいのです[78]。

知識を誤用した者たちについて、こうも述べています。

> 「我々はみな知識を持っている」ということを、わたしたちは承知しています。ただ、知識は人を思い上がらせ、愛は人を造りあげます。人は何かを理解しているつもりでも、自分が理解しなければならないようには、まだ何も理解していないのです。しか

75　「教義」と「教え」という用語は、翻訳によってしばしば互換性があります。間違った行為―殺人、嘘、偽証、不道徳、ソドミーなど――について述べた後、使徒はこれを「健全な教義［ギリシャ語の *didaskalía*《ディダスカリア》］に反する」（改訂標準訳; 新国際訳）、あるいは他の翻訳では、良い知らせの「健全な教えを無視する」振る舞い（新英語訳聖書; フィリプス現代英語）として語っています。（テモテ第一1:8-11; テモテ第一4:1-6を比較なさってください。）

76　マタイ22:35-40。

77　テモテ第二3:16, 17。

78　コリント第一13:2, 3, 新改訂標準訳。

し、神を愛する者がいれば、その人は神に知られているのです[79]。

使徒は知識の誤用が弱い人々に破壊的な影響さえ与えかねないことを警告しました[80]。そしてローマ人への手紙の第14章で、そこのキリスト者の間に信条の相違、食べ物や聖日についての信条の違いがあるために、兄弟を裁く者がいることを論じています。明らかに、そのような論争においては、一方が正しくて他方が間違っているか、あるいは両方が間違っているということがあります。とはいえ、一方の側にいる者も他方の側にいる者もどちらも神は「迎え入れられた」こと、その人たちは神の僕であって神がお裁きになること、良心や見解の相違があるにしても、神はその人たちとの好ましい関係を維持することがおできになることをパウロは示しました。それぞれがしていたこと、食べていたにせよ避けていたにせよ、守っていたにせよ守らなかったにせよ、それは神に対してしていたのであって、このようなことはどちらか一方が批判的、独断的な態度を取る根拠にはなりません[81]。実際には一方が理解において正しく、他方が間違っていたということを示す聖句もあります[82]。とはいえ、使徒が促したのは、間違っている側が誤りを認めるまで議論を続けることではありませんでした。そうではなく、使徒はこう促しました。

> それゆえ、もう互いに裁き合うことをやめましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、人の前に決して置くまいと決意しなさい。
> ......神の国は、飲食ではなく、聖霊における義と平和と喜びなのです[83]。

ものによってはそれがもたらす影響のゆえにきわめて重要な問題もあります。同じ使徒が根気強く戦ったのは、なおも良心に動かされて律法特有の点を守ろうとする者に対してではなく、律法遵守を救いに不可欠なものとして他者に押し付けようとし、それがキリスト者の自由にどれほど破壊的か、キリストの犠牲をどのように本質的に無効にするかを知っていながらそのようにした者に対してでした[84]。使徒は単に間違っているものに対して戦ったのではなく、有害で、ダメージを与え、人を隷属させるものに対して戦ったのです。聖句を理解する上で正誤は常に重要です。というのも、それによって自分の理解からどの程度益が得られるかが決まってくるからです。しかし、その重要性は常に相対的なものであり、ものによっては争うに値せず、まして分裂するに値しません。何かが正しいとか間違っているとかを議論によって証明するだけでは、それ自体でキリスト教の実践とは何なのかを達成することはできません。ですからわたしたちは単なる知識ではなく、知恵、洞察、健全な判断力を求め、そのようにして知識を有効に、良い目的のために用いる能力を得る必要があるのです。ヤコブは、「あなたがたのうちで、知恵があり理解力がある

79　コリント第一8:1-3, エルサレム聖書。
80　コリント第一8:10, 11。
81　ローマ14:1-12。
82　マルコ7:19; コロサイ2:16, 17を比較なさってください。
83　ローマ14:13, 17, 新改訂標準訳。
84　ガラテア5:1-4。

のは誰ですか」と尋ね、そのような人は自分の知恵を単に知的な方法で明示するだけでなく、「その立派な生き方によって、知恵から来る謙虚な行い」によって示すべきであると述べています[85]。

苦々しさという破壊力に抵抗する

自由のないシステムの中で過去にあった事柄に対して心に憤りを抱き、そのために自分の考えや言動を蝕(むしば)む苦々しさを抱くようであれば、わたしたちの自由は決して完全なものとはならないでしょう。

いっぽう、そのような感情は理解できるものです。このように影響を受けた人の中には、親がエホバの証人でなく他の宗教のメンバーであった人もいます。そうした人はものみの塔組織から受けた教化のために、何年もの間ほとんど親と関わりを持たず、親によそよそしくて冷淡でした。それは親が「真理」に無関心であったり拒絶反応を示したりしたためでした。このように遠ざけるプロセスはしばしば最初から、つまり証人になれば『神の敵対者に反対され』、家族がそのようなサタン的反対の道具になりうると告げられた時から始まりました。それ以上のことはなかったにしても、さらなる関わりを思い止まらせようとする努力はありました[86]。このような観点から物事を見ると、自分の新しい宗教を「認めて」くれない親に対する情が薄くならざるをえませんでした。しかし今、自分が「真理」と同一視していた信仰体系に、いくらか真実が伴っていても、非常に深刻で根本的な誤りもあること、さらにそうした誤りの上に築かれた教えこそが、自分が親を含む他者に対して冷淡になる原因となっていたことを理解するようになりました。中には、自分を地上に生み出してくれ、食べさせてくれ、扶養してくれ、世話してくれ、親としての愛情を注いでくれた人に負っている自然の情愛をあらためて表現することができた場合もあります。しかし、そうできなかった場合もあります。親がすでに亡くなっていたからです。親への愛を再確認したくても、親はもう手の届くところにはいないのです。このことがもたらす自責の念は計り知れません。

配偶者のいる人も、それに匹敵する体験をしたかもしれません。その多くは基本的に良い結婚をしていましたが、自分がものみの塔組織のメンバーになり、伴侶がそうならなかった時、そのひずみ――神の御子によって体現された資質をその後より十分に発揮したからではなく、組織の圧力に応え、組織の規則や方針に全面的に服従しようと努めたことによるひずみ――のために結婚関係が弱まったり、解消されたりする結果となりました。後者の場合、家族の崩壊は子どもにも悪影響を及ぼしたかもしれません。「こんなふうにならなくてもよかったんだ」という思いは耐えがたいものです。このような場合、壊れてしまったものを再構築することはほと

85　ヤコブ3:13, 新国際訳。

86　ものみの塔の研究用書籍、「とこしえの命に導く真理」16頁［英語］、「あなたは地上の楽園で永遠に生きられます」23, 24頁の記述を比較なさってください。

んどできません。

一人の女性のことが思い浮かびます。彼女は結婚してからの長い年月、証人でない夫に忠実でありながらも、義務感から夫を「世の人」と見なし、「終わり」が間近に迫っているということで、夫との間に子供をもうけることも控えました。そして事実上神の代弁者を名乗る組織の主張が正当なものではないことに彼女が気づいて間もなく、夫の良い資質にあらためて感謝し、その感謝が高まっていた矢先に、夫が交通事故で突然亡くなりました。もし自分が誤った考えに支配されていなければ、二人の結婚はどうなっていたか、何を生み出していたかを思うと、悲しみが通常をはるかに超えて増し、押しつぶされそうなほど気が滅入りました[87]。

また、組織の枠組みの中で子育てし、組織が神の地上の「経路」であり、それゆえに神の指示と恩寵を独占しているという概念を子どもに植え付けた親もいます。彼らは聖書の真理への忠誠ゆえに良心に基づく立場を取らざるを得なくなった時、我が子から切り離され、親である自分に組織が「背教者」のレッテルを貼って忌避すべき者とするのを我が子が受け入れるのを見るという悲惨な経験をしました。息子や娘が結婚すると聞いても結婚式に招待されない、孫が生まれたと聞いても招待されないし、会うことも許されないことは甚大な心痛をもたらします。何百、何千人という親や祖父母がそのような痛みを体験し、あるいは今も体験しています。ほかにも、人生の歳月を費やして追い求めた目標が、「神権的な目標」とか「神権的なキャリア」とかいった言葉で飾り立てられ、「王国の関心事を第一にする」とか「まだ残されている時間を賢く使う」とか説明されてはいても、結局のところ真の実体も、真の価値も、真の意味もない目標だったことが分かり、二度と取り戻せない失われた時間を実感する人もいます。わたしもそうだったように、彼らも自分が奉仕しているのは人々を神のもとに、キリストのもとに導くためだと考えていたし、だからこそ自分が持っているものをすべて喜んで捧げました。しかし、しまいには組織が不法に人々を自分のものとし、自分に従属させ、受けたものに対して何でも自分にお返しする義務があると見なしていたことに気づいたのです。その結果、熱心に奉仕していた人は「利用された」、時間、体力、リソース、才能という犠牲を組織の祭壇に捧げるように仕向けられた、しかもそのすべては組織とその関心事の発展のためだったという感覚を抱くようになりました。取り戻せない、お金よりもはるかに価値のあるアセットを「だまし取られた」と感じるのです。

うれしいことに、多くの人は、最も多くを失った人も含めて、苦々しさが心に足がかりを得ることを許しません。もし自由を愛するならそうする余地はありませ

87 彼女はもう交わっていませんでしたが、それでも地元の長老に「証人の葬儀」を執り行ってもらいました。夫の友人や仕事仲間の多く（夫のように証人ではない）が参列しました。長老の葬儀の話は専ら、死に関する組織の教えを支持する論議に終始していました。夫について、彼がどのような人だったのか、彼の人生から何を学べるか、彼が表した資質については、何も語られませんでした。これで決まりました。彼女は脱退の決意を固くすると共に、後悔の念があふれるのをどうすることもできませんでした。

ん。苦々しさ、恨み、復讐心(ふくしゅうしん)は人を身動きできなくする感情であり、自由にする感情ではありません。それらは報復への絶え間ない努力と相まって、未だにその人が囚われの身であり、過去に縛られていることの証拠なのです。何年か前に友人が『タイム』誌に掲載された記事のコピーをくれました。その中には、赦しの力についての、心を刺し、美しく表現された考えが述べられています。

> 赦しに対する旧約聖書の見方は、その懺悔(ざんげ)の文学を支配する動詞、「向きを変える」、「戻る」という意味のヘブライ語 *shuv*《シュヴ》に包含されている。この教義は、人には悪から善に向きを変える力、変わる力があり、向きを変えるという行為そのものが神の赦しをもたらすということを示唆している。<u>赦さない者は自分の人生の境遇を変える能力が最も低い者である</u>。……
> 赦すことの心理学的な事例には圧倒的な説得力がある。赦さないということは、過去に囚われることであり、古い悲しみに囚われて人生に新たなる門出をさせることができないことである。赦さないということは、他者の支配に自分を委ねることである。赦さなければ、相手のイニシアチブに支配されることになり、行為と応答、侮辱と報復、やられたらやり返すという絶えずエスカレートする悪循環から抜けられない。現在が過去によって際限なく圧倒されて、食い荒らされる。赦しは、赦す者を自由にする。それは赦す者を誰かの悪夢から引き出すことである。ドナルド・シュライバーは言う。「悪い過去との決別がない限り、わたしたちが手にするのはこの出口のない悪の繰り返しだけだ」と。……
> 赦しというのは、あまり好まれる衝動ではない。いろいろな意味で神秘的で崇高な考えである。……赦すということは、悪い世の中で生き残るためのツールには見えない。しかし、現実はそうなのだ[88]。

1982年、わたしはスウェーデンのカール・オロフ・ヨンソンと初めて個人的に文通を始めました[89]。彼は初期の手紙の中で、元証人の中にはそれまで自分が支持して信じてきた事柄とは「反対の考え方をせざるを得ないと感じている」と思えるような人がいることに触れた後、こう付け加えました。

> 彼らはものみの塔運動を本当に離れたわけではありません。依然としてまだその運動に固着しています――逆に固着しているのです。そして残りの人生をしばしばその攻撃に費やすのです。証人を親切に<u>助け</u>ようとするならわたしも理解できますが、非常に多くの場合、彼らは苦々しさに満たされています。

組織のある方針がもたらした破壊的な痛手に多くの人が、しばしば同情心に突き動かされて憤りを覚え、その痛手を終わらせようという熱い思いを抱くのは、わたしも理解できます。しかしながら、目的が手段を正当化すると考えるのは重大な誤りであるとも信じています。虚偽を明らかにすることは、恥ずかしいことでも愛に

88　下線はわたしのものです。『タイム』誌1984年1月9日号からの引用で、彼らの許可を得て転載しました。著作権 1984年 タイム社 無断転載を禁じます。

89　彼は『良心の危機』（190頁）の中で、『異邦人の時 再考』としてのちに出版される資料を統治体に送ったことで言及されています。また、『終わりの日のしるし――いつ？』という本の共著者でもあります。

欠けることでもありません。また、誰かと意見を異にすること、その人が持っている信条やしきたりに誤りがあるという証拠をその人の前に置くことも、その人に敵意を示すことではありません。それは愛のある行為となり得ます。しかし、それがどのような方法でなされるか、どのようなスピリットでなされるかが決定的要素なのです。わたし個人としては、幾つかの採用されている手段が、神の御子のアプローチとスピリット、弟子たちへのメッセージの趣旨を純粋に反映したものであるとは考えていません。

組織との関係を解消した人の中には、王国会館やエホバの証人の大会にピケをはったり、マスメディアの注目を明らかに集めるための異例な行動に出たりする人もいます。これは何も新しいことではありません。ものみの塔組織に反対する人はこのようなことを、わたしが子どもだった半世紀も前からしてきました。関わっている人によっては、その動機が専ら不正や虚偽を明るみに出すことであるのを、わたしは知っています。他人の動機については何も言えません。いずれにしても、わたし個人がそのような手段が逆効果なだけでなく、わたしたちが仕えると約束したキリスト・イエスを好ましく映し出していないとも考えているからといって、その人たち自身を裁こうとしているのではまったくありません。公表（パブリッシュ）と宣伝（パブリシティ）には違いのあることがあります。真実を公表するのは常に良いことです。しかし、宣伝のためのパブリシティを求めるのは、真実を公表することに関して言えば、ほとんど何の役にも立ちません。大抵は奇抜な行動やより過激でセンセーショナルなスローガンの使用、不一致の存在ばかりが宣伝され、何か価値のあるメッセージがあるとしても、それが伝わることはほとんどありません。

マスメディアによる取材は、多くの人に事実を知らせるという点でかなりの成果を成し遂げるポテンシャルがあります。過去にわたしはマスメディアからの取材要請に応じてきました。それと同時に、取材を申し込んだことは一度もなく、受けた取材の数よりも断った取材の数のほうがはるかに多いぐらいです。わたし個人の経験では、満足のいく結果が得られることはめったにありません。大抵、求められるのはセンセーショナルな内容であり、良い知らせを伝えることにほとんど役立ちません。わたしが受けたあるラジオインタビュー（フロリダ発）で、インタビュアーはエホバの証人とその信条や行いに関して、絶えず皮肉や誇張を交えて話しました。わたしはエホバの証人を擁護するために実質番組全体を費やし、エホバの証人が全体として誠実で良識のある人々であるというわたしの確信を言い表し、インタビュアーに対して、彼の発言がいかに事を歪曲（わいきょく）し、エホバの証人を不当に誤って非難しているかを指摘しました。そのように表明したことがうれしかったし、それがこの体験で唯一満足できるところでした。

ですから基本的にわたしは、ある人が感じている懸念や、憤りにさえも共感するし、同様の懸念をわたしも感じます。しかし、そのような気持ちを表現するために時に用いられる手段には必ずしも共感しません。使徒の助言の正しさを確信しています。

> あなたがたはそれぞれ、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅くなければなりません。人の怒りは神の正義を推し進めるものではないからです[90]。

簡単な方法は往々にして最善の方法ではありません。人間関係において不公正と思われることに憤慨する時に、苦痛の出所に怒りをぶつけるのは世界中で最も簡単なことです。それはまた、強さよりもむしろ弱さの表れでもあります。自制心を働かせること、冷静さを保つこと、問題の真の原因とそれに対処する最も効果的な方法を探り出すために時間と労力を費やすことのほうが、単に感情をぶちまけるよりもはるかに強さと決意が求められます。

元証人やその他の人によって、ものみの塔組織に関する非常に多くの資料が（印刷物やインターネットで）出されています。それに携わる人の多くが誠実な気持ちから、単に受け身になるのではなく「何かをしなければならない」と感じていることに、わたしは疑問を投げるつもりはありません。しかし、正直なところ、発信されるものの多く（おそらくその大部分）が益というよりも害となっていると信じています。キリスト者の自由とは、言いたいことを何でも言っていいということではありません。わたしたちはキリストの歩みにしっかりと付いて行くように召されており、キリストについてはこう書かれています。

> 彼は侮辱されても侮辱でやり返さず、拷問を受けても脅かすことをせず、正しい裁きをなさる方に信頼を置きました[91]。

悪意のあるスピーチ、嘲り、中傷、些細（ささい）な欠点を実際よりもはるかに大きくすること、何でも疑ってかかり、相手が間違っているにしても誠実な気持ちからやっている可能性を認めないこと、相手の過ちが誤った概念による被害の産物であることに情状酌量しないこと――これらはいずれも真理の大義に何の役にも立ちません。残念なことに、このようなことは「反ものみの塔」が出している文書の多くにしばしば見られます。またこれらは、ものみの塔の文書にも見られ、その宣言に同意しない人々、ものみの塔が「背教者」のレッテルを貼る人々に関して用いられる表現に表れています。こうして事は一回りし、過ちに対して過ちで応じるという気が滅入るような循環を繰り返すのです。これとは対照的にわたしたちはこう促されています。

> あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、のろってはなりません。……悪に悪を決して返してはなりません。あなたがたの志は、すべての人が立派と考えるようなことであるべきです［あなたがたの関心が至上の理念だけにあることを、みなに示しなさい, エルサレム聖書］。あなた次第ですが、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。愛する友よ、自分で復讐（ふくしゅう）をしないで、神の報復に任せなさい。というのも、「主が言われる。正義はわたしにある。わたしが返報する」と書いてあるからです。別の箇所にこうもあります。「あなたの敵が飢えているなら食べさせ、

90　ヤコブ1:19, 20, 新英語訳。

91　ペテロ第一2:23, エルサレム聖書。

> 渇いているなら飲ませなさい。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになるのです」。悪に負けてはなりません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい[92]。

このことにおいて使徒は神の御子の教えを忠実に反映したのです。

> 「隣人を愛し、敵を憎め」と言われたことは、あなたがたの知っているところです。しかし、わたしはあなたがたに言います。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。そうして初めて、あなたがたは天の父の子になれるのです。天の父は、善人の上にも悪人の上にも同じように太陽を昇らせ、正直な者にも不正直な者にも雨を降らせてくださいます。自分を愛してくれる人だけを愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるでしょうか。徴税人でも同じことをしています。また、自分の兄弟にだけ挨拶したところで、それのどこが優れているのでしょうか。異教徒でさえ同じことをしています。あなたがたの天の父が限りなく善良であられるように、あなたがたも善良の限りを尽くさなければなりません[93]。

証人の指導層は、自分たちとの意見の相違を公に表明する行為、自分たちの教えや方針に対する反論の証拠を提示する行為をどれも自分たちへの「迫害」であると見せようと努力します。実際にもしそうであるならば、彼らが今日の最悪の迫害者に数えられることは疑いありません。というのも、彼らは絶えず繰り返し他の宗教との意見の相違を公表し、その教えが誤りであることをどうにかして証明しようとするからです。また、他の宗教にとってマイナスになるようなニュースをすぐに取り上げ、それを公表します。であれば、他人を裁くのと同じ基準で裁かれることを予期しなければなりません[94]。しかし、このようなごまかしによって、彼らは自分たちの主張や見解に疑念を抱くことに対して厳しい表現を使用しても、それを正当化することができます。

詰まるところ、証人の組織を率いる人たちとのわたし自身の体験は不快なものでした。何年もの知己で一緒に仕事をしてきた人たち、何百もの集団討議の折にその前で自分自身、自分の確信や懸念を表明してきた人たちがあのような行動に出たり、あの手の手段に訴えたりするとは思いませんでした。とはいえ正直に言って、現在も過去も恨みを抱いたことはありません。明らかに最初のショックはありましたが、それ以降はその出来事を不機嫌に振り返ったり、過去に思いを馳(は)せたりして時間を無駄にしませんでした。結果として生じた突然の変化、六十歳を目前にして新たに人生を始めることの難しさは、わたしの知る限り、傷跡を残していないし、自己憐憫(れんびん)を感じる理由にもなっていません。この体験によってわたしは自分が向上できたと感じているし信じています。そして心からそう願っています。さらに、あの人たちのうち、わたしが冷静沈着に話したいとは思わない人、食べ物や宿、そのほか必要なものを提供したいと思わない人は一人もいないと言うことができます。敵意が存在するとすれば、それはわたしの側ではありません。彼らのうちの何人か

92　ローマ12:14, 17-21, 新英語訳。

93　マタイ5:43-48, 新英語訳。

94　マタイ7:1, 2。

は――自分が属している組織のためにそうするわけにはいかないと感じながらも――わたしに対して同じような態度を表すかもしれないとさえわたしは信じています。

キリスト教がもたらした解放の突破口を総括して、ある情報源はこのような効果的なプレゼンテーションをしています。

> ……神に対する新しい自由がある。それは恐れを払い除け、神の御前で最も親密な種類の自由へとつながる（ローマ8:15-18; ガラテア4:1-7）。……これは神へのきわめて自由な性質の奉仕を生じさせる（ローマ1:9）。それはまた、他者に対する新しい自由へともつながる。これには、人の裁きに対する恐れから、人を操ろうとする自分自身の試みからの自由が含まれる。また、自分の考えを伝えること、自分の感情を表現すること、自分の人生を切り開くこと、自分の所有物を分かち合うことの自由も含まれる。実際、他者への自由な奉仕、他者への愛のうちに自発的に自分を捧(ささ)げることは、この自由の概念の核心となっている（コリント第一9:19; テサロニケ第一2:8）……。
>
> だから、神がお与えになったこの自由は、人を、神との破綻した関係および人との欠陥のある連帯から、両者との新しいコミュニティーへと移行させるだけでなく、その新しいコミュニティーそのものを拡大し深めるような生き方をするように促すのである[95]。

他者との交流を通じて、このような自由の恩恵を分かち合って享受する方法は確かに、わたしたちの真剣な考慮と検討に価します。

---

95 『コミュニティーに対するパウロの考え』, ロバート・バンク著（Eerdmans-Anzea Publishers, 1988年再版）, 27頁［英語］。